
銀魂 悲しみの物語

夜代衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 悲しみの物語

【Nコード】

N6814J

【作者名】

夜代衣

【あらすじ】

悲しい過去を持つ少女は、男だらけの真選組に混ざって日々奮闘中！！

笑いあり・涙あり（かもしれない）のストーリー。

紹介（前書き）

銀魂の小説作ろうと、1年がかりで構想練りました（本当は1週間）
がんばってかきます♪

紹介

はいドモ。

知ってる人もいるかと思いますが（ temeエー何様だ！！ ）夜代衣です。（ ついでにフルネームは隼 はやぶさ 夜代衣 やよい ）

聞いてないっすよね。 スミマセンでした（ 全力で土下座 ）

え〜と、本編ではオリジナルキャラクターが出てきます。
この一話はその紹介だけです（ オイ！！ ）

さっそくドーズ ← ← ←

名前：都野 みやの 桜 さくら

真選組二番隊隊長

性別：女

年齢：16歳

好きな食べ物：だいふく

嫌いな食べ物：抹茶アイス

誕生日：12月24日

武器：刀

短刀

バズーカー（超軽量化。 威力はそこそこ）

「無情の鬼神」の異名をもつ。

このことは真選組には秘密にしている。

真選組では、「神速の辻斬り」と言われるほど、足が速い。
一瞬で相手の背後に回りこみ、敵を倒す。

もう一つの技は、小説本文でこれから紹介していこう。

仲間達の呼び方

いちよう呼び方を先に書いておきます。理由ですか？なんとなく♪

例

名前：呼び方

坂田 銀時：銀時

志村 新八：新八（怒っているときは『メガネ』 『駄メガネ』）

神楽：神楽

志村 妙：妙さん

近藤 勲：近藤さん（極たまに局長）

土方 十四郎：土方さん（極たまに副長）

沖田 総悟：沖田さん

山崎 退：山崎 （部下はだいたい呼び捨て。怒っているときは『ジミー』）

桂 小太郎：小太郎・コタロー （怒っているときは『ヅラ』）

坂本 辰馬：辰馬 （時にグータラオヤジ）

高杉 晋助：晋助

お登勢：お登勢さん

キャサリン：キャサリン （怒っている時は『猫・泥棒猫』）
長谷川 泰造：マダオ（長谷川さん）

こんなところかな？

出ないキャラいるかも（笑）（笑 じゃねーよ！！）

では皆様、本文お楽しみに！

やっぱりこの時世全てが金である

私は都野 桜。

まだ16です。

これでも真選組の二番隊隊長を任せられています。

そして――思い出したくもない記憶があります。

いつもどおりの朝。

「フアゝ・・・ア・・・。。よく寝たっ」

布団を片して、制服に着替えた。

そして髪を高めの位置で結ぶ。まあ、ポニーテール。

「今日も1日、がんばりますか・・・」

そう言って障子を開けた・・・その時だった。

ドオオオオオオオオオオン・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・」

静かな朝に鳴り響いた爆音。

どうやら、バズーカのようだ。

「何やってんだか・・・・」

そう言っただけの爆音のしたほうへと向かっていった。

その頃

「てめえ！！総悟！！何しやがんだ！！」

「・・・・チツ、さつさと死んでくだせえ・・・・土方さん」

舌打ちをするのは沖田。

「チツじゃねーよ！！！！俺の部屋どうしてくれんだ！！！！」

で、怒っているのが土方。

「まーまー。そんなことより……」

沖田は刀を抜く。

「土方死ねやあああああ!!」

「テメエが死ねええええ!!」

部屋の中で大乱闘。隊士たちには止められそうに無い。

そんな2人の間に滑り込む、黒い影。

キイイイイイン……

刀と刀が交わる音がした。

「いい加減に……して下さい!!」

それを止めたのは桜だ。

「どけ桜……こいつはいつペンぶった斬らねえと気がすまねえ!!」

「そうでイ桜ア」

2人とも桜に退くように言うが、聞くはずも無い。
つか聞く奴は居ない。

「どー考えてもこの状況で刀を引く馬鹿いませんから!……」

あ、近藤さん」

桜の視線の先には局長である近藤が居た。

「さっきの爆発音はなんだ！！？」

急いで駆けつけたようだ。

「こいつが俺の部屋にバズーカぶっ飛ばしやがったんだよ！！」

土方は視線を沖田に向けたまま言う。

「まあ、まずは2人とも刀をしまえ！！」

近藤に言われ渋々刀を納める2人。

桜も軽く息を吐き刀を納める。

「土方さん……次はこうは行かねエですぜ？」
「上等だコラ」

ガンを飛ばす二人。

（喧嘩するほど仲が良いつて絶対嘘だろ）

と全員が考えてしまった。

ところ変わって万事屋

「おはよーございまーす」

いつもどおり新八が出勤してくる。

「神楽あー！！テメエー何俺のメシまで食ってんのー？！」

「銀ちゃん、私は育ち盛りアルヨ！メシたくさん食べなきゃならな
いんだヨー！！！」

「ただの屁理屈へりくつだろーがあー！！！！！」

「ほらほら・・・2人ともやめて下さいよ」

新八が2人の間に入る。

「うるせーアルヨ新ハイ！！お前は酢昆布でも買ってくるヨロシ」

「ついでに苺ミルクとジャンプも買って来い」

「いや、何で僕なんですかあー！！！！！」

いつも通りの口げんか。

結局新八は買いに行くことになった。

——哀れなメガネである。

「いや、何でメガネ!？」

ゴチャゴチャうるさいのは放つといて、続きをどうぞ

「あゝ．．．．．何でいつもいつも僕ばかり．．．．．ん？」

新八の視線の先には人だかりができていた。

（何だろう？）

新八は人ごみを掻き分けて、前のほうへ行った。

「オラアア!!この女の命が大切だったら金持って来いやあ!!!!」
「ス．．．スミマセン．．．!!そんな金はウチには．．．ガ
ハア!!」

見るからに悪そうな奴にやられた男を呼ぶ女性。

「デメエーらもジロジロ見てんじゃねーよ!!!!」

周りの人にも攻撃する。

．．．．．怒りがこみ上げる．．．．．

「おい!!」

新八は柄にも無く前に出て、言った。

「その女性ひとを放せ!!!!」

声を張り上げた新八に対し、「ああ〜ん?」と言って返すやぐざ。

「だから、放せって言ってんだよっ．．．．．!!!!?」

新八は後ろから何者かによって殴られた。

「．．．．．!!!」

余りの衝撃に、頭がクラクラしていた。

「ジャマなんだよ!!」

更に横っ腹に蹴りを喰らい、店に突っ込む。

「キヤアアアアア!!」

悲鳴はあの女性ひと。

男は新八を無視し、女性の足元に倒れている男性を踏みつけた。

「ヤ・・・・・・・・・・メ・・・・・・・・」

ヤメロ、と言おうにも、言葉が出ない。

「連れて行くぜ」

ボス的な奴に言われ、女性が連れて行かれる。

「あんた・・・・・・・・!!」

女性は、自分の足元の男性に視線を向ける。

「とつとと歩ゴバア!!!」

言葉尻が、何かで殴られたことにより、消された。

「その女性ひとを放しなさい」

殴ったのは桜。細い道から飛び出して、相手の顔面に刀（鞘ごと）で殴ったようだ。

「おいおい・・・普通に止めればいいだろ・・・」

「そうですぜイ・・・どうせならバズーカでも・・・」

「それは普通とは違うだろ!! てかお前の常識のライン分かんねえ
ーよ!!」

殴られた男は、気を失っていた。

周りの中間達も怒りを抑えきれないようだ。

「テムエ！！何しやがんだ・・・・・・・・！！真選組・・・・・・・・！！」

男達は各々抜刀する。

「^{こゝろ}怯むな！！相手はたった3人だ！！」

ボスっぽい人が命令する。

その頃真選組の3人と言えば――

「バズーカ・・・・・・・・」

「何『今度やってみようかな？』みてえな顔してんだよ！！」

「バズーカは誰かの気を引いて、そこから撃つと効果的ですよ」

「いや何教えてんだよ！！」

「大丈夫ですよ土方さん。バズーカは相手を一掃する時くらいしか使いませんから。たぶん」

「『たぶん』ってなんだよ『たぶん』って！！」

堂々の無視である。

「おらあ！！無視してんじゃねーぞ！！」

ボスっぽい人が刀を向ける。

3人は敵を見る。ざっと20人弱くらいだ。

「この人数で驚いたか・・・・・・・・死ねえ！！真選組！！」
「うるさい！少し、黙っててよね」

やっぱりこのご時世全てが金である ぱーと2（前書き）

サブタイトルに変更がありました。

正直気まってなかったのですが、今決まりました。

・・・え？金が全てであるじゃないのかって？

気づいたか

まっいつか。

では、小説をお楽しみ下さいナ

やっぱりこの時世全てが金である ぱーと2

結局、ヤクザっぽい人達は、全員逮捕。

ほぼ全員が病院送りの状態となった。原因は桜の放ったバズーカだ
が………

「何はともあれよくやったな!!」

誉めているのは近藤だ。

「どーも。」

でも、ほぼ全員病院送りにしちゃったんだけど………大丈夫・
………かな?」

「大丈夫だろ!この小説は何でもありだ!!」

「は………はぁ………」

ハイテンションで言う近藤に対し、そっけなく返事をする桜。

「まあ、皆無事で………って、新八!？」

桜がやっと新八に気づいた。

「いや!!今気づいたの!!?」

「うん。存在感無くて気づかなかったわ」

「ヒドッ!!!!!!」

新八は元気そうなので、大丈夫 と思っていた。

「銀時達はどーしたの?」

「僕はお使いに出されたんですよ……半強制的に」

桜はクスツと笑いながら

「御愁傷様ごしゅうじやうさま」

と言って新八に手を差し伸べる。

新八は差し伸べられた手を掴んで立ち上がる。

「あーあ……銀さんと神楽ちゃんに怒られちゃうよ……
ハア……」

新八の視線の先には砂埃が着いたビニール袋と、中身が飛び出して土を被った状態である。

「何とかなるよ。この後暇だし、ついて行こうか？」

「えっ？でも仕事が……」

「だから暇だつてば」

「じゃ、じゃあお願いします」

「土方さん達にバレないようにね」

「結局サボッてんじゃねーかぁー！！！！」

「うるさい！見つかっちゃうつてば」

土方達はまったく気づいていない。

「行こ」

路地に入り、万事屋へ向かった。

万事屋についた2人。

「銀さん、ただいま帰りました」

「おい新ハイ、テメエ何してたのー？遅すぎるんじゃないの？」

「そうアルヨ新ハイ。私待ちくたびれたアルヨ」

「僕だっているいろいろあったんですよ……。あっ銀さん、お客さんです」

「何！？依頼か！！？」

銀時は興味津々に身を乗り出す。

「残念でした」

桜は笑いながら銀時に対し手を振る。

「何だ・・・テメエーかよ・・・」

「・・・何よ・・・文句ある？」

「ありもあり、大有りだよバカヤロー」

銀時はイスに座ったまま、ほぼ一定の声色で言った。

「あ、銀さん、あの・・・その・・・ジャ、ジャンプです」

新八がおどおどしながら出したのは、砂埃を被ったジャンプ。

「あ・・・あああああ後、苺ミルクです・・・！！！」

更には大量の土がついた苺ミルク。

それらを見た銀時が無言になる。

「新ハイ！私のはどこアルカ？」

神楽がソファーに寝そべったまま新八の方を向く。

「・・・」

新八が無言のまま出したすこんぶは、箱が破れて中にまで土が入ってしまったようだ。

「新八・・・俺のジャンプと苺ミルクに何してんだあああああ
！！！」

「テメエ・・・私のすこんぶに何してるアルカあああああ！
！！！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！
！！！」

新八が流石に可哀想かわいそうになったので、桜は殴っている2人を止めた。

「はい、もうお終い。じゃなきゃ新八死ぬわよ？」

「いや！心配してんならさっさと助ける——！！」

新八が叫ぶが、「うるさいアル！！」と神楽の蹴りが入った。
やれやれ、と思った桜は懷から紙を出した。

「10000」

「よし神楽あ、この辺にするぞ」

「分かったアルヨ銀ちゃん。食費のためアル」

「お前等金に釣られ過ぎだよ——！！！！」

新八が突っ込んだとおり、桜が出したのは10000円札である。
銀時はそれをむしり取ると、自分の懷に入れた。

「一件落着」と桜が言うものの、新八は半死なので、落着……………
ではないかもしれない。

桜はソファアに座った。と、同時にチャイムがなった。

「よおし、新八・出る」

「イヤ何で！？半死人に言うことじゃ……………ゴッツ！！」

新八は叫びすぎで血を吐いた。

再びチャイムがなる。

「新ハイ」

「だからムリですってバガハア！！！！」

再び吐血。

そして再びチャイム。

少しばかりの間、これが続いたようだ。

く玄関前く

「できやせんねえ……」

「流石にイツライラしてきた」

1人が扉を開けた。

無謀にも扉は簡単に開いた。

さらに、部屋からは騒ぐ声が聞こえた。
その部屋に入り、声を掛けた。

「おい」

ギアアギアア

「……おい」

ワーワー

「………おいつつつてんだろっがぁ……………!!」

この大声には皆、一瞬にして黙る。

「ああ、多串君・総一郎君、いたんだ」

「誰が多串だ!!」

「旦那あ、総悟ですぜ」

真選組の2人のようだ。特に土方は、爆発寸前のようだ。

「あ、土方さんに沖田さん」

内心、（ヤッバ・・・サボってるのばれた・・・）と思っていた。

「あ、じゃねえぞ馬鹿野郎・・・仕事サボリやがって・・・」

「俺はいつもサボってまさあ」

「テメエはサボりすぎなんだよ！！！」

と、言っていると銀時が

「で？なんか用かあ？ウチは金貰ってなんでもする仕事だからね
」？」

「フン、テメエ等に頼むのはしゃくだが・・・この際仕方が無い」

珍しく土方が頼みごとのようだ。

「旦那ア、実はさア・・・」

沖田が話を始めた。

「最近、ここらで天人あまんとばかり狙って強盗・殺人する奴等がいるんでさア」

「だから、何アルカ。私等には関係ないネ！」

「チャイナア、話は最後まで聞きやがれってんでイ」

ここで沖田に代わって土方が煙草の煙をはいてから話を続けた。

「で、俺達は天人ばかりだと思って天人を守っていたんだ……が」

「………何ですか？」

新八が聞く。

「どうやら……何かしら武器や薬^{ヤク}、珍しい物を持っている奴等が狙われることが分かった。

天人はそういうのを良く持っているから狙われたんだろな」

「———！それって………私たちも危ない、と考えても？」
「多分、間違いないだろうな」

桜の表情がキリツとする。

「で、俺達になんの頼みだ？」

銀時が土方と沖田を見る。

「江戸は広いですからねィ……俺達だけじゃ守りきれないところはどうしても出てくる」

「で、何が言いたいのかしつかり・ハッキリ・短く言え」

「旦那達にもこの町を守って欲しい、ってことですぜィ」

それを聞いた新八は、銀時の方を向いて、「銀さん………」と呼んだ。

「あつ！？なんだよ？」

「やりましょうよ、この依頼」

「———？珍しいな、お前から言ってくるなんてよ」

「今ウチは金欠ですし、この依頼・受けて損はないと思いますよ」

「・・・・・・・・」

「銀ちゃん、やるアルヨ。金のために」

「いや！！結局金かよー！！」

新八がツツコミをした後、桜が

「で、どうするの？」

と聞くと、銀時は

「ギヤラを聞いてから決めてやるよ」

と、言った。

「20万でどうだ」

土方が封筒に入った20万円を差し出す。

「・・・・・・・・しゃーねーな。んじゃいつちよ、やってやるか」

「やっぱりアンタは金なのね・・・・・・・・」

でも本当はそうじゃない、と桜は思っていた。

（でも、本当はそうじゃないんだよね・・・・・・・・銀時。本当は、皆を守りたいんだよね・・・・・・・・銀時）

だが・・・・・・・・

「あつたりめーだ。この不況のご時世にはな、金・マネー・キャッシュー！なんだよ」

期待を裏切る言葉。

少しでも信じた自分が馬鹿だった。

とでも言いたげな表情で、立ち上がる。

「銀時・・・・・・・・アンタって奴は・・・・・・・・」

ハア、と深くタメ息をついた。

やっぱりこのご時世全てが金である　ぱーと2（後書き）

はい、次回もお楽しみに♪

あ、桜あゝ、後ヨロシク

桜「はいはい・・・」

今回いろいろ修正入れました。

内容的には全く変わっていませんのでご安心下さい。

では、また次回♪」

赤頭巾ちゃんがいるのだから黒頭巾ちゃんが居たってなんら問題は無い（前書き

BLEACHの小説とこの小説書き終えるのに結構時間が・・・
もう日にちまたいでるよ・・・

もう寝る!!

赤頭巾ちゃんがいるのだから黒頭巾ちゃんが居たってなんら問題は無い

「引き受けたは良いものの……」

「町は特に……」

「変わったことは無いアルヨ」

いつも通り賑わう町並み。

が、そこに響いた悲鳴

「ギヤアアアアアアアアアア!!!!!!」

3人はダツシュで声の聞こえたほうに向かった。
だが、3人は

（男だったよな？）

（はい。間違いなく、男性の声でした）

（男が悲鳴上げるとは情けないアル）

（だが……）

（ええ……）

（（間違いなくあのヤローだ））

なぜか心で声で会話できる万事屋。

そして3人が確信した男とは……？

続く

「って！何勝手に終わらせてんだよ！！」

冗談だって・・・はい続き
←

そのころある場所。

「お妙さあああああん!!!」

「しつけーんだよ!!!このゴリラァ!!!」

言わずと知れたスト・・・近藤と、お妙のようだ。

「あれ？今なんかストって聞こえたよ？何？ストーカーって言おうとした？ねえ？作者あ!!!？」

「ギヤアギヤアうるせえんだよ！ゴリラ!!!」

「ギヤアアアア!!!」

そこに駆けつけたは万事屋3人だった。

「ぱつつあん、見なかったことにしようぜ」

「で、ですね」

「ゴリラはほっとつても構わないネ」

3人は同時に踵を返したが、

「あら、新ちゃんじゃない。銀さんと神楽ちゃんも一緒なの？」

先にお妙に見つかってしまった。

「あ・・・姉上・・・」

「ねえ新ちゃん、警察呼んでくれるかしら？ストーカー捕まえたから」

「姉上・・・その人が警察です」

「あら、そう？じゃあ、処刑人呼んでくれるかしら？ねえ……」

黒い笑みを浮かべるお妙に引いてしまい、やむなく真選組を呼んだのであった。

「あんたは一体何やってんだ……！」

土方はボツコボコにされた近藤を見て、叱っている。

「どうやって隊士に言やあいんだよ……」

「す……スマン、トシ」

「俺が毎度毎度、どれだけフォローしてると思ってた……」

土方は額に手を当てた。

「悪かったな。ウチの局長が変な事して」

「いえ、もういいんですよ。こいつを永遠に眠らせてくれさえすれば」

サラッと恐ろしいことを口にするお妙。

「姉御オ、こいつきつと霊になってまたくるアルヨ。余計めんどくさいアルヨ」

「それもそうね。あの、やっぱり霊だけ剥ぎ取って下さい。そして一瞬で昇天させてください」

「姉上——！！！どんどん酷くなってるよ！！そろそろ止めてあげて下さい！姉上——！！」

「新ちゃん、私ね、もう疲れちゃった♪だから早くこいつの物語、終わりにさせなくちゃ」

ザク！ザク！つと心に突き刺さる一言に、近藤はガックリしてしまった。

（生気が抜き取られてる！！）

銀時の思ったとおりだ。近藤の口から霊が出てきた。

「あら、言葉だけで成仏してくれそうね」

「近藤さん！しっかりしろ！！」

土方は何とか近藤に生気を戻させた。近藤はダークムードのままだった。そしてそのまま車に乗って帰った。

「あのまま死ねば良かったのに」

「おい……あのメチャクチャ傷ついてたよ？誰にも手が出せなくなるくらい傷ついてたよ？いいの？傷がついたまんまでいいの？」

「いいのよ銀さん。ゴリラには言いすぎくらいがちょうどいいのよ」

お妙はそうとうイラついているようなので、これ以上は何も言わな

かった。

新八は流石にヤバイ！と思ったのか、話を始めた。

「あ……ああ姉上！最近変な連中を見かけませんでしたか？
「変な連中？」

「は、はい。なんか最近ヤバイ連中が町に居ると噂で……
「そうねえ……元々、人の出入りが多い町だから……
見かけない顔なんて良くあることだしね」

「そう、ですか……」

「まあ、何か分かったら教えてあげるわ」

「ありがとうございます。姉上」

何とかお妙の怒りを静めさせ、話題をかえ、何と協力までさせてしまった。

「流石にもう慣れたんだろうな、新八」

「姉御の料理以外はきつともう慣れっ子アルヨ……駄メガネ
のくせに……」

「神楽、それは誉めてんのか？けなしてるのか？」

「けなしてるアル」

小声で話しをする2人の元に新八が戻ってきた。

「何とか協力してくれました。僕らは僕らで何とかしましょう」

2人の会話を知る由も無い新八。

このまま3人はお妙と別れ、仕事を再開した。

〈真選組〉

「土方さん、お帰りなさい。何があつたんですか？」

桜が大量の資料を持ったまま、顔だけ土方を見る。

「ただのストーカーだ」

「ストーカー？最低ですね。そういう奴は真っ先に嫌われるタイプですよ。私だったらバズーカ撃ってるか、手榴弾しゅりゅうだん投げてるトコですよ」

桜は誰がストーカーの犯人かを知らないで言っているので悪意は無い。が、その言葉は十分に近藤を傷つけていた。

「どうせ俺は最低ですよ……」

どうせ俺は真っ先に嫌われるタイプですよ……」

どうせ俺はバズーカか手榴弾で死ぬんですよ……」

近藤は超いじけていた。

（近藤さんの事だったの——！！！！）

桜はそれに気づいて慌てていた。

「あの、え」と、その……」

「いいんだ桜……もういいんだ……」

近藤は生まれたての小鹿のような足取りへ自室に向かった。

「まあ、近藤さんの事だから直ぐに立ち直るだろ。

で、その書類は何だ？」

「え？ああ、これは会議に使う資料です。珍しい物・武器などが中心です。薬物の資料が見つからなくて……なので、今からその資料を探すところです」

「そうか、なら俺も手伝おう。どーせ今は暇だからな」

「ありがとうございます。正直、量が多くて……猫の手も借りたいたコでしたから」

土方は桜の持っていた資料の半分以上を持ち、直ぐ傍の部屋に持って行った。

その後資料室へ戻り、大量の資料の中から必要な資料を探すことに徹した。

何時間がたっただろうか

資料がまとまり、何冊かの冊子さうしができた。

部屋中に大量の資料。その資料は隊士の手を借りつつ、一つ一つ片付けていった。

土方はふと、空を見た。

（今日は新月か・・・・・・・・・・）

「万事屋チーム」

今はスナックパパパイヤの前にいる。（どこだよ！！！！）

「ちつくしょー。丸1日かけても何も無かったぞ」

「ですね・・・まったく、骨折り損のくたびれ儲けですよ・・・」

「

「もう夜アル・・・。私、お腹がすいてきたネ」

「俺もだ」

「僕もです」

3人は一度万事屋に戻ろうとした。

と、その時だった。

あちらこちらから黒頭巾の者が出てきた。

「なんだあ！？こいつらは！！！！？」

「見るからに怪しいネ!!」

「しかも・・・この人数・・・」

新八の頬に汗がたれる。

「やつちまえ!!」

先に動き出したのは黒頭巾達だ。

その者たちは、叫びながら突っ込んでくる。

3人に、四方八方から刀が降ってくる。

「死ねえええええええええええええええ!!!!!!」

だが、その攻撃は全て神楽の傘に防がれた。

相手が驚いている隙に銀時は木刀を抜き、新八は刀を持っていないかったため、相手の刀を奪う。

神楽は相手を一掃し、傘を閉じる。

「オラオラオラオラオラアアアア!!!!」

銀時は次々と木刀で相手をなぎ倒していく。

「はあああああああ!!」

新八も峰でなぎ倒していく。

「喰らうネ!!」

神楽は銃で相手を狙う。

辺りからはうめき声が聞こえた。

5分間、3人は戦った。

「ハア、ハア、ハア」

「ハー、ハー、ハー」

「ゼエ．．．ゼエ．．．」

肩で息をする3人の周りには、真っ黒な影がごろごろ転がっている。

「何だっただ？こいつら．．．」

新八がつぶやくと銀時が、

「これが最近出ている変な輩だろ．．．．．っ！かそれ以外ねえだろ」

「そうアル新八．．．．．。銀ちゃん、こいつらどうするアルカ？」

神楽が聞くと、

「真選組に連絡しとけ。俺達の仕事は守ることだろ？こいつ等をどうするかは真選組あいつらの仕事だ」

「じゃあ、まずは資料を配りますね」

近藤にとどめを刺した張本人は、たんたんと配っていく。
話せる雰囲気ではない近藤の代わりに土方が話し始めた。

「全員知つての通り、最近変な連中が江戸全域に出現。襲われた奴は数知れず。そのほとんどが天人だ」
あまんと

資料をめくる。

「そして、被害者が持っていた物で盗まれた物・盗まれそうな物が全部載っています。一通り目を通していただきます。あと、一番最後のページを見てください」

桜の一言で全員が最後のページを見る。

「敵の特長です。まだ、分からないことのほうが多く、それだけでは不十分かもしれませんが」

書いてあつたのは、

- ・相手は全員黒頭巾を被り、黒い服を着ている。
- ・相手は集団で襲ってくる。
- ・目標が1人でなくとも襲ってくる。
- ・武器は全員が刀。目新しい武器は見かけない。
- ・新月や三日月の夜・朧おぼろ月の夜など、月明かりが無いときに出でる。

全員がある2行に釘付けになった。

・相手は全員黒頭巾を被り、黒い服を着ている。
・新月や三日月の夜・朧月おぼろの夜など、月明かりが無いときに出てくる。

特に釘付けになったのは、後者の文だ。

「皆気づいたと思うが、月明かりが無い時……つまり今日の
ような日に出てくると言う事だ」

「じゃあまさか……………」

「確定はできないが……………恐らく奴等は出現しただろう」

急に話しに入ってきた近藤に、全員が「いつの間に!!」という表情をした。

「どこにいるか分からないじゃ……………迂闊うかつに出て行くことはできないわね……………」

「通報があるまで待つしか無さそうですぜイ」

沖田がそう言った直ぐ直後だった。

「噂をすれば来やしたぜイ……………」と、呟いた。

「会議中！失礼します!!」

入ってきたのは山崎だった。

「黒頭巾を被った奴等が居た・との通報がありました!!」

「場所はどこだ!!」

「はい！歌舞伎町のスナックパパパイヤの前だそうです!!」

「どこだよ!!」

土方が刀を腰に結わえた瞬間だった。

「で、万事屋の旦那が倒したそうぞ。全員のしたから早く来てくれ・と」

「それを早く言え!!」

土方は山崎に怒声を浴びせた後、数人の隊長と、何人かの隊士を引き連れて、それぞれ車に乗り込んだ。

「行くぞ!!」

けたたましくサイレンを響かせながら現場へ向かった。

続く

赤頭巾ちゃんがいるのだから黒頭巾ちゃんが居たってなんら問題は無い（後書き

夜更かししちゃう駄目だよ）（テメエがいえることか！！）

スナックの人は一体いつ寝ているのかよく分からないと思う中学生（前書き）

サブタイトルに意味は無いですよー？

ただなんとなあく思ったことをサブタイトルにしました。

あ、それから今回残酷描写ありだからね？覚悟して見てよ？

桜「それをサブタイトルより先に言いなさい！！！！」

スナックの人は一体いつ寝ているのかよく分らないと思う中学生

「おう、おせーぞ新八」

銀時は仁王立ちして相手を見張っていた。

「すいません。ちょっと電話が見つからなくて……。
てかどういう見張り方ですか？仁王立ちって……」

「いや、やっぱ見張りって言ったらこの体制かなーっと思ったから
だ」

「それじゃあ『この俺様になう者など一人もいないのだ！』って
言って笑ってる大魔王ですよ！！」

「新ハイ、オマエいちいち細かいネ！」

「そうそう。少しは大雑把おおざっぱになれよ」

「そー言うオマエ等は大雑把すぎんだよ！！！特に神楽ちゃん！それ
れ見張ってる体勢じゃないからね！？家でくつろぐ体勢だよそれは
！！！！！！」

新八の言うとおり。神楽の体勢は、家のソファーに寝転ぶような体
勢である。

「それにしてもおせえーなあー税金泥棒達」

銀時がボソツと呟いた時だった。

足元に居た黒頭巾が目を覚まし、銀時に向かって刃を向けたのだ。

「！！！！」

反射的に後ろに下がる銀時。その黒頭巾はゆっくりと立ち上がった。

「クソ・・・!!」

声質からして女であろう。

彼女は逆手に刀を持つと、銀時に突っ込んで行った。

「はあああああ!!」

「クッ!!」

銀時はかろうじて木刀で止めた。

「銀さん!!」

「銀ちゃん!!」

2人は駆け出す。

「クツクルナーアアアアアア!!!!」

女性は体を回転させ、銀時・新八・神楽を近づけさせない。

「素顔を見ることができねえな・・・こりゃ」

「ハア、ハア、ハア・・・ウウ・・・!」

女性は荒く息をする。

「銀ちゃん! 何だかこの人苦しそうアル!!」

「・・・!!?」

銀時が再び木刀を構えたときだった。

四方からけたたましくサイレンを鳴らした車が現れる。
真選組のパトカーである。

「御用だ！！神妙にお縄につけ！！！」

土方が車から降り、戸を閉めつつ言った。

「イヤだトイッタら？」

奇妙な話し方で女性は言う。

「無理矢理でも捕まえるだけでさあ」

沖田も車から降り、とぼけた声で言った。

「ムリヤリでモムリよ。わたし二八あの御方がツイテイルカラサ」

まるで、男女の声が混じったような奇妙な声に、全員が不信感を抱いた。

「あの御方って、誰？」

桜が聞いた。

「ふん！教える程私ハ甘クハないゾ」

銀時はふと、あることに気がついた。
さっきよりも話し方が若干女性らしくなったことに――

「とつとと話した方が身のためだと思っけど？」

桜は鯉口を切った。

「何がアロウとも教えられないわ」

新八も気づいたのか、銀時に、

「銀さん……気づきましたか？」

と、聞いた。

「ああ、とつくの昔にな。だんだん男っぽい声色は伺えなくなった・
・・・・」

「ですね。まるで、何かに操られたように喋っていたのに・
・・・今は自分の口で話してるって言うか何と言うか・
・・・」

2人が相談している間に、相手が先に動き出した。
逃げる気である。

「待て!!」

土方の静止など聞かず、屋根の上に飛び乗りそのまま去っていく。

「愚かな人は死ぬ定め・
・・・」

そついい残した彼女は爆弾らしき物を放って行った。

「銀ちゃん！アレ絶対ヤバイアル!!」

「わぁーってらぁーに!!!!逃げろ!!!!!!」

「うわあああああ！！！！」

と、万事屋。

「総悟！桜！退避だ！！」

「へーい」

「り・・・了解ッ！！」

と、真選組。（何で絵本みたくなってるんだよ！！）

ドカアアアアアアアン・・・・・・・・

辺りは爆弾で吹き飛び、スナックパイパイは跡形も無く吹き飛んだ。

「わ・・・・・・・・私の店がああああ！！」

店のオーナーらしき人が帰ってきたようで・・・・・・・・その場に愕然としていた。

更には・・・・・・・・

「ぎ・銀さん！！」

「なんだ？ぱつつあん・・・・・・・・！！！！」

「ここで気絶していた奴等がないネ！！！！」

さっきの場所に戻ると、地面は熱で真っ黒に焦げていた。

「旦那、よく見てくだせえ。こいつら骨の髄まで焼けて無くなつてまさあ」

沖田の言つとおりである。さっきの場所をよく見ると、焼け残った黒頭巾があつた。

所々に人骨まである。

「ひ……酷い……」

「……どうしても素性を明かさないつもりだな」

後ずさりする新八と対照的に、土方はその現場に近づく。

「こつやつて全て焼きつくせば何も残りはしねえ……。つまり、何の情報も俺達にはやらねえ・て事だろう」

「だからって……仲間を簡単に見捨てるなんて……。一体あいつ等は何者なの?！」

怒りがこみ上げてくる桜は、無意識に拳を強く握った。

「たく……そうとうめんどくせえことに巻き込まれたようだな」

銀時は頭を掻く。

（だが……ここまでとなると攘夷志士じゃねえかもしれねえな……）

銀時はかがんで焼け残った布を拾った。

(一 体 ・ ・ ・ ・ ・ 誰 な ん だ ・ ・ ・ ・ ・ ?)

スナックの人は一体いつ寝ているのかよく分からないと思う中学生（後書き）

コレ見て気分悪くなった方すみマセンでした（全力で土下座）

桜「申し訳ありません・・・」

じ・・・次回は残酷描写無しで行きたいと思っています！！
頑張ってほんのりコメディーにしてみます！！！！

では次回、お楽しみに！

メチャクチャになってもとりあえず出来ていれば問題は無いのでテストなども公

サブタイトル通りにしちゃ駄目だよ・・・？

メチャクチャになつてもとりあえず出来ていれば問題は無いのでテストなども公

その後、全員が暗い面持ちで帰った。

「万事屋組」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

だんまりして万事屋のソファに寄りかかる。

「銀さん・・・・・・・・僕、そろそろ帰りますね。姉上も心配ですし」

「ああ・・・・・・・・」

銀時はそつけなく返した。

無理もないだろう。

あんな残酷なものを目の前にしてしまったからだ。

新八は荷物をまとめると、ただ「また明日来ます」と言つて出て行った。

無言の時間が過ぎていった。

そんな沈黙を破つたのは神楽だった。

「銀ちゃん。アイツラが死んだのは銀ちゃんのせいじゃ無いアル。

銀ちゃんじゃなくて、あの女ネ！だから銀ちゃんは気にしないでい

いネ」

「・・・・・・・・ああ」

神楽にちよっぴり励まされたのか、俯いていた顔を上げた。

（俺が気にしてんのはソコじゃねーんだよなあ）

銀時は外を見る。

（俺が気にしてんのは桜^{あけつ}なんだよ・・・・・・・・・・）

（真選組）

「副長、おかえりなさいませ」
「おう」

土方も、万事屋チームと同じような心境で帰ってきた。

「沖田隊長、都野隊長もおかえりなさいませ」

「ああ」

「ただいま……」

いつもと変わらぬ表情で沖田は歩いていく。

桜は少しばかり表情が暗い。

「……大丈夫かい？」

「はい……大丈夫……大丈夫……です……。
でも、ちょっと休ませてもらいます……」

桜は自室へと向かった。

「……土方さん」

「ああ、分かってるよ。あいつの調子がおかしいことくれえ」

土方は新しい煙草を出してライターで火をつける。

（あんな場面……まず見ることはねえからな……）

フー・と煙を吐く。

（……近藤さんに報告しとかなくちな……）

く
桜
く

（何やってんだ……私は……）

桜は畳の上に寝転んでいた。

（何やってんだ……）

桜の呼吸が荒くなる。

疲れ

では無い。

桜はゆっくりと目を閉じた
そして——夢を見た。

2メートル程もありそうな長い草が生えていた。
草原でも、草原に見えないほどだ。

そこに、1人の少女が居た。

少女の手には赤く光る刀が一振りあつた。

少女の足元にはたくさんの男達が倒れていた。

少女よりも何歳も・何歳も年上の男達だ。

そんな男達のもとに、これまた大きな狼が来た。

美しく光る銀色の毛が特長の狼だ。

「食べていいよ。もう、死んじゃったから」

少女がそう言うと狼たちが死体に群がった。

「……………ら!!何……………!!!?!」

「しょ……………生きる為……………!!!?!」

「だからっ……!!?」

「ここに……邪魔なだけ……」

「……!!……!!!!」

少女に何か言っている女性の姿。

そこで夢は終わった。

「!!!!!!!!!!」

荒い呼吸を繰り返す。

「……あの……夢は……」

誰にと言う訳でもなく、呟いた。

（何で今頃になって、あの夢が……）

桜は目をギュッとつむる。

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・」

と、呟いた直後、障子の向こうから声をかけられた。

「桜！居るかー？」

どことなくとぼけた声。

そんな声に、どことなく安心した桜はフツと微笑み、

「どうぞ」

と、言った。

入ってきたのは近藤だ。

「大丈夫か？トシから聞いたぞ」

「もう大丈夫です。ちよつと疲れてただけですよ」

本当は疲れてなんていない。

でも、心配をかけまいと桜は嘘をついた。

「そうか！なら良かった！」

近藤は気づいていないようだ。

「で、何か用ですか？」

「ああ、そうだった。イヤ実はな、俺は正直、お妙さんに嫌われていると思う」

「誰が見ても嫌われてますよ。あれ」

「そこでだあ！！！！何かお妙さんにプレゼントしたいと思う！！！！」

だが、女性はどんなものを喜ぶのか良く分からなくなてな。だからお前のところに来たわけだ！」

思いつきりさっきの話から脱線しているが、桜は気にしなかった。

「そうですね．．．私だったら相手の好きなものをあげますね」
「相手の．．．お妙さんの好きなものか．．．」

近藤の頭に浮かんだのはバーゲンダッシュだ。

「そ、それ以外だったら？」

「あとは．．．花とか宝石とか服とかそーゆーのもくれれば嬉しいですよ」

ニツコリと微笑んだ。

「よし！！助かった！！ありがとな！！！！」

「あ！！まって．．．」

桜が止める前に近藤は部屋を後にした。

「．．．．．行っちゃった」

桜は近藤が去った障子を見つめている。

「でも服は、相手にあまり好印象を与えないからやめたほうが良いですよ・て伝えようとしたのに．．．」

く近藤く

「花も買った・宝石も買った・服も買った・バーゲンダッシュも買った!」

全てを包みこむように持つ。

「いける!!! 今日こそは行けるぞー!!!」

町は夜。だがスナックなどは、今が一番賑わう時間だ。

近藤はうかれていた。

(お妙さん!!! 今日こそは貴女のハートをゲットします!!!)

と、ガッツポーズをする。

その時、丁度後ろにお妙が来ていた。

「あら？ゴリラかと思ったら近藤さんじゃないですか」

「お！お妙さん！！！！」

近藤は、手に持つてゐる物全てをお妙に差し出す。

「お妙さん！！これ、受け取ってください！！」

近藤が出した物を受け取ったお妙。
だが……

「あら、この花いい匂い……それに、この宝石はダイヤモンドでしょうか？」

「……あら？これは……」

お妙は和服を手にとった。

「いやあ！それですか！お妙さんに良く似合つと思つて！」

上機嫌の近藤に対し、ダークオーラを解き放つお妙。

「おいゴリラ……なんで私の服のサイズ知つてんだよオオオオオオオ！！！！！！！！」

とび膝蹴りを喰らわせる。

「ゴベラアア！！！！」

その時、お妙の様子を見に来ていた新八は、その光景に体が固まっ

てしまった。

我に返った新八が止めなければ、もしかしたら今頃近藤は――

これ以上言うのは止めよう………

最終的に、花と服だけ返された。（バーゲンダッシュと宝石だけお妙は貰った）

泣きながら帰る様は、真選組の局長には到底見えぬ。
と、新八は思っていた。

メチャクチャになってもとりあえず出来ていれば問題は無いのでテストなども公

メチャクチャだー!!!

メチャクチャだー!!!

メチャクチャだー!!!

桜「.....(汗)」

朝っぱらから騒がしいと思ったら何かが起きるか起きた後である（前書き）

はいどもーもー。夜代衣です。

本日2月12日は自分の誕生日！！！！
超ウレシー！！！！！！

でもお祝いは昨日やりましたw

誕生日で機嫌がいいので相当時間をかけて書きました。
見てくださいナ←

朝っぱらから騒がしいと思ったら何かが起きるか起きた後である

（次の日の朝）

桜は今日は非番なので、制服ではなく、丈が短い着物を着ていた。

白地に、淡い桃色の丸模様が付いた着物だ。

その上に桃色の羽織をはおっていた。

更に羽織の上から、真っ赤な帯紐を腰で結んでいた。

背中の大きなリボンが特徴だ。

「ご飯食べよつと」

食堂に向けて歩いていていると、土方と沖田に会った。
2人にあいさつをした後、一緒に食堂に向かった。

そして、食堂に入った。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

食堂に入った途端^{とたん}、土方・沖田・桜の3人は黙ってしまった。

顔面に大きな痣を作った近藤に、かける言葉が見つからないのだ。

それは、他の隊士もしかりだった。

「ん？どーしたお前等？何黙ってた？何で俺のほう見てんだ？？」

「いや・・・・・・・・」

「それはですねィ・・・・・・・・」

「何と言ったら良いか……」

3人とも見事に茶を濁した。

「その痣見れば誰でもそうなるような……」

土方は痣を指差して言った。

「もしかして近藤さん……妙さんの所に服持って行きませんかしたか……」

「ああ、持つて行った」

「馬鹿ですか!？」

「ええ!?!？」

近藤は心底驚いたような表情を見せた。

「普通!女性に何も言わず服を持っていく・とかしたら警察沙汰ですよ!!!」

女性と一緒に買いに行く・なら分かりますけど!」

「そ・そうなのか!?!でも昨日……」

「最後まで聞かなかった貴方が悪いです」

近藤は「そ・・・そうだったのか……」と落胆した。

「話は最後まで聞いてくださいよ?」

「はい……」

その後全員がいつも通りの賑わいで食事をしていた。

全員が食べ終わった頃だろうか。

1人の隊士が慌てた様子で食堂に入ってきた。

「き、局長！！大変です！！！」

「どうした？何をそんなに……」

近藤が言い終わらないうちに、

「ぐわあああ！！！」

と、悲鳴が聞こえた。

「な、なんだ！！？」

「見知らぬ男が屯所に侵入してきました！！！」

「何イ！？誰だ！そんな不屈き者は！！！！！」

そう言うなり土方は刀を携え飛び出していった。

「ま、待ってください！！！」

桜も続いて飛び出す。

そして2人は屯所の門まで走っていった。

「デメエ……何者だ？」

土方の後方に、やられた隊士が倒れている。その隊士の傍らに桜が居た。

侵入してきたものは、笠をかぶり体全体を覆う藍のマント。手には手甲が見える。

「貴方が『鬼の副長』ですか？」

「だったら何だ？」

柄に手をかける。

「殺し合いをしましょうよ……」

「上等だコラ。返り討ちにしてやる」

相手が先に動き出した。

土方は瞬間的に刀を抜き、相手の刀を受け止めた。

「くっ……」

思っていた以上に衝撃が大きく、思わず呻いてしまう。

「まだまだ♪」

敵は更に刀を振り上げる。

土方は防御の姿勢をとった。

「ダメ！！かわして！！！」

桜の声を聞いた土方は、相手の攻撃をかわした。

かわした所には、敵の振り下ろした刀が地にめり込んでいる。

（なんて攻撃だ……！！）

土方は、驚きを隠せなかった。

「ありやりや……かわされちゃったか……」

ま、あのまま攻撃を受けていれば貴方、死んでましたよ？」

男の口調は淡々^{たん}としていた。

男の口元がクスリ、とにやけていた。

「何が……おかしいの？」

桜は刀を左手に持った。

「いえ……まさかこんな所に居るとは思わなかったんですよ……」

「何がよ……?」

「鬼神がね」

それを聞いた瞬間、桜は高く跳躍していた。

「ハアアアアアア!!!!!!」

桜は刀を振り下ろした。

だが、相手は身軽に避ける。

「そんな格好でそんなことしたらはしたないですよ？」

「うるさいッ!!!!!!」

そう言うなり、回し蹴りを繰り出した。

「ホラホラ……」

相手はユラユラと、まるで柳のようにかわしていく。

桜は一旦距離をとると、袂たもとから手甲を取り出した。
それを素早く両手につけた。

すると男の口元は更にニヤついた。

「月と桜の模様の手甲……間違い無さそうですね」

男は刀の切っ先を桜に向けた。

「おい桜！相手の挑発に乗るな！！！」

土方が言うが、まるで言葉が届いていないように桜は構えた。

体の左側に刀を構え、左足を後ろに下げた。
前項姿勢をとり、そのまま相手を見据える。

「桜！！止める！！！」

土方の言葉を全く無視した。

桜は左足を踏んばった。

左足が踏んばっている地面は、メキメキと抉^{えぐ}れていく。

と、その瞬間^{とき}だった。

ダン、と駆け出した桜の姿を、土方も男も見ることとは出来なかった。
見えなかったのだ。

次に桜を見たのは、男の背後だった。
刀を一振りすると、相手を睨^{にら}んだ。

「——流石ですね」

男がそう言った後、風が男の間を通り抜けた。
直後、男の体から血が吹き出た。

男の笠が空を舞う。

「『神速の辻斬り』・・・否、『無情の鬼神』」

「その名で呼ぶな！！！！」

倒れた男の上に刀の切っ先を向け、まさに今振り下ろそうとした時だった。

「桜！！！！」

近藤に名を呼ばれた。

「止める！！そいつを殺すな！！！！」

近藤に手首を掴まれた桜は、ピタッと動きを止めた。

「近藤さん・・・・・・」

土方が、歩み寄ってきた。

「そいつが誰か知っているのか？」

その問いに近藤は、

「ああ。知っている」

と、答えた。

「じゃあ！！」

桜は近藤の手を振り払い、向き直った。

「じゃあこいつは誰なんですか！！！」

いつもの落ち着いた印象とは違って、激しい口調で言った。

「こいつは政府の人間だ。元は攘夷浪士だがな」

「攘夷浪士だと！！？」

『攘夷浪士』という言葉に、土方が反応した。

「攘夷を図った者が政府の人間！！？ふざけてんのか！！！」

土方は激しく近藤に言い放った。

「落ち着けトシ！こいつはもう心を入れ替えて今は普通に働いてる」

土方は「信じられるか！」と言った。

「フ・・・フフ・・・信じなくて結構ですよ・・・」

それにしてもまさか味方に斬られるなんて思ってもいなかったですよ。鬼神さん」

「ッ！！！！殺す！！！！」

桜は刀を大きく振り上げた。

「桜！落ち着けと言ってるだろ！！少し頭を冷やせ！！！」

桜は舌打ちをすると、刀を鞘に納め、そして手甲を外した。
それを再び袂たもとに収めると、何も言わず屯所の中に入った。

隊士達も道を開ける。

廊下の角を曲がり、その姿は見えなくなった。

「客間」

「にしても大丈夫か？その怪我」

「大丈夫ですよ。そんなに深くないですから」

近藤は男と向き合うように座っていた。

「悪かったな信濃君。ウチの者モンが」

「気にしないで下さい。私のほうが彼女を挑発したのですから」

男はにこやかに笑みを見せた。

「それにしても……今日は何の用で？」
「……これですよ」

信濃が出した紙には、ただ3文字で『白夜叉』と書かれていた。

「白夜叉だと……!!?」

「はい。攘夷浪士ならば誰しも聞いたことのある名前です。実物を見たことは無いんですけどね」

懐に紙を収めた。

「その白夜叉がどうした？」

「……生きていたんですよ。白夜叉がね」
「!!!!」

「白夜叉がどこにいるかは分かりませんが、生きているそうです」

「江戸にいるかもしれんな」

「はい。そうですね。なので、真選組の皆様にも、と思ひまして」

碧の瞳を近藤へ向ける。

「もう一つ聞きたい。何故ウチの隊士を攻撃した」

「試させて頂きました。真選組の力を。ですが、あれでは白夜叉には勝てませんよ」

「……………」

「安心して下さい……全員峰打ちです。副長さんに対しては殺す気などありませんでしたよ。ただ、そう言ったほうが試せると思って。ま、彼女の反応はチョット予想外でしたけどね」

その言葉を聞いて近藤は「そうか」とだけ言った。

「では、そろそろ御暇おいとまさせて頂きます」

信濃は再び藍のマントをはおり、桜に斬られた編み笠を被った。

そして、近藤に一礼し、出て行った。

（それにしても……何故奴は桜の事を鬼神と呼んだんだ……？

……いや、まさかな………）

く桜く

（何なんだ……何なんだ……何なんだ……！

!!!!!!)

桜は廊下を曲がった後、そのまま自室へと向かっていた。

(なんなのよあいつは……何で私の事を……)

桜は軽く頭を振った。

(いや、元攘夷志士なら知っててもおかしくは無い……よね……)

桜は少し足早に部屋へと歩を進めた。

自分の部屋に入るや否や、畳の上に座り込んだ。

(もし……もしも……気づかれたらどうなるんだろ……)

懷から小太刀を取り出した。

桜の模様が描かれた小太刀だ。

小太刀を抜くと、キラリと光る刃が現れた。

刃に顔を映した。

哀しい瞳の自分自身が映る。

「大丈夫だね……きつと……きつと……」

朝っぱらから騒がしいと思ったら何かが起きるか起きた後である（後書き）

桜「前書きってあれは……」

ハッピーバースデートウミー

桜「悲し過ぎる……！悲しすぎるって……！ちゃんと祝いしても
らったのに何それ……！」

ジョークだってヴァ

桜「……（――u）」

○×問題で分からない場合は全て○か全て×にせよ（前書き）

サブタイトル通りにやれば、必ず1〜3点は取れる。

桜「勉強しなさいッ！！！」

○×問題で分からない場合は全て。か全て×にせよ

近藤は土方を自身の部屋に呼び出していた。

「本当か!!?」

「ああ。間違いなく白夜又は生きているそうだ」

土方も驚きを隠せないようだ。

「…………でもそれだけじゃないんだろ?んなモン、会議
で言えば良い事だ」

「フ…………ハハハハ!!!やっぱトシはスゲーな!!」

近藤は頭に手を当て、笑った。

「その通りだ。お前を呼んだのにはもう一つ理由^{わけ}がある」

打って変わって真剣な眼差しになった。

「鬼神…………無情の鬼神についてだ」

「!!!!」

煙草の灰が畳の上に落ちる。

「まだこれは仮説だ…………よく聞けよ」
「……………」

「俺は…………桜が無情の鬼神じゃないのか・と思っている」
「なッ!!」

「俺だってそうは思いたくは無い。だが、さつき来ていた信濃・・・あいつが言った言葉を覚えているか？そして——あの時の桜の慌てぶり・・・」

土方は1時間前のことを思い出していた。

いつもとは違う態度・言動

『鬼神』と言われた時の慌てよう

いつもの『桜』とはまるで違っていた。

「だが・・・あいつがもし無情の鬼神だとしても、攘夷があつたのはたしか8年前だろ？あいつはまだ8歳だぜ？」

土方がそう言うと思っていたのか、一つの資料を手渡した。受け取った資料を見ると、こう書かれていた。

「無情の鬼神　・　幼い女子。黒髪をなびかせその姿、何人たりとも見ることは無し。

特徴的なのはその瞳。漆黒の瞳に漆黒の月が浮かんだような模様。」

「これだけか？」

「それ以上の資料は無かつたんだ。だが、最近になつてもう一つ資料が見つかったんだ」

今度は近藤自身が読み上げた。

「その刀、妖刀なり。その者の気持ち　強く読み取り　その者が殺そうとすれば、刀は漆黒に染まる」

「・・・・・・・・！！！」

「あいつの刀を覚えているか？昔、真選組ができた頃、あいつが本気で相手を殺そうとしたことがあっただろ？」

「ああ・・・隊士が大量にやられた時か」

「あの時のあいつの刀・・・黒かったよな・・・？」

「・・・・・・・・ああ」

「この資料に当てはまるだろ？」

土方は黙ってしまった。

（ここまで桜と一致するとは・・・・・・・・）

土方は無意識のうちに資料を強く握っていた。

「それでもよオ・・・・・・・・もしかしたら鬼神の刀が何らかの偶然でアイツの手に渡ってしまった・てこともあるだろ？」

「まあな・・・・・・・・」

「それにだ」

土方は資料を投げ出し、立ち上がる。

「こんだけの資料じゃアイツを鬼神とすることあてきねえだろ」

そう言っで部屋を出て行った。

（そーだよな。あんだけじゃあ桜を鬼神と言うにはまだ早いか）

腕を組み、フツと微笑んでいた。

「あ、土方さん」

部屋を出て、廊下を歩いていた土方に声をかけたのは沖田だった。

「なんだ？」

「桜、見やせんでしたかい？」

「いや・・・俺はさっきまで近藤さんと居たからな・・・桜がどうかしたのか？」

「アイツ、何も言わずにどっか行ったみたいでさア」

「？それがどうした？アイツ今日非番だろ？どっか行ったって不思議じゃねえだろ」

土方がその場を去ろうとした時、沖田が、

「誰も見てねエんですよ」

そう言われて歩みを止めた。

「アイツが出て行くところを誰も見てねエって言ってんですぜ。土方さん」

数秒の沈黙の後、顔だけ少し振り向いて、

「直ぐ帰ってくるだろ」

と言って、また歩き始めた。

く桜く

桜は歌舞伎町を歩いていた。
たくさんの人とすれ違う。

（やっぱり平和が一番だね……このまま何も無かったらいい
んだけどな）

桜は軽く伸びをした。

（それにしても……何も言わずに出て行っちゃったけど……
・良かったのかな……？）

桜はあの後、門ではなく塀を乗り越えて出て行ったため、誰も気づかなかつたのだ。

そんな事ばかり考えていると、女の人とぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい」

「い・いえ。こちらこそごめんなさい」

女の方は急いでいたのか、足早に通り過ぎていく。
そして、人ごみにまぎれて見えなくなった。

桜は見えなくなるまでその人を見ていた。

その後、行きつけの茶店に寄っていた。

「こんにちは」

「ああ、桜ちゃんいらっしやい」

出てきたのは30代くらいの女性。

「いつもで良いかい？」

「はい」

桜は店の中のイスに座った。

おばちゃんが直ぐに大福とお茶を持ってきた。

「いったただっきまーす」

はむつとぽってりとした大福に食らいつく。

「今日は塩大福と苺大福だよ」

そう言っておばちゃんは桜の向かい側に座った。

桜は大福を食べている時だけ子供っぽい表情をする。

「そっぴや桜ちゃん聞いたかい？あの噂」

「噂？」

桜は机に肘をつき、両手で湯飲みを持って茶をすすった。

「そっそっ。誰が言ったか分からないんだけどね……」

桜に手招きしながら言った。

「『白夜叉が生きていた』って噂、聞いてないかい？」

桜が大福に伸ばしていた手がピタツと止まる。

「白夜叉……」

「そうそう……私たちには白夜叉がどんなものか知らないんだけどね、町はその噂でいっぱいだよ」

少し俯く桜におばちゃんは、

「桜ちゃん、白夜叉って何なのか知ってるかい？」

少し考え込むような表情をしていた桜はスツと顔を上げて、

「私も良く知らないです」

と、答えた。

そして、再び大福に手を伸ばした。

「そーかい？真選組が知らないんじゃないわね
」

「そーですよ」

桜はお茶を飲みほすと、席を立った。

「いくら？」

「800円。お茶はオマケだよ」

「ありがとう」

800円ちょうどを置いて、外へ出て行った。

（銀時に知らせなくちゃ・・・）

桜は万事屋に向けて走り出した。

く万事屋く

「ついた・・・ハア・ハア」

桜は万事屋の玄関先で、中腰になり、息を弾ませていた。呼吸を整えてからインターホンを押した。

ピンポーン・・・ピンポーン・・・

「はい」

と、扉の奥から声が聞こえた。

「どちらですか・・・って桜ちゃん」

出てきたのは新八だ。

「どうしたの？そんなに急いで」

「銀時に・・・話があんの・・・銀時は？」

「銀さんなら中に居るけど？」

「そう・・・上がってもいい？」

「どうぞ」

桜は草履くすりを脱ぐと、直ぐに障子をスパーンと開けた。

「うお！！なあんだ、桜か・・・何の用だ？こちとら急がしいんですけどー」

「まったくそうは見えないわ・・・」

タメ息を吐くと、バンツと机を叩いた。

「そーじゃなくて！！！ホントのホントに聞きなさいよ！！！！！！」

あまりの迫力に銀時はイスから転げ落ちてしまった。

「何ツツだよ！！」

「だあから話し聞きなさいって言ってるのよ！！バカ！！」

「だあれがバカだこの野郎！！」

「アンタがバカだって言ってるのよ！バカ」

「あのなあ、バカって言う奴がバカなんだよ。だからオマエは俺以上になバカって訳だ。バカ」

「アンタの方が2回多く言ってるけど？」

2人の口喧嘩は延々と続いていた。

「あの2人、収まりそうにないネ」

「やれやれ・・・」

「という訳で止めてこいメガネ」

「なんで僕！？てかどういいう訳！？それ以前に何でメガネ？何で僕メガネなのー！！！」

「うっさいメガネ。とっとと止めてくるヨロシ。それ以前にオマエのツッコミ回りくどいアル」

「く・・・」

「こうなりやヤケだー！！」と言って2人の仲裁に入った。

「もう！2人とも！いい加減にして・・・」

「うっさいメガネ！！」

そう言われた拳句、2人のアッパーを顎に喰らった。

「くだがばアイイ！！！！」

恐らく「いい加減にして」の後の「下さい」と言っただろう。

「おいおい新八倒れちゃったよ？お前のアッパーでノックアウトしちゃったよ？」

「私よりアンタのアッパーの方が威力あるでしょうが！！」

またまた言い争いが始まった。

「大丈夫かー？新ハイー」

神楽が声をかけると新八はわなわなと拳を震わせながら立ち上がった。

「デメエー等……いい加減にしろよ——!!!!!!」

新八の大声に2人の喧嘩が止まった。

「大体何だよ!!皆してメガネメガネつて!!!!僕は『脳を鍛える大人のでいーえす』ですか!!?ええ!？」

全員若干引き気味である。

「それに!桜ちゃんも何の用なの!？」

「あ、すっかり忘れてた」

桜はポンツと手を叩いた。

「あのね銀時……」

と、桜が話そうとした瞬間だった。

「銀時——!!!!!!」

と、窓から桂 小太郎が入ってきた。

「「「「うおわああああああ!？」「「「「」

「桜も居たか。それより銀時!かくまってくれ!!!!」

「ああ!?!また真選組に追われてんのかア!？」

と、銀時が言った直ぐだった。

「御用改める！！真選組だ！！」

土方の声がした。

「く……見つかったか……」

桂は苦痛な顔をする。

「見つかったかじゃねーよ！！あんだけ堂々として来てんじゃねーよ！！！」

「おい万事屋ア！！桂を出せ！！！！さもなくばこっちから行くぞ！！」

外から土方の声が響き渡る。

「くそッ……おい新ハイ！神楽ア！ヅラ隠せ！！」

「ヅラでは無い！桂だ！」

「言ってる場合か馬鹿野郎！！」

と、言ってる間に桜は自分の草履ぞうりを持ってまた部屋に戻ってきた。

「私も隠して！！」

「え？な・何で？」

「訳は後！！！」

新八の上に神楽が肩車し、その上に桂が乗った。そして屋根裏に隠した。桜も同様に隠した。

そして外では・・・

「強行突破だ」

と、土方が指示した直後だった。

「ちょーつと待ったア！！！」

銀時がそれよりも早く扉を開けた。

「また壊されたらたまんねーよ！！！！横暴警察！！！」
「だれが横暴だ！」

いつもながらの言い合いだった。

「チツ・・・まあそんなことはどうでもいい。桂を出せ」
「ヅラア？ウチにはいねーよ」

「嘘ついても無駄だぜ？とつとと出せよ桂」
「だあから知らねーって言うてんだろ」

銀時はチラリと下を見る。

そこには桂の愛ペット、エリザベスが居た。
プレートにこう書いてあった。

「あー！下に桂が居る！あのままじゃ逃げられちまうぞ」

そしてクルリとひっくり返す。

「ほら！あそこにあいつのペットがいるぞ……！
と言え」

と書かれていた。

（しゃーねー……）

銀時は、エリザベスが走り出したのを見て、

「あー！！下に居る！！下にツラが居るぞ！！あのままじゃ逃げられちまうぞ……！！」

「何！？」

バツと下を見る土方。

「ほらあ、あっちあっち。あそこにあいつのペットの変な生物が居るぞ」

指差して言った。

「くそ……！追え！奴等を追えー！！！！」

「「はい！！！！」」

全員がエリザベスを追っかけて行った。

○×問題で分からない場合は全て○か全て×にせよ(後書き)

珍しく長くなったー!!

桜「ほとんどセリフじゃない」

う・うっさい!!

桜「それから、攘夷があつたのは8年前設定にしています」

理由?何となく」

桜「……………(汗)」

男がおいしそうにチョコを食べていると不思議と女も食べたくなる

「おい、もう出てきていいぞ」

と、銀時が言うと、2人が天井裏から出てきた。

「よつと」

「は！」

2人は見事着地した。

「銀時、助かった」

「ありがとう」

「どーいたしまして」

銀時は、とぼけた表情で返事をした。

「そっぴえば桜ちゃん。何の用事で来たの？」

「あー……忘れてた」

桜はソファーにドサッと座った。

「今から言うこと、よく聞いてね」

桜は全員を順に見る。

「銀時……白夜叉のことがあちらこちらで噂になってるわ」

「「……………」」

銀時だけではなく、桂も驚いていた。

「それだけじゃない……私の事も……鬼神のこともバシはじめてる」

「な?!」

「どうしてそんな事が……?」

新八が聞くと桜は、ゆっくり瞬きまばたした後、話し始めた。

「今朝、屯所に元攘夷浪士の男が来たの」

「な!! 攘夷浪士だと!?!」

桂が目を見開いた。

「今は政府の人間らしいんだけど……そいつが私の事を鬼神と呼んだの」

「信用できない奴ですね」

「まあ、それよりも1番心配なのは白夜叉……銀時のことよ」

桜は銀時を見る。

「私はまだ噂にはなっちゃいない。でもアンタはもう噂にまでなってる。誰が言いふらしたかは分からないんだけどね」

「さっき言ってた元攘夷志士の男が怪しいネ!!」

「そうなんだけどね……でも、一般に知れ渡るとなるとちよつとね……」

桜はヒョコツと立ち上がった。

「用はそれだけ。じゃあね」

桜は後ろを向いたまま手を振った。

「銀時・・・実は俺もその事を伝えに来たんだ。その途中で真選組に見つかってな」

「ヅラア！お前ドジアルな」

「リーダー、ヅラでは無い。桂だ」

桂もそういつて窓の棧に足をかける。

「気をつけるよ銀時」

そう言つて外に出て行つた。

「ま・・・まあでも、銀さんを白夜叉だと思つ人はいないと思ひますよ」

「そうアルヨ！こんな死んだ目をした天パが白夜叉だと思つ奴はいないネ！！」

「あれ？神楽ちゃん？今俺なんか傷ついたよ？もの凄く傷ついたよ？」

ああ、もうコレ絶対大丈夫だ　と、思ふ新八であつた。

「桜」

「久しぶりの非番だしなー」何しようかな？」

桜は再び伸びをする。

「ねえ」

と、不意に後ろから声をかけられた。

「ん？」

桜が後ろを向くと、小さな女の子が居た。

「おねえちゃんのその腰紐、ほどけてるよ」
「え？」

桜は手を後ろに回した。

大きなリボンほとんどほどけていた。

「あーホントだ。教えてくれてありがとう」

屈^{かが}んで少女の頭をなでてあげる。

「うっん！」

少女は無邪気な笑みを見せてくれた。

それだけで嬉しくなった。

桜は一旦腰紐をほどいた。

と、その時だった。

一際強い風が吹き、腰紐が飛んでいく。

「あー!!」

桜の声に数人が振り返る。

腰紐は、少し遠くのマンションのアンテナに引っかかっていた。

「もう!」

そのマンションへ走り出していた。

「あー……どうしよう……」

桜はどうしようかと考えている。

と……

突然マンションの窓が開いた。

「オイ！誰だあ！！アンテナにイタズラしたのは！！！」

マンションの窓から叫んでいるのはマダオこと長谷川だ。

「あ・・・マダオ」

桜がボソツと呟やいた。

「誰がマダオだあ！！！」

「地獄耳！？」

ん？とマダオが桜に気づいた。

「おお！桜ちゃんじゃねーかあー！！何してんだ？こんなトコで？」

「ちょ、恥かしいから大声出さないでよ！！！」

桜が言うが、マダオは聞かず、

「それより、アンテナどうなってんだー！！？誰かイタズラしてねーかあー！！！」

「うるさい！ってば！！！」

「えー！？何だってー！！！」

桜の怒りのボルテージが上がっていった。

「だから・・・うるさいってんでしょーがあー！！！！！」

桜は足元に合った石をマダオめがけて蹴り飛ばした。

「ゴアッ!!」

マダオは後ろに倒れて下から見えなくなった。

【なんだなんだ?】

【あの娘が蹴り飛ばした石が人に当たったの】

【暴力女?】

【ヒッド】

【警察呼んだほうがいいのかな?】

などと囁かれて流石にヤバイと思った桜は、

「お・・・おいマダオー!大丈夫ー?」

シ～ン

【自分でやつといて大丈夫?だって】

【悪魔?】

【サイテー】

桜はどうしたら良いのかであたふたしていた。
すると、ゆっくりマダオが起き上がった。

「マダオ!!無事だったんだ!」

「・・・まあ・・・で、何でさっきからマダオ!?作者酷くない!!!?」

長谷川って打っても変換したらマダオになる。

「今長谷川って出来てんじゃない!」

「マダオ・・・良かった・・・」

「何サラリと話元に戻してんの?」

はいはい、本編続くから←←←

「ねえマダオ、あれ取れる?」

「は!?!ムリムリ!あの三角屋根にどう登れって言つの?」

「・・・やっぱりマダオね」

(しょうがない・・・あの手を使うしかないわね・・・) ↑自分で取る気はサラサラ無し。

「ねえ・・・誰かアレ・・・取って?」

少し潤目うるめで下唇に人差し指を乗せて言った。

「「「「「よろこんでー!!!!!!」」」」」

周りに居た男達がこぞって登り始めた。

「取ったー!!!」

1人の青年が高々と腰紐を掲げた。

周りの男達は「クッソー」とか言っていた。

「はいどうぞ」

そう言ってその青年から手渡された。

「ありがとう」

いつも通りのスマイルでお礼を言う。

そして、もう一度結び直した。

「よし」と

桜はしっかり結んだのを確認してから、マダオのほうを見た。

マダオは涙を流しながら煙草をふかしていた。

(・・・・・・・・u)

夕方

「そろそろ帰ろっかな」

と、呟いたが、

（鬼神の事とか・・・白夜叉の事とか・・・どうなってんだろう）

そう考えると歩みが止まった。

そして、自然と屯所に向かう道ではなく、別の道を歩いていた。

「それにしても・・・なんだろう・・・この胸騒ぎは・・・」

立ち止まり、キョロキョロ辺りを見渡す。

「気のせいだね」

桜がまた歩き始めようとした時だった。

遠くで爆音が聞こえた。

「!!!!!!!!!!」

桜は走り出していた。

（今は・・・何!?!）

爆発があったであろう、黒煙が立ち上るほうへ向かった。

「やっぱり今日も1日平和にっつのはムリそうね」

人混みができていた。

桜は人ごみを掻き分けて進み、最前列へ行った。

桜の視線の先には、見るからに悪そうな男達が10人。
そして、人質が3人。

「!!!!」

桜は人質を見て驚いていた。

1人は最初、ぶつかった女性

1人は腰紐がほどけていることを教えてくれた少女

1人はその腰紐を取ってくれたあの青年だった

「あの3人がいるなんて……どーゆー偶然かしら？」

桜はジッと相手を見る。

（武器は刀が6、銃が4か……）

相手の武器を確認した後、隣に居た男性に尋ねた。

「あの・・・何があつたんですか？」

「え？ああ、あいつ等、あのガキがぶつかつた事に怒つてよ・・・で、女性が母親らしくてな、謝つてたんだが、許す気が無いみたいだよ。そしたらあの男が助けようとしたらああなつたんだ」

「・・・さっきの爆発は？」

「あいつらの爆弾さ。ホレ、一軒家が無くなつてるだろ？アレを爆破したんだ」

「そうですか・・・ありがとうございました」

桜は袂たもとからあの手甲を取り出した。

「おいおい！讓ちゃん何してんだ！？」

「決まつてるでしょ？助ける」

「ムリだ！あいつ等誰か1人でも助けようと齒向かえば、人質全員を殺す気らしい」

「可能よ。殺す前に、倒せばいいだけ」

「ムチャだ！ここからあそこまで10メートルはあるぞ！？真選組を待ったほうが・・・」

手甲をつけ終わった桜は、懷ふところから手帳を取り出した。

「・・・真選組二番隊隊長、都野 桜です」

「し・・・真選組！？」

男の言葉に周りの人々がいつせいに桜の方を向く。

「はい。今日は非番だつたんですけどね」

手帳を収めた。

懐から短刀を出そうとすると、敵の1人が「おい!!」と声を張り上げた。

「そこそこ。あとそこのお前!コツチへ来い!!」

3人、指差された。

その中には桜も入っていた。

「おい・・・譲ちゃん・・・」

「チャンス」

そう呟いてから、前に出て行った。

桜以外にも、2人の女性が指名された。

桜は2人の女性を自分の後ろに下がらせると、敵に向かって、

「何の用?」

と、強気の姿勢を見せた。

「別に・・・ただ、カワイイな」と思ってたなア」

桜の顎をクイッと持ち上げる。

「触るな!!」

バンツと手をどかす。

「気が強いねエ・・・」

男がそう言っていた時に、人質の1人・あの少女が桜に気づいた。

「あ!さっきのおねーちゃん!!」

その後、他の2人も顔を上げた。

「貴方は今朝町でぶつかつた・・・!」

「さっきの!!」

人質を見て、「ほお」と男は頷いた。

「なんだあ?こいつ等と知り合いか?」

「フン、ただ町であつただけよ・・・」

桜は鼻で笑った。

「じゃあ・・・1人死んだらどうなるのかな?」

「!!!!!!」

女性に銃が突きつけられる。

「おかーさん!!」

少女が泣きながら母に抱きつく。

「大丈夫よ・・・大丈夫・・・」

母親も、震える手でわが子をなでる。

「・・・銃・・・なさい・・・」

「あ!?聞こえねーな?何て言ってるんだ?」

「その銃を下ろしなさいって言ったのよ!!」

桜の蹴りが、見事に母親に突きつけられた銃を蹴り落とす。

「逃げて!!」

あの青年が、他の4人を連れてその場を離れる。

「撃て!!殺しても構わん!!」

「させない!!」

撃つ前に全てを叩き落とす。

さらにそれを遠くへ蹴飛ばした。

「ぐ・・・」

「なんだこのガキ・・・?!」

「つ・・・強い!!」

銃を持っていた男達は、自らの手を押さえる。

「ええい！情けない！！たった女1人だ！！刀でなんとかしろ！！」

男の命で、全員が刀を抜く。
桜も懷から短刀を取り出す。

「全員倒してやんよ」

「ふざけるなー！！！」

手甲で相手の刀を防ぎ、短刀で攻撃する。

「遅い！！」

「ぐわ！！」

時には蹴飛ばし、時にはかわし――

そして、見る間に9人を倒した。

「どうすんの？残るはアンタだけよ」

「ふふ・・・おもしろくなってきた・・・」

相手は大刀使いで、巨大な刀を引き抜く。

桜は、ニツと笑うと懷から手帳を取り出した。

「それは・・・！！」

「真選組！二番隊隊長！都野 桜！！！！器物損傷及び拉致容疑で貴方を逮捕します」

「出来るモンならしてみろ！」

相手の大刀が振り下ろされる。

「くっ……」

頬をしかすめた。

「まだまだあ!!」

今度は真横に振られる。

それをしゃがんでかわす。

相手の攻撃を避ける防戦一方になってしまった。

（これじゃ……きりが無いッ!!）

そして、一撃が足に当たってしまった。

「ウウッ!!!!」

左足をやられた。

「どうしたよ？え？それが真選組の隊長さんの力なのか？」

「そんな訳……無いでしょ!!」

痛む左足を軸に、右足で蹴りを喰らわす。

が、刀の面で受け止められる。

（チャンス!）

桜は左足で地を蹴った。飛び上がり、とび膝蹴りを刀の面めがけて

放つ。

大刀にはひびが入った。

「な・・・なに!!」

「はあああああ!!」

バキン　と大刀は折れた。

「これで・・・お終い!!」

短刀で右肩から左腰にかけて切り裂く。

男はその場に倒れた。

と、その瞬間^{とき}だった。

「よくやった!!」

「スゲー!!」

「かつこえ——!!」

「えらいぞ讓ちゃん!! 良くやった!!」

あちこちから歓声上がる。

そんな中、桜はあの5人を見る。

（みんな無事で良かった・・・）

その後、桜も地に伏せた。

男がおいしそうにチョコを食べっていると不思議と女も食べたくなる（後書き）

長・・・

桜「いつも短いくせに・・・」

なんかねー銀魂はねーセリフがおおいんだよ

桜「確かに・・・」

最近1年前に買ったゲームをクリアしたと思ったらまだ続きが会った（前書き

なんかもう同じ表現ばっか使って・・・・・・・・

ホントもうスミマセン（TT）

最近1年前に買ったゲームをクリアしたと思ったらまだ続きが会った

桜は地に伏した状態からゆっくり体を仰向けにした。

「ハッ！ハッ！ハッ！」

滝のように汗が出る。

「おねーちゃん！？」

あの少女が桜の元へ走ってくる。

「しっかりしてください！！」

その少女の母親も一緒に走ってきて、桜の傍らに座った。

「だい……じょー……ぶ」

息も絶え絶えに言う。

脇腹に手をやる。

「ッ！！！」

桜は脇腹に刺さっている物を引き抜いた。

「あのヤロー……やってくれるじゃない……」

桜の脇腹に刺さっていたのは短刀だ。

男が桜の攻撃を喰らうと同時に短刀を刺してきたのだ。

刺された場所から止めどなく血が溢れる。

「痛……！」

立ち上がるうにも立ち上がれない。

（あーコリヤヤバイかもしれないわね）

頬の血を拭った。

「誰か！！救急車を呼んでください！！！」

そう言っているのは桜と共に指名された女性だった。

もう1人の女性は桜の足の血をハンカチで拭う。

「私……これでも医者の方端くれなんです。まあ、いつもは父の手伝いをしているだけです」

そう言うと、手に持っていたカバンから消毒とガーゼ、包帯を取り出す。

「今は応急処置程度しか出来ませんから……」

少し悲しげな表情で桜に微笑みかけた。

「今は応急処置でもありがたいよ」

「——ありがとう……」

女性は丁重にガーゼを傷口に当てる。
その上から適度な力で包帯を巻いていく。

「腹部の傷は今は圧迫して止血するしか……氷があればもっと良いんですけど……」

「それならまかしときな!!」

先ほど桜と話していたあの男性だ。

「ウチは直ぐそこなんだ。氷くらいなら直ぐ持ってくるぜ?」

「そうですか。では、頼みます」

「おうよ!任せときな!!」

男は爆破された家のすぐ隣の家に入っていた。

(マジで直ぐ隣じゃん!!)

と、心の中でツツコミをしていた。

男性は3分もしないうちに戻ってきた。
持っていたタライには大量の氷。

「ホラ!これ使いな!」

「ありがとうございます」

女性は氷を自前の手拭てぬぐいで包み、腹部に乗せた。

「しばらくそうしていて下さい」

「分かったわ」

ひんやりとした感覚が伝わってきた。

(ふう……さっきよりずっと楽……)

桜がそう思っている間に、腹部にも包帯を巻いてもらった。

「後は救急車……まだかしら……」

女性は不安そうに辺りを見渡す。

「落ち着いてお姉ちゃん！直ぐ来るって！」

と、先ほど救急車を呼んで、と言っていた女性が言う。

「し……姉妹……なの？」

「はい、そうなんです……」

「偶然の偶然って奴かなー？」

妹の方は姉と違って、明るい性格のようだ。

「何かと皆共通点があるのですね」

と、少女の母親も思わず笑ってしまった。

「共通し過ぎて恐いわ……ホント」

桜も荒い呼吸を繰り返す中、笑っていた。

少し空気が和んだ時に、救急車のサイレンが聞こえた。

「あ、きたみたいだよ」

少女が音のした方を見る。

「ここでーす！！」

妹が手を振って場所を教えていた。
姉は胸に手を当てホツとしていた。

「本当にありがとう。応急処置がなかったら今頃氣イ失ってたかも」
「多分それ、笑い事じゃないと思いますよ」

青年が苦笑いしながら言ったのだった。

その後、救急車に乗せられる寸前。もう一度皆に

「ありがとう」

と、精一杯の感謝の気持ちをこめて言った。

病院に向かう救急車の中で、桜の意識は遠のいていった。

く病院く

どのくらい時が経ったのだろうか？

ボンヤリとした意識の中、桜は目を覚ました。

「んん．．．．．」

だんだん意識がハッキリしてくると、自分の今の状況が分かってきた。

今は夜。病院のベッドで寝かされている。

（まだ．．．眠たい．．．もう少し寝てよ．．．．．）

そして再び眠りについた。

次に目が覚めたのは午前9時。

「はあ．．．．．良く寝た．．．．．」

桜は体を起こそうとしたが、腹部に激痛が走り、体を起こすのをあきらめた。

「いったゝ」

桜はそう言った直後、昨夜は分からなかった事が分かった。

服はそのままだった。

羽織と手甲は外されていた。

（短刀とかはまだ懷にある・・・）

ボンヤリとそんな事を思っていた時だった。

「失礼します」

一声かけて、看護婦の女性が入ってきた。

「あ・・・！目が覚めましたか」

「はい・・・」

「あ、熱があるのでしばらくは横になってて下さいね？」

「分かりました」

その時桜は、（あれ？あんな怪我しよっちゅうなのに発熱しちゃった？）と考えていた。

「疲労による発熱ですからゆっくり休めば直ぐ治りますよ」

「へ？あ、そうですか」

桜は思考の世界から現実の世界へと引き戻された。

「あゝあ・・・情けない・・・」

「どこがですか？」

あ、そういえば貴女の保護者に連絡しないと・・・電話番号教えてくれる？」

「大丈夫です。ケータイありますから。自分で連絡します」

懐に手を入れる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたの？」

「・・・・・・・・無い・・・・・・・・」

「え？」

「自分の部屋に置いて来ちゃった・・・・」

「あらあら。ま、保護者に連絡するよりもまず先にその服着替えなくちゃね。血だらけで気持ち悪いでしょ？」

看護婦さんは、入院時に着るあの緑の服を差し出した。

「カーテン閉めますから、着替え終わったら教えてください。手伝わなくても大丈夫ですか？」

「はい。これくらいなら」

「では、終わったら声をかけてください」

シャツとカーテンを閉める。

桜はほぼ寝たままの状態に着替えた。

血が固まって、肌にくっつきとくっついてしまっていた。それをゆっくりとはがすと、サッサと着替えた。

（短刀と手帳と財布も取り出さなくちゃ）

桜は3つを取り出して、たたんだ着物の隣に置いた。

「もういいですよ」

そう一声かけると、看護婦さんがカーテンを開けて入ってきた。

「傷は大丈夫？」

「はい。何とか」

「そう。じゃ、さっきの続き。保護者に連絡しましょうか」

桜は少し困った表情をした。

「私……親、居ないんです」

「え……!？」

「今は親代わり……というか何と言うか……」

「義父？」

「いえ。しいて言えば上司、ですかね」

「上司……?」

ふと、桜の持ち物に目がついた。

真選組の手帳を見て、「ああ!」と、感心したように手を叩いた。

「分かったわ。確かに、私たちがするより貴女自身でしたほうが良さそうね」

「でしょー?」

2人は互いに笑いあっていた。

その頃真選組と言えば――

（真選組屯所）

「トシイイイイ！……！何で桜は帰ってこねえーんだあー！！！！」

「！」
「知るかなモン！！」

「何も言わずに出て行って何の連絡も無しで帰って来ないなんでおかしいだろ！！！！」

「そんなに心配だったらアイツに連絡すればいいだろ……」

ハア、と深くタメ息を吐く。

「それもそうだなー。ハハハハハ！！」

「やれやれ……」

土方が煙草に火をつけようとマヨ型ライターを取り出す。

その時丁度桜の部屋の前にさしかかる所だった。

「ピツと．．．」

近藤がケータイを耳に当てる。
すると、桜の部屋から音楽が聞こえた。

♪

「．．．．．」

2人はジッと部屋を見つめる。

（（アイツまさか！！））

土方がバンツ！と障子を開けると案の定、ケータイが文机ふつくえの上に置いてあった。

「．．．．．絶望的だな、近藤さん」

「ああ．．．」

2人は言葉を失っていた。

「トシ．．．俺、外回り行ってくるわ」

「イヤ．それ自動的に俺もだろ？」

近藤と土方が外回りに回されていたため、片方が行くなれば、もう1人も自動的に行く羽目になる。

（つーかなんでこのコンビなんだ？屯所が大変な事になりそうな．．．）

土方の悩みの種はつきそうに無いのであった。

続く

最近1年前に買ったゲームをクリアしたと思ったらまだ続きが会った（後書き

ああ・・・・・・・・疲れた・・・・・・・・

1回書いた後にスツカリ題名入れるの忘れてて3時間がパーになりました。

桜「あれで保存押したら全部消えちゃうもんね。

てゆーか、どっかに保存しときなさいよ・・・」

それを言わないで（泣）

ボウリングでストライクを取るのはスベアを取るよりも簡単かもしれない（前書

桜「サブタイトルは……」

お試しかッ！を見ての感想です。

桜「実際ああ何のかなー？」

さあ？

ボウリングでストライクを取るのはスベアを取るよりも簡単かもしれない

「電話、持って来ようか？」

「お願いします。ホンツト動けなくて・・・」

看護婦さんは一礼してから部屋を出て行った。

（皆に迷惑かけっぱなしだな・・・）

桜は頭を少し動かして、外を見る。

この部屋は南向きの部屋なので、朝日も夕日も良く見える。

（本当ならこの時間、屯所に居たのにな・・・）

一人思い耽っている所に、看護婦さんが戻ってきた。

「はい電話」

「ども」

電話を受け取り番号を押す。

呼び出し音が鳴り響いていた。

く近藤&土方く

2人が見回りをしていると、近藤のケータイがなった。

「誰からだ？」

番号しか表示されていないその画面に不信感を覚えつつ、電話に出た。

「もしもし、近藤です」

『あ、近藤さんですか？桜です』

「桜！？」

興味無さそうにしていた土方も近藤のほうを見た。

「さ・・・桜！お前今どこに居るんだ！？」

『今は病院に居ます。すみません、連絡が遅れてしまって・・・』

「病院だと！？一体何があったんだ！？」

『昨日、ちよつといざこざがありまして・・・てゆうーか真選組は出勤しなかったのですか？』

近藤は昨日の事を思い出していた。

く回想く

昨日の夕方

「局長！刀と銃を持った連中が町で一騒動起こしたそうです！！！」

「状況はどうなってるんだ？」

「それが……ある人が1人で全員倒したと……」

「何！？」

「全員をこのままにしておく訳にもいかなないので早く来て欲しいと・

・・・」

「分かった。何人が派遣しよう」

近藤はすぐさま土方に誰かを行かせて欲しい、と頼んでいた。

その後、全員が留置場送りとなったのは言うまでもない。（↑言っちゃった）

「あ……そうだったな……つかアレお前がやったのー！？」

『はい。その時に少々怪我をしまいまして。で、今入院中です』
「そうか・・・まあ無事で良かった・・・今からそっちに行ってもいいか？」

『大丈夫ですよ。部屋は503号室です』

「分かった。なるべく早く行く」

『はい。じゃあ失礼します』

プツツと切れた。

「桜の奴、どうしたんだ？」

話がサッパリ分からない土方は、近藤に聞いた。

「昨日、町でなんかあったろ？」

「ああ。向かったときにはもう全員ノされてたがな」

「アレをやったのが桜らしい」

「はっ!？」

「で、その時に怪我をして今は病院で入院中だそうだ」

「・・・ったく、散々心配かけさせやがって・・・」

「まあそう言っな。アイツは無事なんだ。それだけでも良しとしようじゃねえか!！」

バンツと土方の背中を強く叩く。

「で、行くのか？」

叩かれた背中をさすりながら言っつと、

「ああ」

とだけ言っていた。

〈病院〉

「終わったの？」

年齢に似合わぬ桜の口調にちょっと驚いているようだ。

「はい。ありがとうございました」

桜は丁重にも両手で渡す。

「いいえ。じゃ、お昼になったらまた来るから」

「はい」

軽く布団をかけなおしてから部屋を出て行った。

（近藤さんが来るまでは起きてよ……それにしても暇ね）

あくびを一つしてからただただ雲だけを見つめていた。

く15分後く

コンコン

無音の世界に響いたドアをノックする音。

「はい、どうぞ」

ドアのほうを向いて言う。

「よっ」

「近藤さん、それに土方さんも」

待っていました、と言わんばかりの笑みを見せる。

「ホレ、見舞いだ」

土方の手にはビニール袋があった。

「別に良かったのに」

苦笑いしながらソレを受け取った。

「それより」

と、話を変える。

「どうやって昨日、誰にも見られずに外に出たんだ？」

「あー・・・それですか。簡単です。塀へいから」

「猫かテメエーは！！！」

「まあまあトシ！いいじゃねーか」

「でも近藤さん・・・！」

「いーんだよ」

「・・・・・・・・・・」

桜は正直近藤達の存在をありがたいと思った。

勝手に飛び出して

勝手に怪我して

でもそんな自分をこうして気にしてくれる。

そんな2人が嬉しかった。

「すみません・・・ありがとうございました」

「いーんだよ。で、ちょっと聞きたい事があるんだが・・・いいか？」

近藤の表情が変わったのを桜は見逃さなかった。

「・・・・・・・・はい」

「ま、単刀直入に言うが・・・・・・・・お前は『無情の鬼神』じゃねーよな？」

本当に真っ直ぐな質問に一瞬目を見開いた。

「・・・・・・・・」

「桜・・・・・・・・どうなんだ？」

土方に言われ桜は、

「違いますよ」

と、答えた。

「違いますから。第一に、私は攘夷など興味ありませんし」

桜は2人の目を見て話した。

「そーか！ならいいんだ！悪かったな。疑ったりして」
「いえ、構いませんよ」

桜は土方から受け取ったビニール袋を机の上に置く。

「じゃ、そろそろ見回りの続きに行こうぜ。コイツも休みたいだろ」

土方がドアの方へ歩いていく。

ドアノブに手を触れようとしたときだった。

ケータイがなった。

「？」

電話に出る。

「もしもし……」

『あ！副長ですか！？山崎ですッ！！』

ずいぶん慌てた様子で話していた。

「どうかしたか？」

『あの！俺なんか知らないけど沖田隊長の地雷踏んじやったみたいで！！！』

「まさか……！」

『屯所が破壊されかけて【オイ待て山崎イ！！】ギヤアアアアアアア！！！！』

途中で沖田の声が入ってきた。

『ヘルプミー！！！！！！』

「お前いつたい何やったんだ！！」

『本気で分かりません！！ああ！バズーカ^{マジ}が……』

その声を最後に電話は切れた。

「—————つたく……近藤さん、俺先に戻って総悟何とかしてくらあ」

土方はそれだけ言ってさっさと帰ってしまった。

「逆に喧嘩になりそうな予感かしらないんですけど・・・」

「ハハ・・・まあ、しばらくは屯所の事も黒頭巾の事も忘れてゆつくりしてろ」

「はい・・・!」

近藤は1回桜の頭をなでた後、帰った。

(さあてと・・・寝ようかな・・・)

布団を首元までかけるとそのまま眠りに落ちていった。

ボウリングでストライクを取るのはスベアを取るよりも簡単かもしれない（後書

前回、桜のケータイの着信音は『重なる影』です。
メールだと『あなたMAGIC』です。

桜「どーでもよくない？」

何となくだがあなたの後ろに幽霊が……………（嘘）（前書き）

桜「恐！！サブタイトル恐！！」

ちゃんと嘘ってかいてあるじゃん！！

桜「本気にしたらどうすんのよ！！」

スタンド
幽霊くらいでビクビクしないの！！

桜「そーゆー問題じゃ無いでしょうがぁ……………」

何となくだがあなたの後ろに幽霊が……………（嘘）

昼になり目が覚めた。

太陽が、高く昇っている。

（あー????お腹空いたな）

桜は、昨日の晩から何も食べていない。
空腹はもうMAX状態だった。

（あ????もう別の意味で倒れしそう??????）

そんな時だった。

コンコン

と、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞ」

力のない声で、返事をする。

「昼食、持ってきたわよ」

「た????助かった?????」

桜は看護婦さんが持って来た昼食に目をやった。

（うーん……何と言つか……栄養計算されてそう?）

桜はベットの角度を変えてもらい、楽な体勢にして貰った。

「じゃあ、3時ごろにまた様子見に来るからね」

「はい」

ドアがバタン、と閉まった。

「いっただっきまゝす」

一口食べてみる。

（味・・・ほとんど無・・・）

と、考えていても、お腹は空いているので、自然と箸が進む。

5分程で食べ終えた。

「はー・・・ごちそうさまでしたっ」と

桜は机をどかし、ベットを水平に戻した。

（やっぱりこの体勢が一番楽・・・）

うーん、と腕を伸ばした。

そのままベットの中でウトウトすること30分。
寝れそうで寝れない。

（本格的に暇・・・）

いつもは何かしらやることがあるので、暇な時間が欲しいと思うこともあるが、実際そうになるとやる事が無い。

誰か来ないかな、等思っていると、ドアをノックする音が聞こえた。

（誰・・・？）「どうぞー」

入ってきたのは銀時、神楽、新八だった。

「よう桜」

「銀時！？それに神楽に新八も！」

「桜ア！大丈夫アルか？」

意外な来客に目を丸くする。

「桜ちゃん、これ、お見舞い」
「あ、ありがとう」

桜は箱を受け取った。

「それにしても……何で入院してるって知ってんの？」

と、聞くと銀時が、

「ついさっき総一郎君が来てよぉ」

桜は「総悟だつてば」とツツコンだ。

「で、お前が入院してるって聞いて来たんだ」

「そうだったんだ。てか何で沖田さんが銀時のトコに行ったの？」

「まゝたヅラのバカが万事屋に来てよぉ……で、総一郎君が来て教えてくれたんだよ」

「そうなんだ。てかコタローまた追われてたの？」

「あのヅラ迷惑ネ」

神楽はチツと舌打ちをした。

「はは……ねえ、コレ何？」

桜は新八から受け取った箱を見る。

「マカロンとかクッキーとかケーキだよ」

新八が言った。

「そうなんだ。ありがとう」

桜は土方から貰った袋の隣に置いた。

(アレ・・・確か沖田さんって屯所で何かしでかしてたような・・・)

ここで少し時間を巻き戻そう。

先に屯所に帰った土方。

土方を見つけた隊士が駆け寄る。

「副長ふくちやー！！！助けて下さいイイイ！！！！！」

隊士達が土方の周りに集まる。

「もう手に負えません！！！」

「待て待て、一体何が・・・」

と、何があつたか聞こうとしていると、ドカァンと屯所内部で爆発音がした。

「ったく……」

土方が中に入ると、山崎に刀が向けられていた。
その隣にはバズーカーが……

「総悟！ テメエ何やってんだ！！！」

「死ね土方コノヤロー。俺アコイツをぶった斬ろうと……」

「ヒイヒイヒイヒイヒイ！！ 助けてふくちょー！！！」

「総悟！ テメエが言ってる事なんかおかしいぞ！！ 前半と後半で
言ってる事違うだろうが！！」

「副長！！ ツツコムとこそこじゃ無いですよオオオオオ！！！！
！！」

ゴタゴタ言っていると沖田が山崎を離した。

「死ねエエエエエ！！！！！！」

「イヤ！ 何で俺なんだよ！！！！」

沖田が斬りかかったのは山崎では無く土方だった。

と、そんなことを続けていると、近藤が帰ってきた。

「トシ！ 総悟！ いい加減にしろ！！」

「うるせえ！！」

2人そろって近藤の顔面を殴る。
そして喧嘩を続ける。

「お前等なあゝ！！！！」

3人揃って喧嘩を始めてしまった。

（ああ……もう終わった……）

山崎は1人ポツンと隅に座っていたのであった。

それから数分後

隊長総出で何とか3人を抑えた。

「総悟！お前は外回りに行つて来い！！」

と、近藤に言われ沖田は、「え」と言つた。

「トシ！お前は屯所の修繕だ！」

「チツ……で、近藤さんもやるんだよな？」

「う……あ、ああ！モチのロンだ！！」

「絶対やる気なかつたらテメエ！！！」

という訳で沖田は外回りに行き、桂を見つけ、追いかけて、万事屋へ……となった。

「私、本当は定春連れて来たかったネ！でも銀ちゃんと新八がダメだっけ言うネ！」

「当たり前だと思うなあ・・・」

銀時と新八だけ先に帰り、桜は神楽と話をしていた。

「神楽、その袋取ってきてくれる？」

「これアルカ？」

神楽はビニール袋を渡した。

「これ、土方さんに貰ったんだけど中見てなくて・・・何が入ってるんだろ？」

中を見ると、大福やら団子が入っていた。

「神楽、団子食べる？」

「食べるアル！！」

神樂はみたらし団子を頼張る。
桜は大福を食べた。

「桜、いつターイン出来るアルカ？」

「早くて2週間だつて。傷が大体塞がったら良いってさ」

「そうアルカ。たいした怪我じゃ無いアルカ！」

「うん。足の方は浅いし、脇腹はちょっと深いけど直ぐ直るって」

2人はずっと話していた。
話がつきる事はなかった。

「じゃあ私、そろそろ帰るネ」

「うん、バイバイ神樂」

桜は手を振る。

「バイバイ桜」

神樂も大きく手を振って部屋を出て行った。

（楽しかったなー）

桜は満足そうに笑っていた。

何となくだがあなたの後ろに幽霊が……………（嘘）（後書き）

桜「文句があつたら作者に……………サブタイトル変えさせます」

桜！ー！ヒドッ！ー！ー！ー！

銀魂のマンガを古〇に買いに行ったが80円均一では無かったので2冊しかか

桜「アレ？もしかして作者はマンガを持ってなかったの？」

うん

桜「で、2冊しか買わなかったと？」

うん

桜「じゃあ今までコレどうやって書いてたの！-！？」

アニメだけで書いてた（笑）

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・」

銀魂のマンガを古〇に買いに行ったが80円均一では無かったので2冊しかかき
そして――桜が入院してから3週間がたった。

「もうだいたい大丈夫だけどまだ激しい運動とかはダメですからね？」

「はい。どうもありがとうございました」

桜はペコリとお辞儀^{せぎ}をする。

それからいくつか薬を貰い、病院を後にした。

「あゝ……やつと自由だ……」

桜の足取りは軽快であった。

久しぶりに外に出て幸せだった。

（暇暇スパイラルから抜け出せただけでも嬉しいなあゝ）

と、ここで桜の怪我の状況等をお知らせします。（↑アナウンサー？）

足の怪我は元々深い傷では無かったので早く治った。

腹の傷はまだ完治はしていないが、8割方治っているため、激しい運動でもない限りなんとも無いとのことだった。

熱は疲労が回復すると共に引いていった。

（真選組屯所）

「ただいま帰りましたー」

と、桜が言った途端、

「「「「お帰りなさい！！！！都野隊長ッ！！！！！！！！！！」」」」

と、隊士達が駆け寄ってきた。

「本当で都野隊長居ないと大変だったんですよ！！！！」^{マジ}

「もうメチャクチャでした！！」

「3週間地獄でしたー！！！！」

中には半泣きになる隊士も居た。

「そ、そこまでは行かないんじゃない……」

「行っちゃったから俺達こうなってるんですよ……（泣）」

山崎がか弱い声で言った。

「と、取りあえず私は近藤さんの所に行ってくるから……近藤さんは？」

「自室にいるかと思われます」

「分かったわ。ありがとう」

桜は静かに歩いていった。

〈近藤自室〉

「近藤さん、桜です。只今戻りました」

「おお！！桜か！まあ入れ！！」

「失礼します」

桜は部屋に入ると、近藤に促^{うなが}され、近藤の向かい側に座った。

「それにしてもやっと退院できたか！」

「はい。おかげさまでもう大体大丈夫です。激しい運動はするな、と言われてますけどね」

それを聞いた近藤は、

「じゃあ桜は傷が完治するまでは事務処理に回ってもらっしかなさそうだな」

「すみません・・・あ、でも多分次話かその次位には完治してると思います」

「ん？なんかリリティーのある話が聞こえたが・・・」

「気の迷いです」

「いや、そこ気のせいで良くねえか？」

「まあ、そんな事より3週間、何か変わった事とか無かったですか？」

桜はパツと話を変えた。

本当に何でもアリだなこの小説・というツツコミはスルーして下さい。

「変わったことは特に無かったと思うぞ。ちょっといざこざが有ったくらいであとは何もねえ筈だ」

「そうですか。良かった・・・」

それからあともう一つ聞いても良いですか？」

「何だ？」

「屯所で何か無かったですか？」

近藤は一瞬気まずそうな顔をした後、立ち上がった。

そして、ダンスの中から紙の束を出してきた。

「これは？」

「見れば分かる・・・」

近藤から渡された束を捲^{めく}る。

「・・・・・・・・・・は!？」

桜は己の目を疑った。

その紙にはこう書いてあった。

真選組不祥事

- | | | |
|---------|----|-----------------------|
| ・ 屯所半壊 | 原因 | 沖田が山崎に対する一方通行の喧嘩(?) |
| ・ 屯所半壊 | 原因 | 土方・沖田の喧嘩。 |
| ・ 屯所半壊 | 原因 | 土方・沖田の喧嘩。 |
| ・ 屯所半壊 | 原因 | 土方・沖田の喧嘩。 |
| ・ 民家爆破 | 原因 | 沖田のバズーカー。 |
| ・ 公園炎上 | 原因 | 沖田とチャイナ娘による喧嘩。 |
| ・ 民家半壊 | 原因 | 土方と万事屋が無駄な喧嘩。 |
| ・ 船全壊 | 原因 | 幕府の下手際。隊士によるバズーカーの砲撃。 |
| ・ ストーカー | 原因 | 近藤のストーキング行為。 |

などなど

「何ですか・・・・・・・・コレ・・・・・・・・」

「見ての通り、真選組の不祥事リストだ!」

「誇って言える事じゃねえだろ!!!!」

2人の話に割り込んできたのは土方だ。

「土方さん!! 急に入ってこないで下さいよ・・・・」

「オメエが帰ってきたっつーからコレを持って来たんだよ」

土方はソレを桜に投げ渡す。

「あ……私の刀……」

久々に刀を手にした。

刀の重みが伝わってくる。

（やっぱりコイツが手元にあるだけで安心するな）

桜は愛おし^{いと}そうに刀を見る。

「まあ、取りあえず屯所とかはそんなもんだ」

「とにかく大変だった・と言う事ですかね」

「桜が居ないと俺以外だれもトシと総悟を止められなくてな。俺が居ない時なんかは特にな」

「総悟がワリィんだよ。俺のマヨネーズ隠したり俺を殺そうとしたり」

「あはは……まあ、皆無事で何よりです」

苦笑いしながら言った。

「桜、今日はゆっくりしてろ。退院して直ぐ仕事つてもアレだろうからな」

土方は気を利かせてそう言った。
が、桜は、

「大丈夫ですよ。仕事くらい出来ます」

「いーから休め。まだ完治してねえだろ？」

「でも……」

「そつだぞ桜！トシの言う通り休め！」

2人に言われ桜は渋々「はい」と言った。

桜は一礼してから部屋を出た。

「それにしても・・・改めて見るとスゲーなコレ。とつつあんに怒られんじゃねえか？」

「そーゆー時は俺がなんとかしてやるさ！！」

ガハハハハ！と笑う近藤に、土方は（ダメだコリヤ）という反応を見せていた。

く??????

ある場所で、なにやら会議が行われていた。

「で、どうだ？見つかったか？『鬼月』は？」

「いえ．．．．奴が持つてる以外の情報がありませんから．．．

」

と、ある男が言った直後、イスに座っていた男の持っていたグラスが割れた。

性格には『割った』だろうか。

「四の五の言つてねえでさっさと探せ！！！」

「は！早急に！！！」

それだけ言つと、立ち上がり・去つていった。

「早く．．．．早く『鬼月』を手に入れてやる．．．．鬼の力を．．．．」

不適に笑う。

「あのガキ．．．．俺から『鬼月』を奪いやがつて．．．．」

男は自分の右目に手をやる。

（この傷にかけて．．．．テメエを殺してやるよ．．．．）

男の不気味な笑い声が響き渡っていた。

銀魂のマンガを古〇に買いに行ったが80円均一では無かったので2冊しかか

ふるイチカードが540P貯まりました（喜）

桜「それでマンガ買いなさいよ・・・」

もうちょっと待ってくれ！！今金欠（焦）

桜「もう少ししたらぴ——円貯まるのにな？」

桜！！それは！！！！（弁明中）

金曜日が一番テンションが上がって日曜日が一番テンション下がる

く桜く

「1日安静ってことかな……」

わざわざ布団を敷いて、寝巻きに着替えて寝転んでいた。
布団の近くには脱ぎ捨てられた服や羽織などがあった。

そして、直ぐ傍に愛刀『鬼月^{きげつ}』を置いていた。

（何か急に眠たくなってきたな………寝よ）

布団をかぶり、そのままグスリと眠りについた。

く夢く

桜は不思議な夢を見た。

真っ黒な道に、ポツリと一人立っている。

（ここは………どこ？）

立ち止まっているのもアレなので、歩き出してみた。

歩いても歩いても、ずっと真っ暗なままだった。

（変な夢・・・）

ふと、声が聞こえた気がした。

「何？」

声がしたほうを見ると、小さな女の子が自分に背を向けて立っていた。

「・・・・・・・・私・・・・・・・・？」

桜がそう呟くと、女の子が振り返った。

それは幼い頃の桜だった。

「何故^{なぜ}？」

「・・・・・・・・？」

ふと、幼い桜が背を向けたまま聞いてきた。

「何故^{なぜ}私はいつもいつも、何かに縛られている？」

「えっ・・・・・・・・」

「何故^{なぜ}私は・・・・・・・・」

幼い桜が振り返る。

桜はその目を見て驚いた。

「私は何故^{なぜ}こんな目なのだ？そして何故人^{なぜ}を斬っても何も感じぬのだ？」

その目は漆黒の空に漆黒の月が浮かんだような目だった。

「それは……私が妖刀^{アナタ}を持つてるから。『鬼月』を持つてるから」

「ようとう……」

「そう。鬼月は持ち主の心を強く読み取って、持ち主が『殺したい』と思えば刀はそれを感じ取り、持ち主に絶大な力を授ける。その時、刀は漆黒に染まり、瞳に月を浮かべる。

……私はこの力で全てを断ち切ってきた」

桜が言い終わると、幼い桜は「ならば」とその冷たい目を向ける。

「ならば……この鎖も……斬れるのか？」

「え……？」

幼い桜が歩み寄る。

ボロボロの着物。か細い手足に鎖が絡みついている。

2・3歩ほど後ずさりした。

「この鎖は……私が今まで背負ってきた『悲しみ』。私はこの存在に気づいていない。気をつけよ。私が貴女にしてあげられる最初で最後の注意」

幼い桜が一つの光を桜に手渡す。

「『悲しみ』を断ち切らない限り、貴女への呪縛が続く。『悲しみ』

の正体は自分で暴け・・・・・・・・。さあ、もうこの光で夢から覚めて・
・・・・・・・・」

幼い桜が鎖に引っ張られるように後ろに引き込まれる。
とつさに手を伸ばすが、届かない。

「!?!」

桜は光に包まれる。

「さようなら・・・・・・・・私で貴女」

「うあああああああああ!?!?!?!」

桜は飛び起きた。

(・・・・・・・・夢・・・・・・・・?)

バタバタと誰かが走ってくる。
スパアンと障子が勢い良く開いた。

「都野隊長！どーしたんですか！！？」

入ってきたのは山崎だ。

「ううん・・・何でもないよ・・・ちょっと嫌^ヤな夢見ただけ」

「ならいいんですけど・・・あまり心配させないで下さいよー・・・」

「ふふ・・・ゴメン！ゴメン！」

桜は笑っていた。

と、再び誰かが走ってくる音。

「桜ア！！どうしたんだ！？何があつた！！？」

近藤だ。

「近藤さん・・・なんでもありませんよ。変な夢見ただけです」

「そ・そうか。イヤー・・・てつきり何かあつたのかと・・・」

「そーゆー時は多分悲鳴を上げるんじゃないなくてブツ倒してますからご心配なく」

「ほー、それは頼もしいじゃねえか」

と、3人の目の前に姿を現したのは松平 片栗虎だ。

「ふわあ！！？」

「うお！！？」

「おわあ！！？」

3人は声を合わせて驚いた。

「んー？なあにそんなに驚いてるんでえい？」

「アンタが急に現れるからでしょーがあー！！！！！」

桜が松平を指差して言った。

「おーいおい・・・人に指差しちゃいけねえって親に教わらなかったかい？」

「親いねえよ！！！！ふざけてんじゃねーよ！！！！！！！」

「た・・・隊長・・・口調が・・・」

「うっさい！！」

桜は山崎にアッパーカットを喰らわせる。

「ゴバア！！！」（八つ当たり！？）

山崎は天井を突き破って、屯所の庭に墜落した。

「で、なんでとつっあんが居るんですか？」

桜はビビッている近藤にちょっとドスの効いた声で聞く。

「あ・・・ああ！！ちよつと問題が発生してなア、そそそそれだとつっあんが情報をくれたんだよ！！」

「問題？」

いつも通りの優しい声に戻っていた。

「ああ。最近『白夜叉』がまだ生きているという情報が入った」
「知ってます」

「・・・・・・・・なら話が早い。白夜叉が誰なのか・・・・・・・・一人候補

が上がったんだ」

「・・・・・・・・誰ですか？」

近藤は少し間を置き言った。

「万事屋——坂田銀時だ」

しばらくの沈黙が続いた。

「はぁ・・・・・・・・アイツがですか？信じられません。アイツが攘夷をやる奴には到底見えません」

桜は沈黙を破り、言った。

「で、何が問題なのですか？アイツが白夜叉・・・・・・・・それだけでは何の問題があるとも思えませんが・・・・・・・・」

桜は開いていた障子を閉める。

「相変わらず察しがいいねえ・・・・・・・・じゃあ本題に入るぜ？

白夜叉が生きていようがそんなものどうでも良いと思っていた。なぜなら奴が動き出してからしょっ引けば問題の無い事だ・・・・・・・・・・だが・・・・・・・・」

「なんですか？」

「今問題になってるのはある奴と白夜叉が手を組まないかって事だよ」

桜は一つ疑問が浮かんだ。

「ある奴とは誰ですか・・・・・・・・？」

「朱烏……」

「朱烏？それは一体？」

すると、松平に代わって近藤が話しはじめた。

「朱烏とは攘夷志士とはまた少し違う、いわゆる賊だ」

「賊……？でもそいつと白夜叉とでは手を組む理由が無いんじゃない……」

「いや、その朱烏の頭が高杉と……鬼兵隊と手を組んだという情報が入ったんだ。ここに白夜叉が入ってもおかしくは無い。桂小太郎や坂本辰馬・鬼神も同等に、だ」

（小太郎も銀時も辰馬も私もそう簡単には手を組まないってーの……）

桜はニコツと笑うと、

「大丈夫ですよ……桂は鬼兵隊を嫌っているようですし、辰馬はどこに居るか分かんないし、白夜叉と鬼神はサッパリですけどね。まあ高杉と手を組むのはまず無いと思われます」

「……なんだお前？あの坂本辰馬と知り合いなのか？」

「ああ、まあ。少し」

いや、実際には今出た名前全員とただけどね！

（そういえば……私が共に闘ったのはあの4人への恩があったからかな……）

金曜日が一番テンションが上がって日曜日が一番テンション下がる（後書き）

桜「今回なんか微妙なトコで終わったね」

次から桜 過去偏ですから

桜「ちょー!!」

なあゝに照れてんのオ？ん？

ろくでもない過去なんだからいいんじ（ry

桜「次回もよろしくね」（妖笑）

昔話は書くのが難しい（笑）てか書くのメンドクサイ（W）（前書き）

えー・・・なんかこの小説のお気に入りが4人も居てくださって、
更にはコメントまで・・・もう何ていったら言いか（泣）

桜「本当にありがとうございました」

では、桜 過去偏始まります

昔話は書くのが難しい（笑）てか書くのメンドクサイ（W）

物語は止まり、昔へ戻る

事実、戻る事のない過去の話

時計の針が戻らないように

一度した失敗がやり直せないように

しかし記憶は残る

記憶の中でなら戻せる

昔々の、物語り

ここは江戸よりずーと遠くの盆地の村。

村の出入り口側は山道。その反対側の村の外れには開けた場所があり、そこには背の高い草原が広がっていた。

ここには巨大な狼が住み着いている危険な場所だ。
この狼は天人^{アマント}が来てから遺伝子的に進化してしまったらしい。

そんな危険な場所に赤子が一人捨てられた。
捨てた2人の男女は逃げるように去っていった。

赤子は捨てられて3日後、ある1人の少女に救われた。

「大丈夫だよ・・・私が助けてあげる」

少女は赤子を抱きかかえると、足早にその場を去っていく。

そう、この時拾われた赤子こそ都野 桜である。

少女の家

「おかーさん！」

「どうしたの？あら、その子……」

「大変なの！！あっちの草原に居たの！！」

「ええ！？」

「それに……何か弱ってる……おかーさん！助けてあげて
！！！」

「分かったわ。忍葉^{しのは}、アンタは医者と呼んできな
「うん！！」

忍葉は飛び出していった。

（この子……まさか都野さん家^ちで産まれたっていう子？あの2
人……男の子を欲しがってたから女の子はいらないってか？だ
からって捨てる親があんのかしら？）

忍葉の母は赤子を布団に寝かす。

「待つてな。直ぐに助けてあげるから」

忍葉が医者を連れて帰ってきた。

医者は赤子の様子を見て、忍葉の母にいろいろ伝えていた。

1時間後に医者が帰ると、忍葉は母に近づいた。

「おかーさん」

「ん？」

「この子の名前……何？」

忍葉は赤子を見て言った。

「苗字は都野なんだけどね……」

「みゃの？」

「そう。都野。最近村を出て行った2人の子供だよ。だぶんね」

母は2人が立ち去るとき、産まれたと言っていた子供が居ない事を思い出していた。

「にしても名前か……」

すると、忍葉が「ねえねえ」と母の着物の袖を引っ張る。

「ちょっと来て!!!」

「え？何で？」

「いーから！！」

「分かった分かった。この子も連れて行かなきゃなんないからちよつと待ってな」

母は赤子が寒くないように布を巻く。
そして2人は出かけた。

ザクザクと雪を掻き分け歩いていく。

「見て！」

「嘘……………」

雪がチラホラ降る中で、美しい薄桃色の桜の花が満開だった。

「狂い桜……………」

「それって何？」

「狂い桜ってのはね、春に咲くはずの桜が冬に咲くこつたよ。でもここまで満開なのは珍しいものね……………。それに今は12月2

4日。桜は絶対に咲かない……奇跡だよ」

雪に混じって桜が散る。

地面は白とピンクの美しいグラデーションが施された絨毯のようだった。

「よっしー!!」

母は赤子を高々と掲げ、桜を見せる。

「アンの名前は桜。都野 桜だ。誕生日は……わかんないから今日だよ。名前のついた日がアンの誕生日さ。桜」

「桜！桜！」

忍葉はピョンピョン飛び回る。

「さ、帰ろ。風引いちまうよ」

「うん！」

母の後を追う忍葉。

3人の姿は家族そのものだった。

く 桜 3 歳く

私に物心が付いたのは3歳の冬。
ここから先は物心がついてから1ヶ月の話。

桜はあたりを見渡す。

(しのは・・・・・・・・どこ・・・・・・・・?)

桜はズルズルと布団から出る。

すると、襖から光が零れていた。

コッソリ覗くと話し声と共に2つの影が見える。

「これ以上、家を守れない．．．．もう金が無いんだ」

「アンタ．．．．」

「もう．．．．忍葉か桜．．．どちらかを売るしか無いんだ．．．．」

男がそう言つと、母がその頬をパーンと叩いた。

「よく聞きな。私は諦めないよ。忍葉も桜も売らない。それに桜は1度捨てられてる。これ以上あの子に悲しい思いはさせたくないんだ。忍葉も私たちにとって大切な家族だよ」

桜は幼いながらその言葉の意味を理解していた。

（私は捨てられた．．．．？私はこの家の人じゃ無いの．．．．？私とあの2人は本当の親子じゃないの？私が居るから家がキツイの？

私が居なかったらこの家は大丈夫なの．．．．？）

桜は次の日、この家を出る事を決心した。
売られに行くのではない。

一人で生きていく

ことを決めたのだ。

「忍葉・・・私、出てく」

「え？」

「私、一人で生きる。もう決めた」

「でもどうやって生きていくの！？あなたみたいな子供、誰も相手にしてくれないわよ！！？」

「それでも生きてくよ。これ以上この家に居たらきつともっと嫌な事がある」

「家は？食べ物はどうするの！？」

「何とかする」

桜はそう言うなり出て行った。

「桜ア！！」

幼い頃から脚力だけはあった。大人でも追いつけないようなスピードで走り去っていく。

「ありがとう」

桜はボソリと呟いていた。

背の高い草の生える草原。

桜はソコにいた。

狼なんか恐くなかった。
逆に狼と生きていた。

「いい子……」（なんだ……全然狂暴じゃない……）

狼は桜を誘導するように歩く。

桜もそれに続いて歩く。

すると、草原の中に家のような物があった。周りの草をかき集めて
屋根にしたような感じで、でも実際は地下にシェルター式の家があるのだ。

「誰かが昔住んでたのかな？でもこの家良いや。ここに住もう」

桜はシエルターの中に入ってみる。
意外と地下は広がった。

「十分すぎるよ……」

桜はそう呟いてから再び地上に出た。

「さて……どうやって生きていこうか……」

桜は幼い頭をフル回転させた。

（そうだ……賊を中心に襲っていこう。この村に来る者に碌な
輩はいなかった……なら、そいつ等を襲ってしまえばいい……
……忍葉の家にもお金が入るようにしてあげよ……）

桜は立ち上がる。

「ならやっぱり武器が欲しい……刀が欲しい……」
フラリと出かけていった。

〃夜〃

賊共が集っていた。

「頭！」

「なんだ？今は明日あの村を襲う前の前祝やってんだよ！！！」

「ガキが侵入！次々同士がやられます！！」

「ああ！？」

頭と呼ばれた男は廊下から聞こえてくる声に耳を傾けた。

そこからは見方の悲鳴が響き渡る。

前祝をしている者達も徳利とっくりを投げ捨て刀を構える。

程なくして襖ふすまが蹴破けやぶられた。

「！！女！？」

「しかも・・・ガキ！？」

「何だアイツラ？こんなガキにやられたのか？なさけねーなーオイ」

男達は皆桜を見て笑う。

「私を舐めていると痛い目を見るよ」

桜は奪った刀を構えた。

「ガキはガキらしくそこら辺で遊んでな！！！」

一斉に斬りかかってくる。

「！！居ないぞー！！」

「どこだ！？」

「後ろよノロマ」

その声に皆が後ろを振り返る。

そして男が一人、倒れた。

「な・・・！！」

「速い！！！！」

桜は相手が痛みすら感じさせる暇も無く切り裂いていく。
あつという間に全員を倒してしまった。

「ほお・・・強いな・・・ガキ、名前は何て言う？」

「桜」

「桜か、いい名だ。だがな・・・」

頭と呼ばれた男は刀を抜く。

「俺達に刃向かつちゃあいけねえなあ・・・」

「黙れば、この外道」

「いっちょ前の口聞きやがって・・・」

男は刀を振り上げる。

「ふざけるクソガキ！！！！！！！！！！」

重い一撃が入る。

「ッ！」

桜は後ろに飛ばされた。

「いったゝ．．．」

「これが大人の力だよ．．．ハハハハハハハ！！！！」
「舐めるなよ！！」

桜は飛び上がった。

「ガキガキガキ煩いんだよ！！テメエを倒して村を救ってやる
！！」

「．．．なんで俺達が村を襲うと知ってた？」

「アンタの部下が教えてくれたよ」

2人の刀が交わる。

どうしても力の差で桜が負けてしまう。

（．．．やっぱり、強い．．．！でも、負けないから．．．！）

桜はゆっくりと立ち上がった。

「ハアアアアアア！！！」

跳躍すると相手の顔面に蹴りを入れた。

「ぐオあ！！！」

男は、ほんの3メートルほど吹きとんだ。

「このクソガキがあ!!!」

「これで・・・おしまい!!!」

桜は刀をしっかりと握り、相手の目に向かって振り下ろす。

「うぐう!!!?」

男は目を押さえる。

「アンタが居たら安心できないの・・・」

桜は相手を再び斬りつけた。

「消えて」

ズバン

と、相手を切り裂いた。

（アンタの刀・・・戦利品としてもらっていくね）

桜はその刀を手にした途端、体中に異様な力が流れ込むを感じた。

（何・・・!?!）

その刀を抱え込む。

手が、目が離せない。

「う．．．うう．．．うああああああああああ！！」

叫び終わった後に力は収まった。

（何？なんなのこれ？ただの刀じゃない．．．）

「——そいつは鬼月．．．妖刀さ」

「まだ生きてたの？それより、これが妖刀？」

「ああ．．．その刀は（中略）だ」

「．．．．．」

「へへ．．．今は動けねえがいつか必ずその刀を奪い返してやるよ．．．．．」

男が笑いながら言っていると桜は、

「絶対に渡さん」

と言ってその場を去っていった。

この後大量の戦利品をお金に買えて忍葉あとの家に置いていった。

桜は草原に戻るとシエルター式の家に戻った。

こんな日が2年間も続いたのだった。

昔話は書くのが難しい（笑）てか書くのメンドクサイ（W）（後書き）

今、銀魂 悲しみの物語の脱線話（？）的なモノを書いています。
で、リクエストがあったらコメントでお願いします。

桜「お願いしますっ」

話し方が子供らしくないって？うるせEEEEEEEEEEEE！！！！（前書き）

桜「作者ア！！何サブタイトル使って怒ってんの！！てか誰に怒ってんの！？」

いや、明日テストだなあとと思うとイラッときてつい

桜「つい、じゃなあああああい！！！！！！」（蹴り）

グハア！！

話し方が子供らしくないって？づるせEEEEEEEEEEEE！！！！

2年後

桜は5歳になっていた。

「じゃあ、バイバイ」

桜は忍葉しのはに手を振った。

「まって！！！」

忍葉が叫ぶ。

「……………何？」

「もう……………やめようよ」

「えっ？」

「もう、人斬りなんかやめてよ……………」

2年間、忍葉が伝えたかった思いをぶつけた。

だが、桜は首を横に振った。

「どうして!!?」

桜は少し俯いて悲しげな表情をしていた。

「もう、私はコレしかできないから。一度汚れた手は二度と綺麗になんてならないから」

桜は踵を返した。

「それにね、村の人からは鬼って呼ばれてる私が戻れると思う?」

「それは・・・!!」

「話はおしまい。じゃあね」

忍葉は何も言えなかった。

ただ、黙って小さな背中を見送った。

く 昼時 く

ある侍が4人。村を訪れていた。

「おゝい、俺もう腹減ったんですけどぉ」

「駄々をこねるな。子供か」

「チエツ………。あー！！ハラヘツター！！！！」

「うるせーぞ……少しは静かに出来ないのか」

「まあまあ、にしてもおんしら本当に仲が良いのう」

「「誰がこんな奴らと」」

3人が口を揃えて言うと、喧嘩が始まってしまった。

そして、そんな4人を見ていた一人の若い男が声をかけた。

「あの、お侍さん方」

「なんだ！」

一人が語勢を強めて言った。

「あ、あの、早くこの村から出て行った方がよろしいですよ」

4人ともが首をかしげた。

「？どういう意味だ？」

「はい、この村には外から来た者を斬る人斬りがいます」

「人斬りだと？」

「ええ。賊などの外から来た輩は大方斬られて……。我々としては助かっているのですが、少々度が行き過ぎているというのが問題でして……。だから急いでこの場を立ち去ってください」

男は声を潜めていった。

「おいヅラア、ソイツどうする？」

「ヅラじゃない桂だ。まあ、村民に危害は無いんだ。放っておいても良いだろう」

「だが・・・一度手合わせしてみたいモンだな」

「まあ、確かにのう。ちよつとばかり顔を見て見たいぜよ」

さて、カンの良い方ならお気づきかと思いますが、この4人は銀時・桂・高杉・坂本の4人です。

「そんな事言つてないで早くこの村を・・・」

男が4人の背後を見て言葉を失った。

4人は振り返る。

そこには誰も居なかった。

「どうかしたか？」

「・・・遅かった」

「「「は！？」「」「」」

「間違いなく、鬼は貴方方^{あなた}を狙っております！！はやく逃げて下さい！！！！」

「鬼・・・？」

高杉がそう呟くと、かすかに上から鯉口を切る音が聞こえた。

すると、屋根の上に、人影が見えた。

だが、直ぐに4人からは見えない位置に隠れてしまい、顔が確認できなかった。

「なんだ・・・！？」

「よく分かんねえけど……なんつーか小さかった」

銀時が刀を構える。

「にしてもすごいのー……気配がほとんど感じられん」

坂本は相手が隠れたであろう屋根の上を見つめる。

両者とも全く動かず、相手の出かたを見ていた。
すると、背後で声が聞こえた。

「さっさと出ていってはもらえないかな？さもなくば……斬る」

バツと振り返る。

そこに居たのはボロボロの着物をまとい、今にも刀を抜こうとしている餓鬼がいた。

「な……！？ガキだと……！！？」

桂は目を見開いて桜を見る。

「まさかコイツが……！」

「鬼の正体か」

「まさか子供とは思わなかったきに」

銀時・高杉・坂本の言葉を聞いた桜は鼻で笑った。

「フン、皆そう言って舐めてかかってきた。結局、ほとんどがアチラさんになっちゃったけど」

スラリと刀を抜く。

「死にたいならかかってこい」

子供に似合わぬ口調は逆に4人に威圧感を与えた。

（コイツ・・・本気だな・・・）

桂は刀をスツと抜いた。

「・・・真っ先に死にに来るとは・・・」

「誰が死ぬか。それより、もっと女の子らしく家で遊ぶか親の手伝いでもしてろ」

プツン

と、何かがキレる音がした。

「うつさい！！子ども扱いすんな！！男のクセに長髪とか女々しい奴には言われたくない！！」

すると、銀時が笑い始めた。それに続いて坂本と高杉も笑う

「め・・・女々しいって・・・ハハハハハハハ！！！！ソレお前にピッタリ！！」

「じゃの〜！！」

「合ってると思うぜ？その表現」

「笑うな！！」

桂が一喝してると、首元に刃があてられていた。

（な・・・！？）

「戦いの最中に余所見してていいのかな？」

桂は桜の剣を弾く。

（なんだ・・・？さっきまで５メートルも離れてたんだぞ！？いくら速くともあんな一瞬に近づける距離じゃない！！）

２人の刃は止まらなかった。

子供とは思えぬ素早く、滑らかな動きに桂はとまどっていた。

キーン

「ッしまった！！」

「もらった！！！！」

桂の剣は弾かれて、宙を舞う。

万事休す――

そう思い目を瞑った。

だが一向に刀は降りてこない。

（なん・・・だ？）

目を開けると銀時の刀が桜の刀を止めていた。

「オマエ・・・ちょーとオイタが過ぎるんじゃないのかなア？」

「うるさい。これが私の生き方だ。私は2年間こうして生きてきた。この村を襲ってくる奴等を倒して、な」

桜はダンツと後ろへ飛ぶ。

「ふうん」

いかにも興味無さそうに言った。

「何が言いたんだこの天パ」

「誰が天パだコノヤロー!!!俺のコンプレックスに触れてんじやねーよ!!!!!!」

「んな事私が知るか!!」

2人は心なしか楽しそうだった。

「よぉし、人がコンプレックスをどれだけ強みにして鍛えてきたのか教えてやるよ!!」

「コンプレックスを強みって……それがどう鍛えるのにながんのよ!!」

ガキイイン

まるで子供の喧嘩（片方は子供だが）を見ている気になった。チャンバラをしながら相手の悪口を言い合っているようだ。

「天パ舐めんなよ!?サラサラストレートのテメエに何が分かるんだコノヤロー!!!!」

「どこまで天パにこだわってんだ!!!!」

桜が回し蹴りを喰らわせようとするがかわされてしまう。

（何だコイツは！？柳みたいにユラユラユラ……）

刀を振っても攻撃は当たらない。

「あゝあゝ……もームカツク……！！いい加減くたばれ天パア……！！」

「オマエのキャラ分かりにく……！！」

桜が鋭い攻撃を繰り返す。

ここであることに気がついた。

（コイツ……全く攻撃してこない……？さっきから守ってバツカじゃない）

桜は不審に思い一旦距離をとる。

「情けでもかけてるつもり？さっきから一向に攻撃してこないじゃない」

「うるせー。どー戦おうが俺の勝手だ」

「ま、殺る気が無いなら死ぬだけだと思っけど？てゆーか、その2人は攻撃してこないの？」

桜は高杉と坂本に目をやる。

「わしは戦う気は無いきに」

「俺はその天パが死んだらな」

「ふーん（この人ら仲間じゃないの？）」

桜は突然刀を鞘さやに収めた。

「……………なにを仕掛けてくる気だ？」

桂は不信感を露あらわにし言った。

「何も……………ただやる気が失せただけ……………」

「？」

「何て言ったらいいのかな……………この男と戦ってたらなんか戦ってるのがバカらしくなったわ」

ヒョイツと屋根の上に乗る。

「……………それに、さつきからすごく嫌な予感がするの……………」

「嫌な予感……………」

「うん。オオカミ狼達が荒れてる。きっと何か嫌な事を感知したんだと思うの……………」

高杉はジッと桜を見た。

「気をつけたほうが良いよ……………元々この村には変な奴がよく来るの」

「変な奴？」

高杉の問いにコクリと頷く。

「賊とか貴方達みたいな侍とかなんか侍のよーな侍じゃないよーな人とか人じゃない奴等とか」

「……………!!!!!!」

4人は桜の言った事を頭で復唱させる。

(賊に・・・)

(侍に・・・)

(侍じゃないような・・・これは幕府の事か?)

(人じゃない奴等・・・)

(あまんと (天人) ())

「・・・?どうしたの?」

「イヤ、なんでもねー」

「変なの」

先ほどとは全く違う優しい眼差し。

「とにかく気をつけて・・・」

桜の言葉尻が悲鳴で消された。

「何!?!」「なんだア!?!」

悲鳴がしたのは少し遠く離れた場所のようだ。

桜は屋根から飛び降りたかと思うと、すぐさま駆け出していた。

「んな!!?!」

「速い!!」

グングンと距離が離れていく。

「なんだか知らないが・・・俺達も行くぜ！」
「「「おう！」」」

4人も駆け出して行った。

○ ○ × × ○ × ■ □ □ (前書き)

桜「サブタイトル思いつかなかったのね？」

あ、はい。あの・・・その・・・すみません!!

桜が向かっている方向に居るのは天人だ。
そして捕まっているのは忍葉である。

（桜・・・恐い・・・!!）

忍葉はギュツと目をつむる。

（助けて・・・桜・・・助けて・・・!!）

声には出さず、ただただ突きつけられる刃に怯えながら桜が助けに
来てくれるのを待っていた。

「なんだ！？こいつ等は！！？」

「——ッ桜ア！！」

「忍葉！？」

桜は目の前に居るわけの分からない奴と、忍葉を交互に見る。

「なんだ？この餓鬼？」

「・・・人の事を聞く前に自分の事を名のるのが礼儀じゃないの
か？」

「ほう・・・餓鬼にしては教養があるじゃねえか。

まあ、其方の礼儀に従おう。

私は牛樺俱星の牡爾苦だ」

桜は正直笑がこみ上げてきた。が、深呼吸して何とか抑えた。

「牛角製のお肉？」

「漢字が違えよ！！牡爾苦だ牡爾苦」

「いや、これもしアニメだったら小さい子なんか訳分かんなくなるよ・・・？」

「ほつとけ！！！」

桜の中に一つ疑問が浮かんだ。

「・・・？牛樺俱？何処よそれ・・・？」

「なんだオメエ？今時天人をしらないのか？」

「アマント・・・？」

「簡単に言えば宇宙人ってやつか？」

「宇宙人？ハツ余計信じらなくなつた」

「まあ、お前ら地球人に無いものを見せてやるよ」

そう言うとな奴は角をグググツと伸ばした。

「な！？」

「くらえ！！」

牡爾苦は忍葉を抱えたまんま突進してくる。

（一直線上の攻撃！かわせる！！）

かわそうとしたが、自分の後ろには逃げていない人が居る。

（・・・！！）

そのまま真正面に攻撃を喰らう。

「カハア！」

衝撃により血を吐く。
桜の体が宙を舞った。

（落ちる・・・でも体が動かない・・・空中じゃあ身動きが取れない・・・）

「桜！」と忍葉が呼ぶ声があるが、今はその声に反応する事もできなかった。

「・・・・・・・・？」

桜の体はいつまでたっても地面につかない。
それより、誰かに受け止められたような感覚があるのだ。

「・・・・・・・・！あんた達は・・・・・・・・！！！」

「あつはつはつは。無事かア？」

桜を受け止めたのは坂本だ。

直ぐ傍に銀時・高杉・桂も居る。

「放せ。このくらい・・・・・・・・なんとも無いわ」

桜が立とうとした瞬間、胸に激痛が走る。

「うぐ・・・！」

「無茶をするな。あんな攻撃を真正面から受けたんだ。無事なほうがどうかしてる」

「そんな事より……忍葉を……人質を助けなきゃ……ッ！！」

左手で胸元を押さえ、方膝をつく。

そんな桜の頭に銀時はポンツと手を置く。

「俺達に任せろ。相手が天人なら俺達の出番だ」

「任せきれないわ。アンタ達に頼ったら鬼の名が泣くわよ……」

ゆっくり立ち上がり、刀を構えた。

「いいからどつかいてろ。足手まといだ」

高杉は冷たく言い放つが、桜は

「うっさい！ここは私の村だ！だから……何が何でも私が皆を守ってやる！！」

と、威勢が付いて来た。

「おしゃべりはそのくらいで良いかなあ？」

牡爾苦がドスを効かせて言う。

「貴様等攘夷志士か？」

「だったらどうする？」

「こっするんだよ！！」

忍葉の左腕が、飛ぶ。

「キヤアアアアアア！！！」

忍葉の絶叫。

その後あまりの痛みに意識を失った。

「デメエ！！！」

銀時が食って掛かってきた。

高杉は忍葉には目もくれず刀を抜き、桂はギツと相手を睨みつけながら刀の柄に手をかけ、坂本はいつものちゃらんぽらんではなく、真剣な表情だった。

だが桜はそんな4人とはまた別の反応を見せた。

刀をダランと下ろし、俯いている。

そのまま刀を引きづりながら牡爾苦に近づいていく。

「デメエ……今何しやがった……？」

ドスの効いた低い声で桜が聞いた。

「ああん？ただこの女の腕一本ぶっ飛ばしただけだろう？それがどうし……！！！」

桜はただ牡爾苦に目を向けているだけだ。だがそれでも牡爾苦は動けなかった。

「デメエにとつちやあ私達がどうなろうと関係なかるう……だがお前は今の私を怒らせた……私はお前を殺す……」

「

桜の柄を握る手から黒いオーラのようなものが発生したかと思うとそれは刀を黒く染めていった。

その様はまるで砂に染みた水がジワジワと浸水していくような感じだった。

「貴様は私を3回怒らせた・・・一つこの村に入った事

一つ人質を取るなど卑怯な真^ま

似^ねをした事

一つ仲間を・・・友^{タチ}を傷つ

けた事！！！！！！」

桜の目に漆黒の月が浮かんだ。
鬼の目だ。

（な・なんだ?!このバカげた殺気は!!?）

桂は急に汗が溢れんばかりに出てきた。
それは他の3人も例外ではない。

「死ね」

桜はその漆黒の刃を振り下ろす。

「うがぁ!!」

相手がバランスを崩したところで第二・第三撃と攻撃を入れ続ける。
そして、相手を蹴り上げた。

宙に浮いたその体より、更にその上まで飛び上がった桜が上から刀を刺す。

この時から私の時は狂い始めていたんだ――

テストヤベーよコンチキショウ!!!!!!!!!! (前書き)

あ、牡爾苦のアクセントは「お」です。

イントネーションで言っていると葉月と同じです。

テストヤベーよコンチキショウ!!!!!!!!!!

桜は振り向いて、4人の様子を見た。

「・・・へえ・・・」

4人は恐ろしく強かった。

あまんと天人達が次々に倒れてゆく。

「・・・加勢しなくとも大丈夫そうだな」

ゆっくりと瞬きをした。瞳はいつもの瞳めに戻っていた。

「忍葉・・・!」

桜は忍葉の傍に行く。

出血が酷かった。

(どうすればいい!?どうすればいいの!?!?)

自分自身、このような大怪我をした事がないので、どうしたらいいか分からなかった。

(とにかく止血・・・できるモンねーし!?!?)

桜は着物に羽織のみ。現在のように腰紐を上につぶという事をしてなかったのだ。

桜は辺りを見渡した。

人々は逃げ、今ここにいるのは天人と桜たち5人のみ。

（今医者は山を越えた村に居る・・・どんなに速く走っても半日はかかる！！）

歯を強くくいしばった。

そんな桜の背後から人影が現れた。

「牡爾苦さんの仇かたき！！」

棍棒こんぼうが振り下ろされる。

「ジャマ！！」

居合いで棍棒が振り下ろされるより先に相手を切った。

が、傷が浅かったのか、再び棍棒を持ち直し、桜の頭に打撃を繰り返した。

（意識が・・・！クソッ！）

「とつとと・・・くたばれクソ牛イイイ！！！」

「ッ・・・！？」

ソイツに刀を振り下ろしたのは銀時だと分かった。

「おい、生きてますかあ？」

「ちよつと意識が飛ぶ寸前だったけど大丈夫よ」

「意識が飛ぶ寸前つてのは大丈夫じゃない証拠だろオイ」

「私より・・・忍葉を何とかして・・・頼む・・・」

桜は頭を押さえながら少しだけ頭を下げた。

「この村に医者はいんのか？」

「うお！どっから現れた高杉！！」

だが高杉は銀時を堂々と無視して桜に問い詰めた。

「……居るっちゃ居るが今はあの山を越えた先の村に居る。その人以外この辺に他に医者は居ない」

「その村までどのくらいだ？」

「ずっと走っても半日かかる」

「いつ帰ってくるんだ」

「忍葉の話じゃ3日後と言っていたハズ。それ以上もそれ以下もありえるけどね」

桜は忍葉の腕の無いその体を見る。

やるせない気持ちばかり溢れかえってくる。

「だったら走ればいいんじゃないか？」

坂本がどっから持ってきたのか分からぬが、駕籠かこを持っていた。

「バ……バカじゃないの！？人の話聞いてた！！？」

「聞いてたからこうやって駕籠持ってきてんだよ俺達は」

「そういうことだ。ほれ、さっさと乗せろ」

銀時と桂が担ぐ役に回されたようだ（身長的に）。

「じゃあ道案内任せるぜ、えーと……」

「桜よ。都野桜」

「俺は坂田銀時。まあとにかく頼むぜ桜」

「俺は桂小太郎だ。で、こっちが高杉晋助・坂本辰馬だ」

「よろしくな」

「道案内、たのむぜよ」

「分かった。ついてきて！」

桜を先頭に走り出した。

「村はずれ」

この草原を抜ければ近道になる。

「ッ!!」

桜は再び座り込む。

「やっぱり肋骨を何本か折れたようだな」

「少し治ってんだけどね……まだ完治はしてないから……」

「

「？何か治るの早すぎやしねえか？」

高杉が不思議そうに聞く。

「私の妖刀は効果を発揮した時術者の身体能力を少しばかり上げることができる。治癒能力も普段の数倍。だからさっきの間、鬼神化した時に治っていたって訳」

「つくづく便利な刀じゃの〜」

「そんな事より急ごうぜ？」

「ああ、ゴメン」

フラフラ立ち上がるが、痛みで思うように歩けない。

「・・・こうなったら最終手段！」

「え！？」

桜は指をくわえてピーー！！と鳴らした。

すると、ガサガサ周りの草が揺れて、馬鹿でかい狼が出てきた。

「なんだコレエエエエ！！！！」

「大人しいから大丈夫」

一匹の狼を撫でる。

「この子に乗る。しばらく私の足の代わりになってもらうわ」
「そ、そうか」

桜はなんとか背中に乗ると、前を指して「ゴー！」と言った。

狼は丁度いい速さで走る。そして草をなぎ倒し、4人を導く。

しばらくしてようやく山道に出た。

「ああ・・・ハラヘッタ・・・」
「諦める」「諦めるきー」

銀時は空腹でだんだんスピードが遅くなる。

「つたく・・・子供じゃないんだから」
「餓鬼に言われたくねーよ!!」
「言葉じゃなくて行動で見せて」
「く・・・行くぞッラア!!」
「ッラではない!桂だアアアア!!」

スピードが上がった。

(扱いやすいわね)

「グルルルル!!」

狼が唸^{うなり}った。

「どうしたの?ってキャア!」

横の茂みに飛び込んだ。

「あ!ちよつと待て!」

続いて4人も横の道へ行く。

道は道でも獣道だ。

「どうしたの!？」

桜が驚いていると、後ろから微^{かす}かだが声が聞こえた。

「この辺りに攘夷浪士が潜伏してる筈だ!! 探せ!!」
「はい!!」

どうやら幕府の者らしい。

「あいつらは……?」

「幕府だ。奴等、俺達を見捨てて天人と手を組みやがった」

「危なかったのう。見つかったたら一大事じゃったきー。この狼はエライのう」

「ガウ!」

狼は嬉しそうに鳴いた。

「この獣道が一番の近道だって事をこの狼^こには分かってるみたいね」

「なんだあ? コイツも。○け姫の犬神様かア?」

「この辺のでは一番強いよ」

「マジでか?」

「マジよ」

狼が先導する事3時間たった。

現在時刻は午後5時。

「さ……流石に腹が……」

「腹の皮と背中^のの皮がくつつきそうじゃー」

「せめて水を……」

「文句言っても仕方がねえだろ……」

「この先に川があつたはずだからソコまで頑張つて」

桜はチラリと駕籠を見る。

銀時の鉢巻で応急処置をして出血が少し止まったものの、はちまき駕籠は少し赤く染まっている。

「あ！川じゃ！」

途端に坂本が走り出した。

「その元気はどっから出てきたのー！！？」

く川く

「はあ……生き返るぜよ……」

「ぜよくじゃねーよ！！テメエ何一人で抜け駆けしてんだこの野郎！！！」

「アイダダダダ！銀時！痛かばー！！！」

「お前たちはその元気をもっと別の事に使えんのか」

桂も水をすくって飲む。

冷たくて、疲れが吹っ飛ぶようだった。

狼もゴクゴク飲む。

桜は大きな葉っぱを引きちぎり、川の流れで洗う。

そこに水をすくうと駕籠に持っていた。

「忍葉・・・？」

「ウ・・・さ・・・く・・・ら？」

「意識が戻ったんだね。水飲める？」

「うん・・・イツツ！」

急激に痛みが襲ってきた。

「左腕・・・斬られたんだっけ？」

「うん・・・ゴメン・・・」

「何で桜が謝んのさ。桜がいなきゃ今頃大量出血で死んでたよ」

「・・・とにかく、水」

「ありがとう」

右手で上手く持ち、少しずつ飲む。

「近くに居るから何かあったら呼んで」

ヨロリと立ち上がって駕籠のすだれ（？）をおろした。

（あーもっと早く治れよ肋骨ー）

桜も川の水を飲んだ。
痛みで上手く体を傾けられなかった。

「さて、そろそろ行こうぜ。早く着いた方がいいだろな」

高杉も桜が忍葉と話してる間に水を飲んでいたらしい。

「そうね。行ける？」

「ガウ！」

「無論だ」

「おうよ！」

「行くぜよ！」

満場一致で出発した。

だが目の前には川。深くも無ければ流れも比較的穏やかで、楽に渡れた。

ここから先、獣道から山道に出て、医者 of 居る村まで一直線だった。

「この道を通つ直ぐ行けば村があるわ！！」

「ヨッシ！もう一息だ！！」

「うん。あと5時間あれば着くから——」

5時間と聞いて全員のボルテージが下がった。

「この一直線を5時間！？」

「この山道一気に上って降りれば5時間くらいかんのよ！！」

「クソ医者アアア！！ぜってー診察させてやる！！寝てても叩き起こしてやる！！」

「その意見に賛成」「その意見に賛成だ」「その意見に賛成じゃ！！！」

妙なところに息の合う5人だった。

午後10時30分

「見えた！！あの集落よ！！」

桜の声で皆が元気付く。

「やっと医者にあえんだな！」

「うん」

桜は狼から下りた。

「先に戻ってな。私は後でゆっくり帰るわ」
「グルルル・・・」

少し悲しそうに鳴く。心配してるのだ。

「いいからお帰り」

狼は少し名残惜しそうにその場を去った。

く村く

何とかなんとかで医者を見つけた。

忍葉を見てもらうと、その後に桜も見てもらった。

やはり肋骨が数本折れていたようだ。

「だいぶ治りかけてるけど安静にしたほうが良いよ」

「えー・・・作者さん。これ治して」

え！？あーはいはい。

《桜の傷は治った》と

「おや？すごいねー。なあんか一瞬で治ったよ？」

「一瞬だけ鬼神化したからね！！（うそ）」

と言っ訳で桜の傷は治りました。

「で、これからどうするの？」

桜は4人を買ってきた大福を出す。

「別の町にいくさ」

「そつか・・・じゃあもうお別れだね」

どこか悲しそうに言った。

「・・・お前も来るか？」

「は？」

「別に餓鬼の1人や2人なんとも無いぜ？」

銀時の優しさが嬉しかった。
が、桜は、

「いけない……」

と、呟いた。

「?なんでだ?」

「私は……何もかもを斬ってきた。全てを切り裂いて来た。こんなゴロツキの餓鬼に何ができると思う?刀を振る事しかできないんだよ」

立ち上がって裸足で外に出る。

「それに私は鬼。……ちょっと前にね、ここに来た奴らを切り裂いて道を真っ赤に染めたんだ。
だから鬼だって。

でも何とでも言えればいいさ。私は鬼として、人斬りとして、ここで……生きて……行くだ……」

桜の瞳からは涙があふれ出ていた。

桜は本当は着いて行きたかった。

村では恐れられ、人々からは石を投げられる。

そんな鳥籠から抜け出したかった。

でも護りたいものがある。

守ると約束した人がいる。

桜の心は揺れていた。

どうしたらいいか自分でも分からなくなつた。

「鬼だからなんだって言うんだよ。鬼なら鬼らしく刀振るって人々
ビビらせてその代償に誰かを救え。」

だがなア、もし俺達と着いていきたいのなら自分自身でその操り人
形みたいな鎖を解け。

残るんなら一生ここにいろ。ただそれだけだろ？」

桜は自分自身に語りかけた。

（私は……どうしたい？一生鎖でつながれていたいか？違う！
鬼らしく居たかったのか？違う！

私は……自由になりたい……！もつと誰かの役に立ちた
い！！もう忍葉には十分恩を返した。今度はこいつ等に恩返ししな
いとね……）

桜は涙を拭いて、振り向いた。

「……行きたい……銀時たちと一緒に世界を見てみたい！行
くよ！外に！！」

4人はフツと笑った。

「それに……借りをかきっぱなのは嫌な性分なの」

「はは！ちげえねえ」

夜空には綺麗な満月が浮かんでいた。

その月はまるで桜を祝福しているようにも見えたのだった。

「次の日」

桜たちは昨日の夜から一睡もせず、桜の村に帰っていた。

4人とも桜の家でグッスリ眠っている。

桜は忍葉の家に行き、忍葉の母に全てを話した。

「そうか。やっとアンタにも仲間が出来たね」

「うん。・・・いつかこの村に戻ってくるから。その時はもっと強くなってるね」

「行っというでバカ桜」

「行つてきます」

桜はタタタツと駆けて行った。

桜は服を着替えた。

一番綺麗な服だ。

白と桃色が基準の着物だ。

だいぶ前に特注で作ってもらった桜と月の描かれた手甲。
足袋に草履。

髪も綺麗にまとめた。

「絶対に・・・強くなる・・・!!」

その決心を胸に、愛刀『鬼月』を携え、銀時たちと共に村を出て行った。

その後、攘夷戦争に参加し、『無情の鬼神』という異名が付いた。

無表情で、容赦なく敵を切り裂く幼い鬼。

テストヤベーよコンチキショウ!!!!!! (後書き)

次で過去偏最後です。

桜「次はいよいよ真選組だねー」

うん。ゴリ……近藤にあったあたりだからね。

桜「アレ？何か今ゴリって……」

きにするな!!

駄文が無駄に長くなってしまった（笑）（前書き）

桜「やっと終わり？」

終わりー

桜「てか、なあんか量が多くない？奇跡？」

ハッハー。2日かけてコレだぞコレ。

桜「ふーん……ではどうぞー」

駄文が無駄に長くなってしまった（笑）

攘夷戦争の後、5人別々の道をたどった。

皆各々の志を胸に分かれた。

そして、皆と別れてから早1年。

皆と出会ってから3年たった8歳の時に攘夷戦争が、そして只今9歳。

まだまだ餓鬼と言われる年代だ。

で、結局私は行く宛ても無しに、なんとなく江戸へと向かっていた。

「うつ・・・ここ3日何も食べてない・・・」

あまりの空腹と疲れに今にも倒れそうだった。

少し伸びた身長。

それは成長期の証だった。そして・・・

「お腹が空くのも成長期の証・・・って、何急に私に振ってんの！？」

はいスルーしまーす。

「あーあ・・・お金はあるのに周りにや何も無いって・・・これ本当に宝の持ち腐れじゃん・・・」

桜がブツクサ言っていると声をかけられた。

「へえ？お金はあるんだ」

桜は声の主を確かめず、とにかく距離をとるように離れた。

「そのお金、オジさんにくれないかなあ？」

「誰がアンタみたいな奴に・・・!!」

刀を抜き、構えた。

「おいおい、刀は子供のおもちやじゃないんだぜ？」

「これでも攘夷戦争に参加した！！子供扱いしないほうが身の為だぞ」

「じ・・・攘夷って・・・ブハハハハハハ！！！！何言ってるだデメエ！！！」

周りからも笑い声が聞こえた。
次々と桜の前に姿を現す。

「嘘つくなくて！！こんな餓鬼が戦争なんかできるわけねえだろ！
！」

「嘘じゃない！！私は……」

「はいはい。取りあえず……」

賊たちも刀を抜いた。

「金よこしなあ……」

「返り討ちにしてやんよ……！！」

多対一。

圧倒的に桜が劣っている。

だが攘夷戦争では数百人いや、数千人を相手にたった一人で立ち向かって行った桜にとっては何てことも無かったが、疲れと空腹がそんな武勇伝を無きものとする。

「ハアア……！！」

それでも何とか踏んばった。
斬って・蹴ってを繰り返す。

「な・なんだ！？この餓鬼……！！」

「メチャクチャじゃねーかあ……！！」

「……！！な・なあ……！！俺、一つ思い出した……・攘夷戦争のある
噂……」

「あ……！！？」

「男しか居ないはずの戦場に女が一人いたって！しかもそいつは餓鬼で……」

皆、男の話の続きを黙って聞いていた。

「妖刀と馬鹿げた脚力、月と桜の手甲が特長の……『無情の鬼神』だ……」

「あら、私の事を知ってる人が居たなんて……嬉しいな。でもアンタ達に覚えられても嬉しくないけどね……」

ソイツを蹴り飛ばした。

「ホラホラ！！全員まとめてかかって来い……」

「ク……クソッ……やっちまえ……」

男共が駆け出した。

桜も駆け出す。

（私は……絶対に負けない……！）

「近くの村」

「オイコラア！！それ返せ！！」

「やなこつたい！！」

黒髪の男と亜麻色の髪の子供が追いかけてここをしていた。

「いーからとつと俺のマヨネーズ返せ！！」

「取れるモンなら取って見やがれこのマヨラー！！」

「こんのクソガキア！！！！」

黒髪の男は土方。亜麻色の髪の子供は沖田だ。

「あーもー！！いい加減にしやがれ！！！！」

土方が沖田の腕を掴んだ。

「たーすーけーてー！！マヨラー星人につかまったあ！！」

「黙ってる！！」

ガンツと頭を殴った。

「イッテー！！」

「おいおいトシ、その辺にしてやれ」

「近藤さん」

土方は渋々沖田から手を放した。

「ほら！道場に行くぞ！！」

「おう」

「へーい！！」

「じゃあ・・・始め！！」

近藤の合図で2人一組での模擬戦が始まった。

カァン！カァン！と木刀と木刀がぶつかる音がする。
それが30分続いた。
そして30分後

「はい！そこまで！！」

近藤が手を上げる。

その合図で全員が木刀を下ろした。

「お疲れさん！少し休憩したら今度は別の奴とだ！」

『はい！！』

「じゃあしばらく休憩！！」

3人揃って縁側に居た。

「それにしても攘夷戦争・・・あれは一体どういう意味だったんだろうな。敵うはずも無い敵に突っ込んでいくとはよオ」

「まあな。攘夷戦争も結局はただ死人が出ただけで終わってしまっただ。なんともまあ悲しい戦いだなア」

近藤が空を見上げて言う。

しばらく静かな時間が流れた。

「近藤さん!!」

そんな沈黙を終わらせたのは急いで駆けて来た原田だ。

「ん?どうした?なに焦ってたんだ?」

「アツチに人が倒れてたんだ!!!」

「何!?分かった!!!連れてけ!!!」

「はい!!!」

4人は草履を履くと、原田に続いて出て行った。

(クソ・・・疲れてさえいなけりやな・・・)

桜は大きな木に寄りかかっていた。

頬から、腕から、腹から、足から血が流れ出る。

「こんな雑魚に対してここまで怪我するとは・・・我ながらに情けないわ・・・」

刀も敵の血で染まっていた。

「ここで終わるのも・・・癩^{じやへ}ね・・・」

腕から流るる血が細い指を伝い地へと落ちていく。

動けないまましばらくジッとしていると遠くから声が聞こえた。

「こっちです！」

「おう！！」

「もつと速く走れよ！！」

「うるせエ！！オメエもほとんど変わんねエよ！！」

桜は随分とうるさい奴等がやってきた・・・と思っていた。

そして足音はどんどん此方へと近づいてくる。

桜は顔を上げず、刀に手をかける。

そして奴等は自分の目の前に来た。

「おい！大丈夫か！？」

一人が桜に手を伸ばす。

「まだ居たか・・・賊め！！」

桜は刀を勢い良く引き抜き、振るった。

だが、後ろに居た2人が手を引いたのでソイツには当たらなかった。

「ハア！ハア！ハア！ハア！」

刀を杖代わりにして立ち上がる。

そしてビツと4人に向けた。

「クソッ」

土方が刀を抜いた。

だが近藤がそれを抑える。

「まで！トシ！俺達は戦いに来たんじゃない！！」

桜はその言葉にすこし目を細めた。

「君も・・・信じて欲しい」

「フン！過去にそう言っただけで襲ってきた奴なんぞごまんといた。信じられないわ」

「そんなことより、」

沖田が1歩前出る。

「コレをやったのは・・・アンタか？」

「ええ・・・襲ってきたら身を守るために戦う。当たり前じゃない」

桜の言葉には不思議と威圧感があった。

（この人数をたった一人で・・・！？）

「君、怪我してるんだから治療しねえと・・・」

近藤が手を差し伸べる。

「だから、信じられないって言ってんでしょ！！」

桜は叫んだ。

「だいたい、刀を持って治療するとか信じて欲しいと言ったって誰も信じやしない！！私とてバカではない！！」

疑いのまなざしを一向に崩さない桜に近藤は刀に手をかける。

（来るか？）

だが近藤は鞘ごと引き抜き桜のほうへ投げた。

「な！？」

「ホレ！トシと総悟とも渡せ！！」

ついでに、原田は刀を置いてきちゃいました（笑）

2人も投げ渡す。

「これで信じちゃ貰えねーかなあ？」

ジツと刀と4人を交互に見る。

そして、フツと笑った。

「フフフ・・・アハハハハハハ！！！」

桜は声高らかに笑った。

「フウ・・・信じるわ。ここまでして貰ったのよ？信じないわけないじゃない」

その後、3人に刀を返すと、フラリと倒れた。

そのまま闇の底へと意識は沈んでいた。

「どうですか？」

「ええ。もう大丈夫そうですよ」

「そうか・・・良かった」

ぼんやりと意識はあるが、まぶた瞼は重くてあげられなかった。

（さっきの男と・・・誰？女性？）

意識はハッキリしないが、言葉だけは良く聞き取れた。

（誰だろう・・・？）

そんな桜を一発で起こす言葉を放った。

「にしてもこんな餓鬼がなあ」

桜は左側に居る男に対し、右足で顔面を蹴った。

「ぐガパ！！！」

男——近藤は隣の部屋の壁まで飛んでいった。

「人を餓鬼扱いするな。虫唾が走る」

「は……はい……」

ムクリと起き上がる。

「あらあら、まだ起きちゃダメよ」

と、女性に再び寝かされた。

「この位の怪我なんてなんとも……」

「強がってもダメ」

「……」

桜は女性を通り越して自分が蹴飛ばした近藤を見た。

「イテテテ」と言いながら立ち上がる。

「オイ！一体何の音だ！？」

壁にぶつかった際、その音を聞いた土方&沖田が部屋に来た。

「ああ、イヤ、大丈夫だ」

「？ならいいが……。ん？コイツ目エ覚ましたんだな」

近藤が近寄ってくる。

「にしても大丈夫か？相当な怪我だったが……」

「もう大丈夫……」

桜はフワリと笑った。

「まあ、無事で良かった！
ところで君、名前は？」

「人に名を聞くときは自分から。それが侍としての礼儀じゃないの？」

ニヤリと笑って言った。

「ハハハハハ！コリヤ一本取られたな！俺は近藤勲だ！」
「俺は土方十四郎だ」

「俺は沖田総悟ってんでさア！」

「私は沖田ミツバです。そーちゃんの姉なの」

「私は都野桜。助けてくれてありがとう」

「にしても、その刀は……」

近藤は桜の刀を指差す。

刀や一通りの持ち物などは枕元に置いてあった。

「私の刀よ？それがどうかした？」

「いや、子供が刀なんて持つてる方が珍しくてな」

「……まあ、気にしないで。……あ！」

ここで桜は始めて自分の着ている服が自分のではない事に気づいた。

「この服……」

「私が子供のときに着ていた服よ。貴女のはボロボロで血だらけだったから勝手に着替えさせてもらったわ。ごめんなさい」

「いえ、いいんです」

桜はこのような美しい着物を着たことが無かった。

常に戦場に立っている桜には、美しさなど気にも留めていないことだった。

「そいやぁお前どこから来たんだ？」

土方が聞いてきた。

「ずっと遠くの山間の村から。今は江戸に向かつてる途中なの」

「ふうん。にしてもその手甲に脛当^{すねあて}・・・侍か？」

「そう。私は侍。舐めてもらったら困るわよ」

「フッ、そうか」

「で、ここはどこなの？」

桜が聞くと近藤が、

「ここはウチの道場だ」

と、答えた。

「道場？」

「ああ。もうすぐしたら稽古の続きを始めるんだ」

「・・・見に行っても・・・いい？」

「別に構わないが・・・怪我は・・・」

「気にしないで。足と腕以外は言うほど深くは無いから」

桜はニコリと笑って言った。

「でも心配だわ・・・」

ミツバはとても心配そうだ。

「心配には至りませんから」

「なら良いけど・・・」

「じゃあ近藤さんはやく行こうぜ！」

「分かった分かった。慌てるな総悟」

桜は起き上がると刀を携え、短刀を懷に納めた。
手甲や脛当は置いていった。

（面白そうだなあ・・・）

「じゃあ続きを始めるぞー！！」

「あの・・・その前にあの餓鬼は・・・」

桜は「餓鬼呼ばわりすんな！！」と短刀を投げつけた。
鞘に入ったまんまなので、打撲だけですんだようだ。

「斬られたいの・・・？」

「ヒイ！！」

今怯えているのは山崎退。やまざきひがる

桜は刀を抜いてその切っ先を突きつけていた。

「桜！その辺にしてやれ！」

近藤に言われ、桜はチツと舌打ちをした。

（チツてオイー！！！）

心の中でツツコミをする山崎。

「まあ桜！あの辺から見ててくれないか？」

「分かったわ」

刀を納め、短刀を拾い上げると近藤に言われた場所に腰を下ろした。
その姿は小さいながらも武士を思わせた。

「じゃあ続き行くぞー。さっきと別の奴と組んでくれ」

全員が向かい合った。

「それじゃあ・・・始め！！」

勢いのある動き。

（技術はある・・・皆相当の力の持ち主・・・）

的確に状況判断をする。

（特にあの土方と沖田だったかな？あの2人は飛び抜けて強い――）

桜はあの4人の事を思い出していた。

「会いたいな……」

「誰にだ？」

「うわぁ――！」

急に隣に近藤が居たので驚いて飛び上がってしまった。

「き……急に隣に来るな――！ビックリするじゃんか――！」

「イヤ……俺だいが前にお前の隣にいたんだけど……」

「え？マジで？」

「マジだ」

気づかなかった事を不覚に思った。

「で、誰に会いたいんだ？」

「……仲間……」

「仲間？」

「うん。今は皆別々の場所に居るの……唯一分かってる奴も宇宙^そに居るし……」

「そうか……悪い事聞いたな」

「気にしないで。一人で居るのには慣れてるから」

近藤とはそんな他愛も無い会話をしていた。
そして30分。

「はいそこまでだ――！」

何人かその場に座り込んだ。

「で、どうだった？」

「そうね。皆強いよ。でも・・・」

ここで爆弾発言をした。

「私より弱い」

「んだとお！！？」

「ざけんなよ餓鬼イ！！！！」

「だったらやってやるうじゃなえか！！！！」

「望むところよ！！」

「待て待て！飯にもコイツは怪我してんだ！！」

「こんな怪我、怪我した内にも入んないわ」

「オイー！！！！俺止めようとしてんの分かんないのー！！！！？」

と、騒いでいるとミツバがやって来た。

「皆さん、ご飯できましたよー」

「じゃあクソ餓鬼、メシ食った後に勝負だ」

「かかってきやがれ。返り討ちにしてやんよ」

くそして昼ごはんを食べてしばらくした後……

空腹が酷かった桜も、久しぶりにご飯を食べれて満足していた。

「じゃあ殺^やりましょうか？」

「おうよー!!」

そして再び道場へ……

「真剣でやる？それとも木刀？」

桜は真剣上等というような怪しい笑みを浮かべた。

「真剣でやろう。木刀じゃあつまらんだろ？」

「良いわ」

桜はミツバから洗濯して貰って綺麗になった自分の服に着替えた。
これまた丁重に修繕までしてあった。

桜は手甲をつけた。

鞘から刀を引き抜き、鞘を捨てた。

「さて・・・と、始めますか」

スツと構えた。

「ああ・・・いくぜ!!」

相手も突っ込んでくる。

桜はヒョイヒョイかわして追撃する。

「遅い!!」

峰で相手をなぎ飛ばした。
周りがシンとする。

たった一撃で終わってしまったのだ。

「な・・・にイ・・・?」

「舐めてかかったらダメって事ね」

肩で刀を担ぐ。

「で、次は誰？」

「俺がやろう」

立ち上がったのは近藤だ。

「本気で来て。じゃなきゃつまらないわ。怪我の心配は無用だ」

近藤が構えた。

「いくぜ・・・？」

「どうぞ」

2人は同時に踏み出した。

ギン

丁度道場の真ん中あたりで刃を交える。

しばらくの間、全員が無言で2人の動きを見続けた。

豪快な攻撃を繰り出す近藤と、鋭く素早い攻撃を繰り出す桜。

なかなか勝敗がつかない。

桜が飛び上がり、その羽織と帯紐がはためいた。

「！！高・・・！」

「喰らえエエエエ！！！」

ガドン

鈍い音が道場に響き渡った。

桜がかかと落としを繰り出したのだ。

脳天に直撃し、パタリと倒れた。

「誰が刀だけって言った？私のもう一つの武器は足よ」
「チ・・・ク・・・シヨ・・・ウ・・・」

意表をつ突かれた攻撃に、周りは愕然とした。

「近藤さんが・・・!!」

「やられた!!」

意表を突かれたにしても、一撃で近藤を倒した事にかわりは無い。

「次は誰がやる？誰でも良いよ」

「俺が行こう」

次に名乗り出たのは土方だった。

「俺はあの2人ほど甘くは無えぞ」

「上等」

と、桜が言った後周りから、

「がんばれ土方さん!!」

「行けー!! 2人の仇をとってくれ!!」

「死ね!土方コノヤロー!!!!」

「総悟オ!!」

誰が言ったかなど土方には一発で分かった。

「桜ア！その人ぶつた斬れー！！」

「味方じゃないの！？」

「俺ソイツ嫌い！！」

「そんな理由か！！」

土方は冷静さを取り戻し、桜に向き直る。

「こいよ」

「ハア！！」

下から上へ打ち上がる斬撃。

「やるじゃねえか！！」

「これでも6年間刀持ってたのよ！！」

隙の無い動きと攻撃に、土方は汗を流す。

（全く攻撃が当たる気がしねえ・・・これじゃ一方通行だ）

ヒュン・ヒュン

刀は虚しく空を切る。

「私は常に戦場に立ってきたのよ？生半可な攻撃は通用しないわ！」

「そーかい！！」

ギイーン！

キン！

ギャン！

刀同士が交じる音が延々と続く。
一向に体には当たらない。

そして、桜に一瞬隙が出来た。

「貰った！」

だが、土方の攻撃は刀ではない何かに防がれる。

「——！手甲！？」

驚く土方に刀を一振り振るった。

桜は峰打ちで土方の体勢を崩した後、蹴りを入れる。

ドカッ

壁に衝突し、止まった。

「残念でした。私の勝ちね」

「クッソ……」

その様子を皆啞然と見ているしかなかった。

「……でも手加減されて勝ってもあんまり嬉しくないわ。なん
で本気でやらなかったの？」

桜は鞘を拾って刀を納めながら言った。

「餓鬼相手に本気だすんざあ大人気ねえだろ？」

「餓鬼呼ばわりする奴は嫌い。……でも、立派な武士道を持つ

てる奴は好きよ」

「お前も持つてんだろ？自分の武士道くらい」

「当然。私は私の武士道にしたがって生きているからね」
「ちげえねえ」

その時さくらは（銀時に似てる・・・）と思った。

く桜 10歳く

桜は1年間近藤達と共に過ごした後、共に江戸へと向かった。

そして・・・真選組を立ち上げ、桜は二番隊隊長に任命された。

で、現在に至る。

（あいつ等にまた会えた。晋助とは敵同士。コタローもそうだけど・
・でも、それでもいい仲間。辰馬も相変わらずチャランポランだ
し、銀時も・・・いい家族なかまが居る）

桜は知らず知らずの内に笑っていた。

「ん？どーした桜？」

「いえ、ちよつと・ね」

桜は近藤や松平に向かって満面の笑みを浮かべていた。

駄文が無駄に長くなってしまった(笑)(後書き)

テスト終わったー!!! (イエイ!!!)

桜「で、出来前はとうだったの?」

聞くなー

聞くなー!

聞くなー!!!

聞くなー!!!!

桜「..... (汗)」

仕込み刀がたまゝに欲しくなる。なんかかつこいーじゃん

それからここ数日、実に平和な日が続いた。

桜も怪我が治り、真選組に復帰していた。

「ここんところ朱烏の動きが無いですね。まあ、新情報が入っただけでも良かったですけど」

「えー？そうだったっけ？」

「沖田さん・・・忘れないで下さい」

「俺アそんな事言つてたとき土方さんに呪いをかけてたからなア」

「呪いなら後でも出来るじゃないですか。じゃあもう1回だけ言いますよ？」

呪いにはツツコマ無いのか！とか言わないで！

「黒頭巾共は朱烏の手下。命をかえりみず、悪事を働く集団です。誰か一人でもやられたら、直ぐに全員まとめて爆死するという集団です。分かりましたか？」

「あー」

「なんですかその気の無い返事は・・・」

沖田は横を向いた。

「？どうかしましたか？」

「そついやア土方さんに渡す書類があつたんじゃ無いんですかイ？」

「ああ、忘れてた」

桜は土方の部屋に、障子越しに声をかけた。

「土方さーん、書類持ってきました!」

だが反応は無い。

「土方さーん?居ないのかな?」

「桜、どきなせい。俺がバズーカーで……」

「止めてください!!!」

沖田がバズーカーを構えるが、撃つのは桜が阻止した。

「ん?桜ア、なんか中から聞こえませんか?」

「え?あ、ホントだ……TVかな?土方さん、入りますよ?」

桜が障子を開ける。

TVからはプリ。ユアの音楽が。

土方……否、トッシーがそれに合わせて歌って踊っていた。

そして土方に戻った。

「あ……」

「何も見てません」

2人は同時にそう言うと、バアンと障子を閉め、足早に去っていった。

「あ!オイ!ちょっと待てエ!!」

土方が急いで呼び止めようとするが2人は、

「何か見てはならぬ物を見てしまいました」

「だがこれはいいエサだゼイ？口止め料を頂きたいチャンスでさア」

「ただだけ腹黒なんですか。つーかアレトツシーですよね？トツシ
ーですよね？？」

「いや、きつと土方コノヤローだ」

「それもつとイヤです！！」

「お前ら2人は何の話をしてんだコラア！！」

後ろから2人を呼び止めたのは話題の主、土方だ。

「アレはトツシーだ！！あんなモン消えて欲しいぜ・・・たくく・・・」

「じゃああれ広めませんから口止め料よこせ」

「総悟、テメエの舌斬つてやる」

チャキリと刀を抜く。

その途端、沖田は走り出した。

「み〜ん〜な〜！！土方さんが〜。リキュアを歌いながら踊ってま
したゼイ！！！！」

「そ・・・総悟オオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

そんな沖田を追いかける土方。

（にしてもアレは・・・うん、見なかったことにしよう）

桜は頭を振ってその概念を取り除こうと必死だった・・・。

「にしても静か過ぎて逆に恐いくらいですね」

昼食時、桜は近藤と話していた。

「だな。で、実はその事でまた一つ情報が入ったんだ。どうやら奴等は兵庫の神戸に居るらしい」

「神戸ですか？」

「ああ。真選組から2人ほど偵察に行ってもらった事になってんだが・・・」

「私に頼みたい・と？」

「ああ。山崎と2人で行ってくれ。いいか？暴れるなよ？情報を集めてくれ」

「はい。で、いつからですか？」

「できれば明日からだ。行けるか？」

「了解しました。山崎には私から伝えときます」

「頼んだぞ。桜」

「はい」

桜はフツと笑って返事をする、食器を片付けて、山崎を呼び出した。

そして近藤に言われた事をそのままソックリ伝えた。

「分かりました。すぐに準備します」
「おねがいね」

「次の日」

「じゃあ、頼んだぜ2人共。しっかりな」
「はい！」
「あと桜、流石に刀を置いていくのはアレだろ？だからコレを持って行け」

近藤に渡されたのは番傘だ。

「番傘？」

「刀が仕込んである。もしもの時だけそれを使え」

桜はコクリと頷いた。

「山崎も気張っていけよ」

「はい!!」

2人は駅へと向かっていった。

それから、なぜ桜が刀を置いていくかと言うと、流石に女が刀を持つていたら怪しまれる、と踏んだからである。

山崎と共に電車に乗って、神戸へ向かった。

「にしても隊長、神戸って行った事あります?」

「無いわ・そういう山崎はあるの?」

「いえ・・・実は俺も無いんです。初めて行く場所だからなー」と

思つて」

「まあ、元々居場所の分からない奴等探すんだから地理なんて地図があれば何とかなるわ」

桜は窓の外を見ながら言った。

そして2人はしばしの間電車で揺られていた。

く神戸く

「2時間もかかるとは……」

「アハハハハ……疲れましたね……」

予想以上に時間がかかり、2人共少々体を伸ばしていた。

「じゃあ近藤さんに予約してもらった宿へ先に向かいましょう」
「はい」

2人は神戸の街並みを楽しみながら歩いていた。
桜は赤い番傘が良く似合っていた。

「でもすごい賑わいですね。ここが有名な神戸港かあ．．．」
「そうね」

桜が番傘をクルリとまわした。

刀が仕込んであるとは思えないほど綺麗な傘であった。

「あ！隊長、ここですよ」
「本当だ」

2人はカラリと開けて入った。

「いらっしやいませ」

「あの．．．予約していたのですが．．．」
「お名前をお願いします」

桜は近藤が「桜の名前で予約しといた」と言っていたのを思い出した。

「都野桜です」
「少々お待ち下さい．．．はい、分かりました。ではコチラにどうぞ」

と、女将さんに案内された。

「このお部屋です」
「わあ．．．」「うわあ．．．」

2人は思わず声を漏らした。

とても広い部屋で、2部屋あった。

「では、私はこれで失礼致します」

女将が下がろうとした時桜が、声をかけた。

「あの、神戸で有名な場所は何処ですか？」

「そうですね・・・やはり神戸港ですね。広いですからゆっくり見て回るといいですよ」

「そうですね、ありがとうございました」

「いえ、ごゆっくり」

女将はスーと襖を閉めた。

「やっぱり神戸港・・・そこから探索しましょう。少しでも情報を集めなきゃ・・・」

「そうですね。それだけ広がったら何か分かるかもしれませんね」

桜は頷くと、再び外へ出て行った。

「女将さん、7時ごろ帰ります」

「分かりました。お氣をつけて」

「はい」

2人はまた神戸港に向かっていった。

と、ある海沿いに大きな建物を見つけた。

「あら？ここは・・・」

「海軍操練所ですね。幕府もここに目をつけてるんですよ。攘夷派

の浪士が居ないかって」

「へえ……怪しいっちゃ怪しいわね」

等と会話していると、一際強い風が吹いた。

「あー!」

桜の傘が、操練所の中に飛んでいってしまった。

「ヤバ……」

と、中から誰か出てきた。

「誰の傘だア!!?」

「わ……私のですッ……」

桜がビクリと肩を震わせながら言った。

「そーかい。気をつけろよ」

「あ、はい。スミマセン……」

と、桜が傘を受け取っていると中から「勝先生」と声が聞こえた。

「勝先生、大丈夫ですか?」

「ああ。ちよつと頭にぶつかったただけだ。にしてもその傘重いな」
「ア……ハハハ、気のせいじゃないですか?」

桜は仕込み刀の事がバレないように、なんとか誤魔化し通した。

「あの……ここって一体何をするところなんですか?」

山崎が上手く話題を変えてくれた。

「ここは海軍を育てるとこよ！！ちよっくら見ていくか？」

「え、良いんですか？」

山崎は思いもよらぬ返答に、驚いていた。

「ああ。つと、俺は勝海青^{かつかいしょう}。オメエラは？」

「私は都野桜と言います」

「俺は山崎退です」

「分かった！まあ入っていけよ！」

2人の背中を押す。

（なあんか・・・）

（主旨がずれてないですか？）

2人は同時に同じような事を思ったのであった。

「で、ここは塾も兼ねてな〜……………」
「そうですね……………」

だんだん歩くのに疲れてきた2人。
しかも周りの視線がやけにイタイ。

「女じゃねえか？」

「なんで女が勝先生といえるんだよ？」

等と聞こえてくるのは自分の事ばかり。

「で、この塾にたまにフラツと寄って来る奴が居るんだが……………
・ソイツが相当船好きのアホでなあ……………」

「船好きのアホですか。フッフ……………私、そんな友達が居ますよ」

「ほお！どんな奴なんだ？」

「頭カラツポで、だけど船が大好きな奴です。まあ、1回アイツの
せいで宇宙で死にかけましたけど」

「ハハ！大変なんだな」

勝が笑っていると、上空に大きな影が出来た。

「た……………隊長……………！アレ！」

山崎が上を指す。

差した方をみると、巨大な宇宙船が降りてきた。

「あ！あの船……………辰馬！！？」

「ん？なんだ？お前坂本の事知ってんのか？」

「ええ……………まあ、腐れ縁ってヤツですよ……………」

そして、ドガアアンと大地を響かせながら降りてくる。

「イヤー！やっぱ地球はええのお！！」

「頭、あまりウロウロせんで用事だけさっさと済ませるきー」

「わかつちよらぁに！」

「陸奥ー！！」

桜は陸奥に抱きついた。

「久しぶりー！！」

「お？桜じゃなかか？こんな所で何しちよるとー？」

陸奥に聞かれ桜は小声で、

「幕府^{うゑ}からの命令でね、ちょっと最近江戸で暴れまわってる奴等の情報を集めて来いって言われてね」

「成る程・・・」

桜はゆっくり陸奥から離れた。

「にしても辰馬、久しぶり」

「久しぶりじゃのー。で、こんなトコで何しちよるか？」

「ちよつとあつてな、今こん中案内してる所だ」

「ほー。おんしは江戸におるとばかり思っちよったわ」

「ちよつと用でね」

その中でポツンと取り残される山崎。

「俺の事忘れてる・・・？」

操練所を後にし、4人で町を回っていた。

「成る程のー。幕府^{おかみ}の命令で来ちよったのか」

「うん。朱烏ってヤツ等が神戸に潜伏してると情報があつてね。今2人で情報収集してたトコなの。そしてら風が吹いて傘が操練所に入つてね」

「それであーなつとつたがー？」

「せいーかい」

桜と坂本の会話を聞いていた山崎は、不思議で仕方なかった。
何故こんな大物に洗いざらい話しているのか。

「どーかしちよったか？」

山崎に陸奥が声をかけた。

「え？イヤ、ちよつと……なんで隊長があんなに話してるんだ

ろうつて思つて」

「ウチの頭と昔交流があつたみたいでのー、あの2人は何かと仲が
いいんじゃない」

「へえ・・・隊長は自分の昔のことは話さないからな・・・」

「まあ、仲がいいと言つても頭が何かすれば・・・」

「ん？」

陸奥が指差す。

山崎は陸奥と話していて気づかなかつたが、坂本が地面にめり込んでいた。その上には桜の足が・・・。

「ちよつとオ！？何してるんですかア！！？」

「イヤ・・・ちよつと・・・」

「なんじゃあ！わしは只相変わらず小さいと言つただけじゃなかか
！！！！」

「ソレがムカツクのよ！！長身のテメエと一緒にするな！！」

更にギリリと足に力をこめる。

「イダダダダダ！！おんしゃ何するんじゃない？あ！！？」

「やっぱもー死んでくれない？マジでお願いだから。アンタがいる
と大変な事しか起きないからね絶対」

「隊長オオオオオオオ！！！！！！」

山崎が止めに入った。

「ちょー！陸奥さん！！アンタの上司が大変な事になってるのに助けないの！？」

「いつもフラフラしちよる罰じゃきに。いっぺん位地獄に行つても
らいたいくらいじゃ」

「一体なんの恨みがあるの!!?」

「なんかその台詞セリフ聞いたことがあるぞ?」

なんとかかんとかで桜の怒りは静まった。

(ホントだ……坂本あのひとと居ると碌ろくな事が起きなかった……)

山崎は疲れて茶屋の長いすに座っていた。
桜たちも座っていた。

陸奥は編み笠を下ろしていた。

そして、団子を食べながら話していた。

「にしても桜、その髪留め使っちゃったのか?」

「いいでしょ別に……」

山崎は桜の髪留めを見る。

真っ赤な花に、薄緑の葉。そして、緑の編み紐が下がっている。

「そついやあ・・・隊長つて非番の日とかよくいろんな髪留め使ってますよね？藤とか枝垂桜とか黒いやつとかソレとか」

「ああ・・・この赤いやつは昔辰馬に貰ったの。黒いのは銀時がくれたのよ」

「えッ！？旦那が！？」

「そつ。以外でしょ？アイツがあんない物」

桜がクスクス笑う。

「まあ金時にはマトモじゃったのー」

「銀時ね。でもアンタもマトモな物くれたじゃない」

「そうかア？」

「ええ。アホのアンタにしては・ね」

「あつはつはつは。誰かア！コイツに隕石は落としてくださーい！ー！」

「んな事言つて落ちてくる訳なかばに・・・」

と、陸奥が言つた途端、上から石が落ちてきた。

――結構でかい。

「うわああああああ！ー！？」

「何じゃアアア！ー！？」

「い・・・石！？」

「何故上から・・・！？」
なぜ

4人は上手くかわした。

どうやら屋根の上から落ちてきたようだが、あまりにも偶然過ぎて逆に恐ろしかった。

「だ・大丈夫ですか!？」

店番の娘が来た。

「申し訳ございません!!私の父が・・・」
「「「「?????」」」」

看板娘は屋根を見る。

4人もつられて見る。

「す・すいませんお客様!!大丈夫でしたか!!?」
「あ・・・あのー一体何を？」

山崎が恐る恐る聞いた。

「あはははは・・・屋根の修理です。重しが落ちてしましまして・・・ホントにすみませんでした!!」
「構いませんよ。幸い怪我也無かったですし」

桜は先程自分達が座っていた場所を見る。
無残にも、長椅子はバラバラだった。

「まあ、わし等じやのうたらもつと大変な事になつちよったのー」
「頭は潰されれば良かったきに」
「あつはつはつは。殺すぞ」

2人の会話を聞いた桜と山崎は顔を見合わせ苦笑いした。

「辰馬・陸奥、私達そろそろ（仕事に）戻るわね」

「ん？そうかア？気をつけえよ」
「ふふ。辰馬もな」

2人はとても楽しそうに笑った。

仕込み刀がたまゝに欲しくなる。なんかかつこいーじゃん（後書き）

なあんかグダグダのバキバキのゴロゴロですね。

桜「分かりにくいわ!!」

事故があってから分かれるまでの間が……

桜「短い」

ズビシツと言っくんじゃねえ!!!

桜（作者って……女だよね……？）

今日卒業式あったけどさー校長の話長くない!!? (前書き)

桜「サブタイトルのこれさ、作者は在校生じゃん? あたかも自分が卒業しましたー的なノリは止めてよ」

どこまで酷いんだテメエー!!

「私だってその時は子供だったから……一緒に寝たくなるモンなのよ」

桜が少し頬を赤らめながら言った。

「次この話したら斬るからね」

「は……ハイハイ！」

（まあ……実際は辰馬だけじゃなくて銀時やコタローともあるんだけどね……）

少し、その時のことを思い出していた。

(・・・寝れない)

桜はムクリと起き上がった。

隣では4人が気持ち良さそうに寝ている。

桜は4人を起こさぬよう、コッソリ部屋を抜け出した。

宿屋に泊まってる5人は、2階の部屋をあてがわれていた。

落下防止の柵に登り、屋根に飛び乗った。

「涼しい・・・」

桜はヒンヤリとした風に当たっていた。

(よくよく考えれば明日、戦いに出なきゃなんないんだよねー)

屋根の淵から足を投げ出し、満月を眺めていた。

ふと、後ろからカシャと瓦を踏む音がする。

「誰？」

刀に手を伸ばしつつ、振り返る。

「俺だ俺」

「コタロー・・・」

桜の元へ来たのは桂だ。

「どうしたの？コタローも寝れないの？」
「まあな。そんなとこだ」

桂も桜の隣へ腰を下ろした。

「……………桜」

「何？」

「戦うのは嫌か？」

「え？」

あまりに唐突な質問に一瞬戸惑う。

「……………嫌だよ」

「じゃあなんで戦うんだ？」

「決まってる。護る為」

桜は立ち上がる。

「護る為ならばこの命、どんな者にでも・どんな事にでもかけて見せようぞ」

「……………そうか」

「で、なんでこんな事聞いたのよ」

「何でもないさ。ちよっと気になってな」

「そ、」

桂も立ち上がる。

「じゃあ俺は先に寝るぞ」

桂は屋上から飛び降りようとした時桜が声をかけた。

「コタロー」

「なんだ？」

「――一緒に寝ても・・・いい？」

予想だにしない発言に一瞬戸惑ったが、フツと笑って

「ああ」

と、答えた。

く朝く

「んく良く寝たきー」

グーと体を伸ばす坂本。

「ファく・・・ア・・・」

銀時もムクリと起き上がった。
時同じくして高杉も起き上がった。

「おいッラア・・・朝だ・・・ぞ・・・」

高杉は言葉を失った。

坂本と銀時も覗き込む。

「うぉーい・・・コレはどういうことかなあ？」

「知るか。だが・・・」

「やることは分かっちゃるのお？」

「「ああ」」

3人が同時に足を振り上げ、振り下ろした。

「グガア！！！」

「なあにやってんだッラア！！」

「お前がそんな趣味だとは思わなかったぜ」

「幻滅じゃ」

3人が目撃したのは桜と桂が一緒に寝ているところ。

3人は、「ロリコン野郎」とでも思ったのかフルボッコにする。

「ま・・・待てエ！！誤解だ！！」

「なあにが誤解だこのロリコン！！」

「ち、違うぞ銀時！俺はどちらかと言うと同年ぐらいが・・・」

「ンなモン聞いてねー！！！」

バキッメキッゴズッ

桜は不快な音に目を覚ました。

「うゝ・・・うるさいよ」

「桜！無事かア！！」

「はぁ！？」

焦って駆け寄る銀時に訳が分からない桜。

「な、何言ってるのさ？」

「お前、ヅラに何もされなかったか！？」

「言ってる意味が分かんないんですけど」

いろいろ言ってくる銀時に、桂をボッコボコにする高杉と坂本を見て、大方把握した桜はしばらくの間3人に説明していた。

くしばらく後

「なんだ。そうだったのか」

「わしはてつきり桜が襲われてるんじゃないかなかと思って・・・」

「それ5歳に向かって言う言葉じゃないよね？」

その後、戦いへと参じたのだが、モチロンながら桂はメッコメッコにされて、参戦できなかった。

「・・・・・・・・長・・・・・・・・隊長!!」

「え!？」

「どーしたんですか?急にボーとして」

「気にしないで」

桜は笑いながら頭を振る。

「にしても・・・・・・・・特に変わったことは無いようね」

「そーですね。やっぱりこんな人が大勢いるところには居ないんじゃないんですか?」

「かもね。事件もなけりや皆楽しそうだし、無駄足だったかな」

桜が傘を背中^{うしろ}のほうに下ろす。

上から陽射しが入ってくる。

「・・・・・・・・?山崎、なんか臭わない?」

「え・・・・・・・・?あ、ホントだ。なんか焦げ臭いような・・・・・・・・」

2人はあたりを見渡した。

「火事だ——!!!!」

途端に、町民の一人が叫ぶ。

「隊長!」

「分かつてる！行くよ！」

「はい！」

桜は傘を閉じ、走り出した。
その後ろを山崎が走る。

「って隊長！速い！！」

モチロンながら桜の速さにはついていけないのであった。

「火事だー！！逃げろー！！」

現場はとても大きなお屋敷で、既に広範囲に火の手が迫っていた。

「着いた!!」

片手両足でブレーキをかける。

（結構でかい屋敷ね・・・このままだと隣接民家も焼けてしまう・・・）

パチパチと火の粉が飛び散る。

「どうしますか？このままじゃ隣まで焼けてしまいますよコレ」

「分かってる。だから打ち壊せ」

「え？それ、俺に言ってますか？」

「ええ」

「ちょー！一人じゃどう考えても無理でしょコレ——！！！」

「男なら四の五の言わずに行ってこい」

「ちよつとオオオオオオ！！！」

桜は近くの「家が焼けるー！」と泣き喚いている人に話しかける。

「あの、すみませんけどコレ、貴方の家ですか？」

「そーだよー！！！！っーか誰か助けてくれー！！中に子供が！！！」

「分かりました。助けてきます」

桜は傘を放り、髪留めを外し、代わりに丁度持っていた紙紐で留めた。そして、傍にあった火消し用の水を頭からかぶった。

「隊長！ムチャですって！！」

「ムチャしなきゃ助けられないって！！」

と、桜は火の海に突っ込んでいった。

中は黒い煙と火が蹂躪じゅうりゅうしていた。

「コホッコホッ」

壁伝いに歩き、煙に咽むせながらも取り残された人を探していく。

「コホッ、おい！誰か居ないのー！！コホッ・・・」

何度か呼びかけるが、全く反応が無い。

「おい！」

と、ふいと耳に子供の泣き声のようなものが聞こえた。

「誰か居るのー！！？」

「ここだよー！助けてー！」

横の部屋から声が聞こえてくる。

「そこに居るの!？」

「助けてー!!！」

桜は扉に手を触れるが、熱で変形し、開かなくなっている。

「あーもー!なんで屋敷にこんな鉄のドアがあんのよ!!！」

「鍵が付いてて丈夫だから!!！」

「黙れ」

桜は声のトーンを落として言った。

「しゃーない・・・ドアから離れて伏せて!!！」

ガツシャアーン!!

ドアを蹴破る。

「助けに来たよ。さ、逃げよ」

「うん!!」

桜に駆け寄ってきたのは双子の姉弟。

桜は2人に合わせて走っていく。

「・・・て、なんでこの屋敷二階建て？」

そう、この屋敷は二階建てのため、まずは一階に降りなければなら
ない。

「「おねーちゃん！上！！」」

姉弟が声を揃えて言う。

「はっ！！」

上から炎を纏った柱が落ちてくる。
桜は2人を抱えて前に飛んだ。

危機一髪

なんとかかわすことができた。

「大丈夫？」

「うん！」

頷いた姉弟に桜は無言で頷き返す。
そして姉弟を抱えたまま走る。

やっとこせで階段に着いた。

「なっ！？」

下から火の手が上がってきた。
炎に遮られ、先に進めない。

「うう・・・」

姉が泣きそうになる。

（迷ってなんかられない）

桜は決心して炎に飛び込んだ。
階段を飛び降りる。

飛び降りた直後、階段はボロボロと焼け落ちていった。

「よし！もう少し・・・」

桜が1歩踏み出したと同時に、天井が焼け落ちた。
寸前で足を止めていなかったら今頃下敷きになっていた。

「くう！」

「おねーちゃん・・・」

3人の行く手を阻むのは炎の壁。
前にも後ろにも動けなくなった。

（閉じ込められた・・・）
「う・・・うわぁ～～～ん」

とうとう姉が泣き出してしまった。

「泣かないで。大丈夫、絶対私が助けてあげるから・・・」

2人をまとめて抱きしめる。

（そうだ・・・助けるんだ・・・）

桜は周りの状況をよく見る。

何をどうしたらいいか分からなくなった時はまず落ち着いて周囲の様子を確認する。
基本だ。

「天井……はりが残ってる……？」

焼けず、ただ黒くなっただけはりを見つめる。

「そうだ！アレなら炎を回避できる！！行くよ！？^{つか}まって！」

桜が2人を抱きかかえ、2人は桜に抱きつく。

「てりゃあ！」

「わッ！」

桜ははりの上まで飛び上がる。

はりは杉の木で出来ており、焼けなかったのだ。

「このまま外にいくからね」

トンッ

はりを蹴り、羽織を翻^{ひるがえ}しながら見事、地面に着地する。

「隊長！！」

「山崎！この姉弟の手当して！^{かす}掠り傷程度で済んでるけど念のため！」

「あ、はい！分かりました！」

山崎は2人の手を引き、安全な場所へ連れて行く。

「！！杏^{あん}！蓮^{れん}！」

「父様！」

「良かった・・・杏、蓮」

「あのおねーちゃんが助けてくれたんだよ！」

姉弟——杏と蓮は桜を指差す。

「そうかそうか・・・」

杏と蓮を撫でる。

「お礼を言わなければな・・・」

この後直ぐに火消しが訪れて、火を消したという。

く宿く

すっかり遅くなり、女将達は本気で心配していたようだ。

「もー。本当に心配したんですからね！」

「「す・・・スミマセンデシタ」」

2人は肩をすぼめて正座をしていた。

「これからは気をつけてください。最近よくない噂も立っていますから」

「噂・・・？ちょっと聞かせてもらえませんか？」

「ええ。最近ね、朱鳥とかいう奴等がこの神戸に根を張ってるって噂なの。今日火事があった家も朱鳥と何か問題があったみたいでね、証拠隠滅のために奴等が火をつけたっていう話もあるくらいよ」

「朱鳥ですって！」

「シー！声が大きい！とにかく、関わらないほうが身のためですよ」

女将は部屋を出て行った。

「録音した？」

「バッチリです」

「ふふ、ここに根を張ってるのは間違いないね・・・明日は昨日火事に会った家の人に聞いてみましょう」

「正気ですか！？元々関係があったかもしれないですよ！？」

「だから行くのよ。虎穴に入らずどうやって虎子を得るのよ」

「あーもー分かりましたよ！でも俺はどうなっても知りませんからね！？」

「はいはい」

適当に受け流すと、隣の部屋へと消えていった。

（本当に、大丈夫かなあ・・・）

（絶対に情報を得てやる・・・）

2人の心は180度別の方向を向いたまんま、次の日を迎えるのであった。

今日卒業式あったけどさー校長の話長くない!!? (後書き)

卒業式長かったなー。

なんで片付けはいつも5・6組なの? 信じらんない! 不憫!

桜「クラス順で行ったら5・6組があたるんでしょ」

おーぼーだー!!

桜 (どこが・・・?)

なんかアレ、アレが食べたい（前書き）

桜「アレって何!？」

いろいろー

桜「子供かッ!！」

なんかアレ、アレが食べたい

と言うわけで朝。

さっそく2人はその親子が居るという宿屋へ向かった。

「ここね」

宿屋に足を踏み入れた途端、その異様なほどに豪華な内装に驚いた。

「いらっしやいませ」

「あの・・・ここに杏と蓮っていう双子の姉弟が泊まってませんか？」

「ああ、伊田様ですね？いらっしやいますけど、どうか致しましたか？」

「会いたいのですが・・・大丈夫ですか？」

「確かめてきます」

どうやら伊田という苗字らしい。

しばらくすると、また戻ってきた。

「良いそうです」

「ありがとうございます」

女性に案内され、その部屋へと入る。

「失礼致します」

「おお、やはりあなた方でしたか！」

「「おねーちゃん!!」」

杏と蓮が真っ先に駆けてくる。

「どうしたのー?」

「ちょっとお父さんに用があつてね」

「私めにですか?」

「はい、少々お時間宜しいでしょうか?」

「構いませんよ。なんせ私のかわいい子供を救ってくれた恩人だ」
「どうも」

杏と蓮を山崎に任せ、桜と父だけで向き合つて話していた。

「で、何の用ですか?」

「単刀直入に言います。朱鳥についてちょっと教えてもらえませんか?」

父は驚きで目を見開いた。

「なぜ・・・朱鳥の事を・・・?」

「ふふふ・・・こーゆー者です」

手帳をそつと見せた。

「・・・分りました。洗い浚いあらひお話しいたしましょう」

「恩に着ます」

「まずは・・・何について知りたいですか?」

「貴方の朱鳥での立場から」

「私は朱鳥の中でも中級。主な仕事は裏での作業。しかしまあ、杏と蓮が産まれてからはそんな事ができなくなつてしまいました。だ

からこの世界から足を洗いました。

しかし奴等はしつこい。何年経ってもまだこの世界からは目を付けられています」

「では、その裏での作業を教えてください」

「まずは幕府の目を誤魔化す事、薬の中継地点、とにかくまあ表向きは良い事を、裏では至極悪い事を」

「成る程……では、朱鳥の首領の名前は……？」

「玄虎 青楡です……」

「……聞いたことが無い名前ね……」

「そうですね。私達でさえ知る者は少ないのですから」

桜はスウと目を細める。

「成る程ね……奴が黒幕だとしたら、奴の目的は一体……？」

「コレは本当の裏話ですぞ。玄虎の目的はある刀を見つけること」

「刀……？」

父は声を落として囁いた。

「はい、名を『鬼月』といい、何でも妖刀だそうです」

「嘘……でしょ……!？」

「いえ、本当です。……どうか致しましたか？」

「何でもないわ……気にしないで下さい。とにかく、危険な事の上ないのに、ありがとうございました」

桜は手を前につき、深く頭を下げた。

「いえいえ、私はもう古い先長くない」

「まだ若そうですね……」

「私はいずれ、朱鳥に命を狙われる——もう分かっているのです。ですから、貴女方にお願ひがあります」

「なんですか？」

「杏と蓮を連れてどこか遠くへお願ひします」

「え……！？」

あまりの唐突さに思わず身を乗り出す。

「あの姉弟を連れて行く……！？」

「はい、江戸に行けば私の親戚がおります。私と同じ伊田と言う苗字です。伊田 哲史^{てつし}からだと言えは分ります。どうか……どうか……杏と蓮だけはお助けを……」

「貴方はどうするの……！？」

「時間を稼ぎます。あの2人が逃げるまで。それに大丈夫。親戚の家は私の姉の家ですから」

「でも……でもッ……！」

諦めきれない桜に優しく手を載せる。

「貴女もいずれ親となるなら分かります。親というのはどうしても自分の子供を護りたいのです」

桜は深く頭^{いづく}を垂れたまま、小さく頷いた。

「——私には親がいません。親がどういう者なのか知りません。でも……」

スッと顔を上げる。

「貴方も生きて江戸へと渡ってください。親の居ない子供がどれだ

け辛い。私は知ってます。だから、江戸へ」
「・・・・・・・・ああ」

彼は頷く。

桜は杏と蓮を連れて、自分の泊まっている宿屋へと向かった。

「ねーどうして父様はこないのー？」

山崎の袴はかまを引いて聞くは蓮。

「お父さんはね、ちょっと用事ができたの。今から俺達は江戸に帰るんだよ。いや、君達は行くかな」

「ヤダー！杏は父様と居るのー！」

「ホラ・・・・山崎を困らせないの。ちょっと用事が済んだら直ぐに来るからね・・・・」

桜は杏をなだめるように言う。

宿屋へ着くや否や、荷物をまとめると、女将にあいさつをしてすぐさま出て行った。

（親のいない辛さは私が良く知ってる・・・・だから、絶対来て下さい・・・・・・・・）

電車に乗ると、初めて見るものに興奮する姉弟。

「隊長、どうするんですか・・・・助けないんですか・・・・」
「できる訳無いじゃない・・・・あいつ等の狙いは私。単身乗り込んでも真選組に迷惑がかかる・・・・それに・・・・」

杏と蓮の頭を撫でる。

「あの父親の宝を無事に江戸へと送り届けなきゃ……………。これが今の私達の仕事よ」

「……………はい……………」

電車が走り出し、グングン神戸が遠くなる。

（ホントは助けに行きたいよ……………バカザキ……………）

何も知らない杏と蓮を見ると心が痛む。

（私のせいね……………この双子^{ふたり}から親を奪ったのは私ね……………）

く江戸く

「ひとまず杏と蓮を真選組へ連れて行きましょう」

「ですね。俺達はまず先に報告しなくちゃいけませんから」

2人は杏と蓮の手を引きながら屯所へ向かう。

「近藤さん、土方さん、只今帰りました」

「おお？意外に早かったな……その餓鬼は……？」

「ちよつと今からの報告に少し関係があります」

「分かった。すぐに聞こう」

杏と蓮を隊士に預け、部屋へ入る桜・山崎・近藤・土方。

「で、どんな情報が入った？」

「はい。俺達、偶然にも元々朱鳥に関わりのあった人に会えまして……それがあの2人の親ですよ」

「フーン。で、どんな情報だ？」

「朱鳥のトップの名前は玄虎青榆、目的は私の妖刀が狙いだそうです」

「「何イ！？」「」

近藤と土方は思わず大声を出す。

「うるさいです。で、あの姉弟の親はあの2人を護りたくて私達に預けたんです。今から連れて行きますよ」

「そうだったのか・・・」

立ち上がり、障子に手をかける。

「——あの、近藤さん」

「なんだ？」

桜は動きを止め、顔だけ振り返る。

「親って・・・そんなに子供を護りたいモノ何ですか？」

「当たり前だろう？何が何でも護りたいものさ、きつと」

「・・・私は親と言つのは良く分かりません。私には親は居ないですから」

悲しそうに微笑むと、部屋の外へ出た。

「杏、蓮、おいで」

「「はぁーい！！」「」

桜の後ろをちょこまかついていく。

(私は親に対して憎悪しか無いもの……。それに比べてこの
子らは幸せね……。愛されて……。)

2人を預けてから再び屯所へ戻る。

「もう疲れました……。」「

「ご苦労さん。今日はもうゆっくり休んでくれ」

「はい、すみません」

部屋へ戻り、鬼月を手取る。

「誰だ．．．私を狙う奴は．．．」

く朱鳥く

「奴は殺したか？」

「はい。裏切り者には死を」

杏と蓮の父親は無残な肉塊になっていた。

「で、どうだ？鬼月は見つかったか？」

「確かではありませんが．．．江戸にそれを持つ者が居るそうで．．．」

「ほお、江戸か．．．」

「はい」

「よし、江戸へ出陣だ。準備をしろ」

「是」

男はサツとその場を去っていく。

「やっと見つけたぜ．．．ククク．．．あの餓鬼は元気にしてるか
ア．．．．．？」

静かな部屋に不気味な笑いだけが響いていた。

相手の目的が何だろうと・・・
私は私の武士道に従う。

ただ、それだけ

なんかアレ、アレが食べたい（後書き）

桜「今回は短いわね」

まあね、そろそろ大事になるから。

桜「つか仕込み刀使わなかったわね」

アレもまた出てくるって。多分

桜「多分かいいッ!!」

戦いに無用なものは持っていくな（前書き）

桜「なんかサブタイトルがまじめ・・・！？だれかア！！救急車！！」

まともに書いたらいけねーのか！！！！

戦いに無用なものは持っていくな

（狙いは私……一体誰なのよ……）

次の日、桜はいつも通り外回りに出る。

（玄虎青榆って言われても本気で分かんないしな……）

なんて事を考えていると、喫茶店から聞きなれた声が聞こえた。

「だアからア！！なんで俺達がお前なんぞに付き合わなきゃいけないんだ！！」

「別に良いであろう。ちよつとエリザベスを探すだけだ」

「どーせまた喧嘩したんだろ！！」

「イヤ、今回はもうマジで」

「もう付き合いきれないアルヨ」

「リーダー、そこを何とか」

「嫌アル」

「で、桂さん、思い当たる節はあるんですか？」

「だから喧嘩はしておらぬと言っているであろう」

万事屋メンバーと桂が何か言い合いをしている。

（エリザベス……？あれ？さっき見たような……てゆうかあそこに居るんですけどぉ！！）

桜の目線の先にはチラシを配っているエリザベスが居た。駆け寄り、話しかける。

「エリザベス、アンタ何やってんの？コタローいいの？ほっといて
エリザベスは看板を出す。」

「桂さんに頼まれてバイトしてるんだけど」
「・・・・・・・・・・」

桜はボードを見つめた。

（アイツ絶対に忘れてる・・・・・・・・！）

「桂さんがどうかした？」

「何でもないわ。じゃ、がんばって」

桜は再び喫茶店へと向かう。

中に入るとさっそく4人に近づく。

「コタロー」

「おお、桜ではないか。どうかしたのか？」

「エリザベス、外に居るわよ」

「本当かア！？」

ガタンと立ち上がる。

「アレー？ちよつと桜ア？なんでエリザベスいないって知ってんの？」

「何言ってるのよ銀時。アンタ達の声、外まで丸聞こえだったわ」

溜息をつきながら言う。

「それにコタロー、エリザベスはアンタに頼まれてバイトしてるって言ってたわよ」

そついった途端、万事屋メンバーが無表情になった。

「あー、そういえばそんな事言っただけ」

桂が立ち上がろうとすると、銀時がその肩を抑えた。

「おいゾーラー……お前ふざけんなよオオオオオオオオ！！！！！！！！」

「ホントアルうううううう！！！！私達の貴重な時間をどうしてくれるネ！！！！」

「銀さん、神楽ちゃん、こついつのはどうでしょうか？今から僕等ここで好きなだけ好きなものを食べますけど御代は全部桂さんが支払うってことで」

「異論はねエ」

「賛成アル」

桜は巻き込まれない為、さっさと店から出ていた。

(……言わないほうが良かったかしら………?)

数メートル進んでから一旦振り向き手を合わせる。

「ごめんコタロー……」

く真選組 屯所く

「護衛任務……ですかイ？」

「ああ。桜が戻ってき次第行くぞ」

「へーい。で、護衛するのはどんな奴なんですかイ？」

「天人だ。牛みてーな奴だったと思う」

「今度は牛井ですかイ」

「オイイイイイイ！！牛井って何だよ！！何で米が入ったんだよ！？」

牛井……じゃなくて牛を守るといふ任務のようだ。

あ、間違えた。牛じゃなくて牛のような天人だ。

「なんで米が入ったかって？ただ単に俺が食いたいただけでさア」

「逆にテメーが食われる」

だんだんヒートアップしていく2人の口喧嘩。

「いい加減にしろよテメエ……任務舐めてんのか？あゝ？」

「いつも言ってるじゃないですか。俺が舐めてんのは土方さんだけでさア」

「今すぐ切腹しろ!!」

「俺が切腹する前にアンタを斬ってやりませあ!!」

「上等だコラ!切腹は取り止めだ!!今すぐ俺がテメエの首を切り落としてやる!!」

「いい加減にして下さい!!」

どこから取り出したか、バットで2人の頭を殴る。

「いつて……!!何しやがんだテメエは!!?」

「いい加減にして下さい。どうやったら喧嘩が殺し合いになるんですか……」

桜は頭を押さえて言う。

「つーか何時戻ってきたんでい?」

「ついさっきです。丁度土方さんが任務舐めてんのかって言ったあたりです」

「聞いてたんかいッ!!」

土方がそついった後、スミマッセーンと言いながらバットを後ろに放った。

庭の木か塀にでも当たると思ったが、それは意外な人の顔に当たった。

「おーう桜、戻ったんなら任務に行くゾぶエ!!?」

近藤である。

彼の顔にメリ込むように当たり、まるでスローモーションのように

ゆっくり倒れていった。

「「「あっ・・・・・・・・」」」

カランカランとバットは転がり、しばらくの間無言の時間が続いた。

（あはっ・・・・・・・・どうしよう・・・・・・・・）

「オ、オイ！近藤さん！？」

「しっかりしてください」

土方と沖田が駆け寄る。

少し遅れて桜も近寄った。

「こ、近藤さん！しっかりして下さい！！！」

軽く揺ると、少し唸りながら起き上がった。

「イタタ・・・・・・・・ちよつと桜ア！？何やってんの！！？」

「すみません！ちよつと後ろに投げたのが偶然近藤さんに・・・・・・・・」

「「つーかバット使って何してたの！！？」」

「2人をシバいてました」

「シバくって・・・・・・・・」

若干引き気味の近藤はさて置き、真選組総出で任務へと出かけた。

桜は車の中で土方から説明を受けていた。

「牛みたいな天人ですか……………」

「ああ。名前が確か……………何つつたかな……………」

土方は考える仕草をする。

「爾苦にくだったか？」

「変な名前……………」

（爾苦……………おを付けたら牡アイツ爾苦と同じね……………てことはもしかして……………）

「あの、もしかして牛樺倶星の者ですか？」

「良く分かったな。確かに、牛樺倶星の奴だ。つーか何で知ってた？」

「いえ……………ちょっとばかし……………ね……………」

急に桜の眼差しが変わる。

こみ上げてくる怒りを抑えきれないのだ。

（アイツ等を守るですって・・・！？最悪ね・・・）

助手席に乗っている桜の顔は、後ろからは見えない。
運転している隊士も気づいていないようだ。

しばらくしていると、急に無線が入ってきた。

『トシ！桜！聞こえるか？』

近藤の声だ。

桜は無線機を取ると、口元に持っていく。

「聞こえてます。どうかしましたか？」

『またもやめんどくさい事に巻き込まれそうだ。目の前に大きな屋敷が見えるだろう？』

顔を上げ、フロントガラス越しに外を見ると、確かに屋敷が見えた。

「はい。それがどうかしましたか？」

『周りの建物を良く見ろ！既に攘夷志士が狙っている！』

窓から見れば、確かにあちこちに不自然な光の反射が見られた。
銃口を向けている証拠だ。

それを見た土方は桜の手から無線機を取る。

「オイオイ近藤さん！こりゃ俺達が着く前に殺^やられるんじゃないのか？」

『可能性はある。だから少しスピードを上げて急いで屋敷に向かつて欲しい。今5〜10番隊までが到着したと連絡を受けている。お前たちも急いでくれ！』

「分かった。おい島田ア！スピード上げろ！」

「はい！」

アクセルを先程より深く踏み、一気にスピードを上げる。

「あと3分もしない内に着く。それまで全員待機させといてくれ」
『分かった』

ガチャリと無線を切った。

土方はドサリと後部座席に腰掛ける。

「島田、遅れたらお前肅清な」

「ハYYYYYY！！！！」

桜はそのやり取りを（悲惨・・・）と思いつつ見ていた。

「間に合えよ・・・」

何とか、襲撃を受ける事も無く屋敷に到着した。
肝心の依頼主の姿は無い。

（私、アイツ等嫌い・・・）

そう目で訴える。

それに近藤がいち早く気づく。やっぱりよく見てるなア・・・

「どうかしたか？ノリ気じゃ無いみたいだが……」

「私、アイツ等嫌いです」

「どうして？」

「何が何でも。あの天人に怪我させられましたから。肋骨3本」

「肋骨！？一体何したんだ！！？」

「人質救助です。……アイツ等の突進に気をつけてください。

一直線だけど当たると肋骨ボツキリ ですから」

「……………（汗）」

小声で話していると、中から牛のような天人が2人出てきた。

「遅かったな真選組よ。爾苦様は既に待ちくたびれていたぞ」

中の一人が堂々とした態度を取る。

（うん、もう斬りたい）

昔の怒りがどんどん膨れ上がる。

「まずは中に入ってくれ。中で爾苦様がお待ちである」

もう一人が踵を返す。

一息置いて最初の一人が、後に近藤↓土方↓沖田↓桜↓各隊長の順で入る。

その他の隊士は外で待機、との命だった。

館の中は薄暗く、ポツリポツリとロウソクが立っている。

単純に不気味としか思えなかった。

「爾苦様、真選組の者が来ました」
「入れ」

重々しく、威厳に溢れた声で返事が返ってきた。

扉をゆっくりと開く先程の2人。

「失礼する。真選組局長、近藤勲です」

こちらにも、いつもよりは威厳を感じさせる声で言う。

「待っていたぞ真選組。俺が牛樺倶星大使、爾苦だ。最近良からぬ輩に狙われていてな、困っていたところだったんだ」

「攘夷志士共は既にこの屋敷を囲んでおります。絶対に外に出ないよう、心がけてください」

「承知した。だが、女が居るとは滑稽こっけいだな。戦場に女は不要だ」

「お言葉ですが」と、桜近藤より数歩前に出る。

「女だと舐めてもらっては困る。戦場に男女など関係無い。力がある者が上に行く。ただそれだけです」

「そうか・・・それは悪い事をしたなア・・・」

全く悪びれていないのはこの場に居る誰もが分かった。

「なんせウチの親父が女に殺されてるもんでなあ・・・クククク・・・」

ジッと桜を見る。

その視線がどこか気持ち悪く、思わず後退^{あとずな}りする。

「ついでに、親の名前は何てい言うんですかイ？」

沖田が興味ありそうに聞く。

「牡爾苦という。ある日気まぐれで村にいったんだ。そしたら帰ってきたのは死体だったよ」

桜は確信した。

間違いない、コイツが私を怒らせた野郎の息子だという事。

「とにかく、仕事に移ろうぜ？ここですっと話しててもキリがない」

「そうだな。皆、行くぞ」

『はい！』

近藤と土方が先頭に出て行く。

桜は一番最後だった。

「そう言えば・・・」

「・・・なんでしょう？」

クルリと振り返る。

「餓鬼の特長とお前に似てるところがあるなア・・・」

「人違いじゃないの？」

完全に敵意むき出しの目で見た後、部屋を出た。

「いいか？あの餓鬼を殺せ。アイツが親父の仇だってもう分かっている。影からコッソリな・・・」

「ああ。殺そう。・・・フフフ・・・俺もアイツには借りがあるからな・・・」

椅子の後ろで誰かが喋る。

「あの餓鬼を殺して刀を返してもらっさ・・・ハハハハハハハハハ！！！！」

桜は二番隊の隊員を連れて、出入り口付近を見回る。

「隊長……大丈夫ですか？」

隊士の一人が声をかける。

「大丈夫……ちょっとコイツ等の為に働くのが嫌なだけだから……」

優しく笑いかけると、隊士も軽く礼をして持ち場に戻った。

「フウ………ッ!!」

バツと今居た場所から離れる。

「誰だ!!」

その声に隊士達も振り返る。

だが、誰も出てこない。

（地面から殺気が……!!）

恐る恐る近づき、先程自分が居た場所に刀を刺す。
ズブリと深く突き刺さる。

刀を引き抜き、穴が開いた場所を持ち上げる。

すると、板のようなものがあり、下に大きな穴がある。

「何だコレは……!!？」

穴の一部は不自然にも土の色が一箇所違う。

（逃げられた・・・）

「誰か、この事を近藤さんたちに伝えに行つて。残った者は2組に別れて。A班は引き続き護衛に、B班は他にこのような物が無いか探して！」

『はい!!』

隊士達が散らばっていく。

（誰だったの・・・？）

不信任を覚え、なるべくその場を動かないようにした。

「おい、そつちはどうでさア？」

「あ、沖田さん」

サボりに来たのか、沖田がやってきた。

「それが・・・変な穴が・・・しかもそこから殺気がしたし、あ
の一部だけ完全に土の色が違うんです」

「・・・確かに不自然だな。近藤さん達には？」

「先程隊士の一名を行かせました。独断ですが、今護衛班と探索班
に分かれてもらってます。こんなものがあつたんじゃコチラも動き
づらいですからね」

桜は穴を覗き込む。

明らかに誰かが居た痕跡が残されている。

「・・・そうか、まあ、気をつけなせエ」
「はい」

沖田は歩きながらそう言っ去った。

「いい加減出てきたらどう？ここには私しか居ないわ」

すると、穴から声が聞こえた。

「ほう・・・気づいていたか・・・」

「馬鹿にしないで。それだけ殺気を出していれば誰でも気づくわ」

すると、あの不自然な色をした土の場所だけがボロボロと崩れ落ちる。

「アンタ、何者よ」

「クククク・・・俺か？俺は玄虎青榆・・・」

「何！？」

まさか、自分を狙った奴が朱鳥のリーダーだとは夢にも思わなかった。

「顔くらい見せたらどうなの？」

確かに、青榆は黒い布を顔に巻いている。

「アンタには聞きたい事があるの」

「なんだ？」

「銀時達を襲ったとき・・・アレ、アンタの手下でしょう？」

「それがどうした？」

「あの女性、操られてるように思ったんだけど？」

「ああ・・・あれは特殊な薬さ・・・全く、お前らのせいで薬の効果が切れる直前だったぞ・・・」

「相手を操る薬って事かしら？」

「ほう・・・察しがいいなア・・・。にしてもあの時の餓鬼がおまで立派になるとは・・・」

桜は目を見開く。

コイツは私を知っている。

「どういう意味よ！！！！」

「そのまんまさ。後ろを見てみる」

バツと振り向くと、牛樺倶星の者達が桜を取り囲む。

「なっ！？」

「あの時の怨み、今晴らさせてもらうぞ！！」

「親父の仇だ・・・」

「血祭りにしろオ！！！！」

その中には爾苦の姿もある。

「舐めんなよ！！」

素早く刀を引き抜くと、抜き様に一人斬る。

「アンタ等……あの時居た奴等か!!」

「その通りよ……やっとお前に復讐できる!!」

ドンドン増え、斬りかかって来る敵。

持ち前の身軽さを利用し、テンポよく切り裂いていく。

「キリが無い……!」

冷や汗を滲^{にじ}ませながら塀の上に飛び乗る。

「おおと……朱烏^{おれたち}を忘れるなよ……?」

桜に向かって、銃が発砲される。

「くッ……アイツ等は攘夷志士じゃなけりやアンタの手下ってコトね!!」

「その通りさ……さあ、逃げ切れるかな?」

「逃げる気は毛ほども無いわ」

刀を構える。

「全員、返り討ちにしてやんよ!」

塀が壊れるほど強く蹴る。

流れる水の如^{ごと}く、吹き乱れる風の如く動く。

返り血を浴びる暇も無く、次々と倒す。

だが、一向に敵の数は減らない。

「いい加減……失せろ!!」

叫びながら、斬り倒す。

「行け！何をしておる！！」

爾苦が命令する。

（あの野郎さえ居なければこいつらは烏合の衆と化す……なら狙うはアイツ！！）

相手の顔を踏み台に、近づく。

時折、斬撃や棍棒などが襲ってくるが、難なくかわせた。

「死ね！」

「させん！！」

2人が守りの体制に入るが、お構い無しである。

「ハア！！」

「ガア！！」

刀をモロに受け、倒れる。

どうやら、爾苦には武の才が無いようだ。

「爾苦様！！」

だが、すでに心肺停止状態である。

「次は誰……」

と、同時に穴から残像が見えた。

「ははははは！！相変わらず強いな貴様は……」

「アンタが私の何を知っている！！？何故私の刀を狙う！！答える！！！」

「全て知っているさ……なんせ俺から鬼月を奪ったのは貴様だからなア！！！」

黒い布をスルスルと外す。

「その……顔は……！！！」

「ほう……覚えていたか」

「忘れる訳が無い……アンタは……私の……最初の獲物……」

桜は近づいてくる奴に対し、刀を構える。

「そうさ……俺はあの時言っただろう？いつか必ずその刀を奪い返してやるよつてな」

「言っただでしょ？絶対に……」

グツと踏み込む。

「渡さん！！！」

青榆の腕めがけて刀を振る。が、何かに防がれる。

それは剣でも盾でもなく——腕だ。

「なア！！？」

「お前に負けてから俺はいろいろな手術を繰り返してきた・・・数多の天人の遺伝子を俺に組み込み、俺は驚異的な体を得た！！全ては・・・お前を倒すためだけになア・・・？」

桜は、殴り飛ばされた。

屋敷にぶつかり、破壊してようやく止まった。

血が

口から溢れる。

「あんにやるオ・・・」

瓦礫を踏み走る。

そして縁側あたりで踏み切り、上空からの攻撃を仕掛ける。

「やあああああ！！」

「効かぬ！！」

もし、今の状況をたとえるのなら、滅茶苦茶

そんな戦いだった。

「俺達も加勢に行くぞ！」

と、土方が言うが、桜は「来るな！！」とだけ言った。

その言葉に思わず足を止める。

「ほう・・・仲間想いだな・・・」

「黙れ外道が」

蹴りもまるで効かない。
完全に桜が押されている。

だが、全く助けを乞うこと無く、ただただ剣を振るう。

「なんだあ？鬼の力は使わないのか？」

「知ってるくせに白々しい」

「だが・・・俺はお前の鬼が見たいのだ・・・まあ、これならやる気になるよな？」

青榆の背後に天人に捕らえられた女性。

桜の目つきが変わる。

「き・・・貴様アアアアアア！！！！！！」

先程とはまるで違う、殺気を纏った刀を振り下ろす。
少しばかり傷が入る。

「ハアアアアア！！！！」

振り下ろした刀は地面をも割く。

「な・・・！？」

やはり真選組の者達は驚きを隠せない。

「怒りは刃を鈍らせる・・・まんざら嘘ではないようだな」
「黙れエエエ！！」

青榆はそんな桜の攻撃を軽々とかわし、後頭部を掴む。
そして、そのまま地面に容赦なく打ち付けた。

「桜!!」

土方の声が、どこか遠くで聞こえる。

「まだ……だ……」

「やはり……しつこい餓鬼だな。まあ、鬼月は貰うぜ?」

「渡さん!!」

桜は手をつき、体を少し跳ね上げ、刀を近藤達へ向けて投げる。
それは見事に、近藤の足元に刺さった。

「うお!!」

近藤が驚きに短く声を漏らすと同時に、桜は再び地面に打ちつけられる。

もう、意識が朦朧としてきた。

首をつかまれ、持ち上げられる。

「ったく、とつとと渡せばよいものを……この女がどうなってもいいのか?」

「忍葉に……手を出すな……」

そう、捕らわれていたのは忍葉。

左腕の義手が痛々しい。

「ごめんね……桜……ごめんね……私が弱いから……」

また桜に迷惑かけちゃって……」

忍葉はかすかな声で、涙を流しながら謝罪する。

「忍葉……………」

―違う。

忍葉が弱いんじゃない。

私が…………私が弱いから。

皆に迷惑かけるんだ…………。

私が妙な意地を張ってるから…………私が…………私のせいだ…………

…………!!

何がみんなを護るだ…………

私が皆を不幸にしてる

だから、私は…………

皆を護る為に…………鬼になる…………―

戦いに無用なものは持っていくな（後書き）

なんかダラダラと長くなりました。

次回は更にバトルが続きます。

ヤバイ！疲れるー！！

桜「もう・・・嫌・・・」

（！！ヤバイ！！本編がそのまま続いてる！！）
はい！今日はここまで！！！！

やっと技術の授業で作った本棚が完成したのでそこに銀魂を入れてみたら、全業

桜「もう一つのサブタイトルは『手ヲ出スナ』です」

え？意味不明？ごめんなさい。

桜「それから、この小説をお気に入り登録して下さっている7名の方々、ありがとうございます。これからもよろしくおねがいします」

では、本文どうぞ

やっと技術の授業で作った本棚が完成したのでそこに銀魂を入れてみたら、全業

首をつかまれ、上手く呼吸が出来ない。

もう体に力が入らなくなってきた。

足が、ブランと宙に爛^{ただ}れる。

「まだかア？早く鬼になれよ……ん？無情の鬼神よお！！」

力を加え、更に苦しさが増す。

「オイ……今アイツ……何て言った……？」

土方は、思わず煙草を口から落とす。

「なんだ？知らなかったのか？」

桜を掴んだまま高くかかげる。

「ヤ……メロ……お……」

途切れ途切れ、かすれた声で必死に訴える。

「お前等も攘夷戦争は知ってるだろ？」

「それがどうした！！」

「ククク……その中でも最も強かった5人の侍の話は知っているか？」

「……ああ。狂乱の貴公子 桂小太郎・過激派攘夷志士 高杉晋助・坂本辰馬・白夜叉・無情の鬼神。それがどうした」

「その中の一人が・・・今ここに居るんだよ・・・」

「ヤメ口お！！！！！」

青榆は桜を壁に思いつきりぶつけた。

カクンと、頭が力なく揺れる。

「こいつが・・・『無情の鬼神』だ！！！！！」

全員が言葉を失う。

忍葉は苦しそうな顔をして俯く。

「何・・・だとオ！？」

「こいつは攘夷戦争の中、無情に天人を切り裂く幼い鬼と味方からも敵からも恐れられた存在だ。こいつが何時鬼と化すか分からない。そんな危険な奴をお前たちはかくまっていたんだよ！！！！！」

桜はもう、放心状態だった。

（ああ、もうダメだ。私の素性がバレてしまった・・・ならもう鬼になってやる・・・このまま皆死んでいくよりマシね・・・）

桜は最後の力を振り絞り、青榆の手首を持つ。

「なっ！？まだ動く力が残っていたか・・・！？」

桜はニヤリと、どこか高杉を思わせる笑みを浮かべる。

「無情の鬼神・・・？それがどうした！そうよ、私が無情の・・・鬼神だ！！！」

青榆の胸に足を乗せ、そのまま蹴り飛ばす。
ミシリと、奇妙な音がした。

「うぐう！！！！」

思わず桜から手を離し、自らの胸元を押さえる。

桜は着地するや否や、近藤達が居る場所まで飛ぶ。
刀を引き抜くと、再び飛び上がり上空で一回転すると、忍葉を捕らえている天人を斬り捨てた。

「逃げて」

「うん・・・！」

忍葉は、近藤達のほうに逃げる。

一人の隊士が忍葉の安全を確保し、後ろに下がる。
それを見届けた桜は、フツと微笑むと、青榆に向き直る。

「立ちなさい。こんなもんじゃ済まされないわ」

「望むところだ」

桜はゆっくりと目を閉じる。

いつの間にか微笑んでいた唇は、今や何の感情も示さない。

「アンタを絶対に・・・許さない」

スウと開いた目には、漆黒の月が浮かんでいる。

「やっと鬼神化したか・・・待っていたぞ!!」

「ふん・・・貴様に^{など}等待たれとうないわ」

丸つきり別人だ・とそこに居る誰もが思った。

踏み込んだ後の2人の姿は見えなかった。

鋼鉄のような腕に、少しばかり刃が通る。

「死ね」

桜は冷徹に言葉を発する。

足と足が交差する。

2人共足が不自然に曲がっている。

どれほどの威力なのかお分かりいただけるだろうか・・・？

2人共、自らの足を・骨を動かし、正常な位置に直す。

桜は鬼神化しているおかげで既に直っている。

青楡も桜ほどではないが治ってきている。

「辻斬り」

溜めも無しに、技を繰り出す。

後から吹く風が、青楡の体を襲う。傷は普通に切るよりは深い。

「ふふふ・・・ハハハハハ!! いいぞ!! いい!! これが俺の求めていた戦いだ!!!」

「イカれている・・・何がおもしろいのだ」

「全てさ！ますますその鬼月が欲しくなったよ！！」

「勝手にぼざいているがよい」

いよいよ、青楡が刀を抜いた。

「いくぜえ？」

刃が交わり、火花が散る。

その素早い攻撃を誰も見ることが出来ない。

一撃が桜の腕に当たる。

攻撃を受け、間合いを取った桜は、腕に手を触れる。
血は大量に出ている。だが、すぐに傷は癒えていく。

「何だ・・・！？あの回復力は・・・！！！？」

「アレはホントに・・・桜ですかイ？俺にはもう鬼以外の何にも
見えませんぜイ」

沖田の言うとおり。

これはもはや戦いというより獣同士の争いにしか見えなかった。

誰もが恐怖する中、ただ一人だけ恐怖しない者がいた。
忍葉だ。

「桜・・・勝って・・・」

手を組み、祈るように目を瞑る。

「そっいえば・・・アンタ、桜とどういう関係なんだ・・・」

「私は……桜の姉代わりです……捨てられたあの子を拾ったのも……私です……」

「そうか……そりゃ、あいつも護りたいよな……」

もう屋敷は原型を留めておらず、今や瓦礫の山である。

「そろそろ、終わりにしようぜ？鬼神よ……」

「ほう、奇遇だな。私も今そう思っていた所だ」

桜はしっかりと構える。

そして……今度は溜めに入った。

青榆は刀を真つ直ぐに構える。

「オラァ!!」

「ハ！」

ドゴオオオオオオオン

2人が接触する前に、桜の刃を止める人物が居た。

「とうとう姿を現しましたか……無情の鬼神さん」

「信濃君!!?」

近藤の目が見開かれる。

「貴様が朱烏の者だとうの昔に知っていた」

「そうですか……青榆様、今日はこの辺にして下さい。高杉様がお見えになってます」

「そうか？あいつは気が短いからなァ……ハハハハハ」

桜はグッと唇を噛む。

「テメエ等に・・・晋助の何が分かるんだ!!!」

目は、いつの間にかいつもの目に戻っていた。

「分かるさ・・・アイツとつるんで居ればなァ」

そう言うなり、青榆は信濃をつれ、去っていかうとした。

「ま・・・!!」

桜はバタリとその場に倒れる。

「ムチャをするなよ・・・お前の体はボロボロだ・・・ハハハハハハハハハ!!!」

青榆はあざ笑う。

「次こそ奪ってやる・・・覚悟しているがよい」

と、言い残し、車に乗って逃げた。

車のスピードが速すぎて、追いつく事は不可能。

「つくしょう・・・体が・・・動かない・・・ッ!!」

鬼神化は、体の限界をとうに超えてしまう恐ろしい力だ。

長い間使用すれば、だんだん体が耐え切れなくなってくる。

なので、鬼神化を解いた直後はこうやって倒れる事もしばあった

ようだ。

「桜！」

忍葉が近寄る。

「ごめんね・・・また、私のせいで・・・ごめんね・・・」

「忍葉の・・・せい・・・じゃ・・・ない・・・から・・・謝るなら・・・私だよ・・・今まで・・・ごめん・・・」

真選組隊士達が走ってくるのが分かる。

「桜・・・」

近藤の心配そうな目。

（そんな目で見ないでよ・・・私は貴方達の敵なのだから・・・）

ばやける視界の中、自分が護った人達を見て、ニコリと笑う。
そして、そのまま意識はどんどん闇の底へ引きずりこまれていった。

次に目覚めたのはある一室。
自分の部屋だった。

（あれ・・・？私、何時の間に・・・）

体には全く力が入らない。
痛みは無い。でも、疲れが一気に襲う。

障子は開け放たれていた。

涼しい風が、動けない桜の頬を撫でる。

ふと、誰かの足音が聞こえる。

「ん？近藤さん！！土方さん！！桜、目エ覚めましたぜイ！！」

ボンヤリとしか見えないが、声や話し方で沖田だと分かった。

「桜！！」

すぐに2人がくる。

「わ・・・たし・・・は・・・」

「喋るな」

土方の手が、額に当たる。

（冷たい・・・）

安堵の息をついた。

少々熱があるのか、その冷たさは格別だった。

「お前に聞きたい事がいくつかあるんだ・・・。熱もほとんど下がったみてえだし・・・いいか？」

桜はコクリと頷いた。

「お前・・・無情の鬼神だったんだな・・・」

再び頷く。

「桜！お前入院してるとき違うつて言っただろ！！なんで……」
「オイ、近藤さん！コイツにあまり喋らすような質問はするな……」
「い……え、いいん……です……」

桜は2、3回深呼吸する。

「私は……確かに攘夷には興味がありません……これは今も昔も同じです……。そして、無情の鬼神だと言う事は否定しません……。私のもう一つの名ですから……」

桜は幾分か落ち着いた様子で話す。

「もう……隠し切れない……。話しましょう。全て……」

桜は自分が捨て子だった事から、自分が5歳までどう生きていたか、白夜叉・高杉・桂・坂本に救われたこと、攘夷戦争の事を話した。

「そうだったのか……」

苦しく、きつい過去話を聞くたびに胸が痛んだ。

「最後にひとつ聞きたい」

「なんでしよう……？」

「白夜叉とは誰だ……？」

桜は頭を横に振る。

「お教えできません．．．何があるうとも、絶対に」

強い視線を3人に送る。

「アイツはもう攘夷には関係ないのです．．．今更そんな事を
ほしく穿り返したくない．．．」

どこか悲しそうな言い方に、聞くのを止める。

「いつかきつと．．．アイツから言いに来る．．．きつと．．．」

フワリと微笑む。

「で、私をどうするのですか．．．？私は元攘夷志士。捕まえますか？そう簡単には行きませんよ」

刀へと手を伸ばす。

「待て！！」

近藤の声が部屋に広がる。

「俺達はお前を守る」

「えっ．．．！？」

意外な返答に目を見開く。

「これが真選組の出した答えだ．．．お前の事は上には伝えない。
お前は．．．俺達の大切な仲間だ．．．仲間を売ったりはしない」

それにと続ける。

「お前は今は攘夷志士じゃない。真選組二番隊隊長だ。その名前も誇れ。な？」

「近藤さん・・・!!」

「それに、お前一人で何もかもを背負うな。俺達は仲間だろ？」

「土方さん・・・!!」

「もつと俺達を頼れよ」

「沖田さん・・・!!」

「そうですよ!!」

外を見ると、隊士達が全員居た。

「都野隊長ばかり戦わせるわけにはいきませんからね!!」

「今度は俺達も一緒に戦うぜ!!」

「皆・・・!!」

「桜」

そつと入ってくる忍葉。

「アンタは一人じゃない・・・いつも傍に誰か居たのよ・・・」

「

そつと桜の手を包むように持つ。

「忍葉・・・!!」

桜の瞳^めから涙が溢れる。

いつも一人だと思った。

この力は忌み嫌われていると思った。

でも、違う。

自分が退けていたんだ。

傷つく事を恐れ、傷つける事を恐れ、全てに恐れていたのは自分自身だった。

（でも……でも……私の周りにはいつも誰か居たんだ。

忍葉・小太郎・晋助・辰馬・近藤さん・土方さん・沖田さん・ミツバさん・神楽・新八・妙さん・お登勢さん・キャサリン・陸奥・月詠・日輪・晴太・さっちゃん・エリザベス・定春……そして、銀時）

「ありがとう……皆、ありがとう……！」

桜は涙を拭いてこれ以上無いと言うほどの笑みを見せた。

周りもつられて笑い出す。

「もう、迷いはしない……」

動かなかった体に不思議な力が入ったような気がした。

桜は満身創痍の体で起き上がる。

「次こそは……倒す……この戦いも元々は私が招いたもの……」

・・・」

ならばせめて、自らの手で青榆を倒す。
そう、心に誓った。

「ま、応援も呼びますよ。私一人じゃムリですから・・・ね・・・」
文机に置いてあったケータイを手に取る。

そして、何度か電話をかける。

（皆・・・力を貸してね・・・）

「で、一体誰に電話したんでイ？」

「いろいろです」

桜は、障子を閉める。

畳を一枚どかすと、中から箱が出てきた。

「まさかまた使うとは思っても無かったわ・・・」

箱を開けると、着物が出てきた。

その着物は白一色の丈の短い着物・黒い羽織・黒に映える血のよう
に赤い帯紐・そして脛^{すねあて}当。

すべて箱から出すと更にその下からボロボロの着物も出てくる。それはサイズは小さく、所々に血がついている。

（昔の・・・）

昔、戦争に出たときに着ていたものだ。

「懐かしい・・・じゃなくて、着替えよ・・・」

寝巻きから、戦闘服に着替える。

「準備完了・・・」

ニヤリと笑いながら障子を開ける。

「行くのか？」

木の上から、桂が声をかけた。

「やっときた。ごめんね、こんな危ないところに呼んで」
「気にするな」

と、言ったところで木が爆破される。

「かーっア！！」

「止めて沖田さん！！仲間です！！この戦いでは仲間ですからア！！！！」

「こんな奴がか？」

「そーです！！」

土方に聞かれ、大声で返す。

「安心しろ。無事だ」

普通に逃げていた。

「コイツと力を合わせるのは嫌だが仕方が無いな・・・」

溜息混じりにタバコの煙を吐く。

「俺は真選組に協力しに来たんじゃない。桜に協力するために来たんだ」

桂は『桜』という所だけを強調して言った。

「で、他の奴等はまだか？」

「もう来るんじゃない？アイツは今地球に居るしね・・・」

桜は柱に寄りかかって言った。

「ん？土方さん、何かあの宇宙船こっちに近づいてませんか？」
「そう言えば・・・つーか完全にこっちに墜落してるじゃねーか！！！」

小型の宇宙船が、庭に突っ込む。
衝撃と爆風で思わず方膝をつく。

「あつはつはつは！イヤー、また失敗してしもうた！！」
「しもうたじゃ無い！！！」

桂が殴り、桜が蹴る。

「全く・・・頭には困ったものじゃ」

「陸奥・・・コイツ何とかならないかな？もつとまともな頭にならないかなあ！！」

「無理なんじゃねーのオ？ソイツの頭力ラッポだしよオ！！！」

全員が塀の方に目を向ける。

「銀時・・・」

ヒヨイと飛び降りる。

後ろから新八と神楽も降りてくる。

「まったく、めんどくせえなア」

銀時は至極めんどくさそうに頭をかく。

「そう言つな銀時」

「月詠……」

月詠も塀を乗り越え入ってきた。
後ろには百華の者達も居る。

「コリヤすごい人数だな」

「近藤さん……」

揃った面子を順に見る。

「まあ、人数が多いほうがいい。今度の敵の情報が入った。総悟、
隊士等を集めて来い」

「分かりやした」

すると、スピーカーを取り出し、音量を上げる。

『おい、全員集まれえええええ！来なかった奴から土方スペシャル食わせるぞ』

なぜか罰ゲームと化した土方スペシャル。
30秒しないうちに全員が揃った。

「よし！じゃあ皆聞いてくれ！！」

近藤が堂々とした態度で声を張り上げる。

「今ここに揃ったのはいつもは敵である奴かもしれないし、見慣れ

ない奴かもしれない。だが俺達は同じ志の元集まった同志だ！……どんな奴にでも協力しろ！……一致団結して敵を倒すぞ！……！」

真選組 「オォー！！！」

土方 「フン……」

沖田 「おもしろくなってきたじゃねえか」

神楽 「やってやるネー！！」

新八 「僕だって頑張りますよ！」

坂本 「わし等も頑張るかのー」

陸奥 「無論じゃ」

月詠 「わっち等もやるぞ」

百華 「はい！」

桂 「真選組と共に戦うのは不服だが仕方が無いな」

銀時 「ま、いっちょやっちゃんか」

桜 「今度こそ……倒してやんよ」

全員の志が一つとなった。

いざ、戦場へと足を向ける。

倒すは……朱鳥の頭・玄虎青楡 及び 信濃光樹^{しなのこうじゅ}。

やっと技術の授業で作った本棚が完成したのでそこに銀魂を入れてみたら、全業セリフが連続で出て正直誰が誰か分かりにくくなっちゃったので一箇所だけセリフの前に名前を入れました。

桜「結構集まったね」

まあね。

あと、信濃のフルネーム出しました！！
多分気になったと思ったので…………

桜「次から戦争だね…………頑張らなきゃ！！」

その意気だア！！！！！！

真の戦い 決意（前書き）

桜「はい、まともなサブタイトルがこれからも続きますよー」

こっからは『真の戦い』の後に決意とか。とか××ってつくからねー

真の戦い 決意

皆が一様に車に乗り込む。

人数が多いので、一台だけトラックである。
だが、でかでかと真選組と筆文字で書かれていた。

桜は銀時運転で、桂・坂本と真選組の車に乗っている。

ちなみに←

0号車 銀時・桜・桂・坂本

1号車 近藤・沖田・神楽・新八

2号車 土方・山崎・月詠・陸奥

3号車 真選組隊士等

以下3号車と同じ。

で、トラックには百華の者達に乗っている。
運転してるのは真選組隊士だが……。

〽0号車〽

運転席には銀時

助手席には桂

後部座席には桜と坂本

「なんで俺が運転なんだよ……」

銀時は渋々運転している。

桜と桂以外は二人とも免許を持っている。だが、もしもの襲撃の時、遠距離攻撃できるように・と言っわけで銀時が運転しているのだ。

「文句を言うな……お前だけ遠距離攻撃ができないだろう？」

「そーゆーツラもできねえだろ」

「ツラじゃない。桂だ。それに俺はできるぞ。爆弾がある」

銀時は今にもハンドルを折りそうな勢いで握る。

「とつとと諦めてよ……」

「うるせーな！！大体なんでオメエーは免許持ってないんだよ！！」

「まだ10代だから」

「総一郎君だつてそうだろ？」

「総悟ね。あと沖田さんは私より2つ3つ上なのよ？つまり最低でも18歳以上。私はまだ16だから免許が取れないの」

「グウ……あーもー分かったよ！！俺がやりますうー！！やればいいんでしょおー！！？」

やっとこせで諦めた銀時は、もうヤケクソで運転する。

さて、次は1号車だ……

「1号車」

運転してるのは沖田。

助手席に近藤が、後部座席に神楽と新八が座っている。

「オイ、サドオ！！お前もつとスピード出せないアルカア！？」

「うるせーチャイナ。少し黙ってるイ」

「ムキー！！そうやって私を見下すのは止めるネ！！」

「ちょ、ちよつと神楽ちゃん落ち着いてよ！！沖田さんも止めてください」

新八が神楽を宥める。

やはり1号車は波乱万丈のようだ。

さて、2号車は……

2号車

•

•

•

•

4人の無言の時間が続く。

なぜなら、土方は陸奥と月詠とは関係が無い。

山崎は陸奥とはあるのだが、この重苦しい空気の中喋る気がしない。陸奥自身も、隣に座っている月詠とどう接していいのか分からない。山崎とも喋る空気ではない。

月詠は完全に全員が初顔である。

4人とも何かしら話しぶり状況になってしまったのだ。

無言で車を走らせていると、土方が煙草を取り出した。

「あ！副長！煙草吸うんだったらちよつと待ってくださいよー！」

山崎が急いで窓を開ける。

「別にゴチャゴチャ気にするな」

「気にしますって。特に女性は煙草のにおいが髪や服に付くのを嫌うんですから!」

「わっちは気にせんぞ」

月詠はそう言うなりキセルを取り出した。

「わっちも毎日吸っとるからな」

月詠はキセルに繊維状の煙草を入れ火をつける。
スウ、とゆっくりと吸う。

「わしは周りの者がよく吸っちよるからの。あまり気にならんぜよ」

陸奥もサラサラ興味なし。てゆうかどうでもいいようだ。

「はは・・・陸奥さんらしいですね・・・」

「何だ山崎? お前コイツと知り合いか?」

「前、兵庫に行った時です。偶然会って・・・」

「そうなのか」

土方のくわえている煙草が口の動きに合わせてヒョコヒョコ動く。

「そう言えば、名前を言ってなかったな。俺は真選組副長、土方十四郎だ」

「わしは陸奥じゃ。よろしくな」

「俺は真選組監察の山崎退です」

「わっちは月詠でありんす」

なんとか会話の元が出来た。ってアレ? 合コン?

しばらく走っていると、急に無線が入る。

『おい！全員聞こえるか！！』

「土方さん・・・？」

「トシ？」

桜と近藤はボソリと呟く。

『朱鳥の奴等が居るぞ！！気をつける！！』

と言った矢先に車に向かって銃が発砲される。

「銀時！スピード落とさないでね！！」

「わぁってらァに！！」

桜はトランクからバズーカーを引っ張り出す。
狭い車内ではもの凄く邪魔。

そのバズーカーを持ったまんま窓を開け、そこから屋根の上へ上がる。

「辰馬ア！！頼むよ！！」

「まかせろ！！」

坂本も窓を開け、身を乗り出す。

そして銃を構えると、道端に居る朱鳥のメンバーを次々と撃っている。

「・・・・・・・・！！桜ア！！上じゃ！！！！」

歩道橋にマシンガンを構えた奴等が居る。

「分かってるわよ！！」

ガシャリ

バズーカーを構えると、スコープを覗きながらしっかりと狙いを定める。

「発射アアアアアア！！！！」

歩道橋を破壊しつつ、おおよそ半数を落とした。

「撃てエエエエエエ！！！！」

銃を乱射してくる。

銀時が上手くかわしてはくれているが、フロントガラスが蜂の巣のようになり、車内にガラスの破片が散った。

桜はジャスタウェイ型手榴弾を取り出すと、安全ピンを噛んで抜き、投げつけた。

完全に破壊された歩道橋。

破片が道路に散らばるが、お構い無しである。

ビルから・あちこちから敵が襲ってくる。

隊士等も応戦するが、一向に数は減らない。

そして、2号車では……

「……わっちが何とかしよう」

月詠は無線機を手に取る。

「百華よ、聞こえるか？今からわっち等が足止めをするぞ」

月詠はドアを開ける。

バツと外に出ると、その身のこなしで見事・着地する。

一番後ろに着いてきていた百華の乗っているトラックが到着する。

「ゆくぞー!!」

『はい!!』

クナイを構えると、投げつける。

平和な町が・一瞬にして血の雨の降る戦場と化した。

百華が足止めしてくれているおかげで他の車はスイスイ進めた。

「近藤さん、奴等のアジトはまだですかい？」

「もう直ぐだ」

「お、沖田さん！！前！前！」

新八が前を指差している。
その指が震えているのが分かる。

「何でイ……」

前を見ると、丁度ドラム缶が地面をワンバウンドした瞬間^{とき}だった。

「うおおおおお！！！！」

咄嗟^{とっさ}にハンドルを切る。

ドラム缶が右を通り過ぎる。

それは後ろに着いてきていた車に当たった。

「神山！！」

神山（六角事件の時に出てきたあのメガネ野郎）の乗っていた車は
ビルに突っ込み、横転する。

「アイツ死にましたかい？」

「いや、炎も出てないし多分無事だろ」

「神山のヤロー、俺の事ドSバカだと思っているからなア」

「いや、沖田さん？今さっき『神山！！』って呼んだのは何ですか？」

「ノリでさあ」

「オイイイイ！！この人全部ノリで過ごそうしてるよ！！」

「新八！！アレを見るネ！！！！」

今度は神樂が指をさす。

「な・・・ななななな何あの大砲！！？完全に僕達を狙っているよね！！？」

「心配するな新八君！！あれは松平のつつアんだ！！味方だ！」

近藤が嬉しそうに言う。

「ったく、どいつもこいつも・・・とつと通りなア。ここは俺が何とかしてやらア」

「ありがとう！！とつアん！！！」

全速力で全車通り過ぎる。

「よし、松ちゃん砲発射よーい・・・」

手をスツと挙げると控えていた者たちが準備を始める。

光が徐々に砲身へ集まる。

「発射ア！！！」

大地を抉^{えく}り、敵を一掃する。

「よし、オジさんができるのはここまでだぜイ・・・」

松平はかすかに見える戦士達の乗った車を見つめる。

〈0号車〉

桜は車内に戻ると、手を組んで祈るような体制をとる。

（間に合って・・・間に合って・・・！！！！！！）

そんな桜の頭にポンツと手が置かれる。

「大丈夫じゃきに。もっとリラックスせえ！」

坂本は桜の頭を優しく撫でる。

「・・・・・・・・・・ありがとう、辰馬」

桜は顔を上げ、足を下ろす。

先程より幾分か楽そうな顔をする。

『――前方に大きな城のようなものが見えるだろ?』

急に入ってきた通信。

『アレが奴等のアジトだ。あそこに玄虎青榆も信濃光樹もいるだろう。もしかしたら・・・高杉達鬼兵隊も居るかもしれない。気を抜くなよ』

一瞬にして、空気が変わる。

桜は足元に置いてあつた刀を坂本に渡す。

「コレは・・・」

「銃だけじゃ弾切れした時に動けないでしょ?コレを使って。名刀虎鉄、切れ味は良いって近藤さんが言ってた」

「そうか、ありがとぜよー!」

坂本は素直に受け取る。

「銀時にも・・・」

もう一つ置いてあつた刀を渡す。

「コイツは?」

片手運転をしながら聞く。

「名を『蒼炎^{そうえん}』というらしいんだけど・・・行きつけの鍛冶屋で作ってもらったの。相当いい刀だって親父さん言ってたわ」

「そうか、ありがとよ」

銀時は蒼炎を立てかけると優しげな表情で再びハンドルを握る。

そして、アジトまであと500メートルという所で車から降りた。

皆が揃う。

だが、最初居た人数より遥かに減っていた。

「皆・よく聞いて、今から1歩でも歩を進めれば生きるか・死ぬかの世界よ。死ぬことを恐れたのなら帰りなさい」

桜が言うが、誰一人としてこの場を離れる者は居ない。

「迷いは捨てて。覚悟を決めて」

桜・銀時・桂・坂本が先頭に立つ。

「行くよ！！！」

『オオオオオオオオオオオオオオ』

全員が4人に続いて駆け出す。

そして、駆け出して早々、敵のお出ましのようだ。

「ここは俺達に任せろ！！」

「原田さん！二木さん！藤堂さん！丘さん！井上さん！」

「行け！桜！！」

「はい！！」

笑いながら頷く。

「あのさ、桜」

「何？銀時」

ここで銀時は気の抜ける質問をする。

「・・・誰？」

「今聞くことかア！！！！」

怒声を浴びせる。

「少しくらい教えるコノヤロー」

「アンタが生き残ったらね」

皆一様に刀を抜く。

前方から襲ってくる敵を切り捨てていく。

「行くアル！！定春ウ！！」

「ワォーン！！」

「あれ！？神楽ちゃん！！定春何時の間に来たの！！？ねえ！！」

神楽は定春で突っ込む。

新八は走って追いかける。

そして・・・なんやかんやで城まで無事辿り着く事ができた。

大きな扉を蹴破る。

ドゴォン

ゆっくりと倒れるその重たい扉。

「へへへ・・・待っていたぜ・・・」

あの黒頭巾どもが居る。

「かかれやあ！！！」

『うおおおおおお！！！！』

黒頭巾どもの人数は、コチラの人数の何倍だろう。

「銀ちゃん！先に行くネ！！」

「銀さん、ここは僕たちに任せてください！！」

「頭、とつとと行くき」。負けたら承知せんぜよ^{かしら}

「早く行け！！」

「ここは俺達が！！！」

「神楽・・・新八・・・ああ！分かった！！」

「陸奥・・・おまんも生きるぜよ！！」

「武田さん！杉原さん！斉藤さん！永倉！行ってきます！！」

「オイコラ桜ア！！一様原作では俺隊長だからな！！」

と、永倉が叫ぶ。

「でもこの小説だったら私が隊長だもん！！ばーか！！」

「デメエ！！」

桜も永倉に叫び返した。

・・・口喧嘩が勃発した^{はっはっ}。

「喧嘩してないで早く行ってください！！」

山崎はミントンのラケットを持ってジャスタウェイ型の手榴弾を乱れ打ちする。

「皆！頼んだ！！」

そして、残ったメンバーで中にはいる。

「まるで迷路だな・・・」

「上へ行く階段すら見つからねえな・・・」

「これじゃあ敵に会う一方ですぜ」

残った7人は城を彷徨さまよっていた。
畏イタスラやら敵やらで中々前へ進めない。

「やつぱりちと腕が落ちたのー」

坂本は刀を見ながら口を尖らせる。

「まあ、銃しか持つてなかったもんね」

「にしてもこの刀はよく切れるなア……」

銀時はシャツと一振りする。

石像が真つ二つに斬れた。

「あつたりまえよ。石くらい斬れるの作れつて頼んだもの」

「それはともかく……ここは何処だ？まだ俺達は一階から抜け出せてないぞ」

「分かつてまさあ」

7人は走りながら角を曲がる。

と、階段があつた。

「いよつし！行くぜ！！」

近藤が真つ先に登る。

すると、上がった先にはまたもや扉。

「開けるぜ……」

土方が扉を押す。

すると、中から一人の女性が現れた。

「いらつしゃい。私は一人目の番人。
雛菊蓮華ひなぎくれんかよ」

「番人・・・！？」

「つまり、朱鳥の幹部って事よ・・・記憶した？」

蓮華は豪華な椅子から立ち上がる。

「誰が私の相手かしら？」

と、言うなり巨大な扇子を取り出した。

「俺が行きまσα」

沖田が名乗り出た。

「ふふふ・・・かわいいボーヤね・・・じっくりといたぶってあげるわ！！」

蓮華は扇子を開くと走り出す。

「先に進んでくだせエ。俺も後から行きまσα！！！！」

沖田も飛び出す。

残った6人で更に上を目指す。

沖田の運命はいかに・・・！？

真の戦い 決意（後書き）

桜「真選組の隊長の名前が一通り出たかな？」

うん。多分。

桜「ま、次は沖田さんの戦いね！」

沖田「誰が相手だろうとお構いなしでさア」

・・・ま、がんばって

真の戦い 真実（前書き）

感想のところにサブタイトルが日記みたいだと書いてありました。
はい、そーです。日記ですw

でも今まともに書きちゃってますwww

この話が終わったら直ぐに元に戻ります。

桜「この話が終わったら完結じゃないかって？うん・・・作者がいちいちめんどくさいからタイトルとあらすじだけ変えてこのままだるってさ」

桜ア！！それ裏話・・・！！

真の戦い 真実

沖田は雛菊蓮華と対峙^{たいじ}していた。

「ふふふ．．．私は幹部クラスとは言っても最下級。そんな私にここまで押されてる貴方が可哀想になってきたわ．．．」

蓮華はとても愉快^{ゆかい}そうに笑う。

「俺アまだ本気を出しちゃいませんぜ．．．？」

沖田は挑発するような笑みを浮かべる。

「私に勝てるでも思っておるのか？まあ、いいのよ．．．？」

巨大な扇子^{せんす}をパシインと閉じて、先を沖田に向ける。

「朱鳥の中では『拷問姫』と呼ばれている私に勝てるわけ無いもの．．．貴方は後でたあっぷりいたぶってあげるカラ．．．」

「アンタ．．．相当なDSだな」

「最高の誉め言葉よ」

そう言うなり、蓮華は扇子を振るう。

沖田は刀で受け止めた。

（そんなに重たい攻撃じゃない．．．スピードも桜に比べれば遅い．．．何故こんな奴が幹部なんでい．．．？）

扇子を弾き、無防備の胴へと刀を振るう。

— が

「なっ!?!」

「残念だったわね . . . 私は常に鎧を着ているの 重くて堪^{たま}ったもんじゃないわ」

蓮華はシュルリと帯を取り、着物を脱ぐ。

下には重厚そうな鎧。

美しい着物は鎧を隠すカモフラージュだったようだ。

「自分をイジめてるってことはやっぱドMですかイ?」

「いいえ、Sよ。私はS。イジメられるよりイジメたいもの」

「いーねえ . . . そーゆう気の強い女は 俺がタップリスコートしてやるぜイ」

「やれるものならやってみなさい。私が貴方を拷問椅子が哀^{アイ}暗^{アン}明^{メイ}電^{デン}に入れてあげるわ」

2人の会話は放送禁止用語がスレスレに入るかは入らないかのよう
な物だった。

蓮華が扇子を開く。

「そうれ」

一振りし、風を起こすと、突風が起きた。

「おわっ!？」

あまりの風に沖田の体が吹き飛んだ。
壁に強く背中を打つ。

「いつて・・・」

「私の体に触れることなく・貴方は死に至る・・・」

蓮華は何度も扇^{あお}ぐ。

ミシミシと壁にめり込んでいく。

「ぐ・・・あ・・・ああ・・・!!!!」

あまりの風圧に呼吸が上手くできない。
更には押し付けられる力で血を吐く。

「真選組もたいしたこと無いのね・・・興ざめだわ」

沖田は絶体絶命の状態に陥^{おちい}っていた。
ここは2階。

別に落ちても打撲くらいで済むだろう。
だが、それ以前に今の状況。

落ちる前に命を失う。

そう、考えてしまう。

(どうすればいいんでしょ・・・)

そう考えている間にも攻撃は続く。

（無理矢理に・・・賭けてみるか・・・？）

沖田は床にザクリと刀を刺す。

そして、風が止む一瞬。

攻撃と攻撃の間に来る隙に立ち上がる。

「なっ！！」

蓮華は思わず攻撃の手を止める。

「貰ったアアアアア！！！！！！」

ズバン

鎧を裂き、蓮華に一撃を喰らわせる。

「うぐう！！」

胸元を押さえ、片膝を付く。

「やるじゃない・・・」

2～3回咳き込むと、血を吐く。

鎧を貫通して、肺そして気管に傷が入ったようだ。

「それはこっちのセリフでさア・・・」

沖田もすでにフラフラだ。

「この戦い……」

「運勝負……!」

「いざ、尋常に……」

2人は渾身の力で立ち上がり、刀を・扇子を構えた。

「勝負!!!」

同時に駆け出す。

点々と血が落ちる。

「おおおおお!!」

「ヤアアアア!!」

「あーあ……負けちゃった……」

蓮華の扇子は真つ二つに切れ、自身の体からも血が噴出す。

「……引き分け……でさア」

沖田は左腕をブラリと力無く垂らす。

「骨……折れちまつたぜ……」

沖田は刀を納めると、蓮華には見向きもせず、桜たちが進んだ道へと歩を進めた。

さて、沖田と分かれたときの6人かというと・・・

「やっと3階への階段みつけた!!」

桜は真つ先にのぼり、扉を蹴破る。

「ようこそ。いらっしやいましたな・・・」

中から出てきたのは細身でいかにもガリベンそうな眼鏡をかけた男

だ。

（何て言えばいいのだろう……！！）

いかにもありがちな展開に何と云っているのか分からない。

「私の予想では……貴方達は一人置いて行ってしまう……」

「その通りだ！！俺が残る！！」

「ほう、貴方ですか？ハハハ！貴方はきっと私の名前を聞くことなく死んでいくでしょう」

近藤は仁王立ちしてガリベンを見据える。

「ゴリラ……頼んだぜ！！」

「まかせろ万事屋！！」

後ろの扉を開けようとする。

だが、扉はビクともしない。

「え？嘘？何コレ？」

銀時は押したり引いたり、スライドさせたりするが一向に開かない。

「その扉には特殊な仕掛けがしてありましてね……扉に書いてある文字の意味・そして答えを言えば開きますよ」

扉には、なにやら金属の板が付いている。

「えーと……何々……？」

こう書かれていた。

I must say that name five young
samurais .
White female devil , black beas
t , and noble will , free , and d
emon .

When seven sounds that show fi
ve people and sounding , I will
open the road .

「つて、分かるかアアアア!!!!!!」

ドゴオンと横の壁を殴る銀時。

「はっはっは!!! 一生無理だな!!! 貴様等には分かるはずが無かる
う!!! ハハハハハハハ!!!」

「黙れガリベン。アンタみたいな奴がクラスで浮くのよ」

桜は見向きもせずに、ボソリと呟く。

メチャクチャ落ち込んでいるのが見なくとも分かる。

「にしてもサッパリだなコリヤ」

土方でも分からない。

真選組の頭脳と呼ばれる彼が分からないとなったらもうお終いだと
誰もが思った。

「真選組の頭脳とも呼ばれる男が……この朱鳥の頭脳には敵わないようだな……ハハハハハ！！！」

奴はさも見下すように笑う。

「おろ？英語か？何々……」

「やめておけ。お前なんか分かるわけなかるう」

と、桂は腕を組みながら言う。

「五人の若き侍達よ、名を申せ。

白き夜叉・黒き獣・高貴な志・自由奔放・鬼

五人を表す七つの音、響く時道開けようぞ。

と、書いてあるぜよ」

全員がフリーズした。

「ちよつと待てエエエエああアア！！何でお前が分かるの！！
？奇跡！？奇跡なのこれエ！！誰か夢だと言ってエ！！マジホント
お願いだからア！！！！！」

「ちょ！辰馬！病院行こ！！頭見てもらったほうがいいって絶対に
イ！！！！」

「落ち着け2人とも。まあ、なんだ。とにかく脳を見てもらったほう
がいいな」

銀時・桜・桂の3人は完全に焦っている。

「あっはっはっは。いい加減にせい」

坂本は笑っているのか怒っているのかよく分からない。

「ま・・・まあアレだ、まだ合っているとは限らねえ。なあ、ガリベン君！」

銀時がバツと振り返る。

「あ・・・ああああたり前だろう・・・ききき貴様等な・・・などの低種族の脳みそにはわきやるまい」

「めちやくちゃキョドってんじゃねーかア！！何だよ『わきやるまい』って！！ただけ地味な噛みかたしてんだよ！！！」

土方が言う。

「てことはコレ・・・」

「ああ・・・合ってるって事だ・・・」

「コレは夢・・・そうよ、夢なのよ何もかも」

現実逃避をしている。

「おんしらア・・・」

坂本の頬に青筋が浮かぶ。

笑顔が引きつっていた。

「とにかく合ってたんだ。答えだ答え！！」

近藤が叫ぶと、現実逃避していた3人はハッと目覚めたように再び文字へと目を移す。

「それもそうね・・・辰馬、もー1回！」

「ハア・・・五人の若き侍達よ、名を申せ。

白き夜叉・黒き獣・高貴な志・自由奔放・鬼

五人を表す七つの音、響く時道開けようぞ」

「白き夜叉・黒き獣・高貴な志・自由奔放・鬼・・・これは俺達の事か？」

桂は思考をめぐらせる。

「だとしたら五人を現す七つの音ってのは何だ・・・？二つ多くねえか？」

「そうか！分かったわー！」

桜がポンツと手を叩く。

「『せいかい星海』・『きやうじやん狂乱』・『きじん鬼神』・『くぐじやう黒獣』・『やしや夜叉』・『やいは刃』・
たましい魂』の七つで成り立つ曲・『せんらんぶきよく戦乱舞曲』
ねー！」

「そうか！あの曲は確かに俺たち五人を現し・そして七つの曲で成り立つ一曲。間違い無さそうだな」

答えが分かった。

「ようし！コレでひら・・・かねえ・・・」

「まだまだ！答えを入力しなければねー！しかも曲は奏でなければ意味が無いのだよー！」

「わー。おしえてくれてありがとう」

桜は棒読みでそう言うと、プレートに手をかける。
それを手前に引っ張ると、プレートの後ろに入力するための機械が
あった。

「じゃあ入力するね・・・」

桂小太郎

坂本辰馬

高杉晋助

都野桜

桜はそこで手を止める。

後は坂田銀時と打ち込むだけだ。
だが、どうしてもできない。

理由は土方達も見ているから。
白夜叉の正体がばれてしまう。

(どうしよう・・・?)

キーを打つ手が震えている。

それを見た銀時が、手を伸ばす。

そして・・・自身の名前を打ち込んだ。
そして、画面に『正解』とおぞましい字で表示される。

「なっ・・・!? 万事屋お前・・・!!!」
「オイ! どういう事が説明しろ!!」

土方は銀時の胸倉を掴む。

銀時はハア、と溜息を一つついた。

「どういう事かってエ？決まってんだろんなモン。俺が白夜叉だよ」

銀時は土方の手を払い除ける。

そして襟を直しながら続ける。

「文句あつか？」

そう言われるとどう返していいか分からない。

「文句ツツーか……」

近藤も口ごもる。

「で、どーすんだ？俺を捕まえるか？ん？」

ニンマリと笑う。

「……お前を捕まえるってなっちゃあ桜も捕まえなきゃならんくなる。ま、上から命令がこねえ事を祈っとくんだな」

近藤は少し微笑む。

「とにかく次入れるきに」

「だが、曲を入れなければならんとは言っても……」

楽器など、持つちやいない。

「残念だったな！やっぱりお前等はこの銀孤秀ぎんこしゅうの頭脳には敵わないんだよ！！」

「名前言っちゃった！！！！さっき名前を聞くことなく死んでいくって言ったのに！！」

「こいつバカなんじゃねえの？」

桜と銀時は完全に馬鹿にする目を向ける。

「う・・・うるさい！！」

「とにかく曲を入れましょう」

「だが、どうやってだ？曲を入れるものが何にも無いのだぞ？」

「いいえ・・・あるわよ・・・」

ニンマリと笑う。

「多分だけどね・・・」

桜はグツと拳こぶしを握りしめる。

「ヤアアアアアア！！！！」

先程、銀時が殴った壁を更に殴る。

ガラガラと崩れていく。

「あ・・・あのさ土方君？桜って確か腕力無かったよね？アイツ脚力ばかり無駄にあって腕力は常人位しか無い筈なんだけどー？」
「の筈なんだけどなア・・・」

2人共桜と壁を交互に見つめる。

「ホラ、みーつけた」

桜は三味線と篠笛を取り出す。

「朱鳥の頭脳ねエ・・・ただ威張りたいたけじゃないの？」

「な・・・何故分かったのだ!!」

「ンなモン見りゃ分かるわよ。だってここだけ壁の素材が違うもの」

（ヤベエ、分からなかった・・・）

桜以外の全員がそう思っていた。

「とにかく、楽器は揃ったわ」

右手に篠笛を、左手に三味線を持つ。

「篠笛は私がやるとして、三味線は？」

桜はズイツと突き出す。

「俺と近藤さんはまず曲を知らねエ。だからお前等で決めろ」

「じゃあ・・・」

桜は銀時たち3人に三味線を突き出す。

「イヤイヤ！俺は無理だって！！三味線ほとんど弾けねーし！！辰馬ア！！お前がやれ！！！！」

「わしだって無理じゃあ！ツラが何とかせい！！」

「無茶を言つな！元々あの曲は高杉と桜しか演奏できないだろう！
！」

「オイオイ！！じゃあ誰が弾くんだよ！！」

土方は桜たちを見る。

「困ったな・・・仕方ない・・・こうなったら・・・笛だけで何とかします」

「ッ！出来んのか？」

「元々笛がメインですから」

篠笛を口に当てる。

そして、心地よいメロディーを奏でた。

最初はゆったりと、それでも沢山の音が溢れる。

次は激しく。低高音の入れ替えが多い。

次も激しいが、どこか怒り狂っているようで・冷ややかな感じもする。

次は速いメロディー。風のように流れる。

次はなんと言葉で言い表したら良いのだろうか？
スウと流れるようで、それでいてどこか優しい。

次の曲は鋭く切れる曲で、荒々しく・かつこい。
最後の曲はどこか懐かしく・それでいて荒々しく・優しい。

そして——全ての曲が終わった。

「フハア・・・っ・・・疲れた・・・」

息をゼイゼイ切らしながら途切れ途切れ言った。

「入力完了シマシタ。デハ・扉ヲ開ケマス」

ゴゴゴゴゴと、フロア全体を揺るがす振動。

「開いた!!」

全員が淡い喜びに笑う。

「よし！俺はここに残って総悟を待つ！お前等だけで先に進んでくれ!!」

「了解！」

近藤以外の5人が次に進む。

「な・・・何ということだ・・・!!青榆様に何と言えば・・・!!」

「・・・いい方法があるぜ？」

「な・・・!?」

「失せるオオオオオ!!」

ギアアアアアアアアアア!!!!

断末魔の叫びが、響き渡ったのであった。

真の戦い 真実（後書き）

桜「うわッ弱!!」

たいていガリベンの終わり方はコレでいいの。うん。

桜「次は3人目ね」

誰が来るかな？

桜「名前くらい考えてるわよね？」

モチロン！じゃあいつもコレ見てくれている人に特別！

次の敵の名前は――

パッ（明かりが消えた）

ギヤアアアアアアアアア――！！！！

暗いの嫌い！！怖い！！スタンドが出てくる！！

桜「……………ブレーカー落ちただけなんだけどなア……………」

真の戦い 力・炎（前書き）

あー脱線話がーすんごく微妙ー！！

桜「まあ、ガンバレ」

真の戦い 力・炎

3Fのフロアは全域に罠が仕掛けられていた。^{トラップ}

槍が降ってきたり、床が抜けたり、手裏剣が飛んできたり……。

だが、奇跡的にも全員無事である。

「あー！！クッソ！何だよここはアー！！ウザインですけどー、メツ
チャウザインですけどオオオー！！！」

銀時は前方から飛んでくる棒手裏剣を刀で打ち落とす。

「文句垂れる暇があんならこのトラップなんとかしやがれ！！」
「出来たら誰も苦労してねーんだよ！！いま守るだけで精一杯です
うー！！！」

前も見ずに棒手裏剣を打ち落とすのは容易な事ではないのに、何故^{なぜ}
か銀時にはできている。

奇跡の産物である。

つーか喧嘩やめろよ土方&銀時^{バカ二人}

「・・・おい坂本、ささってるぞ」

「んー？おろ？ホントじゃ」

「いや！何で気づいてないの！！？バカなの！？バカなのアンタは
ア！！！！」

坂本の頭には一本刺さっているが、何故か気づいていない。
呆れ顔の桂に、飛んでくる棒手裏剣を叩き斬りながら怒る桜。

この5人には緊張という物は無いようだ。

「にしても……いつまで続くのだ……。これでは一向に前に進めんではないか」

「確かにのう……。ただ体力だけが無くなっていくぞ。どうする？ 銀時？」

「決まってるだろ……。強行突破だアアアア！！！」

「結局それかいッ！！！」

無鉄砲に走り出した銀時にツツコム土方と桜。

「あーもー！！アンタはもって考えて動けエエエエエ！！！」

桜は銀時の後を追うように走り出す。

「悪いな！！俺は頭より体のほうが先に動くんだ！」

「そういう意味じゃなくて！！まだトラップがあるかもしれないじゃない！！」

「そつだぞ銀時！！無闇に動くな！！」

後ろから桂が叫ぶが、ズンズンと前に進む。

と、流石に無くなったか。

棒手裏剣が止まった。

「オーイ！もう大丈夫そつだぜ？」

遠くから銀時は叫ぶ。

桂達3人も後を追う。

直ぐに追いつくと、銀時と桜の2人は立ち止まっていた。

「どうした？2人共」

「いえ、土方さん。だって……コレ……」

桜が指差す先は床。

明らかに一箇所色が違う。

（うおおおおおいイイ！！何だよコレ！？あれか？落とし穴か
コノヤローおおおお！！！）

（な・なんてベタな……！！いや、むしろアレか？本当は安全
って奴かア？）

（何コレー！！落とし穴なの！？このまま2階に真っ逆さまーって
やつなの！？）

（……イヤ……何かのスイッチかもしれん……本当は岩と
か洪水とか……）

全員がこのベタな物に対し頭を悩ませる。

「なんじゃあ？コレ？落とし穴か？スイッチか？」

無防備にも踏もうとする坂本^{バカ}。

「バカかあ！！今ここで踏む奴があるかアアア！！」

銀時が猛烈な蹴りを食らわせストップさせる。

「でも……いつまで考えていても先に進めないわ……こうなり

や多数決よ!!」

「多数決？」

「この床の上を通るか、避けて通るか！」

ズビシと他の4人に指を差す。

「よ、よし!ここはセオリーに反して実はこの床は大丈夫でーす!て方に賭けるぞ!!」

「ああ、分かった」

「異議なし」

「じゃあ・・・行くよ・・・」

『せーの!』で5人同時に踏み出す。

その床はなんとも無かったが、何故か隣の床が沈む。

『なんでやねん!!!!!!』

全員が同時にそうツツコムと、急にフロアに地響きが広がった。

「えーと・・・何コレ？」

「どうせ岩だろ」

「そうですね。これは岩が転がってきて絶体絶命!と思ったら誰かが気を利かせて助かったー」^{作者}てパターンですよ」

「だな。どうせ夜代衣作者がそれ以外のいい事を考えてる訳があるまいよ」

「そうじゃきに。どーせ何とかなるきー・・・」

舐めきった表情で音のするほうを見つめる。

すると、曲がり角から出てきたのは――

なあんか大量のトゲのついた丸い物体である。

《岩じゃ無かった——！！！！！！！！》

フロアの床を貫きながらも疾走するトゲボール。

「逃げるオオオオオオオオオオ！！！」

銀時がそう叫ぶと、全力疾走で駆けてゆく。

「嘘だろ！！？作者がそんなイイ事考えられる訳がねえ！！あんな中二の餓鬼に書ける訳がねエ！！！」

中二舐めんなよゴルア。つーかもう三年になるわボケナス。

イラッときたからトゲボール更に強化させるけん（笑）

「ってちよつとオオオ！銀時のせいで何かあのトゲに毒が追加されてるんだけどオオオ！！！」

「どーしてくれるんだ万事屋ア！！つーか作者はサラッと広島弁使うアアア！！！」

「ゴチャゴチャ言ってる場合かアア！とにかく階段を探すぞ！！球体のものは下にいけても上にはいけまい！！！」

「お？あれじゃなかか？」

立派に朱塗りされた階段がある。

『急げエエエエエエエエエエエエエエ！！！！』

まさに危機一髪。

あとほんの少しでも遅れていたらトゲボール（改）の餌食になって

いただろう。

「何だよトゲボール（改）って……ド。ゴンボール（改）のパクリですかあ？」

階段の中央で乱れた息を整える5人。

「よ……しゃ、行くぜ」

土方がギギギと鉄で出来た扉を開ける。

「よくここまで来れたな！！俺がここの番人！『格闘の達人』黒桃だ！！」

男はゴツく、見るからに熱血系で格闘技を得意としそうな感じだ。

「で、誰が俺と戦うんだ！！？まあ別に全員まとめてでも構わんぞ！ハッハッハッハ！！！」

黒桃がそう言うと、土方が前に出る。

「オマエら……行け」

「土方さん……」

「とつとと行け。さつさと玄虎青楡と信濃光樹倒して来いよ」

桜は土方から目をそらすと、後ろの扉へと走る。

だが、コチラの扉も重く、容易くは開かない。

「銀時！小太郎！辰馬！手伝って！！」

「わかってらあに！」

4人がかりで押す。

「チキ……シヨ……桜！思いつきし蹴り飛ばせ！！」

桜はコクリと頷いた。

そして、助走を取ると一気に駆け出す。

「せやあ！！」

ど真ん中を両足で蹴る。

少し、扉が開いた。

「押せエエエエエ！！！！」

その衝撃を利用し、扉が開く。

ただ、人っ子一人通れるギリギリの幅だ。

先に桂と坂本が通る。

その後に、桜が続いた。

「じゃあ頼むぜ多串君」

「だから誰だよ多串。俺は土方だ。お前絶対わざとだろ？」

「さあー？どーでしょーかねー」

チャラけてそう言つと、扉の奥に姿を消した。

「さてと、うるさい連中は居なくなつた事だし、始めるか」
「ああ・・・そうこなくてなは・・・」

黒桃は巨大な鉄のヌンチャクを取り出す。

「んなツ！？バケモンかよ・・・」
「俺は朱鳥一の怪力の持主！貴様など、一捻りにしてくれるわ！！」
「やってみやがれ！」

ブォン

風切り音に、迫ってくるヌンチャク。

「おわっ！！」

咄嗟とつとの判断で横へ飛び、かわす。

フロアの底が抜けてしまった。

「おわああああ!!?」

そのまま突き抜けて1階まで落ちる。

ドン

爆弾でも落ちたかのような音と共に2人は着地した。
いや、上手く着地できたのは黒桃だけで、土方はなんともまあ無残に……

「オイ……大丈夫……か?」

思わず声をかける。

「うるっせエな!! テメエに心配される覚えはねえ!!」

「いや、心配アリアリだと思うのだが……」

ガバリと体を起こし、チョッピリ恥かしそうに刀を向ける。

「とにかく……お前に心配される覚えも——負ける覚えもねエ」

「フン、いつまでその憎まれ口が叩けるかなア!!?」

今度は横払いにヌンチャクを振る。

しゃがんでかわすとその低姿勢のまま相手の懐に入る。

「オラア!」

刀を振る。

「甘い!!」

が、黒桃も負けず、横っ腹に思いっきり拳を叩き込む。

「ぐア!!」

「ぐウ!!」

2人共、呻き声を上げる。

土方は殴られた衝撃で壁へと突っ込む。

「チツキシヨウ……」

口の中に溜まった血を吐き捨てる。

「クソ……やるじゃねーか」

黒桃も血を吐く。

「フン……敵に誉められても——」

グツと踏んばる。

「嬉^{うれ}かねーよ!!」

そんな土方の背後に迫る影……

背中からそれに吹き飛ばされた。

「グワァー!!」

地面を何回転かし、やっとこせでその勢いは止まった。

「ははは!! ヌンチャクを忘れては困るなァ・・・?」

血を吐きながらゆっくりと立ち上がる。

その手に光る『村麻紗』は血にも汚れず・ただ爛々と輝いている。

「おいコラトツシー。何でデメエには『鬼月』みたいな特別な能力みてーなのがねえんだよ・・・」

毒づきながらもその刀を構える。

(さっきので骨を数本イツたな)

バキッボキッと、不可思議な・痛々しい音が体中から聞こえてくる。

「もう終わりか?」

「へッ・・・誰が・・・」

睨みあう2人。

(クソ・・・アイツら絶対倒せよ・・・)

先へ進んだ4人は邪魔な奴等を斬っては捨てていく。

やはり、ここは完全な迷宮である。
ラビリンス

「く・・・全くみつからねえ・・・」

『蒼炎』をザクリと突き刺し、銀時は壁に寄りかかる。

「このままじゃ・・・上に辿り着く前にブツ倒れるわよ・・・！」

桜も壁へと寄りかかった。

坂本はヘタリと座り込み、桂は中腰になり・呼吸を整える。

「それにしても・・・先ほどから下が騒がしいな・・・」

下では黒桃と土方が戦っている。

その振動が上まで伝わっているのだ。

桜はふと、外を見る。

曇天の空から雫が落ちる。

それは徐々に強くなり、一気に雨空へとかわった。

空が光る。

そして、雷が一直線に地上へと落ちる。

しばらく、休みがてらそんな空を見つめていた。
地上ではまだ仲間達が戦っている。

「——そろそろ行くうぜ。アイツらはずっと戦ってたんだ。俺達が休むわけにはいかねーよ」

銀時は『蒼炎』を引き抜く。

「ええ」

桜も鬼月を持つ。

互いに頷き、走り出す。

曲がって曲がって。

壁を破壊し、敵を倒す。

そんな事を延々と続けていると、ようやく新たな階段を見つける。

「何か暑くないか？」

桂は額の汗を袖で拭う。

「そうじゃのー。なんか火に炙^{あぶ}られてる感じがするのー。なあ、金時」

「ホントに炙られる」

銀時は扉に向かって刀を振るう。

斜め上からスパアンと一直線に切込みが入る。

「よくきたの。わしがここの番人。『火使い』の炎烙^{えんらく}じゃ!」

70代くらいの背の低いジジイがいた。

「ジーさんよオ、諦める。そんなジジイの体で俺達に勝てると思っ
思っているのかよ? あ?」

「そうそう。そんなよぼよぼの体で立ち向かってくるだけ立派だわ。
とつと死に晒せ」

「コレ! 年上を敬わんかい!」

『イヤだ。お前こそ次の時代にバトンタッチ^{しなさい}しやがれクソジジ」

銀時と桜は声を合わせてそういった。

「おい銀時! 桜! 年上はもっと大切にしろ!」

桂はまじめな顔で言う。いや、いつもまじめか。やっぱいつもじゃないわ。うん。

「そうじゃきー。クソジジでもたまには役に立つ! ここはわしに
任せて行け!」

「おおつと、誰が行かせると思っかな?」

炎烙は扉に背を向ける形で立つ。

「今までの奴はどうだったか知らんが、わしは絶対にここを通さん
ぞ!」

「通してもらっわ。何としてでもね」

「ほっほっほ。無理じゃな」

と、炎烙が舐めきつた顔をしていると、銀時が桜に「あれ、よいい」と言っていた。

「りょーかい」

桜はどこからともなくバズーカーを取り出す。

「コタロー」

「ああ」

桂は両手に花・・・じゃなくて爆弾を持つ。

「はい発射!!」

銀時がそう言うのと、一斉発砲が行われる。
そのフロアの半分が焦げて黒くなる。

「死んだがか？」

「ほっほ、だれがじゃ？」

全員がバツと後ろを向いた。

「何時の間に・・・!!?」

「それ位じゃわしは死なんぞ」

クツと一瞬苦々しい表情を浮かべるが、次の瞬間・もう笑っていた。

「辰馬ア!!!後は頼んだ!!!」

「任せるき!!!」

坂本を残して3人はさつさと扉の奥へと進む。

「バカじゃないの？自分から道開けるなんて」

と、言い捨てて去っていった。

「あんの小娘共がアアアアア！！！」

炎烙はカンカンに怒ってじだんだを踏む。

「で、どうするんじゃ？わしと戦うかのう？」

「あたりまえじゃろうが！」

坂本は虎鉄をシュツと一振りする。

炎烙は酒瓶を取り出す。

「まだまだ若造には負けんぞ・・・」

そう言つて酒を飲むと、ライターに火をともし、一気に吐き出す。

「おわ！？」

坂本の服が少しだけ焦げた。

「これが火使いの力じゃ！」

炎烙の炎で逃げる事も・進む事も出来なくなってしまった。

「まったく、性質たちの悪い冗談じゃ・・・」

真の戦い 力・炎（後書き）

桜「あ、脱線話のほうはまだまだリクエスト受付中！感想欄で願います」

そうそう。感想欄でね。うん。

あ、この小説でも脱線小話の方でもどっちでもいいよー

真の戦い 本戦を告げる（前書き）

あつと3日♪あつと3日♪

桜「何が？」

春休みー！！

桜「プリントがどっさり♪」

そ・・・それを言うなアアアア！！！！！！

真の戦い 本戦を告げる

坂本は苦戦していた。

外傷こそ少ないものの、ジャケットは焦げ付き、ところどころ穴が開いている。

（これじゃあ近寄れんき・・・！）

炎が行く手を防ぎ、炎烙えんらくに近寄れない。

「ほっほっほ。年寄りを舐めぬ事じゃな」

「おいジジイ、その口調止めてくれんかのう？わしと被るじゃろ」

「うるさい若造が。貴様が止めればよいことじゃろ！！」

「スマンなあ。わしのは方言じゃ。もう身に染みちようて直すのは無理じゃ！」

意を決して突っ込む。

「甘い！！」

炎が真正面から襲い掛かる。

「・・・誰がじゃ？・・・」

「何！？」

坂本は一瞬で横へ動き、炎烙の首へと刀を振るう。

その目は獲物を狙う目である。

「仕舞^{しま}いじゃ」

首に当たる寸前のところで刀が止まった。

「・・・・・・・・な・・・・」

炎烙がニヤリと笑う。

「軽率だっ たな青二才」

坂本の腹にクナイが刺さる。

「くう・・・・・・・・」

坂本の左足が少し後ろに下がる。
痛みに踏ん張りが利かなくなったのだ。

「炎熱千本！！」

炎烙は熱せられ、真っ赤に染まった千本（針状の治療具）を坂本の体にさしていく。

元々殺傷力は低く、殺すまではいかない。

だが――

「ぐ・・・・・・・・！？」

体に痛みが奔^{はし}る。

「熱・・・・・・・・！！く・・・・・・・・ぐあああああ！！！！！！！！」

坂本は、激痛に刀を落とし、膝をつく。そしてそのままうつぶせに倒れた。

その拍子にサングラスが外れる。

「痛いかな？それは激痛を催すツボじゃよ」

「う・・ぐ・・・ああ・・あ・・あ・・」

あまりの熱さと激痛に大量の汗が出る。

坂本は体に刺さった針を抜く。

刺さったのはほんの8本。

「ぐうううう・・・！！！！！！」

「その針には体が動かなくなる毒が混じっている・・・。直に体は動かなくなり、死に至るだろう。全く・・・最初っから朱鳥に刃向かわなければよい事を・・・」

炎烙は坂本を踏みつけて、笑う。

（クソう・・・・わしもここまでかのう・・・全く体が動かんき・
・・・）

ふと、声が聞こえた、気がした。

辰馬ア、てめー星をすくうとかデケー事吐いてた
くせにこれで終わりか！？昔からテメーは口だけだ・・・俺を見る
俺を
自分の思っ^{てめー}た通り生きてっぞオオ！！

俺アのんびり地球^{こし}で釣り糸たらすさ。
地べたに落っこちまった流れ星でも釣りあげてもっぺん宙^{そら}にリリー
スよ。

辰馬・・・アンタさあ、そうやって直ぐに諦める
の止めなさいよ！
そうやって諦めるから何も出来ないんだよ？
もっ^{アンタ}と自分の思っ^{てめー}た通りにやってみたら？

私は宇宙^{そら}には行かないよ。だってさ、私が宇宙^{そら}に
行ったら誰がアンタを迎えてやるのさ。とは言っても銀時達も居る
けどね。

（そうじゃ・・・わしは口ばっかで何にもしちよらんかった・・・）

先ほど抜いた針を掴むと炎烙の心臓めがけて放った。

「な・・・！！！？まだ動く力があつたと言っのか・・・！！！？」

炎烙は危険を察知し、坂本から離れる。

坂本はグツと体に入力を入れる。

「おおおおおお・・・・・・おおおおおお！！！！！！」

動かないはずの体を無理矢理動かして、立ち上がる。

「何イ！！？」

「悪いの・・・まだ・・・死ぬわけにはいかんのよ」

「この死に底無いがアアア！！」

刀は足元に落ちている。

だが拾おうとすれば炎烙にやられるだろう。

「このわしが・・・貴様ごときに負けはせぬ!!」

炎烙は特大の針を取り出す。

直径5センチ。

当たれば一たまりも無い。

「喰らえエエエエ!!!!」

その老体のどこにそんな力が・・・?とでも言える程の速さで迫ってくる。

ドンドン、バアン

「・・・フツ、若いもんしかそんな無茶はできぬのう」

炎烙の口から血が垂れる。

そして、ポタリポタリと落ちる血を見ながら自分の心臓に手をやる。

「ほっほっほっほ。天晴れ・・・じゃ・・・」

炎烙はバタリと倒れ、息絶えた。

「フフ・・・ジジイも・・・舐めるもんじゃないの・・・正直危なかったの」

坂本の手には銃が握られている。
銃口から煙が上がっている。

そして、針は足に掠めたただだった。

「わしの方が速かったみたいぜよ」

坂本は咄嗟とつとに銃を出したのだ。

坂本の早撃ちが勝ったのだ。

まあ、普通に考えれば投げるより撃つほうが速いのだが……。

だが今回はほとんど動かない体を動かそうとした為、ほとんど差が出なかったのだ。

坂本はゴロリと寝転んだ。

「あー、やっぱり体が言う事聞かんき。このままじゃ焼け死ぬの。あつはつはつはつは」

笑い事では無いのだが……。

「うわ！炎だ！！」

「これじゃ通れないんでさあ」

（おろ？この声は真選組の……誰だっけ？）

「あ、近藤さん、あの毛玉は……」

沖田が気づく。

「スマン！助けてくれんかの？全く動けんのじゃ」
「分かった！すぐ行く！」

近藤達は上着を脱ぐと火をもみ消す。

火の手が回る前に坂本の居る場所へと転がり込む。

「あっはっはっはっは。助かったぜよー！あのクソジジーに変な技使われてのー」

「そうだったのか。他の皆は？」

「特に瞳孔開きっぱなしの奴は何処でさア？」

「4階に残った筈じゃが？」

坂本は近藤に背負われる。

「4Fだったら大きな穴が開いてましたぜイ？」

沖田はジャケットを着直す。

「あー、さっきの変な音はそれじゃったきにか？何かデカイ音がしたと思っちよったわ」

坂本は呑気^{のんき}にそう言う。

「じゃあ他の3人は先に行ったのか？」

「ああ。あの3人は先に行っちよる。大丈夫じゃ。皆わしより強いきに」

坂本はスツと顔を上げる。

「じゃから、あの瞳孔開きっぱなしの男を追ったほうぐええ。あの怪力男は恐らく強い。死なせたく無いなら尚更なおさらじゃ」

「・・・分かった。トシを追おう」

「俺は死んでくれた方が嬉しいんですけどねエ」

「ちよつと総悟オオオオオオ！！！」

「あー、騒がんでくれ・・・」

3人は騒ぎながらも下へと戻っていった。

く 桜・銀時・桂く

「何？このフロア、真ん中に一個階段があるだけじゃない・・・」

桜の言うとおり、あの扉の先は広い部屋があり、階段が一つある。

「少々酒臭いな。宴会でもしていたか？」

桂は辺りの臭いを嗅ぎながら言う。

「とにかく行こうぜ。なーんかボスの前触れって感じがするくね？」

「何のゲームだ」

ちよつと遠くからツツコミをかます。

「ま、行きましょうか」

3人は一段一段しっかりと上がる。

上がった先の扉は、今までと違う、異質な雰囲気^{かも}を醸し出している。

「開けるぜ」

銀時の言葉に2人は無言で頷き刀に手をかけた。

ギギイ……

3人の目の前に、大柄な男と対する小柄な男が居る。

「ん？どうやら来たようですね」

信濃は余裕綽々^{よゆうしゃくしゃく}といった表情で迎え入れる。

「——玄虎青榆^{げんこせいゆ}そして信濃光樹^{しなのみつこう}。2名を逮捕……いえ、殺します」

桜は殺気立った瞳^めを向ける。

「信濃才、お前は誰を相手する？」

「私は桂小太郎を相手しますが故、青榆様は白夜叉と鬼神を」
「ああ」

「どーやら、アチラさんが御指名の様だ。行け、ヅラ」
「ヅラでは無い、桂だ」

桂と信濃は天井を突き破り屋根へと登った。

「て、いーのかしら？2対1で」
「かまわねえよ。2対1だろうと何だろうと勝つのは俺だ」

互いに構え、睨みを利かせる。

「どこからでもかかって来いよ……………」
「どーなつても……………」
「知らないかな！！！！」

3人が衝突する。

屋根の上でも、戦いが行われていた。

「貴様・・・『全身凶器』まで恐れられていた――」

「おや、私の事を知っていたのですか」

「まあな。攘夷志士を裏切って政府に肩入れしていたと聞いていたからな」

桂は刀を抜く。

「いくぞ」

「どうぞ」

互いの刀を交える。

互いに跳ね返し、また近づいてを繰り返す。

今、本当の戦いが始まるのであった。

土方十四郎VS黒桃

桂小太郎VS信濃光樹

都野桜・坂田銀時VS玄虎青楡

勝つのはどちら・・・？

真の戦い 本戦を告げる（後書き）

あー、今回は銀魂4巻のセリフを入れました。

銀時のセリフが2行。

あとはオリジナルです。

桜「全く・・・あのバカはあーでも言わなきゃやんないんだもん！」

坂本^{バカ}だって頑張ってるさ。

桜「辰馬のお姉さんの方がよっぽどしっかりしてるわよ」

ん、実話を出さない。

真の戦い 最終決戦（前書き）

今更だけどさア」

土佐弁ってよく分かんない」

桜「あはは・・・調べてるものね・・・」

広島弁ならなんでも来い！なのになあ・・・

桜「広島県の方言も分かりづらいのよ？」

え！？マジ！？そうなの！！？

桜「うん。試しに広島弁で喋ってみて」

え！？いきなりそこで振る！？

え〜と・・・まあ例えば

「なんで勉強せにやあいけんの？」

「前ぶつけたところがあおじになってる」

「すいばり刺さって痛いんじゃないけど」

「そんなん、なるーとらん」

「たいぎいけえパス！」

「テメエたいがいにしろ」

「天井に手がたった！！」

「ヤバ・・・〇〇に手がたわん・・・！」

「ねえ、今どーしょん？」

後書きに続く・・・

真の戦い 最終決戦

土方は黒桃こくとうとの戦いで既にボロボロだった。

「ハアー、ハアー」

肩で大きく息をする。

（クソッ！何なんだコイツは・・・！？化け物みてーな怪力じゃねーかコンチクショウ・・・！！）

真上に、又ンチャクが落ちてくる。

「くっ！」

横に転がりかわすが、又ンチャクで壊した床の瓦礫が銃弾のように迫る。

「オーイオイ！これで終わりかア？つまんねーよ！！」

黒桃は土方を嘲笑あざわらうと更に攻撃を繰り返す。

一撃が壁の一部に当たり、壁が壊れた。

土方は飛び込むようにその穴から外へ出る。

「やっと広いところに出れたぜ・・・」

刀を杖代わりに地面に刺し立ち上がる。

「広いところに出ただけで何が変わるんだ？」
「ふ．．．かわりやあしねえか．．．」

土方は自分の後ろを見る。
仲間が戦ってる。

「ああ、安心しな。俺の獲物に手を出すなと毎日のように言ってるからな」

「そーかよ」

血を流しながら煙草に火をつける。

「まだ余裕といった感じだな」

「そーでもねーよ。ただ．．．吸いたいただけだ！！！」

刀を握りしめ黒桃に迫る。

「おおおおおお！！！」

「むん！！」

黒桃はヌンチャクで防御する。
が、ヌンチャクにヒビが入った。

「何！？」

「ブツ壊れるオオオオオ！！！！」

土方はヌンチャクを真つ二つに斬った。
若干、折ったようにも思えたのだが．．．。

「いい斬れ味だな。だが、ヌンチャクは二つで一つだぜ？もう一個

あるのを忘れるなよ!!」

「忘れちゃいねえよ!! そのもう一個のヌンチャクも斬ってやるよ!!」

土方はもう一つ、叩き斬ろうと走る。

黒桃はヌンチャクの鎖を持ち、振り回した。

「よつと!!」

遠心力を利用して、ものすごいスピードで投げ飛ばした。

咄嗟に刀を盾にしてかわそうとするが、勢いがありすぎてそのまま吹っ飛ばされてしまった。

「おわアアアアアアアア!!」

吹き飛ばされた先には新八が――

「新ハイ! 危ないネ!!! ニコ中が飛んでくるアルヨ!!!」

「え? イヤ、ちよつと……うそオオオオ!!!!!」

土方は新八に思いっきり激突し、そのまま飛ばされていった。
そこに居た山崎が駆け寄る。

「副長! 新八君! 大丈夫ですか!?!」

「これが大丈夫に見えるかアアア!!!!!」

「それだけ叫べるなら大丈夫ですね」

そんな山崎の後ろにさっきのヌンチャクが時遅れて飛んでくる。

「山崎! 後ろ……」

ドゴオン

「おわあああああああああああ！！！！！！」

山崎の後頭部にジャストミート。
そして数メートル飛ばされる。

「ちッ、邪魔すんじゃないよ」

黒桃はゆうゆうと歩いてくる。

「・・・おい、逃げる」

「えっ？あ、はい・・・」

新八は落ちてしまった眼鏡を拾ってかけると、木刀を持って少し離れた。

「・・・大丈夫じゃないですよ・・・土方さん・・・」

「気にすんな」

「気にすんなくてレベルの話じゃ無いですよ！！僕も戦います！！」

「構うな。とつとと逃げる。テメーが居ても足手まといだ」

土方は新八の身を案じているのだが、新八には逆効果だった。

「何言っているのか全く聞こえませんね」

「テメエ・・・」

新八はわざと無視する。

こうでもしなければ絶対に戦えない。

そんな事、分かりきっていたから。

プライドの高い土方にはこうするしか無いのだ・と知っているから。

「オイコルアアアアアア！俺が相手してやるよ！ー！」

「お前・・・彼女いねーだろ。どーせアイドルの追っかけでもしてるんだろ」

黒桃はホトホト呆れた表情で新八を見る。

「イヤ、何で知ってんの！ー！？」

「見た目だ」

「見た目！ー！？」

「ああ。見るからにダメガネだ」

「絶対にコロ——ス！ー！ー！」

新八は青筋を浮かべながら走る。

「待て！無闇に突っ込んでんじゃ・・・」

「喰らえエエエエエエ！！ジャアアアスウター・・・ウエエエエエエエー！ー！」

復活した山崎は、またもジャスタウェイ（型手榴弾）を乱れ撃ちする。

「ぬオ！ー！」

黒桃の視界が悪くなり、どこから新八が迫っているか分からなくなつた。

「副長！今です！行ってください！」

「山崎……」

「きつと新八君だけじゃ殺^やられる……！だから、副長！！」
「分かつてるよ」

土方は刀をグツと握ると、土煙の立っている方向に走り出した。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

土方と新八が黒桃に向かって刀を振り下ろす。

だが、その刃は黒桃へは届かなかった。

「なっ！？」

「また又ンチャクかよッ！！」

そう。

またもや又ンチャクにガードされてしまった。

「ウオオオオ！！」

黒桃は拳を硬く握り締めると二人に向かって放った。

新八の木刀は折れ、土方もろとも吹っ飛ばされてしまった。

（……ヤベエな……！！コイツ、メチャクチャ強い……
・！さつきから吹っ飛ばされてばっかだ……）

「2対1でもこれかよ！！ハッ、ツマンネー！！」

「誰が2対1だと言ったアルカ？」

後ろから神樂が迫る。

「3対1・・・イヤ、イッパイ対1ネ!!」

神樂だけではない。

先ほど、戦っていた者達も、相手を全て倒し加勢に来たのだ。

「後方支援は任せろ」

陸奥が銃を構える。

「チツ、役立たず共がア・・・」

黒桃はあの黒頭巾達に対しての苛立ちを見せる。

「オイオイ、お前らだけで祭かい？そりゃー関心しねーや」
「総悟!!」

左腕をブランと垂らした沖田が歩いてくる。

「そうじゃ！^{バカさわざする}ほたえる時は大勢のほう^{かしら}がええ！」
「頭・・・何じゃその様は^{ザマ}」
「おまんこそボロボロじゃなかか」
「フ、頭^{かしら}ほどじゃ無いぜよ」

陸奥は編み笠を少し上げると顔だけ少し振り向いた。

「そつか。なら、ええ」

「あのさ〜・・・俺の存在忘れて無いよね？」

坂本を背負っている近藤がチラと坂本を見上げながら言う。

「あーイヤ、忘れとらんぜよ」

「何か嘘っぽい！！絶対忘れてたよ！！」

「文句は作者に言うきに」

坂本はそう言いながら銃を取り出す。

「降ろしてくれ。なに、狙い撃ちする位なら動けるき」

「あ、ああ」

近藤は片膝を着くと坂本を降ろす。

「さあて、祭を始めるアル」

神楽は傘を担ぐと真っ直ぐに黒桃を見つめた。

「まあ、祭りは祭りでも・・・・・・・・」

近藤は刀を抜き、一振りしてから構えた。

『血祭りだけどなア！！！！』

全員が声を合わせて言った。

「おもしれえ・・・・・・・・ならコツチも本気で行こうか・・・・・・・・」

黒桃はヌンチャクを捨てると、背負っていた刀を抜く。

「なっ・・・！？なんだあの形は！？」

その刀の大きさはもちろんながらに大きい、形が独特である。
刃の先端から中心を通って鰐^{つば}までくり抜かれたかんじだ。

「こいつは首を斬るためだけに存在してんだよ。この間に首を入れれば後は斬られるだけだ・・・」

黒桃はニヤリと笑う。

「デメエ・・・格闘使わねーのかよ・・・」

「この刀など二の次だ。俺の攻撃の主流は格闘技だ！」

強硬な攻撃に、冷や汗が出た。

まさに、巨大で愚鈍な獣を相手にしてるようだ。

そんな中でも土方だけは笑っている。

「オイオメエら・・・足手まといになんじゃねーぞ！！」

「オオオ！！」

“絶対^{みな}に負けない 勝つ”
皆の心が一つとなった。

屋根では、桂と信濃の戦いが繰り広げられていた。

信濃は体のあちこちから武器を取り出す。

桂はどこから出てくるか分からない刃に悪戦苦闘を強いられていた。

「おやおや、『狂乱の貴公子』でもコレには苦戦しますか・・・」

「俺はただお前の凶器の数を見ているだけだ」

「そうですか」

実際、そんな訳が無い。

攻撃しようと近づいてもどこからともなく出てくる武器に、あえなく後退をする。

逆に遠ざかれば手裏剣などの武器を投げってくる。

近づいても遠ざかっても

危険に変わりはない。

(クッ……どうするかな……)

足場の悪いこの場所では桂も思うようには動けない。

(せめてもつと足場のいい場所に出るべきだったかな……)

次々と襲い掛かってくる攻撃をヒョイヒョイとかわす。

桂はかわしながらも着実に近づいていった。

「ぬおおおおお!!」

斜めに刀を振るう。

信濃も少しばかり身を引くが、刀が当たったのか、着物を裂き、血が出る。

「アララ、この場所はこの前『鬼神』に斬られたトコですよ……
傷が開いちゃったじゃないですか」

「フン。貴様の傷などどうでもよいわ」

二人とも冷静に、それでいて狂暴な攻撃だった。

「そこだ!」

そんな中、信濃が投げた手裏剣が桂の頬を掠める。

桂は一瞬、怪我した頬を見たが、直ぐに体勢を変え信濃に刀を振るった。

だが信濃も手前^{てまえ}の刀で受け止める。

そんな攻防戦が続く。

二人とも似たような型タイプなのか、中々決着がつかない。

「・・・お前、何故攘夷志士であることを止め、こんなただの賊になったのだ」

「決まっているでしょう？ 攘夷なんかよりコチラの方が動きやすく、身を隠しやすかったからですよ」

「そうか。だが、お前は攘夷側の情報を持っている。放っとく訳にもイカンのでな」

桂は鋭い視線を送る。

信濃はまるで狐のような表情カオで笑った。

「ふふ・・・これでも幕府に居たのでアッチの情報も持ってますよ？」

「いらぬ。裏切り者からの情報など無くとも良い」

「相変わらずの堅物ですね」

刀を交えながら、会話をする。

「それと、貴様にもう一つ聞きたい」

「何でしょう？」

「『白夜叉』の事を町中に言いふらしたのは貴様か？」

「ええ、そうですよ。お陰かげで攘夷党あなた方の動きが鈍りましたし、幕府側鬼神達も警戒を高めてくれたので我等朱鳥は非常に動きやすかった。ホント、馬鹿ですよね・・・」

「——別に俺の事を馬鹿にするのは構かまわん。だが親友ともの事を馬鹿にするのは絶対に許さん!!」

「許さなくて結構ですよッ!!」

桂の動きに鋭さが増してきた。
その動きに一瞬戸惑^{とまど}う。

「ふふふ・・・コレからが本番ですか・・・」

信濃は不気味に笑いながら戦う。

「ああ、第二幕の始まりだ」

そう言つて刀を掲げた直後、桂の背後に落雷が落ちる。
その光が消えたのを合図に二人はいつせいに駆け出していった。

最上階では銀時と桜・青楡^{せいゆ}が戦っている。
銀時と桜の二人は息の合った動きで挟み撃ちをする。

「うおおおおお!!!」

「はああああア!!!」

青榆の左右から攻撃するが、それぞれ素手で止められてしまう。

（やっぱり鬼神化しないと無理かしら……でも、今は“殺したい”という気持ちが起こらない……!!）

それぞれが距離をとる。

「どうする銀時……これじゃあキリが無いわ……」

「どーするもこーするも……斬るしかねーだろ」

「それが出来なくて困ってるんじゃない。アンタバカでしょ」

「うつせー」

二人は背中を合わせ同じほうを向く。

「……銀時、『辻斬り』で一気に行く。だから、溜めてる間の時間稼ぎよろしく」

「おうよ。任せとけ」

「何ゴチャゴチャ喋ってんだア？」

青榆は不愉快そうな顔で睨む。

「ただの作戦会議だよ」

そう言いながら銀時が走った。

その間に桜は、足を引き・体勢を低く。そして刀を左側に構えた。
『辻斬り』の溜めに入っただ。

メキメキと床板が捲れ上がっていく。

元々青榆の体重を考えて作ったのか、床は分厚く丈夫だった。

銀時は所々に怪我を負いながらも、桜の為に時間を作る。

「銀時！」

桜が叫ぶ。

銀時は青榆の体を踏み台に、青榆の後方に回る。

クルリと青榆が後ろを向いた。

「辻斬り」

低くそう発すると、目に見えないスピードで駆け抜けていった。

（どうだ・・・！）

後から吹く風が桜の髪を揺らす。

青榆の体から、少しばかりの血が飛び散った。

「やっぱり硬い・・・」

桜は苦肉の表情を浮かべる。

「こいつア厄介だな・・・硬すぎて何も通しやしねえや」

銀時も真剣な表情^{かお}をする。

「天人の力も馬鹿にできぬだろう?」

青楡は怪我した場所に手をやる。

「ホントはコレに夜兎^{やと}の力が加われば最強なんだがなあ・・・?」
「フン・・・どうだか・・・」

銀時の頭の中には神楽の姿が浮かんた。

神楽は夜兎。

コイツに見つかったら危険だ。

「そういえば・・・お前たちの仲間の中に夜兎がいんだろ?」
「!!!」

二人は瞳^めを見開く。

「・・・どっから見てたの?」
「ここからさ。眺めがいいぜ?ここは」
「ふうん・・・ずーと監視してたって訳?気分が悪いわ」

桜は刀を担ぎ、青楡を睨んだ。

「まあな。ここからの眺めはまるで俺が神にでもなったかのようなんだよ!!」
「神様ねえ・・・神ならこんな雨空拝む事なんぞ無いだろうによオ」

銀時は刀を真つ直ぐに構えて青楡を見据える。

「まあそうだな。だが、神じゃ無くともこの世で一番俺が最強だつてことにかわりは無いんだぜ？」

「ふうん・・・最強ねエ・・・」

桜は担いでおた刀を下に降ろす。

「最強なんてモンはねエ・・・存在しないのよ!!」
「ま、そーゆーこつた!!」

2人は再び青楡に立ち向かっていく。

この戦に終焉はあるのか・・・？

続
く

真の戦い 最終決戦（後書き）

「今何してる？」

「これ、なんてゆん？」

「これなんなん？」

「あー・・・ぬくい」

「うわッぬるいー!!」

「ブチ殺すど・・・」

「箱がへしゃげてしもうた！」

「ほいでのお・・・」

「何それー？みしてー！」

「やーやー言うなや」

「この事誰にもゆわん？」

「私もよして」

「ちよつと走れんかもしれん」

てな感じかな？

桜「まあ、分かる人には分かるって。有名なものばっかだし（多分）」

まあ、この意味が分かりづらかったら感想等で言ってくれれば標準語に直しますんで。

では、また次回！！

真の戦い 最終決戦 其の弐（前書き）

桜「今回出番無しー！！」

しょうがないって。うん。

桜「……………私達の戦いハシヨるなよ？（妖笑）」

は……………はい……………

真の戦い 最終決戦 其の貳

黒桃と戦いを繰り広げている土方達。

先程からいろんな攻撃を仕掛けていたのだが、一向に当たる気配が無い。

黒桃は恐ろしく強かった。

自慢の筋力で大地を割り、長いリーチを活かしてその大刀を振るう。更には雨が降っているという事もあり、足場は悪くなってしまっていた。

「チィ……こつちも使えんのー」

「ああ。そうじゃな」

坂本と陸奥の銃も、雨に濡れて動かない。もちろん予備はあるのだが、今出しても結果は同じである。

（やっぱ雨の日に火薬は駄目じゃ……）

狙いを定めてトリガーを引いても弾丸は出てこない。

「銃は使えんようだな!!」

「銃が使えなくともコツチにはまだ刀があんだよ!!」

土方が飛び出すが、走るだけでも体が悲鳴を上げる。

「土方さーん、退いてくだせえ」

沖田はバズーカーを取り出す。

「一発しか撃てねーんスけど、まあこの雨だったら一発で十分ですよねえ」
じゅうぶん

沖田はニヤリと笑ってバズーカーを放った。

まきぞえになると思った土方は、とにかく黒桃から離れた。

「おわっ！！」

逃げるのが少し遅れたせいで爆風の餌食になったが、まあ問題は無い。
ノーブログ

「やったか！？」

だが、そんな期待とは裏腹に奴は立ち上がった。

「なッ！？俺の『土方追跡バズーカー』がアアア！！」

「ちよつと待てエエエエエ！！！何アレ！！！？俺を狙うためのモンだったのかコルア！！！！」

「ヘイ。元々は相手（土方）をロックして追跡するバズーカーだったんでさア。あ、誰にでも発砲できますけど」

「ンな事アどうでもいいわ！！お前はアレを俺を殺す為に作ったのか！！！」

「そうでさア。イヤー、威力が試せてよかった……」

「良くねエ！！！」

「あのさ、俺の存在忘れてねえか？」

黒桃は喧嘩する二人を横目に見る。

「ほあちゃあああああ！！！」

そんな黒桃に神楽が蹴りを入れた。

だが、黒桃は神楽の攻撃を片手で受け止めた。

「なっ！？神楽ちゃんの蹴りを片手で！！？」

新八は驚きを隠せなかった。

なんせあの神楽の蹴りだ。

「こんなヘナチヨコキックは効かねえよ！！！」

神楽の足をそのまま掴むと新八めがけて投げ飛ばした。

「おおあああああ！！！」

「神楽ちゃん！！！」

なんとかその体をキャッチするが、勢いそのままに尻餅をついた。

「だ・・・大丈夫・・・？」

「大丈夫ネ。アリガトナ」

神楽はスクリと立ち上がると傘を手に取る。

「この筋肉バカがアアアアア！！！！くたばれやコラァー！！！」

傘の先端を黒桃に向け、銃乱射した。

「効かねエって言ってるんだろ!!」

その強靱な筋肉は弾丸も通さない。
まるで鋼の鎧を着ているかのようだった。

「な・・・なんつー体をしてるんだ・・・!!」

近藤は驚きで目を見開いた。

「どうすりゃあ・・・」

「あんな体・・・有りですか・・・!?!」

「はっはっはっはっは!! 俺様に敵う奴など居ないのだ!! あっは
っはっはっはっは!!」

皆が悩む中、一人が声を張り上げた。

「皆落ち着けエ! どんな奴でも目と喉に刃が通らん奴はおらん!!」

「坂本さん・・・!」

経験豊富な坂本には分かっている。

どんな奴でも目と喉は絶対に鍛えられない。

「分かりました!!」

新八は自分の後方に居る坂本をチラとも見ずに返事をした。

「定春! おいで!」

「ワーン!」

神楽は定春を呼ぶと、その背にまたがった。

「行くアル定春！」

「ワン！」

定春は猛ダツシュで黒桃に近づく。

「ふん！こんなでつかいだけの犬で何ができる……」

黒桃が刀を構えると、神楽はニヤリと笑った。

「定春！急ブレーキネ！」

ギギギイー！

足を踏んばって何とかストップさせる。

刀を振るってしまった黒桃は第二撃が出せない。

「しまっ……！」

「喰らえアルううううう！！！」

その喉に足をかけ、ブツ飛ばす。

「今ネ！全員でたたみかけるアルヨ！」

と、神楽が後ろを向いた瞬間だった。

ザン——……………

神楽の脇腹に、斬撃がはいった。

「神楽ちゃん!!?」

新八が神楽の体を支える。

「フツ・・・甘エあめな・・・」

神楽の傍にはあの刀が刺さっていた。

「神楽ちゃん・・・!!」

「だ・・・大丈夫・・・アル・・・こんな傷・・・スグ治るネ・・・」

息たえだえに言った。

「チャイナあ、オメエ傷治るのにどんくらい時間かかる?」

沖田が神楽に近寄って言う。

「大体・・・5分ちよい位くらいネ・・・」

「ほお・・・じゃあその前に終わらせませア」

沖田は挑発するような笑みをコチラに向ける。

「ガキは大人しく寝てろ」

「うるさいネ! テメエなんぞ勝手に行って勝手に死んでこいヨ!!」

「神楽ちゃん! 傷開いちゃうってば!!」

ガバリと起き上がる神楽を新八は必死で抑える。

「まあ、しばし俺達に任せてお前らは休んでろ」

「近藤さん……」

近藤は新八に向かってビシッと親指を立てる。

「こつから先は真選組の仕事だ」

土方は煙草を捨てて揉み消すと、また新たな煙草に火をつける。

「まった」

陸奥が銃を捨て、歩いてくる。

「わしもまだ戦えるきに」

その手には坂本から借りた（実際は坂本から拝借した）刀を持っていた。

「お前……刀……使えるのか……？」

「心配無用。こつゆう時の為に剣術は多少、身につけてるきに」
「そうか」

土方はフツと笑いながら刀を黒桃に向ける。

「とつとと終わらせようぜ……こんなバカげた戦いはよオ」

「ああそうだな……。俺様が勝って終いだ」

「なアに寝言言ってるんでさア？」

土方の隣に立ち、同じく刀を向ける。

「勝つのは俺達に決まってるんだろ」

近藤も刀を向けた。

「^{かしら}頭」

「わかつちよる。もしもの時は・・・な？」

陸奥は頭^{かしら}としか言っただけで無いのだが、坂本には何と言おうとしたのが分かった。

その言葉を聞いた陸奥は、土方達の方へと歩き、同じく黒桃に刀を向ける。

「フフフフ・・・やってみやがれ！全員俺様が首を斬ってやるよ！！」

ダンツと、土方と沖田が先頭に走り出した。

黒桃は地面を殴る。

バキバキと亀裂が入り、地面が二つに裂けていく。地震のような地響きにバランスを崩してしまった。

「つと危ねエヤ」

沖田は崩れた体勢を直ぐに立て直すと亀裂を飛び越え黒桃に近づく。

「オオオオオオオオオオオオ！！」

首を狙って刀を振るう。

だが、大刀によって防がれてしまった。

「オラア！！」

黒桃は大刀を振り上げ、すぐさま振り下ろした。かわす暇などありはしない。しかも地面が泥のようになってしまっているので踏ん張りが利かない。

「おわぁ！！」

沖田は足を滑らせてしまった。

隙ありと見た黒桃は刀を沖田の首に向かって振るった。

（ヤベエ！！）

咄嗟に刀で防いだ。

刀と刀がぶつかった事によって火花が生じる。

沖田と黒桃の顔だけが明るく照らされる。

「しぶといな・・・」

「それはお互い様でさぁ」

それと・と続ける。

「もつと周りをよく見たほうがいいぜ？」

沖田がそう言った直後、黒桃の背後から近藤が刀を振りかざす。

「どりゃぁ！！」

黒桃の背中に一太刀入れる。

「グッ!!」

黒桃は体を回転させ、その巨大な刀を振るう。
近藤は体を反らして避けた。
当たるスレスレである。

「わしがおる事を忘れるな」

陸奥は冷静に黒桃に対して突きを繰り出す。

「っと、危ねえ!」

上手くかわすと三人から離れるように飛び退いた。

「最初の獲物はアンタだ……」

黒桃は一瞬にして陸奥の背後に回った。

（速い……!）

陸奥はバツと後ろを振り向く。

ズパン

左肩・胸・右腕
三ヶ所が斬られた。

「なッ……」

更に、陸奥に先程のお返しとばかりに突きを繰り出した。
それは陸奥の体を貫いた。

黒桃が刀を抜くと、カクンとその体が墮^おちる。

「陸奥ううう!!!」

坂本は動かない体を無理矢理動かそうとする。
だが、完全に毒が回ったのか全く動かなくなった。

「じゃあな」

黒桃は倒れる陸奥に冷酷にも刀を振り下ろした。

―殺^やられる……!!

そう考えた陸奥はギュツと瞳^めをつむった。

ギイイイイイン

いつまでたつても痛みを感じない。

陸奥はそつと瞳^めを開けた。

「オイオイ……女を真つ先に殺そうとするたあよオ……最低
だな」

「最低だろうが何だろうがそれが朱烏^{あけがらす}だ」

陸奥の体を支え、斬撃を受け止めたのは土方だった。

「うおおおおおお!!!」

黒桃の背後に新八と山崎が同時に刀を振り上げた。

その背に、十字型の傷がついた。

前からは、土方がその大刀を弾き、一線。深く傷がついた。

「うぐう・・・!!」

血が黒桃の体から噴水の如く吹き散る。ゆらゆらと後ずさりする。

そんな時、陸奥が土方を見た。

「おんし・・・カハツ・・・!」

「喋んじゃねえ」

陸奥は土方に礼を言おうとしたのだが、その前に吐血し、土方が喋るのを止めさせる。

「肺をやられてんだ。大人しくしてやがれ」
「・・・・・・・・」

陸奥はチラリと坂本を見る。

坂本は心配そうな表情で自分を見ていた。

「副長！陸奥さんは俺が・・・・・・・・」
「頼む」

陸奥を山崎（と新八）に任せると、己は刀を一振りし、ジリジリと歩み寄った。

近藤と沖田と土方で、トライアングル状に黒桃を囲む。

「デメエは終わりだ」

「終わり……か……」

黒桃はその大刀を地面に落とした。

「殺るなら殺れ」

バツと両手を広げる。

「——その潔さ、その武士魂に天晴……」

近藤がそう言うと、三人は駆け出し、黒桃の体を貫いた。
ドサリと黒桃は倒れた。

三人とも各々刀を腰にしまう。

そんな時、黒桃がおもむろに口を開いた。

「何故……殺さぬ……？」

「デメエにはまだ聞きたい事がある。この戦いが終わったらデメエを護送する」

土方は黒桃を見向きもせずと言った。

「おい山崎！アイツは！？」

「今救急車呼びました！」

山崎は陸奥の編み笠とマントを取り、横に寝かす。

新八が坂本を引つ張つてきた。

「陸奥……」

「おんしも……分かつたろ……？心配……するって……
いうことが……」

「ああ……すまんかったのう」

「分かりや……ええんじゃ……」

そう言うなり陸奥の意識が無くなった。

規則正しい寝息が聞こえる事から眠つたのだと分かった。

（これで後終わってねーのはデメエらただけだぜ……桂……
万事屋……桜……）

土方は上を見る。

「——チツ、嫌な天気だぜ……」

真の戦い 最終決戦 其の弐（後書き）

神楽「ムキー！折角傷が治ったのにイイイイ！！！」

沖田「出番無かったな」

神楽「あーもームカツクネ！！サド！オマエから殺してやるヨ！！」
沖田「やれるもんならやってみなつてさあ！！」

おいコラ、後書きまできて喧嘩してんじゃねーよオイ。

桜「作者ア・・・アンタ絶対巻き込まれるって・・・」

オラアアアアア！！！！

桜「つて、喧嘩してるううううう！！！！？何やってんのオオオ！！？あーもー！今日はここまで！！！」

真の戦い 最終決戦 其の参

屋上では白熱した戦いが行われている。

刀一本で挑む桂に、全身あらゆることから武器を出してくる信濃。今も信濃のほう桂を押している。

「くっ……正に全身凶器だな」

「お褒めの言葉有難く存じます」

雨に打たれながらの戦いは想像以上の体力を使った。雨で滑る瓦の上では気力も使う。

（以外とキツイな……）

満足に走り回る場所も無い。それは桂も信濃も同じだ。

「おやおや……狂乱の貴公子も大した事無いですねエ……」

「黙れ裏切り者が。貴様こそもう飛び道具が無いようだな」

「あらら、バレてしまいましたか……」

だが、あまり大変そうな素振りそぶを見せない。

「その割には余裕そうだな」

「ふふふ……」

信濃は編み笠とマントをバツと雨空に放つ。

「この刀で貴方を倒してみせましょう」
「やれるものならやってみろ!!」

信濃の抜いた細く長い刀。

二人は同時に走り出す。

信濃は飛び上がると上から鋭い突きぞ繰り出した。
桂は体を横にずらしてかわした。

「反応は上々……」

そう呟いた信濃に容赦なく刀を振るった。
だが、信濃は長刀を盾にしてかわした。

二人の刀はぶつかり合ったまま動かない。

「中々やるじゃないか」
「貴方こそ」

互いが互いを弾き、小さくステップを踏んで再びぶつかる。

何度も何度も。

その度に火花が散る。

「貴様は桜と戦ったそうだな」
「それがどうかしましたか？」
「アイツは強かったろ？」
「——はい」

桂はフツと微笑んだ。

「アイツの強さはあんなモンじゃ無い。本気の本気だったら……
・貴様、死んでおったぞ」

その瞳が「偽りなど無い」と語りかけてくる。
信濃の顔が少しばかり真剣な顔になった。

「そうですか。それなら一度、本気の本気というモノを見て見たい
ですね」

「見えるさ。あの玄虎青榆が相手ならな」

そして再び刀を交える。

と、その時だった。

ドンッ！！

城全体を揺らすほどの大きな振動に桂と信濃は膝を着く。

「なんだ……！？」

「下………？」

二人は振動が収まると立ち上がった。

「何があったか知らないですけど、私は貴方を倒して青榆様をお助
けに行かなければ……ね」

「何があつたか教えてやろう」

桂は穴の開いた場所をチラリと見た。

「あれはきつと桜が鬼神化したのだろっな」

「・・・？鬼神化しただけであの振動ですか・・・？」

「たまに起きるのだ。力を制御できずああなる事が・・・」

カッと雷が落ちた。

「まあ簡単に言えば力の暴走というヤツだ」

「成る程ね」

すると、今度は足場が急に横にずれた。

「な・・・何ですか・・・！！？」

よく見ると桜たちのいるフロアが横に斬れている。

そのせいで屋根が横にずれたのだ。

「何を余所見しておる！！」

「しまッ！！」

全て言い終わる前に信濃の体を斬った。

そのせいでバランスを崩し、屋根から宙^{ちゅう}へ放り出される。
信濃は何とか屋根に掴まった。

「あ・・・危ない・・・」

桂はそんな信濃に近づく。

「——やはり貴様は戦闘にはあまり向いていないようだな」

「・・・お気づきでございましたか」

「当たり前だ。その大量に仕込んだ武器もほとんどが遠投型の物。」

貴様は他の者に近距離戦をさせ、自らはそれらを操り、後方支援をするという戦法をしてきたのだろう？」

「あらら、そこまでお見通しですか」

信濃はまだ余裕を見せる。

「貴様には弁明の余地も与えはしない。潔く、死んでもらうぞ」

桂は信濃の命綱である手を踏む。

「私は……簡単には……死にません……ッ!!」

その様子を見た桂は呆れたように溜息を吐いた。

「今更死に対する恐怖を覚えたか。だがもう遅い。裏切り者には死を。これが攘夷志士のやり方だ」

「ヒッ……!!」

雷が落ち、桂の姿が影で縁取られる。それと同時に信濃の手を蹴った。

「う……うあああああ!!!!」

信濃の絶叫。

ここから先は余りにも無残なものだった。

桂は刀を鞘さやに納めるとそつと穴の中を覗いた。

「今加勢したら逆に殺されそうだ……」

〈桜&銀時VS青楡〉

こちらは両者ともに悪戦苦闘していた。

いくら攻撃しても倒れない青楡。

いくら攻撃してもなかなか当たらない桜・銀時。

「銀時……！」

「ああ……こりゃ決着つかねーぞコノヤロー」

もう既に息が上がっている。

相当な攻守戦が続いているようだ。

「銀時……やっぱり何とかして鬼神化しないと……！！」

「大丈夫だ。まだいけらぁに」

「でも……！」

そんな桜の言葉を無視して銀時は刀を構える。

「鬼神化は最後の切り札に取っとけ」

「——うん……」

桜も刀を構えた。

「話は終わったか？」

「ええ」

「ならコイツを喰らいな!!」

青榆の腕が触手のようになったかと思うと、二人の体を捕縛した。

「ぬお!!」

「うっ!!」

二人の体が宙に浮いた。

「ははははは!!どうだ!コレは高杉が仕込んでくれたんだよ」

「なっ!!?」

「高杉……だとお!?!」

その時二人は同時に目を見開いた。

「ねえアレ……紅桜の……」

「ああ……間違い無さそうだな……」

そう言った直後、青榆はニヤリと笑うと触手に力を入れた。

ギリ……ギリギリ……ギリ……

「う．．．が．．．あア．．．あ．．．」
「うあ．．．あ．．．あア．．．あ．．．」

二人は悶^{もた}え苦しむ。

「そうだよ．．．その通りだよ．．．奴が言うには紅桜とかいう刀に組み込まれたというカラクリをそのまま俺の体にいれたんだよ！」

ぞわぞわと二人の体を包み込むように触手が襲い掛かる。

（ヤベエ．．．このままじゃやられる．．．！！）

銀時の意識が少しずつ遠のく。

（こんな．．．奴に．．．）

桜は自らへの怒りとやるせなさに唇を強く噛んだ。
血が滲むほどに。

—『悲しみ』を断ち切らない限り、貴女への呪縛が続く—

夢に出てきた幼い自分が言った言葉。

（悲しみ．．．？呪縛．．．？）

薄れ行く意識の中、ボンヤリと考えてみる。

（私は．．．何に悲しんできた．．．？）

親が私を捨てた事・・・？いや、どうでもいい・・・。
私が村を捨てた事・・・？これも違う。自分で決めた道だ。悲しむ
ような事は無い。

だって・・・この二つの事があったから私の周りには仲間が――
仲間・・・？

（ああ・・・分かったよ。私の悲しみは――）

桜は刀をギュツと握った。
そして、触手を斬り落とす。

「な・・・何！？馬鹿な！この触手の強度は鉄鋼並だぞ！！？」

桜は銀時を掴んでいる触手も斬り落とした。

「鉄だろうが何だろうが、斬り落とす。鬼月コイツに斬れないモノは無い」

刀を目の前にかざす。

「分かったんだ・・・私の悲しみ、それは・・・」

銀時も夢現ながらに目を覚まし、桜の言葉を聞いている。

「仲間を・・・護れなかった事、護りきれなかった事、そして・・・」

スッと目を閉じる。
頭の中に高杉の姿がフラッシュバックのように浮かぶ。

「仲間を――」

刀が闇色に染まっていく。

「仲間の心を……取り戻せなかった事……！」

スツを目を開くとそれは鬼神の目だった。

「殺すは自分の心……」

冷酷な目は青楡を捕らえた。

「喰らえ……！」

刀を一振りし、触手を斬った。

その際、壁にも刀が当たり、あの城を揺らす程の振動が起きたのだ。

「あのヤロー……力が暴走してやがっぞ……」

銀時は触手を払い除け立ち上がった。

「立ち上がって早々悪いが伏せる銀時」

「え……？おわあああ……！」

桜は回転斬りを繰り出し、八方から襲ってくる触手を切り裂き、更には城をも切り裂いた。

「何イ！？」

青榆もコレには驚きを隠せない。

「って、桜！上にツラいつぞツラア！！」

「大丈夫だって」

「鬼神化の状態で言われてもなんか説得力がねえよ！！こう・・・言葉に心がこもってねえ！！」

「心を殺してるんだ。じゃなきゃ無情の鬼神など呼ばれたりしない」

「——それもそうか」

「どこまでお気楽なんだ」と桜は銀時を横目に見る。

「で、どうする？もう貴様の触手は私には通用しない」

「・・・・・・そう見たいだな・・・・・・なら俺も・・・・・・」

青榆の目が妖しく輝いた。

「バケモンになってやるよ・・・・・・」

「「！！！」」

桜と銀時は顔をしかめた。

「ぬおおおおお・・・・・・うおおおおおオオオオオオオオオ
！！！！！」

青榆の姿が変わっていく。

腕はかつての紅桜の時のように触手で覆われ、尾が生え鱗が生え――
みるからに化け物だ。

「来るぞ桜」

「ああ」

今度は触手が槍のように迫ってくる。

二人は左右に分かれてかわした。

だがそこに更に迫ってくる無数の触手たち。

まるでその一つ一つが意思を持っているかのように動く。

「チツキショー！！斬っても斬ってもスグに生えてきやがる！！テ
メーらは微生物ですかコノヤロオオオ！！」

「銀時、例えが分かりにくい」

「冷静にツツコミされてもちよつとアレなんですけどー！！」

「うつさい。黙って斬れや」

「はいはい！言われなくてもやってますよー！！」

銀時は毒づきながらも坦々と斬っていく。

だが、中々本体に近づけない。

（鬼神化もいつまで持つか分からん……早くしないと……
）

だが、どんなに斬っても触手は迫ってくる。

「銀時、これじゃキリが無い」

「分かつてるよ。……しゃーねえ、俺が囷になる。テメエは
その間に本体を叩け。いいな？」

「ああ……。ありがとう」

「礼は後でたつぷりパフェ食わせろや」

「いくらでも食え」

桜がそう言うのを聞いた銀時は、刀をザクリと触手が固まってる所に突き刺した。

深く・深く。

すると、触手が銀時だけを狙い始めた。

「桜！本体を斬れ！！」

桜は無言で頷くと、高く飛び上がり、青榆の頭めがけて刀を突き立てた。

「死にさらせ。玄虎青榆」

「そう簡単に死んでたまるかアアアア！！！」

桜の刀は青榆の尾によって防がれた。
尾の鱗がキラリと輝いた。

「…………貴様はもう、人では無いのだな…………」

「そうさ…………もうこの自我すら俺のモノじゃ無くなってきた…………だから完全に俺の自我が無くなる前に貴様等を倒す！！」

「悪いが、それは——」

刀に込める力をより一層強くする。

「叶わぬ願いだ」

少しだけ、尾に刃が通った。

そしてそのまま尾の先端を切断する。

「ぐ…………ぬううううう！！！」

青榆は迫り来る刀を今度は腕で受け止めた。

切断された尾からは止めど無く血が溢れる。
いや、溢れるというより噴出すだろうか。

（しぶといな）

刀が通らぬと見た桜は一度青榆から離れた。

「おい銀時、無事か？」

「無事だ。これくらい、紅桜でウンザリする程見てらあに」

と強がってはいるが、体にはかすり傷が無数についている。

「アイツの尾を斬った。次は腕やるぞ。どっちを斬る？」

「右」

「分かった」

二人は触手には見向きもせずにとだ走る。

「無駄な事を……！！！」

だが青榆も触手を操り足や腕を捕らえようとする。
だが二人は全て斬り落としていく。

そして……

ズバン！

ザン！

銀時は右腕を、桜は左腕を斬った。

「ぬををおおおお!!!!」

痛みに悶絶しながらも尚^{なお}齒向かつてくる。

「まだ・・・まだだあああああああ!!!!」

今度は腕から槍状のものが生えてきた。

「ンなのアリかよ!!」

「つたく・・・厄介ね」

攻撃を仕掛けてくるその腕を二人は飛んでかわし、トトンと着地した。

「オイどーするよ？中々アイツに近寄れねーぞ」

「さっきの触手と違って攻撃は一直線。上手くかわせば逆にチャンスだ」

「ふーん・・・アレに毒が塗ってあっても？」

銀時が汗を流しながら言った。

確かに

先程からポタポタ何か槍から垂れてくる。

しかもソレは床を溶かす。

「前言撤回。かわしても毒が飛び散ったらヤバイな」

「だからその表情で言われてもイマイチなんだけどおー!!!!」

銀時が刀を少し下ろした一瞬。
毒つきの槍が迫る。

「おっと!!」

「フン……」

二人は何とかかわす。

が、飛び散った毒が二人の肌に付着した。

「イ……イテテテテテ!!! つかアチー!!」

銀時は余りの痛みに刀を落とし、毒の当たった手首を握った。

(……厄介だな。そりゃあ私は直ぐに治る……だがやつぱり痛いのはイヤだしな……)

チラと銀時を見る。

「銀時——」

「し……心配すんなや。こんくねえどーってことねーよ」

「心配、か。まあ正直言えばそんなに心配はしとらん。毒は神経性の物らしい。多量に浴びん限り命に別状は無いと思う」

桜は「しばらくジツとしてろ」と言い捨てると青楡に向き直った。

奴の目にはもう光は無い。

目が死んでいる訳ではない。もう意識を感じられない。

「完全に自我を失ったか化け物め……」

「ウオオオオオオオ!!!」

ビリビリと体中に青榆の雄叫びが響く。

桜は走り出した。

毒槍を避け、狙うは青榆の足。

桜は体勢を低くし、足だけを狙って斬った。

青榆はバランスを崩し、ガクンと倒れた。

「これで動けまい……………」

だが、そんな思想はことごとく崩された。
なんと、青榆の足の切断口から獣のような足が生えたのだ。

「まだ生えるか……………！」

その足を使って立ち上がる。

もう、その姿は人では無くなっていた。

「うがあああああ！！！！」

叫びと共に毒槍の突きを繰り出す。

桜の腕を少しばかり掠めた。

「くツ……………」

一瞬、苦々しげな表情を浮かべたが、傷は直ぐに治る。
毒槍はまだ、攻撃を続ける。

「もう当たらんぞ」

かわしながら着々と本体に近づく。

「ハア！！」

ズバンと腹に傷を入れた。

「桜！危ねエエエエエ！！！」

銀時が後ろから叫ぶ。

その途端、斬ったところから得体の知れない何かが飛び出す。
内臓的な物では無い。

よく見れば先程の触手と同じものだ。

桜はばく転で全てかわした。

「何だ……コイツは……！！？体の中まであの触手を飼ってたのかよ！！」

銀時はガツと刀を掴み、自分を襲う触手を斬る。

「銀時……青楡はきつと……既に死んでいるんじゃないか？」

突然桜が言い出した事に目を丸くする。
だが直ぐに厳しい目つきに変わった。

「——俺も薄々そう思ってたさ。どうせなんらかの手術で瀕死のアイツをあやったんじゃねーか？」

「そう……アイツは自分の遺伝子に天人の遺伝子を組み込んだと言っていた。きっと死にかけた奴をどつかの星の天人、もしくは晋助ら鬼兵隊がアイツの体を改造したんだろうな。なんともまあ、虚しい」

その時、青榆が攻撃を仕掛けてきた。
狙いは桜。

「フアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「もはや、声まで獣と化したか。まだ戦士には同情の価値がある。だが……」

青榆の攻撃をかわしながら淡々とした口調で喋る。

「獣に同情するほど私は甘くは無いぞ」

目に見えない動きで青榆の後ろへと回り込んだ。

「これで……終いだ！」

刀をしっかりと持つと、振り上げた。

そして、振り下ろそうとした瞬間だった。

青榆の背中に切れめが入り、上下に裂けたかと思うと目が現れた。巨大で、全てを見透かされそうな目だった。

「お見通しって訳か……銀時、前は頼んだ」

そう言った直後、背中の何箇所かが裂け、無数の触手が現れた。

束になりかかってくる触手を斬る。

すると、今度はその触手から不気味な汁が流れた。

（何だコレは……気持ちワリイ……）

悪臭が鼻を突く。

「おわ！！何だよこの汁！？くさ！！」

あつちもか、などと思っている暇も無く迫ってくる触手たち。

「こんなもの、足止めにもならん」

斬るたびに鼻を突く汁がぶちまけられる。

背中目が妖しく歪んだ。

「モエテ……シマエ……！！！！」

その台詞を聞いた桜と銀時はまさかと思った。
セリフ
触手の一つがマッチを持っている。

「気づかなかつたろ？この部屋にガスがぶちまけられていた事に！！」

まるで幾人もの人の声が混じったような奇妙な声。

「銀時！外へ……」

「もう遅い！！！！」

シュツとマツチに火が点けられる。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンン・・・・・・・・

大爆発が起きた。

下に居た土方達も思わず上を見上げた。

「銀さん！？桂さん！？桜ちゃん！？」

新八が叫ぶ。

爆発が生み出した炎で城が包まれる。

果たして、3人の運命はいかに・・・・！！？

続く

戦いの終焉 全ての終わり（前書き）

今回で終了です。

桜「次にちょっとした雑談みたいなコーナーの後で新しいのに入ります」

では、今回は短いですが・・・どうぞ！

戦いの終焉 全ての終わり

城から真つ赤な炎と黒い煙が立ち上る。

「おい・・・嘘だろ・・・？」

近藤がつぶやいた。

下に居る全員が燃え盛る城を見つめている。

「銀ちゃん・・・？ねえ新八！！銀ちゃんもツラも桜も死んでないよネ！！？ねえ！！？」

神楽は新八の袖を引いて心配そうな顔を見せる。

「・・・大丈夫だよ・・・あの3人が死ぬ訳無いよ・・・きつと・・・大丈夫・・・」

そう言っている新八の顔も不安で一杯だった。

ごうごうと燃え盛る炎は城をことごとく崩していく。

誰もが言葉を発せずに・その場から動けずにいた。

やがて城は大きな音を立てて崩れた。

「な・・・！！銀時！！ツラ！！桜アアアア！！」

坂本は城に向かって大声を張り上げた。

「うござー！！おまつ・・・止めるー！！傷に響くー！！」

だが、ガツチリと腰にしがみついたまま離れない。

「万事屋ー！！桜は・・・！？」

近藤は銀時の肩を強く揺さぶった。

「アイツなら・・・」

クイと首を動かす。

近藤は銀時から手を放し、そちらに目を向けた。

桜はゆっくり歩きながら近づいてきた。

「近藤局長、真選組二番隊隊長 都野桜、無事生還しました」
「桜ー！！」

服が少し焼け焦げ、体のあちこちに火傷が見られるが大丈夫そうだ。

「でも、どうやって助かったんですか・・・？」

新八が銀時・桂・桜の三人を順に見ながら言った。

三人共火傷と傷くらいで特に大げさな怪我は無さそうだ。

「玄虎青楡が火をつける直前に俺が屋根から落ちてな。そしたら下に居た桜が銀時と俺を蹴り飛ばして自らも外に飛び出した。それが爆発とほぼ同時だったんだ」

桂が詳しく説明した。

「そこからどうやって助かったんですか？あんなに高い場所から飛び降りたりしたら普通は危ないでしょう！？」

新八がちよつと銀時から離れて言った。

「あーそれな、それはヅラがパラシュートを持っててな。まあ途中で燃えちまったけど勢いが無くなったおかげでなんとか助かったってわけよ。そしたら辰馬が叫んでるもんだから走って出てきたついでにぶっ飛ばしてやったんだ」

「いや、坂本さんぶっ飛ばした理由が分かんないです。絶対ぶっ飛ばす必要なかったですから」

さも当たり前のように言う銀時を呆れながらつつこむ新八。

「そういえば青楡はどうしたんでい？」

「死にました。いえ、元々死んでいました」

「？　どういうことだ？」

「憶測でしかないんですけどね、青楡は最初っから死んでいたんじゃないかと思えます。その体に天人の遺伝子あまんとを組み込むことで生き返った・もしくは瀕死状態から助かったのではないかと・・・」

桜は傍の岩に腰かけた。

「まあこれであのバケモノともう二度と戦わなくていいんだ。それだけでよしとしょーや」

銀時は神楽の頭をポンポン叩きながら言った。

「そうだな。さて、俺は逃げるとしようか」
「逃がすと思うかい？」

桂が逃げようとするのを沖田が止める。

「ぶわーはっはっはー！！さらばッ！！」

桂はダッシュで逃げていく。

「かアゝつらアアゝ！！！！待てええええええ！！！！」

沖田がバズーカー片手に追いかけていった。

「いつちまった・・・」

土方は呆然と眺めていた。

その後、救急車で運ばれたのは土方・坂本・陸奥。

その他、病院送り一步手前の人達は屯所か新八宅に送られた。

〽
夜
〽

桜は一人屋根の上で思いふけていた。

「結局……この手でトドメを刺せなかったな………」

自分の手のひらを眺める。

「鬼兵隊も現れなかったし、結局は何も出来なかったかな」

ゴロリと寝転ぶと満天の星空を眺めた。

（これで終わったんだ……本当に、終わったんだ……）

そんな時、下から声が聞こえた。

「ちょッ……総悟！？今何してたの！？」

「いや……ちょつと土方さんのマヨに西洋ワサビとハチミツを混ホースラディッシュぜてるところさあ」

近藤が必死に止めているがもうほとんどのマヨネーズが犠牲になったようだ。

「正に鬼の居ぬまに、てヤツね……」

体を起こしてから下に降りる。

その途端、顔に向かって何か飛んできた。

「うわぁ！！？」

バツと反射的にかわした。

飛んできた物は庭を通り越して塀^{へい}に当たった。(×2)
それはベツトリと壁に付着した。

「ちょっと!! 沖田さん! ? 何あれ!! ?」

「シロップ風船&水風船」

「アメリカのアニメ! ?」

更に飛んでくる。

全部水風船だった。

「おい誰かシロップ風船作れ」

「もうシロップ無いです!! 一個目だけに全部使いました!!」

桜は近藤に目配りする。

「助けて近藤さん!!!!」

「よし!! 任せろ!! くらえ水ばくだん!!」

「アンタもかああああああ!!!!!!」

そんな桜に水風船が一つ当たった。

桜の怒りはほぼ最高潮だった。

「デメエら・・・いい加減に・・・しやがれええええええええええええ!!!!!!!!」

桜の怒号が屋敷中に響き渡っていた・・・。

戦いの終焉 全ての終わり（後書き）

桜「はぁー！！終わったー！！」

ここで次回予告ー！！なんてしたいところですが次のハナシでお願いします。

桜「でわでわぁゝ^^」

次回予告（スルー可）

皆さんこんにちわー！夜代衣です！！

いやー、皆さんのおかげで第一部終わりました（＾　＾）

お気に入りをして下さった9名の方、感想を送ってくださった5名の方、本当にありがとうございました！！

桜「本当にありがとうございました」

ほぼ毎日感想等確認してますが、感想が増えるたびにすっごく嬉しくなります（＾　ｖ　＾）ノ

桜「あとお気に入り件数が増えるときもね」

そうそう！

あ、ここでお知らせです。

私は今日で春休みが終わってしまいます。
なので更新時間が夜とか朝1時とかになりました。

桜「今もそんな時あるじゃない」

まあそうなんだけどね・・・
っーか宿題やんなきゃ」

桜「え！？春休みなのに宿題！？」

理不尽でしょー？

小学校の時は無かったのにねー・・・

桜「まあいーじゃない。もうほとんど終わったんでしょっ？」

モチ！！

桜「まあ世間話はそれまでにして、次回予告です」

はい（　　）／

次回！

まさか桜の。。。が登場！？

その事で桜が大激怒！

更には松平片栗虎の気まぐれ？それとも思いやり？
なんと真選組に休暇が与えられて・・・

万事屋メンバーも大奮闘！！

次回！お楽しみに！！

今日入学式あったけどさ、もうメンドクセエエエエエエ！……！（前書き）

桜「またグチ！？」

あっはっはー♪

あ、ちゃんとしたサブタイトルはコッチ←

「怒りと憎しみ」

今日入学式あったけどさ、もうメンドクセエエエエエ！！！

一騒動あつてから、やっとこせで真選組の仕事を再開した。

（土方が居なかったので上手くまとまらなかった）

「で、結局私が見回りなのね・・・」

桜はブツブツ言いながら歩く。

「あー・・・最近だいふく食べてなかったっけ？」

馴染みの和菓子屋の前を通りかかって足を止めた。

何となく食べたくなって店に寄った。

「すぐ食べる分一つお願いします」

「はい」

女性はだいふくを紙で包んで渡す。

「お待たせしましたー。それにしても久しぶりね」

「最近忙しくて・・・」

桜はだいふくを受け取りながら言った。

「どうも」

桜はお金を置いて店を出た。

「うん．．．やっぱりあの店が一番美味い」

なむりとかぶりつく。

ペロりと食べ終わった。

「ふう．．．さつさと帰って仕事しよ」

机に向かってする仕事は正直嫌いな桜。

でも今は溜まりに溜まった仕事を片付けないと、上から大目玉を喰らう。

桜は屯所に向けて、ちょっぴり早足で向かった．．．．。

とある場所で……

「テメエ！！このクソガキ！！どこに目を付けてんだ！！」

「ご、ごめんなさい！！！」

帯刀している男2人とまだ13〜14くらいの子供だろうか。
その子供が必死になって謝っている。

「ごめんなさいで済むなら警察はいらないんだよ！！」

「いや……兄貴？警察呼ばれたら俺ら危ないんスけど……」

控えていた男がさも恐ろしそうに言った。

「分かってるよ！！例えだよ例え！！とにかくガキ、どーしてくれんのよコレ？俺の服がアイスでベトベトじゃねーか？あ？」

「本当にごめんなさいッ！！」

「だア〜かア〜らア〜……」

男は子供の襟首を掴んで持ち上げた。

「ごめんなさいで済んだら俺たちは怒ったりしねーんだよ！！」

子供を殴ろうと男が腕を引いたその時だった。

「いい加減にしなさい。弱いものをいじめて何が楽しいんだ」

男の腕をガツと掴んでいるのは桜。

「なっ・・・!?!」

桜の背後に倒れるあの控えていた男。
フルボッコになって気を失っていた。

男の怯えた顔を見てニコリと笑う。

「真選組でえすゝ少し・・・話を聞きましょうか？」

最後になるにつれて、笑みが妖笑に変わってきた。

男の腕を手刀で叩く。

「イテッ!」

痛みで子供を落とした。

「この女^{アマ}・・・!」

「とっツ!」

桜の回し蹴りが、男の腹を直撃した。

「ぐオ!」

男の体は吹っ飛び、ズササササと地面を擦って転がった。
そこに更に別の2人の男性が来た。

「あー奉行所の方?この二人どっかにやっというて下さい。邪魔」

「あ、へい！」

二人の男共はズルズルと引きづられて行った。

「大丈夫？怪我してないよね？」

「は・・・はい！大丈夫ですっ！！」

桜の差し出した手を握って立ち上がる。

「名前は？」

「白矢^{しやい}」

「親は？」

「・・・僕、家出したんだ・・・」

「え？」

「だって、親がいつも僕に口うるさく言うから・・・」

「親、心配するよ？」

「僕の心配なんかしてくれないッ！！」

突然の大声に桜も一瞬ビクリとした。

「親はいつも・・・僕のお姉ちゃんを探してるんだ・・・」

「お姉ちゃん？」

桜は顔をしかめた。

「うん。昔、生き別れたって聞いたことあるけどよく知らない。親に聞いても教えてくれないし」

「でも、きつと心配してるって。さっさと帰^{かえ}んな。ここらは江戸でも危ない場所よ」

桜は白矢の頭到手を載せるとさっさと去ってしまった。

「何だろう・・・凄くスッキリしちゃった。もう帰ろっかな」
かえ

白矢も帰っていった。

く万事屋く

「え？人探ですか？」

新八が二人の客にお茶を出しながら聞き返す。

「はい・・・もう無理かも知れませんが・・・」

女性はどこか弱々しく言った。

「で？その探し人の特長は？」

銀時がダルそうにそう言うと、女性の隣に座っていた男性が口を開いた。

「・・・・彼女を捨ててから１６年経ちました・・・・もう、特長といえる特長が無いほど幼い頃に・・・・」

万事屋メンバーが目を見開いた。

「そりゃあどーゆーこった？」

「私達は昔、ここよりもずっと遠くの山間の村に住んでいました。私達はそこで生まれ育ち、共に結婚して子を産みました。しかし、男の子が欲しかった私達は赤子の彼女を――捨てました・・・・」

バン！

神楽が強く強く机を叩いた。

「そんなのオマエらの身勝手ネ！！それに１６年間も放置しとして生きてる保障すらないアルヨ！？」

「分かってます・・・・しかし、私達も何年も探しました・・・・」

それを聞いて神楽は「どういう事ネ？」と聞いた。

「あの子を捨てて2年後に息子が産まれました。私達はその子を育てる内に捨てて子の事が気になって……もし生きているのなら育てようと決心しました」

女性がポツリと言った。

「それが、彼女を捨てて5年の経った日でした」

「5年って……赤子が5年も経って生きているわけが無い!!」

新八は怒りを露に怒鳴った。
そんな新八を銀時は宥める。

「その村に行つて、彼女の姿を探しましたがやはり見つかりませんでした。そしたら、村に居た人が私達に気づいて、『赤子を探しているの?』て聞かれたんです」

「で、どうなったんだ?」

「はい、と答えたらその人は『その子は生きている。でももうこの村には居ない。侍が連れて行つた』って……」

銀時の目が少し細められた。

「結局、あちこちを探しましたが結局は見つからず、今も生きていると信じて貴方達を訪ねてきたんです」

男性は苦しげに言った。

「あのなア……」

銀時が何か言おうとした瞬間、ピンポンとインターホンが鳴った。

「はい」

新八が出ると、そこには小さな男の子がいた。
桜が助けたあの少年・・・白矢だ。

「あの・・・ここに夫婦の客が来ていませんか？」

「ああ・・・来てるよ？」

「僕の親なんです。ちよつと人に聞いてここに居るって聞いたから・・・」

「そうなんだ。まあ、入って」

新八は親切に中に入れた。

「お父さん！お母さん！」

「白矢・・・！」

女性がスクリと立ち上がる。

「それが・・・息子アルか？」

「はい・・・」

神楽の問いに女性は少し頷きながら言った。

「で、話を戻してもいいか？あと新八、このガキにオレンジジュースでも出しとけ」

「はい」

新八は台所に姿を消した。

「で、さっきの話に戻るけどよ？お前ら捨てられた奴の気持ち考え

たことあるか？」

銀時がそう言うと二人は黙った。

「俺の仲間にも親に捨てられた奴が居る。そいつは親を殺したくらいに怨んでいた。お前らが捨てた子供もそーなんじゃねーの……」

銀時はここである事に気がついた。

江戸から離れた村で――

赤子のときに捨てて――

5歳の時に侍に連れて行かれて――

16年間会っていない――

(……桜……?)

当てはまりすぎる。

銀時は二人の顔と、白矢の顔をジッと見た。

(どこか桜に似ているところがある……まさか本当に……!!)

新八が部屋に入ってきた。

白矢の前にオレンジジュースを置く。

「で、何か手がかりありましたか？銀サン」

「手がかりつつーか……俺分かったかもしんねえ。つつーか間違いない無かったらアイツ連れてった侍……俺だし」

この一言に皆の視線が銀時に集まった。

「今から呼ぶ事だつてできる。だが……さっきも言ったようにあいつは親を怨んでる。それでもいいな？」

二人はコクリと頷いた。

「ま……まさか銀さん……!!」

「新八、とつとと電話してこい」

「は……はいッ!!」

新八は急いで電話を取る。

トウルルルルル……

しばらくコール音が響いた。

少しして、誰かが電話に出た。

『もしもし、こちら真選組です』

「あ、その声は山崎さんですね？ 僕です。新八です」

『あー新八君。どうしたの？ 事件？』

「まあそれに似たようなモンなんですけど……桜ちゃんいますか？」

『隊長ならまだ見廻りから帰ってないけど……何か伝言とかあるんだつたら伝えとくよ』

「じゃあ、帰ってきたら『急いで万事屋に来て欲しい』って伝えてください」

『分かった。じゃあちゃんと伝えとくよ』

「ありがとうございます」

新八は電話を切った。

「どうした？」

「まだ帰ってないようです。帰ってきたら直ぐこちらに来てもらうように言っておきましたから」

「そうか……しばらく待つか……」

銀時はソファーに深く腰掛けて空を仰いだ。

く真選組屯所く

「どうした山崎？事件じゃねーのか？」

「はい。新八君からでした」

「新八・・・？ああ、あのメガネか」

土方は煙草をふかしていた。

「なんか都野隊長に用があるそうです」

「アイツに・・・？」

土方は少し疑うような目をした。

「どうかしましたか？」

「イヤ、アイツからコツチに電話してくるなんて珍しいからな。まずありえねえし」

「そうですね」

なんて会話をしていると桜が帰ってきた。

「ただいま帰りました」

少しだけ上機嫌な桜。

久しぶりに蹴ったりできて少し鬱憤うつげんが晴れたようだ。

「都野隊長、帰ってきたばかりでこんな事言つのもアレなんすけど・・・」

「何？」

「なんか、新八君からの伝言なんですけど急いで万事屋に来て欲しいって」

「万事屋に……？分かった。ちょっと行ってくるね」

桜は再び出かけた。

「……………」

「どうしたんですか？副長？」

「イヤ……ちよいと胸騒ぎがな……まあ気にすんな」
「……………？はい……………」

土方はどこか腑に落ちないような顔で去っていく。
そんな土方を山崎は不思議そうに見つめていた。

く桜く

（何だろう・・・？アイツから電話してくるなんて珍しい・・・）

軽く走りながら万事屋に向かう。

いくつかの道を曲がって、ようやく看板が見えた。

「ふう・・・着いた着いた」

階段を登ってインターホンを押す。
中からハーイと声が聞こえた。

「ごめんね桜ちゃん。忙しいのに・・・」

「いいよ。急ぎの用なんでしょ？」

「まあ・・・ね・・・」

新八の顔が暗いのに気づくと少しだけ首をかしげた。

「・・・銀さん・・・来ました」

「久しぶり、銀時。・・・あら？お客さん？」

桜はそこに白矢を見つけて「あっ」と声を漏らした。

「さっき助けてくれた・・・」

「白矢・・・だっけ？」

桜は少し頭をかきながら言う。

「で、銀時何の用？」

「——単刀直入に言うから……よく聞けよ」
「……うん」

銀時の目がいつも以上に真剣なので、桜も真剣な表情で頷いた。

「コイツらが……お前の……『家族』だ」
「……は？」

分らない。

そういった表情で聞き返した。

「コイツらがお前の家族だよ」

「嘘……！」

ガツと声を荒げた。

明らかに怒りが見れる。

「嘘だ……！私に家族は……居ない……！」

「嘘じゃねーんだ。コイツらの話とお前の過去がピッタリ合っちゃう。それに顔立ちもよく似てるし……」

桜の体がガタガタ震えた。

「——本当……なのね」

「本当アル。本当に、桜の家族アル」

桜は刀に手をやった。

「殺すッ!!」

刀を勢い良く引き抜くと大きく振り上げた。

「桜ちゃん!! 落ち着いて!!」

「うるさいッ!!」

桜は新八を蹴り飛ばした。

「ぐはアッ!!」

新八は外まで蹴り飛ばされた。
柵にぶつかって止まる。

「桜! 落ち着けて!!」

「放せ銀時イ!!」

銀時が桜を羽交い絞めにして止める。

3人は驚いたような・怯えたような目で桜を見つめる。

「コイツら・・・殺してやるッ!! 私味わった苦しみを・・・
全部全部・・・!!」

桜の刀が黒く染まりそうになる。

それを抑えているのが『怒り』や『憎しみ』だというのが余りにも
可哀想だ。

「・・・・・・・・さく・・・・・・・・ら・・・・?」

女性が呟いた。

「アンタ達に……アンタ達なんかはその名を呼ばれたくない！
！」

桜は今すぐにも銀時から逃れて斬ってやりたかった。
殺しなかった。

「よくもゆうゆうと私の前に姿を現せたもんだ！！捨てたくせに・
・私を殺そうとしたくせにイイイイ！！」

桜は完全に理性を失いかけていた。
ただ、本能のままに斬ろうとした。

「……ッ神楽！！急いで真選組の電話しろ！！急げ！！」
「了解！銀ちゃん！！」

何も出来ずオロオロしていた神楽は急いで電話を手についた。

『へいもしもし……こちら真選組でさあ』
「サドルか！！？急いで万事屋に来て欲しいネ！！」

神楽の酷く慌てた様子に、電話の向こうで沖田は眉をひそめた。

「今そつちには桜が居たろい？」
『その桜がヤバイネ！！！！』
「どういう事でさあ？」

『桜の本当の家族が来て……！そしたら桜がメチャクチャ怒って今殺そうとしてるアル！！銀ちゃんが止めてるけど何時まで持つかわからないネ！！だから、急いで来て欲しいネ！！！！』

「……分かった。なるべく早く行く。俺たちが着くまでしつかり止めてろい」

『分かったネ!!』

向こうでは電話が乱雑に切れた。

「どうした総悟？お前にしては神妙な面持ちだったじゃねえか」

近藤が背後から話しかける。

「近藤さん、実は……」

沖田は神楽に言われた事をそのままソックリ伝えた。

「なっ!!！？本当か!!?」

「本当でさあ。とにかく急がねーと桜が一般市民を殺してしまいますぜ」

「そうだな……おいトシ!!ちょっと来てくれ!!」

近藤は少し遠くのほうに声をかける。

「どうした近藤さん？」

「桜がヤバイらしいんだ!!説明は車の中ですから今は早く!!」

「分かったから落ち着け!!」

土方は慌てふためく近藤を一喝した。

その後3人は車に乗り込みすぐさま万事屋に向かった。

「万事屋」

桜の怒りは止まるところを知らなかった。

（クソッ・・・落ち着け・・・!!）

黒く染まりかける刀。
変化しかけるその瞳。

「桜・・・!!」

「殺す・・・!! 私を殺そうとした貴様等を殺してやるッ・・・!!」

桜はギッと白矢を睨んだ。

「テメエなんか・・・助けるんじゃない無かった!!!」

白矢の目からは涙がこぼれる。
恐ろしかったのだ。

その時、銀時と神楽だけはその音を聞いた。

真選組のパトカーの音が――

真選組のメンツは急いで万事屋に向かう。
階段を上がった先に倒れている新八を見つけた。

「し．．．新八君！！大丈夫かい！？」

近藤が少し体を揺らすと意識はあつたのか直ぐに近藤の服を掴んだ。

「桜ちゃんを．．．．．早く．．．．．止めて．．．．．」
「分かつてる！」

近藤は新八を寝かせると中に入った。

「よおゴリラ！！急いで止めてくれ！！もう持たねーよ！！」

3人は頷くと、桜に近寄った。

ここからは水のごとく流れるような作業だった。

土方が桜の手から刀を奪った。

沖田が首の後ろのほうを叩き、動きを鈍らせる。

近藤が腹を殴って気絶させた。

桜は銀時の腕の中でダラリと力なく倒れこんだ。

「やっと治まった……」

銀時は桜を近藤に預けた。

「悪かったな万事屋。桜が……」

「気にすんな。コイツは理性を失った途端ああなるんだ。鬼と獣の間をさまよってるようなもんさ」

銀時は疲れたのかソファーにドサリと荒々しく座った。

「本当にすまなかったな。ここを直す金や新八君の治療代はこっちが出そう」

「たりめーだヨー！！そっちが出さねーと怒るぞコノヤロー！！」

神楽が傘を向けて叫んだ。

近藤と沖田が先に出て行つた。

土方も続いて出て行こうとした足をピタリと止めた。

「アンタ達が桜の家族か・・・？」

「は・・・はい・・・」

睨まれるような鋭い視線におもわず怯える。

「アイツを捨てといてよくもまあアイツに会えたもんだな」

「・・・」

「悪いが・・・アイツには二度と会わないでくれ。俺たちはアイツを殺人鬼にはしたくないんでな」

そっぴい残して立ち去つた。

「・・・それもそうだな。土方君の言う通りだ。俺もアイツを殺人鬼にはしたくねえしアイツの苦しむ姿は見たくないんでな。ワリイがもう帰ってくれ」

銀時は一度も目を合わせずに言つた。

「できれば二度と・・・俺たちの目の前に現れないでくれ」

今日入学式あったけどさ、もうメンドクセエエエエエエ！！！（後書き）

あー・・・つかれたッ！！

第二部スタートですッ！！

ちょっと展開速すぎるように思えるけど実はそうでもないんですね

楽しみにしてください！！

委員会なんてやるんじゃないかった！！なんて後悔しても後の祭り。（前書き）

桜「委員会って……えゝえゝえゝえゝ！！？」

そんなにダメか？私がやんの？あ？

委員会なんてやるんじゃないかった！！なんて後悔しても後の祭り。

目が覚めた桜は布団に横になっていた。

ガバリと起きたら、まだ腹の辺りに痛みを感じた。

「イツ……………」

片手で腹を押さえる。

（あ…………そうだ…………私…………）

先程何があつたのかをゆつくりと思い出してみる。

「殺そうとして…………銀時が止めてくれて…………近藤さん達が来て……………」

ふと横を見れば、自分の着ていたジャケットとスカーフが綺麗に折り畳んで置いてあつた。

髪紐もその上に置いてあつた。

ここで桜はここが自分の部屋では無い事に気がついた。

「ここは土方さんの…………部屋…………？」

そう呟いた時に、ガラリと襖が開いた。

「おお桜！目が覚めたか」

近藤が桜の傍らに膝をついた。

「近藤さん……」

「悪いな。痛かったろ？もう大丈夫か？」

「……はい」

近藤は桜を優しく見つめた。

「——すみませんでした……」

ボソリと謝った。

「どうしてお前が謝るんだ？」

「だって私……!!」

「どう考えても悪いのはあっちだ。お前が気にする事じゃないさ」

その時、部屋に入ってきたのは土方だった。

「土方さん……」

土方は手に水の入ったグラスを持っていた。

「飲めるか？」

「はい」

差し出された水を一気に飲み干す。

少しばかり気持ちが悪くなった。

「……アイツらがお前を捨てたんだ……」

「らしいです。でも・・・私に家族は居ない・・・」

グラスを持つ手が震えている。

信じたくないのだ。

嘘であつてほしかった。

「私に親なんて要らない・・・」

落ち着きを取り戻してきた桜だったが、また憎悪が膨れ上がってきた。

顔に深い憎しみが見える。

「アイツ等は自分の勝手に私を捨てて、自分の勝手に私を拾おうとする。ムカツクんです・・・今にも殺してやりたいくらいに・・・」

近藤も土方もその言葉を黙って聞いていた。

「それに、よく考えれば私を拾ってくれたのは忍葉^{しのは}だし、名付け親は忍葉のお母さんだし・・・育ててくれたのは銀時達だもん・・・。何もしなかったアイツらにとにかく言われたくないッ・・・

！！」

バリィン！

桜が持っていたコップが割れた。

いや、正しくは『割った』だろうか。
これには近藤も土方も目を丸くした。

桜の手からガラスの残骸と血が落ちる。

「バツ……お前何やってんだ!!」

土方は咄嗟に桜の細い手首を握った。

手のひらを見ればガラスの破片がいくつも刺さっており、とても痛々しかった。

「近藤さん！そこに救急箱があんだろ！？ちょっと取ってくれ!!」
「ああ！」

近藤はタンスの上に置いてあった箱を持ってくる。

「……………!!」

桜は歯をギリリと喰いしばって、その手をジッと見つめていた。

「桜……苦しいのは良く分かる。けどな、その怒りや憎しみで自分まで傷つけるな……」

近藤がそつとその頭に手を載せた。

桜はその手の重みに任せて深く俯いた。

その間に、土方は手に刺さったガラスを抜いて、包帯を巻いている。

「……幸い、怪我はほとんどしてねえ。ただ、一箇所だけ深い傷があるから気をつけるよ」

包帯を巻き終わると、布団に落ちてしまったガラスを拾って丁度机に置いてあった紙にくるんだ。

「まあ、しばらくこの事は忘れとけ。まあなんだ、気分転換にテレビでも見てみつか」

近藤はリモコンを手に取ると、テレビをつけた。
ニュースをやっていた。

「あれ？とつつアんじゃないか」

土方はテレビを見て言った。

『えー、最近江戸の愚民ぐみん・・・じゃなくて市民は俺達警察に何でもかんでも頼みすぎだア。と、そこでよ？明日から一週間、真選組を休みににする！！』

「「え！！？」」

近藤と土方は思わず大声を出す。

『と言うわけで近藤コシラ、どーせ暇をもてあまして見てんだろ？とにかく休みだからなア。故郷にでも帰ってろ』

その一言を最後にニュースの話題が別のもの変わった。

「休みって・・・故郷に帰ってろって・・・」

近藤がそう呟いたとたん、バタバタと誰かが近づいてきた。
一人二人じゃない。

沢山。

「局長オオオオオ！！！！ニュースみましたかああああ！！！」

「やったー！！自由だああああああ！！！！」

「久しぶりに武州に帰りましょーよ！！！」

皆が楽しそうにする。

「・・・・折角の休暇ですし、マジで帰りやせんか？武州」

沖田がサラリと言つてのけた。

「俺もトシも別に異論はねえが・・・・桜は・・・・」

「ああ、私は行きませんよ。武州^{アツチ}には特に思い出なんてありませんし。

それに大丈夫ですから」

いつものように笑う桜を見て少しばかり胸のつつかえが取れた気がした。

桜は布団の傍に置いてあった自分のジャケットとスカーフを手にとって土方の部屋を出た。

明日からの一週間、何をしようかばかり考えていた。

村に帰ろうかと思ったが、昔の事もあるので帰る気が余りしなかった。

だが遊びに行こうと思えばまた奴等に会うのではないかと思った。

（やっぱ屯所にいよ・・・）

自分の部屋に入ってジャケットとスカーフを乱雑に置くと、タンスに近づく。

先程まで使っていた髪紐がもう千切れそうなので、新しいを出そうとしているのだ。

すると、小物が入っている引き出しの奥の奥に一つの封筒があった。

「・・・？何だっけコレ？」

髪紐の事も忘れて縁側に出る。

持ってきた座布団ざぶとんを二つ折りにして、そこに頭を乗せて寝転んだ。

封筒を開けてみると、中には数枚紙切れが入っていた。

それは写真だった。

「——あ・・・」

一番最初に目にはいった写真には、銀時・桂・高杉・坂本、そして桜の五人が写った写真だった。

「・・・何コレ・・・」

桜はいつのまにか笑っていた。

坂本が銀時と高杉に踏まれて、桂が何か手に持っている。その様子を見て桜が笑っている。

「ふ．．．ふふふふ．．．」

桜は桂が手に持つてる物の文字を見て笑う。

「坂本フルボッコ大作戦」

「こーゆー訳か。あん時はまた何かやったんだろーなーとは思ってなかったな」

他の写真も皆が皆笑っていた。

次に見たのは写真の下の開いたスペースに文字が書かれていた。

「高杉にイタズラ大作戦（大成功）」

「あーコレか．．．楽しかったな．．．」

内容：とにかくイタズラをする。

結果：高杉の服がビショビショに濡れた。後でメチャクチャ怒られた（殺されそうだった．．．）

他にもこんなのがあった。

「銀時をビビらせる。ユーレイ大作戦」

「ツラにハゲのカツラをかぶせてみた」
「夕食を全て桜の嫌いな食べ物にする」

桜は写真を一枚一枚見ていった。

そして、最後の二枚。

一枚は皆で酒を飲み交わしていた。

もう一枚はまともな写真だ。

皆でちゃんと並んで撮った写真だった。

「・・・・懐かしいな」

まだ昔を思うには早すぎる歳けども、とても懐かしく思えた。

（この四人が私の先生で兄貴みたいな存在なんだよね・・・・）

桜はいつの間にか眠っていた。

夕方ごろ

桜の様子を見に来た近藤と土方は、庭に落ちている物を見た。

「なんだこれ？」

近藤がヒョイと拾うと、あの写真だった。

「近藤さん、コレ……」

「ああ、桂と高杉と……万事屋……」

「アイツが白夜叉って本当だったんだな」

二人はある写真を見て思わず吹きだした。

「な……なんだこれ！万事屋の奴ユーレイって……」

「これで一つ桂と高杉の弱み握れたんじゃないか？」

土方は笑いを必死に抑えながら写真の飛んできたであろう方向を見る。

そこでは桜が眠っていた。

「……寝てんのか？」

近藤がそつと忍び寄ると、桜の手の中にある写真を見た。
一番最後に見たあの写真を大切そうに持っていた。

「やれやれ……」

二人は落ちていた写真を全部拾って、封筒に入れてやった。

「……コイツの家族はこいつらかもな……」

土方は、桜がとても大切そうに持っている写真を見て呟いた。

委員会なんてやるんじゃないかった！！なんて後悔しても後の祭り。（後書き）

いやさ、やる気なかったけどさ？もう誰かやないと進まねーしよ？
どうせ私は内申低いし？こんぐらいやってやらア！！って思っ

桜「え？でも作者は係とかは全部積極的にやってるし、ほぼ全部の
行事に参加してるじゃない」

あゝ．．．．あゝゝゝ！！そうだった！！やっぱやるんじゃない
かったコンチキショー！！！！

桜（正に後の祭りだわ．．．）

今日某コンビニに行ったらプリンのあのふたに銀魂の映画の事が書いてあった

桜「サブタイマジで!!?」

うん。ちよつとコンビニ行って何買おうかな?て見てたらアレ?銀魂じゃね?て見つけた。

で、何かクイズがあった。

ケータイでその答えを入力するとチケットが貰えるとか……。

桜「買ってこよう!チケットの為に!!」

いや、もうチケットあるからね?

今日某コンビニに行ったらプリンのあのふたに銀魂の映画の事が書いてあった

あの後。

夕御飯を食べてから直ぐに寝てしまった。

そして次の日……

「じゃあ、留守番よろしくな」

「はい。任せてください」

門の前でみんなを見送った。

「さて……と、なあにしようかな……」

門を閉めて軽く体を伸ばす。
それから中に入った。

こんなに静かなのは初めてかもしれないと桜は思った。

いつも喧嘩に事件と慌^{あわ}ただしい真選組。

一週間も休みがもらえたのはきつと初めてだ。

「……久々に遠出してみようかな」

そう呟^{つぶや}くと自分の部屋に入った。

今着ている羽織を脱いで、それよりも丈の長い羽織をはおった。
もちろん、その上に真っ赤な帯紐。

そして、編笠^{あみがさ}を手にとった。

「貴重品は全部金庫に入れたし……よし、大丈夫」

草履を履いて外に出る。

今日は少しばかり日差しが強い。

門を閉めると編笠をかぶった。

（確か一つ山越えたところに小さな村があつたわけ？あそこ行く前
にある茶屋のお菓子美味しいんだよね……）

桜は銀時に似て甘いものが好きだ。

昔は甘いものなんて滅多に食べられなかったからだ。

桜は山に向かって歩いた。

人々は忙しそうに道に行く。

桜は人が少ない路地裏を歩く。

時折博打はくちでもやっているのか、声が聞こえた。

「……ここはホントは禁止なんだけどね……」

めんどくさいから無視。

いちいち相手にする気にもなれない。

少しして路地を抜けると大通りに出た。
そこを直進すれば山のふもとに出られる。

「にしても……暑あつ……まだ春なのに……」

丈の長い羽織を着なかったら日焼けするんじゃないかと思った。

「あーお姉ちゃん!!」

聞いたことのある声に振り向く。

「ホントだ！お姉ちゃんだ！！」

「杏！蓮！」

こないだの姉弟だ。

「久しぶり。どう？コッチの暮らしに慣れた？」

「うん！」

「アッチじゃほとんどない物も沢山あるんだね！！例えばラb・・・

」

「言っなあああ！！」

蓮の言葉を阻止する。

「はぁ・・・で、新しい家はどつ？」

「お姉さん凄く優しい！！」

杏が飛び跳ねながら言う。

「蓮、凄く楽しい！！」

蓮も杏と似たような行動をとる。

「そっか」

「お姉ちゃんはお出かけー？」

「うん」

「どこいくの？」

「山いつこ越えたトコ」

二人の頭を撫でてやる。

『バイバーイ!!』

「バイバイ」

相変わらず元気な双子だと思った。

しばらく歩いてやっと山のふもとに着いた。

山道に入ると静かだった。

先程までの町の騒がしさが嘘のようだった。

今聞こえるのは風が木の葉を揺らす音。

今匂^{にお}うのは土と草の匂い。

土を踏む感触。

全てを楽しむ。

ゆっくり歩いて1時間。ようやく山を越えた。

すると先に人だかりができていた。

（あれ？ここってこんなに人気だったわけ？）

そう

ここが桜が行こうとしていた茶屋である。

人だかりをかきわけて店を見ている。
中にいる人たちが慌ただしく動いていた。

「どうしたのかしら？」

編笠を上げながら呟くと、人だかりの最前列に居た人が教えてくれた。

「何だ？あんた知らねえのか？さっきここで事件があつたんだ」
「事件？」

事件と聞いて真選組の血が滾る。^{たぎ}

「ああ。この人だかりはただの野次馬さ。ま、俺もだけどな」
「ふうん……」

いつもなら手帳を見せて入っていくのだが、松平に、

『お前ら……事件に関わんな』

と、釘を刺されている。

なので手を出す事ができない。

（とつつァんに逆らったら後が無い……）

店の中を覗いてみると、荒らされたような・暴れたような跡があった。

「あ！桜ちゃん!!」

中にいた店娘が声をかける。

「どうも、お久しぶりです」

「久しぶり」。にしても困ったモンやわ・・・」

店娘は奉行所の者を横切つて桜の前にくる。

「折角来てくれたのに、わるいなあ」

「いえ、大丈夫です。・・・何があつたのですか？」

「いやな、店に来た客が急に攘夷志士だつて叫んでな、今度は金によこせときたんや。姉さんあねが嫌やつてゆーたら暴れだしてなあ・・・」

「そいつらは何処に？」

「それが分からのよ。奉行所に連絡したらどつか行きよつた」

そつ店娘が言つた直後、後ろから奉行所の人が店娘に声をかけた。

「あの、貴女のお名前を聞いていなかったのですが・・・」

「あ、すんまへん！ウチは雪邑凛ゆきむらりんていいます」

「じゃあ雪邑さん、あなたは何をしてましたか？」

「えと・・・ウチは裏のほうで皿洗いしてました。そしたら叫び声が聞こえて・・・で、アイツらが暴れた時には他の人連れて裏手から外に・・・」

凛は裏手のほうを指差しながら言つた。

「で、奴等はどっちの方向に逃げましたか？」

「ちよつと分かりません。なんせ、奴等は連絡した途端直ぐ逃げま

したんで。

「・・・直ぐではないですね・・・連絡した姉さんあねが斬られたんですから・・・姉さんあねは大丈夫なんですか？」

「ああちよいと出血は酷いが命に別状は無いそうだ」

「ホンマですか。よかった・・・」

桜は何かに気づいたのか、凜を呼んだ。

「凜さん」

「ん？何や桜ちゃん？」

「ちよつと・・・」

桜は手招きする。

そして群集から少し離れた場所に移動する。

「どないしたん？何かわかったんか？」

「予想ですけど・・・まだこの辺に居ますよきつと」

「嘘やろ！？」

「嘘じゃないですよ。まだ匂うんですよ」

「・・・？何が？」

「鉄の匂い・・・血の匂いがね」

桜はキョロキョロ辺りを見渡す。

「まだこの辺で血の匂いがする。多分どこかに隠れて逃げる瞬間を見計らってるんでしょうね」

この辺は隠れられそうな草木が多い。

「素人は騙せても私は騙せないわ」

編み笠を取ると、フリスビーでも投げるかのように傘を投げる。

バスッ

と、何かに当たった音がした。

「出て来なさい。そこに居るのは分かってんのよ」

ガサリ・と草が揺れたかと思うと大柄な男が三人。

「あ！コイツらや！！」

凜が声を張り上げると、奉行所の人気がついた。

「テメエ・・・女！^{ガキ}何で分かった！！」

「フン・・・その刀についた血の匂い。それが私に居場所を教えてくださいわ」

男の一人が殴りかかってきたが、ヒョイとかわした。

（え〜と・・・確か戦っているのは・・・）

桜は松平の言葉を思い出す。

『いいか？帯刀するのは構わねえ。ただ〜し！戦っているのは目の前で人が襲われた時と自分が襲われた時だけだ。いいな？』

「これは自分が襲われた時・・・でいいのよね」

ここからは本当に一瞬だった。

ゴッガッドッ

三人はそれぞれ蹴りを一撃ずつ浴びて倒れた。

「死に晒せ」

自分の編笠についた砂を落しながら言った。
そして深くかぶると、来た道を逆そうする。

「誰だったんだあの人は……」

奉行所の人はずばいいた。

「真選組や」

凜がニッコリ笑いながら答えた。

「江戸」

「あゝあ．．．暇」

桜は江戸に戻って、ブラブラ歩いていた。

「遠出したのに（それほど遠くに行っていない）コレじゃあな．．．もついでーや。屯所に帰って寝よ．．．」

愚痴をこぼしながら歩いていると、角を曲がってきた人にぶつかった。

「イタタ．．．あ！ごめんなさい！だいじょ．．．」

桜は伸ばした手を引っ込めた。

「何だ、アンタか」

冷めた目でぶつかってきた人を見る。
その人は桜の母親だった。

「謝って損した。――殺されなくなかったらとつと帰れ」

桜が怒りを殺して横を通ろうとしている。

「ま・・・待って!!」

母が声をかけるので歩を止めた。

「何だよ・・・」

「・・・ねえ、私達と一緒に暮らさない・・・？だって、女の子が刀を持つなんてはしたないし・・・」

「ふざけんな!!」

大声に、陽気だった町が一瞬で静まり返った。

「女が刀を持つなんてはしたない？その切欠きっかけ作ったのは誰だと思ってるんだ!!全部テメエ等だろうが!!」

桜は踵を返すと去っていった。

「ふざけんなよ。二度と話しかけんな。できれば・・・死んで」

ピタリと足を止めて少しだけ振り向く。

その目はかつて無い程に冷たい。

「もう次はないから。次会ったら構わず殺す」

桜が去った後、母は小さく泣いていた。

（そうよね・・・今更こんな事言ったってダメよね・・・だって

て私は禄ろくでも無い親だもの・・・いえ、もう親でも無いわね

「あームカツク」

不機嫌そうに歩く。 実際不機嫌なのだが。

「虫が良すぎるのよ。捨てといて、よくも言えたことだわ」

屯所の近くまで来ればもうほとんど人は居ない。
静かな所に怒りの混じった声が響く。

屯所の門前に着いた。

「……アイツ等が捨てなかったらどうなってたんだろう……」

門を押しながら少し考えてみる。

刀なんて持つてなくて――

銀時達とも会わなくて――

真選組には入って無くて――

今とは全く違う生活していて――

別の幸せを手に入れていたのかも――

「……何考えてんのよ。しょーもない」

桜は中に入ると自室に真っ直ぐ向かった。

「何で休みの日にあいつらの事を考えてんのよ。私の馬鹿」

布団を敷くと、羽織と編笠だけ脱いで、布団に寝る。

「今が幸せなんだ……」

今日某コンビニに行ったらプリンのあのふたに銀魂の映画の事が書いてあった

あーめんどくせえ……

今日眼鏡かつてもらいました。

ほとんど使わないけどねーw

桜「オタク要素が増えたわね」

黙れざけんな殺すぞコルア

桜「だってオタクじゃない」

黙れー！！！！！！

(喧嘩中……また次回！！)

映画公開まで一週間切ったアアアアアアア！！！（前書き）

まずは謝罪、短くて&遅くなってすみませんツツしたー！！！！

桜「学校が始まって急に遅くなったよねw」

シャラップ！！

とにかくどうぞー！！

映画公開まで一週間切ったアアアアアアア！！！

ねえ、僕を見て

「お帰りなさい。お母さん」
「ただいま、白矢」

あ、またあの顔
白矢はそう思っていた。

「どうしたの？」
「・・・あの子に会ったの・・・」
「——ダメだったんでしょ？」

母はゆっくり頷いた。

（嗚呼、いつもそうだ。姉の事しか考えてない……）

白矢は不機嫌そうにそっぽを向いた。

「お父さんは？」

本当はどうでもいいのだが聞いてみる。

「あら、まだ帰ってないの？」
「うん」

母は困ったように顔をしかめた。

「しょうがないわね、じゃあ、父さんが帰ったら御飯食べに行こうか？」
「うん！」

嗚呼、やっと僕を見てくれた。

く桜く

「・・・・・・・・・暇」

テレビは昼ドラ。
正直つまんない。

「お昼にしようかな」

テレビを切って、縁側に出る。
そこから台所へと向かった。

「ん・・・・・・・・なんもないし・・・・・・・・」

冷蔵庫をバンツと閉じた。

「しゃーない、買いに行くか・・・・・・・・。てかまた出かけるんだっ
たら行く前に確認しとけばよかったかな」

草履ぞうりを履いて、外に出る。

誰が見てもめんどくさそうだ。

「あれ？桜ちゃん」

声をかけられて、振り返る。

「あ、新八。どうしたの？買出し？」
パシリ

「いや、もう普通にパシリでいいからね？。買出しでフォローしな
くてもいいからね？逆に悲しくなるからアー！」

「ふうん。で、結局パシられたんだ」
「はい……」

桜は呆れたように笑った。
そして一緒に歩き出す。

「そういえば真選組休みだっけ？」
「そ、とつつアんのせいで淒く暇。まあ、それで今こうして買出し中」

「大変だね、真選組も」

「ふふ……もう慣れたわ。どちらかと言うと万事屋の方が騒がしそうだもの」

「もうホント、毎日が戦争だよ」

諦めたように笑う新八。

「あ、そうだ！桜ちゃんも一緒にお昼どう？」
「え？いいの？」

「大丈夫、一人増えたくらいなんとかなるよ！」

「じゃ、お言葉に甘えちゃおうかな」

てなわけで、桜は新八とスーパーに行つて買い物。
それから万事屋へ……

「万事屋」

「という訳で銀さん、もう一つお皿だしてください……」
「なあに勝手にやってんだアアアア……！」

顔面にドロップキックを喰らった新八。

「何すんですか銀さん……！」
「それはこっちのセリフだ……！主役置いといて何勝手に決めてんの……！？」
「……作者の……！」
「知りませんよそんなの……！それから作者から手紙が……」
「あ……！」

（手紙観覧中……）

「ふざけんな……！何このとってつけたような設定……！」
「いいから小説続けますよ……！」

うん、ホントに続けますよ。

「どーしてくれんの俺達の貴重な金！！桜の分合わせたら一人分多く金かかるじゃん！！」

「桜ちゃんの分は桜ちゃんが買いました！！！！だからギャーギャー言わないでくださいよ！！」

30分程度、言い合いが続いていた。

それを止めたのは神楽だった。

「銀ちゃん、新ハイ、まだアルカ？私、お腹空いたネ」

「ああ、ごめん神楽ちゃん。今作るから」

新八は真っ先に喧嘩を止めて、料理を作り始めた。

銀時も渋々手伝う。

神楽は先にリビングに戻った。

「なー桜、もし今事件が起こったらどうするアルか？」

「何もしない。なんかしたらとつつアんに怒られるから殺される

「・・・見捨てるアルか？」

「そうなるかもね。私達が手を出していいのは目の前で誰かが襲われた時・自分が襲われた時だけ。それ以外で動くなってね」

ソファーに腰掛けて向かいの神楽に話す。

「できましたよー」

「いや、早くね？」

入ってきた新八にすかさずつつこむ桜。

「早いも何も・・・カップ麺だから」

熱々のお湯が入ったやかんを持ってくる。

「あー・・・そうだった」

新八はエコバックからカップ麺をいくつか出す。

「銀さんが『●王』で神楽ちゃんが『ユウフオウ』でいいんですよ？」

「今思っただけなんで俺のだけ伏字？」

「多分、思いつかなかったからじゃない？」

桜は自分で買ってきた弁当を出す。

「あ！桜、そのオレンジくれヨ！」

「はいはい」

神楽は『ユウフオウ』にお湯を入れ、ふたをした。

「にしても・・・流石にあの大きな屋敷に一人って淋しくない？」

「いや、全く。でも静か過ぎて不気味ってのはあるかな」

桜は虚空を見つめながら言った。

「俺はあのうるさい連中が居なくなってせーせーしたぜ。あ、でも一週間後に帰ってくるか」

銀時はタイマーをセットして、ゆったりと待っていた。

「にしても一週間どうしようかな・・・」

「何もやる事ないんですか？」

「うん・・・そうなのよね。休みって言われてもなーってかんじかな」

「——！だったらしばらく万事屋で働いたらどうネ？」

神楽の発言に、反論したのは銀時だった。

「ちょっと神楽ちゃん！？何言ってるの！？働けるわけねーじゃん！！俺金払えねーからね！！？」

「ボランティアならいいんじゃないんですか？」

「でもよ新八・・・。。あー！！桜はどうなんだ！！？」

「別にいいけど？金なんて腐るほど貰ってるから」

「あーそうだったな。税金泥棒さんはいっぱい貰ってるよね・・・俺たちから」

その時丁度ピピピ、とタイマーが鳴った。

「じゃあ働いてもいいアルな？」

「ああ」

銀時はそっけなく返した。

「じゃ、今日から一週間よろしくね」

てな訳で、桜は一週間万事屋に居候する事になりました。

映画公開まで一週間切ったアアアアアアア！！！（後書き）

桜「あのさ、怒殺されるられるのルビ読めないんだけど？」

あー・・・こういう事←
怒られる《殺される》

桜「あのルビ殺されるって書いてあったんだ。全く読めなかったわ。
あと、あの手紙にはなんて書いてあったの？」

脱線話で・・・

桜「省略すな！！」

（マジで脱線話で・・・）

映画見たze ノート買ったYo (前書き)

桜「(サブタイ)ラップ？」

ぱくやってみました。

桜「でもいいな」映画……オリキャラだから見れないし……

「

まあまあ……作者とオリキャラは意思疎通してるんだ」

桜「ムリヤリ!？」

映画見たze ノート買ったYo

真選組休暇 2日目

万事屋 居候中

「おはよ〜桜・・・」

「おはよ、神楽。顔洗っておいで」
「う〜」

ぼてぼて歩いて洗面所へ行った神楽。

「ワン！」

「おはよ、定春。ゴハンもうちょっと待ってね」

頭を撫でてやると、先にリビングに行った。

「あ！定春！銀時起こしてきて！！」

温かいご飯をよそいながら、定春に向かって言った。

で、定春は……

片手で器用に障子を開ける。

そこでは銀時が気持ちよさそうに寝ていた。

「わん！」

銀時の真上から声をかけてみる。

「クー……クー……」

「ワン！」

「クー……クー……」

「ガウツ!!」

定春は、銀時の頭に思いつきり噛み付いた。

「イダダダダダダダ!!!!」

「ガウウウウウ!!」

「ちょ!定春!?!放して……放してええええええ!!!!」

朝っぱらから血がダクダク出ている銀時。

頭はスツキリ じゃなくて真っ白に染まってきた。

「ぎーんーとーきー!朝ゴハ……」

ヒョコつと顔を出してみれば、血だらけの銀時に絶句した。

「うああああああああ!!定春!!メツ!!銀時死んじ

やうから!!」

なんとか銀時を定春の口の中から救出する。

「アレ？なあんか綺麗なお花畑がみえ……」

「みちやだめええええ!!」

ゴズン

銀時の腹に肘^{ひじ}を入れる。

余りの痛みに銀時は絶命して「してねーよ!!」

ガバツと起き上がった銀時は、ナレーターに向かって叫んだ。

まあ、簡単に言えば上あたりに叫んだ。

「ダメでしょ定春。起こすときは。。。にゴズン!!ってしなくちや」

「桜あああ!!それ別の意味で死ぬから俺!!」

銀時は声を張り上げて講義する。

「いーからとつと起きなさい。早くしないとアンタ朝飯抜きだから」

おいで定春

そう言つて定春を連れてリビングに戻った。

「……あいつ、以外と馴染んでね？まだ1日もたってねーんだぞ？ここ来て……」

布団を片付けながら、桜の去った障子を見つめていた。

「いただきます」

朝の献立は……

- ・ 白米
- ・ 味噌汁（豆腐、ワカメ）
- ・ 焼き魚
- ・ 漬物

銀時・神楽・桜が食べ始めた頃に、新八が出勤してきた。

「おはようございます」

「おはよ、新八」

新八は机に並んだ朝食を見て、小さく歓声を上げた。

「わー、凄いですね。もしかしてコレ全部桜ちゃんが作ったの？」

「まあね」

ソファアの横で定春もガウガウ食べている。

「新八は？」

「あ、さっき食べてきました」

荷物を降ろしながら新八はテキパキと家事を始めた。

（オカんだ・・・）

え？BSRとかぶる？なんくるないさー

「うぐぐぐ！！の・・・喉に詰まった・・・！！」

「急いで食べるから・・・ホラ、水」

神楽の目の前に水の入ったグラスを置くと、マッハの速さで取り、飲み干した。

「ブハー！！」

「おーい神楽ア？オマエオッサンになってんぞ」

ダラダラと食べる銀時は、神楽を見ながらそう呟いた。

「ごちそうさま」

「「早！！？」」「」

桜は既に食べ終わり、食器を片付けている。

「桜ちゃん速くない？どんだけ急いで食べてんの？」

「いや、急いでるワケじゃないんだけどね。真選組っていつ仕事があるか分かんないじゃん？だから早く食べる習慣がついてるだけ」

一旦キッチンに姿を消して、そして直ぐに戻ってきた。

「わん！」

定春もお皿を隅々まで舐め、もはやエサのカケラもない。

「はい、もうおしまい。あんまり食べると太るわよ」

定春のお皿はでかいのでキッチンの床に置いておく。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまアルー」

その頃二人も食べ終わり、食器を流しに置いた。

「んじゃ」

「新ハイ」

「後は頼んだ！」

「なんで僕なんですかアアアア！！？」

上から、桜・神楽・銀時

新八はドン！とタンスを叩いた。というか、殴った。

「あ！！危ない！！」

「え？」

桜がタツと近寄ると同時に新八の上に何か落ちてきた。

そして・・・リビングのテレビのデッキに入れてみる。

4人はソファーに腰掛けて、リモコンの再生ボタンを押した。

4人は得体も知れぬ緊張感に包まれた様子でテレビを見る。

『ザ・・・・・・・・』

テレビには延々と砂嵐。

「はあ？」

「なあんだ・・・ホラーでもなんでもないんだ」

「なあんか興ざめネ」

「ホントですね・・・なんですかね？このビデオ。うわ・・・よく見ればこれ相当古い物ですよ」

新八は他のビデオを一つ一つ調べていく。

「みたいね・・・つーか二人はまず着替えて来い」

桜は銀時と神楽に着替えさせた。

で、再び居間へ・・・

「でもホント古いビデオね。何年前のものかしら？」

「銀さんが返してなかったビデオとか？」

「それなら今頃死ぬほど請求書がきてんだろーが」

それによ、と続ける。

「俺がいつも行ってるビデオショップは5年前にできたんだぜ？たとへ返し忘れたとしても、こんなに古いもんじゃねーだろ」

「なあ銀ちゃん。よく見ればこの箱、あちこち腐ってるアル」

神楽の言う通りだ。

ダンボールはあちこちが腐敗しており、あの包装紙はまるでソレを隠すかのようだった。

「・・・なあんか気になるわね・・・」

桜がボソリと呟いた。

「だって、こんなにボロボロになったダンボールって、早々無いわよ？」

「それもそうだな・・・ちよつくら調べてみつか？」

「オオ！おもしろそうアルな！！」

「いいですね！！調べてみましょうよ！！」

万事屋メンバーのちよつぱり怖い仕事が始まった。

「まずは、このビデオ全部見て見ましようよ。何か分かるかもしれない」

新八はいくつかビデオを入れ替えたりしている。
だが、どのビデオも砂嵐。

そんな中、一瞬何か映った気がした。

「あれ？今なんか映ったような・・・」

「俺もみたぜ。オイ新八！ちよつと巻き戻せ」

少し巻き戻して、再生させる。

そして、その一瞬映った部分で止める。

4人はジーと見入っていた。

映像はブレやばやけでサッパリ何が映っているのか分からない。

「ん~~~~さっぱりね」

いったんビデオを出して、シールを貼っておく。
直ぐにどれか分かるようにだ。

「でも、これ以外は全部砂嵐か・・・」

「って、あああああ！！！」

銀時が急に大声を出したので、3人は耳を塞いだ。

「うるっさいわね！！なんなのよ!？」

「結野アナの天気予報がしまっちゃうよ!!！」

銀時は慌ててチャンネルをかえた。

「あれ？何も映んない……」

画面は真つ暗なまま、何も映らない。

「壊れたアルか？」

「ちつきしょー……なんでこんな時に……!!」

銀時はふと、ビデオに目をやった。

「……なあ、今思っただけど……」
「何？」

銀時は手を伸ばして一つ取る。

「これ……よくよく考えりゃおかしくねーか？」
「？」

みんなの頭の上に『？』が浮かんだ。

「だってよ、何にも映ってねーし・しかもこんだけ腐敗してるって・
……こりゃあ、俺達のモンじゃねーだろ？年齢的に考えて」
「確かに……そうね」

桜も考えてみる。

「ビデオが地球に来たのは20年前。つまり、あまんと天人が来たときね。
まあ、それで考えればお登勢さんのだと思っけど……」
「けど、なんですか？」

「・・・ここまで腐敗したダンボール、これはそう・・・土にでも埋めてたようなカンジでしょ？これって何かを隠すために埋めたんだと思う。でもね、何にも映ってないもの埋めたって意味無いじゃない？」

ピコピコ、腰紐が動くたびに揺れる。

「・・・お登勢さんに聞いてみましょう」

くスナツクお登勢く

「ああん？ビデオ？知らないねそんなの」

お登勢はタバコを吸いながらアツサリそう言った。

「くっそ、なんだよこのビデオ。意味わかんねー・・・」

銀時は多量のビデオを眺めながら毒づいている。

「あの、銀さん。コレ、源外さんのところに持っていきませんか？
何か分かるかも……」

この新八の提案で、皆、源外の元に向かったという……
(楽すんな!! by 桜)

「おいジジイ、くたばったかー」

「いや、銀時？それ入って早々言う言葉じゃないよね」

そんなツツコミはほつといて、中からはガシャガシャと音が聞こえていた。

「源外さん？」

そんな中見つけた、もはや見慣れた背中。

「源外さーん」

ガシャコン ガシャン

「オイ、クソジジイ」

ガコーン カーンカーン

「源外のジジイ？」

ゴオンゴオン ピ・ピ・ピ・ドガン

「いーかげんこつち向きなさいよ。オイ」

ドオン バキ メキヤメキヤ ボキツ

「バーカバーカ！！死ね！」

と、銀時が悪口を言ったとたん、スパナが飛んできた。

「ヲゴ！！」

それは見事に顔面に当たり、銀時は背中から地面に倒れた。

その拍子に、落ちていた画鋸ガビョウが背中に刺さり、二度も悲鳴を上げる羽目になった。

「イデデデデデー！！なんでガビョウ！？」

「あースマンな銀の字。ガビョウはそのボードのだ」

「まず先にスパナを当てたこと謝れよ！！」

鼻と背中に手を当てながら立ち上がり、叫んだ。

「悪かったつつつてんだろ。しゃーねーだろ、オイルまみれなんだから」

「知るかよ！ー！っーかテメエぜってーに聞こえてたる！？っーか何あの効果音！！？最後になるにつれてなんか痛そうな音が聞こえてくるんだけど！ー！？」

「そんなことはよしとして、一体何のようだ？」

源外は手ごころな木箱に腰掛ける。

「このビデオ調べてほしいネ」

神楽は新八の持っているビデオを指差す。

「あん？ビデオ？ンなめんどくせーことすつかよ」

「・・・少しは上にかけ合ってもいいんだよ？件くだんの事」

「よし、貸してみな」

桜は人の弱みにうまくつけいり、アッサリ承諾させた。
たとえるなら悪魔 鬼 閻魔

「・・・（イラッ）」

「ん？どーした桜？」

「あ、ううん。なんでもないわ」

セーフ

「で、こりゃあなんのビデオだ？」

「それが、そのシールがついてるビデオ以外は全部砂嵐で・・・それに、映ってるぶんもほんの一瞬だけなんですよ」

「もしかして、その一瞬なにが映ったか調べてほしい だろ？」

「そうアル。早くやれヨ」

神楽はまず人に物を頼む態度からお勉強しなければいけませんね。

まあそういうわけで、「不思議ビデオ検証団」が成立した。

テストなんて・・・テストなんて・・・灰になれ!!（前書き）

桜「燃やす気マンマンか!!」

いーじゃんか・・・テストなんてよお・・・消えちまえばいいんだぜ・・・」

桜「まずアンタが消えなさい」

ヒドシ!?

テストなんて・・・テストなんて・・・灰になれ！！

どれだけ時が経っただろうか？

たった一時間くらいでも、暇であればそれは、何倍にも長く感じられる時間だった。

「おーいジジイ、なんか分かった？」

「それがなあ銀の字、あの映ってるのは女だつてどこまでは分かった。だが、画像のボヤケが酷くてな、よくわかんねーんだ」

「なんとかならないアルか？」

「フン、そーゆーと思って作っただぜ！！」

ボロボロの布切れがかかった何かを持ってきた。

「何ですか？それ？」

新八が尋ねると、とても嬉しそうに笑った。

「こいつアどんな画像の世界に入れる機械からくりだ！」

「てことは、そのビデオの世界にも入れるって事？」

「つまりはタイムスリップが出来る・・・ってことでいいのかしら？」

「ま、できるってことになるな」

源外はカラクリをいろいろイジっている。

ついでにこれ、大きさはメチャクチャでかい。

「よし！準備は出来たぜ！中に入れ」

「『中に入れ？』」

源外があるボタンを押すとカラクリの扉が開いた。

「んじゃま、さつさと終わらせっか」

銀時たち万事屋一行は、カラクリの中へ入った。

『あー、あー。マイク・・・じゃねーや。無線テスト中、テスト中。聞こえるか銀の字？応答どーぞ』

「おーう聞こえるぜ。で、どーすりゃいいの？」

『あれ？お前の声聞こえねーや。ま、いつか。じゃあよく聞けよ？まずはその青いボタンだが・・・』

「押しゃいいのか？」

ポチッと押すと、ガガガガとからくりが不可思議な音を出した。

「あばばばばば！ー！ちょッ源外さん！？なんですかこれ！ー！？」

『それはアッチの世界で緊急事態が発生した時に押すと、どうか別

「銀時！やーやー言ってる場合じゃないわ！！なんか・・・変な浮遊感が・・・！！」

「へ？」

銀時と新八は落ち着いて辺りを見渡す。

足は床から浮き上がり、まるでフリーフォールにでも乗ってるような感覚だった。

「落ちてるうううううう！！」

『あーあー、銀の字、見るからに押しちまったようだな。あ、今時空の穴に落ちてるから』

「あのジジイ！戻ったら殺してやるヨ！！」

ギャーギャー叫ぶ声は、虚しくもカラクリの中で反響していた。

ズガアアアアアン

やっと足が床に着いた。

が、浮遊感が未だに残り、真っ直ぐ歩けないどころか立てない。

「イタタタタ……おい！皆無事か！？」

「大丈夫です……」

「平気ヨ」

「なんとも無いわ」

全員の無事を確認した時、いつの間にか開いた扉。

四人は外に出てみた。

出たところは森だったが、直ぐに道らしき道を歩いて町へたどり着いた。

「ここはドコネ？」

神楽は素朴な疑問を口にする。

「空に船が飛んでない……！？」

「しかも天人あまんとがいない……？」

「オイオイ、まさかここは——」

銀時は一回言葉を切った。

「昔の……天人が来る前の……江戸？」

完全に硬直した。

「ねえどうする銀時？」

「どうするって言われても・・・なあ・・・」

「どうせですから、ちよつと町を見て見ませんか？天人が居なかった頃の町も少し気になりますし」

「おお！おもしろそうネ！！さっそく行くアル！！」

四人は町を見て回る事にし、街並みを楽しみながらゆっくり歩いていた。

「にしても・・・昔ってこんなだったのね」

桜はどこか懐かしい雰囲気をかもしだす町並みを、物珍しそうに見渡す。

「にしても目立ちますね。銀さんと神楽ちゃん」

新八は数歩後ろから言った。

それもそのはず

銀時と神楽はこの時代には無い格好だ。

いや、時代は同じだけど、えーと・・・
ま、いつか

「なあ銀ちゃん、あの紙何アルか？」

神楽は木の板に打ち付けられた紙切れを指差す。

「あぁん？つーか何でもかんでも俺に聞くなつっの！自分で見て来い自分で！」

「チツ、これだから天パは……」

「いや、天パ関係なくない？」

「うるさいダメガネ。行くアルヨ」

神楽と新八はその掲示板へと向かった。

「神楽ちゃん、人が多すぎて見えないよ……」
「任せるアル！」

神楽は「え？」という顔をした新八を踏みつけて土台にし、その上から眺めた。

「か……神楽ちゃん……なんて……書いてある？」

「えーと、” 今晚9時 作五郎の屋敷へ乗り込み、財宝を頂く。キヤッツイアー” って書いてあるネ」

「……キヤッツイアー？」

どこかで聞いたことあるような……と、新八は考えた。

「ちよっ何この子！変な髪の色だし、目の色も青いじゃない！それに何この服……」

「妖怪だ……妖怪だ……」

神楽を見て声を上げた町民達が、騒ぎ出す。
小さな石ころが飛んでくる。

「オラアアア……何するアルか！？イタツ……オイそこのガキイイイ……前に出るや……」

「ちょ、イタツ！！まさかの僕もおおお！！？」

流れ弾が新八に当たる。

「か、神楽ちゃん！僕が何とかするから逃げッ！！」

新八のこめかみあたりに石が当たる。

「新ハイ！！」

新八の頭から、生暖かい液体が流れ落ちる。

着物の袖で拭えば、袖は真紅に染まる。

「テメエらああああああああ！！！！ウチの従業員になにしてやがんだコノヤロオオオオオオ！！」

「オマエラ全員地の果てまで蹴り飛ばしてやるつかアアア！！」

銀時と桜が町民を蹴散らしていく。
驚異的な強さに皆が逃げていった。

「オイ！大丈夫か新八！？」

「大丈夫・・・です・・・。ちょっと血が出てるだけですから」

新八の着物の袖は赤黒く染まっている。
額の血は治まりにくい。

「神楽も、無事？」

「全然大丈夫ネ」

神楽も所々傷はあるが、新八ほどでは無さそうだ。

「とにかく、移動しましょ・・・いつまた、誰が来るか分かったモンじゃないわ」

桜は暗い路地裏にスルリと入っていった。

銀時は新八を立たせると、神楽と共に桜に続いた。

偶然見つけた廃屋。^{はいあく}

何年も人が住んでいないのだろう。あちこちがボロボロになっていて、まるで幽霊でも出てきそうな雰囲気だった。
4人はそこで休憩していた。

「これでよし・・・と。終わったよ、新八」

「ありがとう桜ちゃん」

桜は手持ちの包帯で応急処置をしておいた。（なんで包帯持ってたの？）

「やっぱ天人がいねえから、ちょっとでも自分達と違えばああなる^{あまんと}

ってワケか……」

「みたいアルな。……メンドクサイネ」

「しょーがないよ神楽ちゃん。まだ天人が来ていないんだから……」

「あら？天人が来ていないってことは……今は鎖国の状態って事かしら？」

「だろーな。——っか神楽、あの掲示板なんて書いてあった？」

「財宝を頂く キャッツィアーだった気がするネ」

「キャッツィアー？どっかで聞いたことあるような……」

銀時は、頭をぼりぼり掻きながら考える。

——が、サッパリ思い出せない。

「ま、いつか」

「下克上？」

桜のツツコミは分かる人にしか分からない。

「でも、これからどうしますか？僕や桜ちゃんはまだしも、銀さんや神楽ちゃんはこの時代ではあり得ない容姿ですから……」

新八は二人に申し訳ないような気持ちで一杯だった。

「気にすんな。俺たちがこっから出なけりゃいいハナシだ」

「そうネ。ここから出ないくらい、どうってこと無いアル」

銀時も神楽も、自分は平気だと新八に言い聞かせるような、優しい口調だった。

「それもそうね。ここなら滅多に人もこないだろうし、買出しなら

「まずは、どうやって入国したのかが気になるところね。・・・少し、探ってみましょうか」

「でも、どうやるネ？この時代の奴等^{バカ}は天人なんて知らないアルヨ？」

「簡単よ簡単・・・天人は夜兎以外は大体ヒトとは違う姿をしているわ。・・・搾り出すのも簡単はず」

そう言うなりすくつと立ち上がった。

「ま、ちよつと行ってくるね」

「桜ちゃん一人ですか!？」

「当然、怪我しているアンタを連れて行くわけにも行かないし、銀時と神楽は容易に連れ出せないでしょ」

刀を携えると、ヒラヒラ手を振って出て行った。

「大丈夫。私だって侍だ」

テストなんて・・・テストなんて・・・灰になれ！！（後書き）

桜「家族の話カンケーねえ・・・」

いーじゃん別に。ま、ちょっとした余興だつて余興。
時間つなぎって奴よ？ you, see?

桜「できもしない英語を使うな」

グサッ！（心に矢が刺さった）

え？テストの結果？社会だけでしたヨ……フッフッフッフ（前書き

桜「さてさて、遅くなった分のお詫びは？」

あ……すみませんでした……その……テストがあつて……

桜「いい訳するなッ！！」

お詫び言えッ！つったの誰だよ！！

え？テストの結果？社会だけでしたヨ……フッフッフッフ

一人で町を歩く桜。

特に変わった様子も無く、今のところ収穫^{ゼロ}だ。

「うん……やっぱり分かりやすいところに居るわけないよね……」

立ち止まって、携帯を取り出す。

「えっと……今つつか未来？の地図は……この場所か。
じゃあこの道を真っ直ぐ行けばターミナル建設予定地？に着くわね……って、ややこしいわああ！！！」

ガンと携帯を叩きつけた。

町人が何人が振り返る。

「は！しまった……ついノリで……」

急いで携帯を拾い上げる。

丈夫なため、なんとかかんとか助かった。（普通は無事ですまない
ので止めましょう）

（とにかくターミナルに……）

砂を払い、駆け出す。
が……

（人多くね！？）

中々前に進めない。
イライラしてきた。

「かくなる上は・・・屋根の上！！」

いつもながらの脚力で、屋根に飛び乗る。

カシャンカシャンと瓦を踏みながら先へ進む。

家が密接して並んでいるので、ターミナル建設予定地までは直ぐだ。

「・・・着いた！！」

携帯の地図とあわせても、間違いなくここだ。

そこは不思議な資格好をした人（？）が数十人居た。

「・・・天人！？」

ここで桜は確信した。

―間違ってた・・・！！今は鎖国なんかじゃない！！開国して少しした江戸だったんだ！！―

これならばキャッツアイが居てもあまり不思議ではなくなった。

「これは収獲ね。一旦戻って――」

バキン

「…………ん？」

屋根から飛び降りたと同時に、急に影が出来た。

「貴様……何をしておるか……！」

天人だ。しかも武器向けてます（笑）

（しまったー！！銀時に言われた事忘れてたー！！！！）

攘夷戦争時——

「いいか桜、戦ってる時以外は無闇に天人に近づくなよ」
「なんで？」

「天人は刀……持ってる奴を狙ってくるから」
「ふーん……分かった。気をつける」

「いや……あの……その……」

「貴様……まさか攘夷志士か!!」

（昔はそうだったけど今は違うつつの!!）

「違います!!私は幕府の人間で——!!」

（しまったー!!まだこの頃は真選組が無いッ!!）

「幕府？ならいいか」

（いーのかよ!？）

「とにかく、あまりこの辺でウロチヨロすんじゃないぞ」

「了解……です……」

内心、桜は殴りたいと思っていた。

が、それは余計にめんどくさいので止めておいた。

「……ワン公が」

「なんか言ったか？」

「なーんにも。んじゃ、これで」

その場をさつさと去っていく桜。

向かうは隠れ家。

く隠れ家く

神楽は空腹でイライラしてきた。

銀時も糖分不足でイライラしていた。

「は・や・く・か・えっ・て・こ・い・よ!!」

銀時は床をダンダン叩きながらブツブツと呪文のように言い続ける。

「糖分糖分糖分糖分糖分糖分」

新八は正直、覚めた目で見ていた。

「チョコチョコチョコチョコチョコ」

「あのう・・・銀さん」

「メシメシメシメシメシメシメシ」

ガバツと跳ねおきてツツコミをする新八。

「ほおら、おれてなーい」

「なんかイラツとするから止めてくれない？その言い方……」

桜、罪悪感ゼロで銀時の傍に行き、座った。

「情報入ったわ」

「どんな？」

「まず、今は鎖国じゃなくてももう開国した日本。ターミナルは建設中。キャッツイアーとかいう奴等が居てもなんらおかしくない」

さつきとは打って変わって真剣な顔をする。

「まだ馴染みがない分、天人に対しての恐怖はある。だからやっぱり二人はここから出ないようにね」

「うーいッス」

「分かったアル」

やはり

二人はどこか渋々といった表情で承諾した。

「それより桜あ！私、お腹空いたネ！」

「分かってる。そう言うと思ってちゃぁんと買ってきました」

紙袋に入っていたのはお弁当。

「未来では満員の店でもここじゃガラガラ。だから、結構安く買えたよ」

弁当がドツサドサ。

どれもこれもおいしそうだ。

「わあ、この時もうこんなものが売られてたんですね」

「まだ天人に抵抗があるからだれも買わねえわけね」

「そーゆこと」

こんな会話をしている間にも神楽はバクバクと食べていく。

「神楽ちゃん、あんまり急いで食べたならまた喉に詰まらせるよ?」

「へーきネ」

口に物を入れたまま喋るから、少し飛び散っている。

「ほら神楽ちゃん! お行儀悪いよ! ?」

「うるさいアル新八! お腹が空いたときはめい一杯食べなさいってマミーに言われたヨ! !」

「そういえばさ、神楽のお母さんってどんな人なの? ハゲ・・・ゴホンゴホン、星^{つみほ}海坊主の髪の色は黒いから、神楽の髪はやっぱお母さん譲り?」

「そうネ! マミーはすっごく別嬪だったネ! ! なんて綺麗なマミーとハゲパピーがくつついたのか・・・謎アル・・・」

「まーあれだろ、ファザコンだったんだろ。ハゲ散らかしててお父さんみたーい! ! 的なカンジだよ」

「まあそれ以前にハゲはハゲらしくしてろっての。無理して染めたりバレバレのカツラ被ってたりしたら逆に見苦しいわ」

「まーそういうな桜! アレはアレで頑張ってるんだよ? 努力は認めてあげようぜ?」

「お前らヒデーな・・・」

新八の一言で急に部屋がシーンとなった。

「え？アレ・・・ちよつと？」
「シッ」

どうやら、新八の所為^{せい}ではないようだ。

「誰よ？そこでコソコソしてんのはさあ」
「出てきやがれ」

桜と銀時が言うと、天井から一人の女性が降りてきた。

「あら・・・なんでバレちゃったかな？」
「「「ああああああああああ！！！！」」」

その女性を見たたん、銀時・神楽・新八は声を上げた。

「ちよつと、どうしたの？」
「こいつぁ・・・」
「まさか・・・」
「嘘・・・」
「だから何なのよッ！！」

そう聞くと、3人が桜を連れて、その女性から離れた。

「な・・・何？」
「桜ちゃん・・・僕、あの人に騙された経験アリです」
「は？」
「あいつぁ愛を盗む怪盗、エロメスだ」

思ってるアルか？」

「神楽ちゃん、黒い黒い」

神楽、傘を構えてニヤニヤ笑いながらエロネスに近づいていく。

「あらら、なあんかヤバそう・・・私、かーえるつと・・・」

エロネス・逃走

「逃がすかああああ！！この金づるうううう！！」

「よっしゃああああ！！これで多分あのビデオの秘密が分かるぜえええええ！！」

「うおらああああ！！ウチの家計の為に捕まれやああああああ！！！」

神楽・銀時・新八は勇敢にも飛びかかっていった。

「おつと」

「「「うごおおお！！」」」

エロネスが身軽にかわすと、3人はズササササ・・・と床を滑った。

「あんたら何やってんのよ・・・」

呆れた様子でソレを見ていた桜は、一つ盛大に溜息を吐いた。

「・・・まあ、私が逃がすと思ってんのかしら？」

スラリと短刀を抜くと、エロネスに向かって投げた。

ガッン！！

だが、またしてもエロネスにかわされ、短刀は柱に深々と刺さった。

「あっはははは！！バイバーイ」

余裕そうに手を振ると、塀を越えて姿が見えなくなった。

「チツ……で、大丈夫？」

「お……重い……お……りろ……テメエ……ら……」

銀時は二人の下敷きになっていた。

「あ！すみマセン銀さん！」

「ごめんアル！すぐ退くネ！」

だが、人というのは、起き上がるときに結構力を使うものである。

「グエエエエエ！……く……苦しい……」(ばたっ)

「銀時イー！！！」

その夜、無事に目が覚めたという……。

え？テストの結果？社会だけでしたヨ……フッフッフッフ（後書き

皆様方、只今ブログ小説の更新もしております……

なので、遅くなる率100%です（オイ

ではこの辺で……

最近テストばっかでもうあー！！！！（前書き）

桜「定期テストに実力テスト、小テストに。中テスト・・・」

Ahhhhhhhh！！それ以上言わないでええええええええ！！！！

「9時！？あと2時間しかねーのかよ！！！？つかあいつら俺置いて行ったの！？ヒドッ！！」

「とにかく、オハヨうなわけだし、私達も行こっか」

「うーいッ！！？」

銀時は立ち上がった瞬間に倒れた。

「ぎ、銀時！？どーしたの！！？」

「あ……あああああ足……足が痺れた……」

桜は「バカ」と永遠に言いながら銀時の足の痺れがなくなるまで、その足をつついていた。

「新ハイ！アンパン買ってきたアルヨ」

「あーありがと神楽ちゃん」

「で、どーアルか？」

「やっぱり時間じゃないから全然・なんとも・全くだよ」

二人は茂みでパンを食べながら屋敷を見張っていた。

「でも、よかったのかなあ・・・銀さん置いてって」

「別に気にすることじゃないアルヨ」

「冷たい・・・」

「同罪だからね」

「標準語で喋ったよこの子・・・」

新八は冷めた目で神楽を見ながら言った。

「お待たせー！」

「あ、桜ちゃん！」

「ごめんごめん、思ったより銀時が起きなくてさ」

「ちげーだろ・・・お前が俺の痺れきった足をつつき続けただからだろ・・・」

カトン！

銀時の横の木に短刀が刺さっている。

「・・・深々と・・・」

「あ、ごめーん。手、滑った。で、私がなんだって？」

「・・・ごめんなさい」

銀時は（あいつ、反抗期かなあ）なんて思っていたりした。

「それより新ハイ、様子はどうだ？」

「今のところ何の変化もないですね・・・」

「そうか。ついでに今何時？」

「今7時半」

「まだまだだな・・・」

闇夜の中、ずっと屋敷の方を見ていた。
現在8時半。

「銀ちゃん」

「なんだ？」

「あのジジイ、ちゃんと直したかな？」

「しまったアアアアアアア！！つい忘れてたアアアアアアア！！
！」

銀時は

あたふたと慌て始めた。

「おおおおおオイ！誰かつ、あのカラクリ見に行け！！」

「ど、どーしたのよ急に？」

「テメーはバカかあああ！！あのジジイ、直して勝手にカラクリだけ戻すかもしれねーだろ！！」

「そ、そうだった！えーと・・・新八！Let's GO！！」

「無駄に発音いいなあオイ！！」

とつと行けヨ！と、神楽に蹴られて渋々行つた。

「これでひとまず安心だ」

「確かカラクリに発光弾が積まれてたはずだから、アレで合図さえくれればいいんだけどね」

「ンなもんあつたか？」

「ええ。・・・すんごおく分かりづらい場所に」

「オiiiiiiii！それじゃダメじゃねーか！！」

そう叫んだ銀時を、桜と神楽が地へ押さえ込んだ。

「何しやが・・・！」

「シッ！静かに！」

「誰か来るネ・・・」

2人に言われ、言葉を呑む。

「・・・どうだ？いけそうか？」

「フン、余裕だね。コノ位ノ鍵ナンテチヨチヨイノチヨイ」

「おーう、さっすがっだね」

「ねー、銀ちゃーん」

「なんだい神楽ちゃん」

「なあんか聞いた事、あるくない？」

「ややこしいなあオイ。でも、あるぜ」

「銀時、アレ、キャサリンだ（笑）」

「「「いや！なんであいつがいんのオオオオオオオオオオ！！？」」」

「

3人は叫びながら草むらから飛び出した。

「うお！なんだあ？テメーら？」

「あー！！こいついつぞやのキャッツパンチじゃねーかアアア！
！！」

「おやあ？なんで俺たちのこと知ってんだア？」

クリカン（銀魂単行本4巻・昔の武勇伝は三割り増しで話せ（以下略））が不審そうな目で銀時を見た。

「キャッツパンチ……？って、あの銀河中のお宝を荒らしまわったって言う……！」

やっと桜も気がついたようで、自然と身構えていた。

「それに、キャサリンネ……！」

「何デ私ノ事、知ツテイルノデスカーイ？」

「そりゃあ俺たちが有名だからよ」

闇から音も立てずに出てきたのは服部（忍者じゃ無い方）が出て来た。

「ん？オイ服部よお、柏谷はどーしたよ？」

「ああ、アイツか？アイツならもう来るころあいだぜ？」

「って、ちよいと待ったアアア！なんか無視してない！？俺たちのこと無視してませんかアアアア！！？」

銀時は超大声で叫んだ。そうすりや当然……

「おい、誰かの声が聞こえたぞ……！」

「もしかしたら賊じゃあ……」

などと聞こえてきた。

「ぎ、銀時のバカ！あんまし大声出されたら私達が犯人じゃない……！」

悪魔でも小声で注意した。

「ほうう・・・その言い方だとどうやらコイツらじゃあねえみてーだな・・・キャッツイアーとやらは・・・」

「当たり前アル！あんな小娘と一緒にするんじゃないネ！！」

「クリカン、ドーヤラ女ミタイネ」

「そうだなキャサリン。んじゃ、さつさと探しに行きますか・・・」

「

立ち去ろうとしたキャッツパンチの面々に向かって再び「待った」をかけたのは銀時だ。

「デメーら・・・ヤケに必死そうじゃねーかよ？そんなに嫌なのかい？お宝を取られる事が」

「宝ア？当たり前だろう、そんな事。だがな・・・それよりもよお・・・」

服部が拳をプルプル震わせて言った。

「キャッツパンチとキャッツイアーってなんか被るくない！？みたいなカンジー！みたいな！！？」

「てめーはどつかのゴギヤルですか」

「うるせえ！！とにかく、そんな女に俺達の仕事をとられちゃたまんねーんだよッ！！」

「誰か居るぞ！！」

「やばッ・・・！逃げるよ銀時！神楽！ここで捕まったら元も子もないじゃない！！」

「一旦ヒクヨ、クリカン・服部。ソレカラ柏谷二合流ネ」

互いに睨み合い、別々の方向に逃げた。

だが、どちらも向かう先はキャツイアーが入るといいう屋敷で――
――
すぐに、めぐり合うことになるだろうが、今はそれどころではなく、逃げ続ける。

「ちつきしょー！キャサリンのヤツ、相変わらず読みづらい文アル
ナァー！！」

「そこ！？つーか100%小説これでしか通じないからね！？」

「ンなモンどーだつていいのよオ！！とにかく・あの小屋！小屋に逃げて！！」

桜の指示で転がり込んだ小屋には、なんと有難く・隠れる場所が
沢山ある。

新鮮な匂いにするから、きっと野菜や果物などの保存庫だろう。

3人が隠れた直後、荒々しく保存庫の扉が開いた。

「いたか！？」

「いや、いないぞ！！」

「くそお・・・ドコ行きやがった・・・！！」

バタバタとここから立ち去っていく音が聞こえ、完全にその音が聞こえなくなつてからソロソロと出てきた。

「・・・・・・オイ桜ア、今何時だ？」

「・・・・・・8時50分・・・・・・」

「銀ちゃん、ここは取りあえず屋敷に行くネ。屋敷へ行けばあのビ
デオの謎も分かるかもしれないアル」

「ああ、そうだな。行くぜ、二人とも」

銀時たちは屋敷へ向けて歩を進めた。

「・・・源外さん・・・今、何て？」

「おー、やっと無線機の調子が良くなったな。だからよ、あと1時間あればなんとかかなりそうなんだわ。だから、せめて10分・・・いや、5分前には全員が集まるようにしてくれ」

新八、最大のミッションがスタートした。

最近テストばっかでもうあー！！！！（後書き）

流石に3年生はやる事多いです。

亀並更新だったのが、超亀更新になりそうです。

桜「もうなってるわ」

あつついなあゝwww(前書き)

遅くなりました×100

あつついなあゝwww

屋敷の中を走って走って走って……

迷路のような屋敷はいつぞやの城を思い出す。

「銀ちゃーん、なんかここ通った気がするネ」

「あ、それ私も思ったー」

「き、気のせいだー!!」

どれだけ走っても、奴等の居場所はつかめない。

それどころか宝物庫のような所すら見つかっていない。

さらにはずっと同じところを走っている気がする……。

「……方向音痴」

「……バカ」

「うるせえええええ!!文句があんならテメエらが前走りやがれ!!」

と、銀時が叫んだところで、警備員に見つかった。

まあ、当たり前だが。

「いたぞー!!」

「泥棒だー!!」

追いかけていたはずが、追われてしまった。

「このバカ!!大声出すなんて!!」

「誰のせいだ誰の!!」

「銀ちゃん」

「かああぐらあああ!!?」

そう叫ぶたびに人数は増えていく。

「よし、一人囃に……つて、ん?」

「今度はなんだよ!? つーか囃なんてならねーからな!」

「イヤイヤイヤ、そーじゃなくってさ、アレ・宝物庫じゃね?」

指差した先には『宝物庫』と墨字でデカデカと書いてあった。

(ええええええええええ!!?)

あまりの堂々さに、どう反応したらいいのかわからなくなってきた。

「何アレ!? なんで隠そうともせず堂々なワケ!? バカ!!?」

後ろから来る警備員共をノックダウンさせ、『宝物庫』と書かれた扉の前に立つ。

「あけるヨ」

大きく重たい扉をゆっくりと開く。

中にはキャッツパンチ及びキャッツイヤーがひとつの花瓶をとりあっていた。

その花瓶はおおきなサファイアがついており、見るからに高級そう
だ。

「渡さない!!」

「いいからよこせッ!!」

銀時たちが入ってきたことにすら気がついていないようで、3人は顔を見合わせ一つ溜息をついた。

「銀ちゃーん、ぶっ飛ばしてもいいアルか？」

「おー、気兼ねなくぶつとばせー。俺もやつからよあ」

「んじゃ、私も」

兵隊のように足並みをそろえて3人は泥棒猫達に近づく。

「「「存在くらい気がつけヨオオオオ!!!!」」」

3人それぞれがエロネス・クリカン・キャサリンを吹っ飛ばした。
・・・え？残りのキャッツパンチはって？・・・放置プレイさ！
！（^ ^）b

「ニヤッ!!」

「ゴッ!!」

「ウッ!!」

3人は美しい弧を描いて床を滑った。

「お前ら無視してんじゃねーヨ」

「俺これでも主人公なんでエ、存在感はあると思うんですけどー？」

「存在感以前にアンタら全員知ってて無視つたる？」

3人が一歩踏み出すたびに屋敷全体が震えているような気がした。

「チィッ!! 柏谷！服部！やつちま・・・」

「モウヤラレテルヨ」

神楽&銀時の手によっていつの間にか天井と合体した2人。
そしてまた言うけど服部は忍者じゃ無い方だ。

「キャツハハハ」お宝いっただき・・・」
「それをさせないって言うてんでしょーがあああ！！」

高い位置にある窓から逃げようとするエロネスを膝蹴りで遠くへ落とした。

エロネスは「ニヤツ！」と短い悲鳴を上げる。
花瓶は只今桜の手に。

「よっしやああああ！！」

「よーしよくやったぞ桜！！」

「銀ちゃん！後はコイツらぶっ飛ばして終わりネ！！」

神楽はファイティングポーズをとった。

と、その時だった。

「動くな！泥棒めええええ！！」

『うっさい雑魚^{ジャコ}』

入ってきた警備員が何かの人に、全員が同じ返答をした。

「・・・え？ちよつと待つてくれない？なんでジャコ？雑魚^{ざい}じゃな
くて？」

「雑魚よりもジャコの方がなんだか弱く思えてきたからアルー」

「そうそう。なんか雑魚よりもジャコの方が可哀想なほど捕獲され

て食べられてるし?」

「ちよつとオオオオ!!?何、オジさんは『雑魚と呼ぶにはランクが低いです』的な発言は!!?」

『なんだ、分かってんじゃん』

オジさんは精神的ダメージを受けた。

オジさんは倒れた。

▼・

「何そのド。クエ画面は」

「セメテ線デ区切レヨナ」

「カタカナをひらがなにしろヨナ」

桜のツツコミから会話が脱線が続いているが無視して欲しい。

「あーもー!!いーかげんにしなさいよ!!?それからその花瓶は私のオオオオ!!」

「させるかアアアア!!」

飛びかかってきたエロネスに、銀時が木刀を投げた。

エロネスにぶつかった木刀はブーメランの如く帰ってきた。

エロネスは倒れた

▼・

「だからなんでド。クエええええ!!?」

「つーかド。クエだっけ?」

「もうド。クエはいいだろーがよオ!!」

クリカンによって会話が終わった。

「全く・・・このKYめ・・・お前嫌われるタイプだぜコノヤロー」

「KY！？俺のこと言ってるのか！！？」

「そうアル。つーかオメー以外いねーだろ」

「つーかアンタAKYじゃないよね？」
あえて空気読まない

「エッ？AKB？」

「「「テメーには聞いてねーよ！！」」」

もはや、ド。クエ・・・ではなく、花瓶はどうしたのやら・・・

「とにかく、その花瓶はこちらに渡してもらおうか」

「渡せと言われてハイソーですか・で渡すバカがどこにいのよ」

桜は高い場所から一向に降りる気配は無く、にらみ合っていた。

その隙に銀時と神楽がクリカンとキャサリンの後ろへ回る。

「「「！！！」」」

「「隙ありじゃボケエエエエ！！」」

キャッツパンチに殴るの攻撃。

2人はスキューンのダメージを受けた。

キャッツパンチは倒れた。

▼・

「だから！！もうド。クエはいいって言ってんでしょーがあ！！
つーかド。クエ！？つーかスキューンて何よ！！？」

そう叫んだ直後だった。

ファンファンファンファン

宝物庫が真っ赤な光に包まれた。

「「「!!!」」」

それが警報だと気がつくのに約3秒。
警備員が来るのに約10秒。

花瓶を置いて逃げ出すのに約11秒。

「逃げたぞ!!! 追えー!!!」

窓を割って脱出した3人は、町へと繰り出す。

この3人の足の速さに追いつけた者はいなかった……。

備考として、キャッツパンチ・キャッツイアーは警報で目が覚め、逃げたとかそうじゃないとか……。

「……なんとか助かったアルな……。」

「チツキショー・・・金ヅルが・・・」
「諦めなつてww」

森に向かって歩を進める3人は、悔しがったり安心したり・・・
正に三者三様だ。

「銀さーんッ!!」

新八が大声を上げて走ってきた。

「おーう新八かぁー。どうしたー？」
「そ・・・それがッ・・・!!」

カクカクシカシカ
角々鹿々

「あのジジイイイイ!!」

4人全員が走り出した。

それは新八も含めての猛ダッシュで、すぐに森が見えてきた。
そして、不時着したその場所へたどり着く。

「あと30秒!!」

「大丈夫!間に合う!!」

だが、まだ少し距離がある。

『燃えろオオオオ何かアアア!!!!』

少し時間差はあるものの、全員カラクリ機械の中に入った。

それと同時にその機械は森から姿を消した。

「おー銀の字イ！帰ってきたk（ry！！」
『テメエエエエ！！何してくれんだアアアア！！』

4人同時のドロップキックに源外は吹っ飛んだ。
壁に激突し、亀裂が入った。

「お前のせいであ！！こちとら大変だったんだヨ！！」
「テメーふざけてんのか！？ふざけてんのかコノヤロオオオ！！」
「しかもあのビデオ関係ねーじゃねーかアアア！！！！」
「地の果てっつーか火口にでも蹴落としてやろうか！！？」

「待て待て待て待てくれ！！しくじったのはワリーとおもっちゃいるがよオ！飛ばした世界はあのビデオの世界で間違いないんだッ！！！！」

源外の一言に暴言を吐くのを止めた。

「あゝ？」

「だあから！行った世界だけは本物だつつってんだろ！！」

「じゃあ結局あのビデオってなんだったんでしょかね・・・？」

万事屋下・スナックお登勢

「ああ、そういえばあのビデオね、出所が分かったよ」

お登勢に言われ、銀時が身を乗り出した。

「マジかババアー！！」

「どうやら、キャサリンの物らしいんだよねい」

お登勢がキャサリンの方を向く。

「アレハ私が昔盗ミニ入ッタ屋敷ノ監視カメラノ映像デスネ」

あつついなあゝwww（後書き）

銀「人って・・・以外に変わるモンだよな」

神「そうアルな」

新「若いようで年取ってるカンジですよな」

桜「やっぱ人ってさ」

全『年取ると（別の意味で）怖いよね』

そっちの恐いかいッて思ったヤツ・・・前でろ前！！

（→ごめんなさい）

文字数4444字 不吉々（爆）

3日、4日と日は過ぎていき、今日は真選組が休みに入ってから5日目だ。

「おい、仕事だよ……ハア」

「テンション低ッ!!」

桜と新八に同時にツッコまれた。

銀時は少しダメージを受けたようだ。

「だつてよォ……銀さん2日酔い!!」

「そんなの、銀さんの体調管理が悪い所為せいじゃないですか」

「そうそう。つか、神楽は？」

「呼んだアルか？」

神楽が定春を連れてきた。

「ああ、ゴメン。姿が見えなかったから」

「そうアルか」

神楽はソファーストンと座った。

「で、内容はなんですか？」

「え」と

・依頼内容
逃げたペットの搜索そうさく

「・・・・・・・・で？」

「コレしか書いてねえ」

「ええ！？依頼主も分かんないんですか？」

「朝起きたら新聞と一緒にあっただけだからな」

うーんと皆一様に悩む。

「銀ちゃん、ペット搜索って・・・・あのバカ王子じゃないアルか？」

「はあ？バカ王子イ？ナイナイ！あの王子が俺に頼むと思つか？」

「ムカツクけど、主等に頼むしかないののお」

「ま、それはそれだけ頼られてる証って・・・・・・・・」

『なんで居んだよバカ王子イイ！！』

4人揃つてのストレート&ドロップキックでハタ・・・・じゃなかった。バカは吹っ飛んだ。

「な・・・・なんじゃい！作者まで揃いも揃ってバカとは！！余はハタである！！」

夜「バカでいーんじゃね？バカで」

「作者アル」

「まさかの乱入うううう！！？」

神楽ちゃん、銀さん。

そこはスルーの法則・・・・使えないか。

夜「とにかく、こっから先もバカで貫き通すから・・・・え？文句？受け付けるワケ無いジャン？」

「ちょっと作者さん！？作者がここまで乱入って前代未聞ですよ！？」

夜「うつせーよこのダメガネ。出番0にされてーか？あん？」

「スンマツセーン！！」

夜「とゆーワケで、帰るわw」

作者、退散

「ら・・・乱入とは・・・恐るべし・・・」

「神楽、なんでそんなにボロボロなの？あなたは一体何時ダメージを受けましたか？」

神楽は強敵にやられた時の様に片膝をつき、「クッ」と唸っていた。

「クッじゃねーよ。んでその気色悪い部長！！依頼内容をもっと詳しく。それでいて簡略に説明しなさい！！」

「イヤ銀さん？詳しく簡略につて若干矛盾むじゆんしてませんか？」

「してねーよ。ホラ、こんなカンジで↑」

・ 依頼：探し物

・ 探し物：ペット

・ 種類：バカでかい犬

・ 色：白

・ 名前：定春（サダハル）

「ほーら、詳しく簡略にできたら？」

「ああ、そうツスね。んじゃあバカさんこんなカンジで」

「うむ」

・ 依頼：余が直々じきじき頼みに来た探し物

・探し物：余のカワイイペット

・種類：なんかグチュグチュしてナメクジっぽい。キシヨイ

・色：肌色クリーム

・名前：ナメちゃん（ナメちゃん）

「気持ち悪ううう！！何コレ！？ナメクジ！？ナメクジなの！！？」

桜は依頼内容が書かれた紙を思いっきり机に叩きつけた。

「失礼な！あんな気持ち悪い物と一緒にするでないわー！」

「銀ちゃん銀ちゃん、自分のペットを自分でキシヨイとか書いてるアルー」

「ついかにいちムカツクんですケド？何最初の項目？え？コレが人に物を頼む態度？」

「しかも色のトコ見てくださいよ。肌色の上にクリームって書いてあるんですけど」

「これならもうクリーム色って書けばいいのにナ」

いろいろ言い合っていると、バカがコホンとわざとらしく咳せきをした。

「で、受けてくれるのか？」

「コツチしだいだな」

銀時の手は『お金』を意味していた。

「……余のペットを——」

『いらねーよ』

「……余の服を——」

『いらねーよ』

「……余の触角を――」

『いらねーよ』

「……余のジイを――」

『一番いらねーよ』

「え？何オレ触角以下なの？」

『そーですね』

ジイは「なんだよなんだよ！皆してさー……」と、隅で【の】の字を書いていた。

「金！マネー！宝石！money！！とにかく金や高価なモン寄越せツツの！！」

「銀時、マネーとmoneyは同じよ。カタカナ表記と英語表記なだけだからね？」

「しくじっただけだツ！！で、バカな次長！！とっとと金払ってもらおうか！！」

「くうう……仕方が無い。ジイ、アレを持ってこい。って、バカな次長？」

するとジイが10×10×10くらいの正方形の箱を持ってきた。細かな装飾がしてある藍色の箱だ。

「お持ちしましたハタ……あ、イヤ・バカ王子。じゃなくて、バカな次長」

「開ける。とゆーかバカな次長？ツツか言い直してんじゃねーよ」

ジイが開けるとそこにはダイヤモンド・サファイヤ・ルビー・ラピスラズリ・アクアマリン・アメジスト（以下略）がたくさん入っていた。

「おお！キラキラしてて綺麗アル！！」

「つか、コレ本物なのバカな次長」

「まごう事なき本物じゃ。てゆーかいつまでバカな次長？」

そんなハセ（ゴホン・ゴホン）バカ王子を無視して銀時が、
な次長

「よっしゃ！オイバカな次長オやお・・・受けてやつぜその依頼
！！」

「それは良かった。じゃあこれがナメちゃんの写真じゃ。空色のリ
ボンをつけておるぞ。それと報酬は後払いじゃ。ちゃんとナメちゃ
んを捕獲してくれたら渡すからの。ねえもう頭下げるからバカな次
長ヤメテ」

写真をみると、葉っぱの上に乗っているナメクジの姿が・・・。

（やっぱりナメクジかい——！！）

（さっきナメクジ気持ち悪いって言ってたよね！？）

（いや、あの依頼内容にもキシヨいって書いてあったネ）

（じゃあ何！？ホントはキモイの！？イヤイヤ飼ってるの！？）

「では頼むの」そう言ってバカ（な次長）は出て行った。

「しゃーね、俺たちも行くか・・・ハア・・・」

その後（見つからなかったの）話し合いの結果、2チームに分か
れることになった。

「で？」

「イヤ、【で？】って何？」

「アハハハハ 目の前みや分かるでしょ」

銀時と桜は目の前の物質に対し、ちよつと……アレな反応を見せた。

「なんでこんなにデカイのよおおお！！！！」

「知るかアアアア！！！！」

2人の目の前には水色のリボンをつけた巨大ナメクジが――。

「きつつつしよく悪^{ワル}うううう！！聞いてないわよ！！こんなにデカ

「イなんてッ!!」

「俺だつて知らねえよ!!チッキショー!!あの欄に【大きさ】の項目増やしてやるッ!!」

ただいま2人はナメクジに追われているカタチで……………。

「アイツの進んで行つた道にベツタリ跡がついてんだけど!?何あのヌメヌメ!」

「うわあああああ!!くゝるゝなアアアア!!」

ナメクジは2人の想像以上に速く、結構苦戦中。

「あんのバカ王子イイイ!!なんつーモン地球に連れてきちゃつてんの!」

「言ってる場合かアア!!どーすんのよコレエ!」

「こーなつたらズタズタの刺身にしてやらア!!」

「スイマッセーン!!誰かア!塩くださああああいいいい!!」

「俺の意見ムシー!!」

そこまで言つて銀時の頭にいい案が思いついた。

「桜!港行くぜ港!!」

「え!?!なんで?」

「海に沈める!!んで縮めば——」

「いくら潮水だからって水に浸けてどーすんの!」

「はッ!そーだった……」

実際塩水でどーなるかなんて知りません。

「アレ?銀さん?桜ちゃ……………」

新八&神楽と偶然遭遇。
そして新八は絶句した。

「うぎゃあああああ！！！！なんですかあのナメクジいいいい！！？」
「アレがバカのペットだ！！！」

写真と実物を比べる。

「うつそおおおお！！？じゃあなんですか！！？この葉っぱが相当デカインですかああああ！！？」

「だったらメチャクチャでかい葉っぱアルな」

「・・・！！来るぞ！！！」

ヌメヌメボデイののしかかりを上手くかわす。

ムクリと半身を起こしたヌメちゃんはグングン先へと進んでいく。

「・・・！！マズいネ銀ちゃん！！このままだと町に出るアル！！！」

神楽の指差した先は確かに町がある。

「チツキシヨオオオオオ！！喰らえやコノヤロー！！！」

木刀をヌメちゃんに向かって下ろす。

だがその軟らかい身体には傷がつかない。

しかもヌメって滑って、銀時はハデにこけた。

「イッター！！ちょ、俺頭のカタチ変じゃない？頭蓋骨ずがいつ割れてない？」

「大丈夫よ。守るモン（脳）が無い頭に頭蓋骨は存在しないわ」

「ちょ、反抗期？」

「そんなコトよりどーすんですか！？アレ！！」

新八の指差す先にはナメちゃん。
破壊活動を始めた。

「コレでも喰らうがいいネ！！」

傘の取っ手を引き、散弾する。

だが、やはりナメちゃんの身体には効かない。
すべて食い込んで威力をなくし、地面に寂しく落ちていく。

「なら斬る！！」

抜刀し、切りかかる。

「ハッ！！」

まるでグミを斬るような感覚が手に残る。

斬ったナメちゃんの一部にどこからか調達した塩をかけた。

「おー！しばむアル！！」

「キシヨツ・・・つーかどっから持ってきたその塩！！」

「え？そこで買った」

親指で指した先には塩屋があった。

「つーか刀が・・・（泣）」

ナメちゃんを斬ったせいで刀はヌメヌメになってしまった。

・・・ここで想像して頂きたい。

はさみに油がついていたら気持ち悪いでしょ？

「→意味分かんねーよ！！はさみに油がつく訳ねーだろオオオ！！」

「ママー、あの人なんにも無いのに上指差して叫んでるよ〜？」

「見ちゃいけません！！早くにげるわよ！！」

「新八〜、周りの人には見えてないアル。だからもの凄く【痛い子】視線が送られてるヨ」

その言葉に新八は「ウツ」と詰まった。

「それより斬ったおかげでナメちゃんの動きが止まったわ！！」

そう

ナメちゃんは動きを止めて、なにか口から発射してきた。

「って、オiiiiiiii!!?」

真っ直ぐ銀時に向かってきたソレをかわした。

「溶けたー！！なんか知らないケド地面が溶けたー！！！！」

「虚アルか!？」

「それマンガ違いiiiiiiii!!」

「言ってる場合か万事屋メンバー！！」

どこから取り出したのか、桜はハリセンでスパーンと3人の頭を叩いた。

「一護オオオオ！！ヘルプミー！！」

「だからマンガ違いだっつってんだろ！！？」

とうとう銀時の頭に桜のかかと落としが決まった。

「取りあえず！！誘導誘導！！」

ズルズルと銀時を引っ張りながらナメちゃんを誘導していくのでした。

続く

文字数4444字 不吉々(爆)(後書き)

えーと、ここで用語説明を・・・

スルーの法則とは←

・ちょっと待てエエエ!!という事でもスルーすること。
使いやすいモノ 銀魂・BASARA・その他モロモロのマンガ類
日常会話で気になったこと。

ナメクジコノヤロー!! 事件(続) (前書き)

ウガアアアアアアア!!

・・・はい、夏休み終わってからというもの、中々暇な時間が出
来なかった夜代衣です。

ついでに言えば、今も余裕ありません。
イヤ、マジで。

ナメクジコノヤロー！！事件（続）

• なんだかんだ、どーだこーだあって、ナメちゃん捕獲に成功……

「しつなあああああいいいいいい！！」

しないのである。

現在進行形で向かう先は空き屋敷。

ボロボロでくたびれてて幽（以下略）……な屋敷である。

「キシヤアアアアア！！」

「ちよつとオオオ！！なんかナメクジが奇声上げてるんですけど！？」

「……新八、テルーの法則使うネ」

「スルーね神楽ちゃん。君は一体心を何に例えたいの？」

そんなコントをしながら進んでいく。

「つと、着いた！！」

桜は一気にブレーキをかけ曲がる。

ゴン！と鈍い音をたてながら敷地内に入った。

「つて、ゴン？」

新八が後ろを向くと、置き去りにされた天パの男が……。
天パの……男が……。

「銀さあああん!!?」

頭を抱えてうずくまる銀時がいた。

「イダダダダ・・・・なんか俺今日頭にダメージ多くね?」

「あ、さっきのは完全にわざとね」

「テメエエエ!! 待てやゴルアア!!」

桜の一言で起き上がった直後、全てを覆い隠すような影が出来た。
おそろおそろ振り返ると「キシユウウ」と唸るナメちゃんが居た。

「・・・アハ」

「ペツ」

ジュウウウウ

またしてもナメちゃんの吐き出したモノが大地を溶かす。

「銀ちゃん!! 逃げるネ!!」

「わーってるよ!!!」

「このままだとハゲになるヨ!? 銀ちゃんがパピーみたいになっ
つて信じたくないヨ!!?」

「心配なのそっち!? 俺本体は!!?」

「中身入れ替えて戻ってきてネ」

「こんな時まで変なこと言わないで下さ・・・」

ドシャアア

新八は石に躓^{つまづ}いてこけた。

ナメちゃんはもうすぐそこだ。

「新八！！」

桜は方向転換し、新八の元へ向かう。

「危ないネ！！桜ア！新ハイ！」

「ヤベエ！潰される！！」

銀時と神楽も方向転換するが、間に合いそうに無い。

桜はとつさに新八を庇った。

そんな二人の上を、ナメちゃんが通った。

「新八いいいい！！桜ああああ！！」

銀時が叫ぶ。

「・・・・・テメエ覚悟できてんだろうナ？」

2人はナメちゃんと対峙した。

「・・・・・オイこそナメクジ・・・・・」

「・・・・？」

「ズルズルズルとよオ・・・・」

ゆつたりとした動作で各々武器を構える。

「もちつとサツパリしてきやがれエ！！」

「しつこい奴は嫌われる運命ネエ！！！！」

怒りの一撃により、ナメちゃんは横に倒れた。

「新ハイ！」

「桜！！」

ナメちゃんを押して、下敷きにされた2人を助け出した。

「・・・クソっ」

「・・・2人共・・・」

周りの空気が、一気に変わった。

「勝手に殺すなよ？」

ゴン

銀時の頭に、軽い一撃が入った。

「ヌルつとした．．．って、新八！？桜！！？」

体中がヌルヌルした液体に包まれた2人が居た。

「わあああ！！無事だったアルか！！！」

神楽は桜にダイブした。

「桜あゝ桜あゝ．．．！！！」

「はいはい．．．」

「あれ？神楽ちゃん？僕は無視なわけ？」

「まあ、無事で何よりだぜ。桜」

「銀さんまで！？」

新八がだんだんへこみはじめたので、話題を代えることにした。

「で、結局どうして助かったんだ？」

「イヤ、それがね？思った以上に．．．軽かったのさ」

グツと親指を突きたてながら言った。

「．．．．．は？」

「イヤ、だから軽かつて「はあああああ！？」」

「じゃあ．．．なんですか？あの若干シリアスモードは．．．」

「いやー、でも息しにくかったんですよね．．．。アレ」

「こそ！苦しかったなゝゝゝ」

疲れ気味（というか疲れた）4人はバカが待っているという公園へ向かう。

ナメちゃんを引きずりながら。

「おいバカー出てきやがれ。バカー!!」

だが、バカは出てこなかった。

「アレ？銀さん置手紙が……」

新八はソレを拾い上げ、読み上げる。

【拝啓 万事屋 + α 様

ナメちゃん探し、ご苦労であつた。
が、ナメク・・・ナメちゃん要らんで主等にやろう。
光栄に思え。なんせハタ王子様のペットじゃからの。

ハタ王子ヨリ

P・S

報酬は送つといた。心して受け取るが良いわ。
クッフッフッフッフ」

ビリビリビリイ！！

だあれ プラスアルファ
「誰が + α じゃボケエエエー！！」

「なんで一回ナメクジつて言いかけてんだよ！！だれが手紙でそんな事しろつったよ！？」

「要らんってどーゆー事じゃあああ！！あんの触角うううう！！」

「最後の笑い方なんだよ！！ナツポーか！？ナツポーなのかよコル
アア！！」

どうなっ
たかは、
脱線話でどぞー
♪

ナメクジコノヤロー！！事件（続）（後書き）

夏休み終了

←

休み明けテスト

←

体育祭練習

←

体育祭

←

オワタと思ったらハイテスト

←

テスト勉強中

←

本番（地獄とも言っ

←

オワター＼（＾０＾）／

←

合唱祭の練習（指揮者）

学級旗政策

←

今

そして合唱祭が終わったらまたテスト・・・

ああああああああああああ！！！！！！

高校入学式でした！・（前書き）

夜代衣復活です

桜「んじゃ本編、どうぞ！..」

喋らせる！！！！

高校入学式でした！・

休暇に入って六日目。

「あゝあ、明日で終わるかあゝ・・・・・・・・」

朝食の皿洗いをしながら呟く。

「あはは。仕方が無いよ。」

新八も隣で洗った皿を拭きながら返事をする。
そして、ふと思ったことを口にする。

「そういえば、近藤さん達何時帰ってくるの？」

「さあ・・・・。今日か明日ぐらい、としか聞いてないからね」

「え・・・・。じゃあ桜ちゃんどうするの？」

「まあ、一回屯所に戻ってみてくるわ」

皿洗いを済ませ、出かける準備をする。

・・・・まあ、ただ羽織を着て帯び閉めるだけなのですけどね。

「ん？出かけるのか？」

2人の会話を知らなかった銀時が聞いてくる。

「ちょっと屯所にね。今日帰ってくるかもしれないから」

「そうか。つーかお前もう帰れよ」

「いやいや、それがそーも行かないようで」

「あ？なんでだ？」

「え〜と……ホラ」

袂たもとから手紙を取り出す。

「……オイ待て。この展開って前もあつたよな？なあ？」

「ハイハイハイハイ、とっとと読もうかー」

ペشین

投げた手紙が銀時の顔に当たった。

「テメツ……！」

「プププ〜。銀ちゃんダサイアルウ〜」

「うるせーよ！！！！！」

銀時は手紙を取り出して読み始めた。

あてな 坂田銀時様

一週間必ず桜を万事屋に置いておくように。

もしコレを破った場合、一生万事屋メンバーの出番ありません。

一切。マジで。

攘夷メンバーを出すとしても銀時デメエは出さないつもりなので、そこん
とこ夜露死苦ヨロシク

さくしゃ 夜代衣より

「こんツツツのクソ作者がああああああ！！！！」

ビリッビリイ！！

銀時は叫びながら、荒々しく手紙を破った。

・・・アンニヤロ、殺すぞボケが

「なんだよこの手紙！！『あてな』と『さくしゃ』だけなんで平仮名なんだよ！！」

「最近のチャライ女に倣^{なら}ったアル。絶対」

「え？なんですかソレ？そんなこと全く興味ないでしょあの作者は」
「っ！か最近作者ネタ多いと思うの私だけ？」

『いや、皆思ってる』

イヤ、だってさ？夢（とは言っても恋愛要素はまず無いだろう）小説とかでしかないじゃーん。こーゆーのってさ？

それに『あれ？作文？』とか『暗黒物質^{ダークマター}』とか『ドロップキック』とか『超ハイレベルツツコミ』とか『キャラ崩壊』とか皆やっててつままないッ！！私ッ！！

「なげええええ！！そーゆーのは脱線話でやりやがれ！！画面の前の皆ア！マジメに読まなくてOKですツツ！！！！ハイ！もう本編戻るからなー」

「んじゃ、行つてきまゝす」
「いつてらっしゃーい」

桜は軽い足取りで屯所へ向かう。
すると向かいから、数人の刀を持った者達が近づいてくる。

別に桜に向かつて近づいてきているのではなく、ただ向かいから歩いてきているだけで、あと少しですれ違いそうだ。

「「っらあ!」」

桜と相手の1人が、すれ違ったと同時に刀を交える。

キィィン

鋭い金属音が響き渡った。

「あつのさ……！私今休暇中なんだよねッ……こんなことしたくないんだけどね！！イヤマジでッ！！」

「知った事かああああ！！死ねええええ！！」

「もう最悪だよこの野郎があああああああ……！！」
「ゴバア……！！」

刀など関係無しに、怒りのパンチが入った。顔面に。
……痛そうだ。

「もう何コイツ！？月日がたってからというものの余計にキャラ分かっていくなりやがったよ！！」

「もう駄キャラがスペース使うなやッ！！」

「ゴッ……！！」

サッカーボールを蹴るかのごとく、駄キャラを蹴った。

「よし、沈んだか」

「……」

返事が無い

ただの屍のようだ▼

「あ、久しぶりだねドラ。エ」

駄キャラとその他多数を放置して、また歩き出した。

屯所に向かっている途中、
なんだか同心^{どうしん}達がせわしなく走っている

姿が見られた。

（何かあったのかしら・・・？）

「オイ、聞いたか？」

「ああ。まただつてよ・・・。」

近くに居た同心2人の会話に耳を立てた。

「これで6日間連続だぜ・・・。」

（6日間連続・・・？）

「真選組が居ねえからなあ。攘夷志士を抑える事がちゃんとできてないんだよなあ・・・。」

「そうだな・・・。全く、松平公も何考えてんだか・・・。」

「何も考えてねーだろ」

（間違つてないね。うん）

「まあ、それは置いといてだな・・・。」

「ああ。——人斬りだろ？」

（・・・人斬り？）

「昼夜問わず無差別に襲ってくる・・・。俺たちも気をつけねえとな」

と、言った直後だった。

「キヤアアアアアア！！！」

耳を劈く悲鳴が聞こえた。

「なんだッ！？」

「まさか・・・人斬り！！！？」

「・・・見に行こーっと」

同心の数メートル後ろをついて行き、現場に向かう。
ツーンと鼻につく血の匂い。

——死んだかな？——

ふと、そう思った。

「御用だ！！・・・ぐああああ！！！」

今 自分の目の前で 血が飛び散った。

「ッ！！！」

サッと影に身を隠す。

「2匹——」

「ヒイイイ！！！」

スパァン

また、肉を斬る音がした。

「3匹――」

血の匂いが充満してきた。
慣れぬ者なら吐き気を催すだろう。

(3匹……やっぱり最初の女、殺られちゃったか)

「もう居ないな……」

足音と気配が去っていく。

「……ちえつ。朝っぱらから……」

――昼夜問わず？ 昼夜問え――

「行くかな」

気配を消して、追跡する。

(って、ヤバくない？ あっち結構な大通りよ……!?)

冷や汗が流れる。

そしてついに、大通りに出てしまった。

「獲物がいっぱい……フハハハハ……!!」

(イヤッ！ 気持ち悪いんですけど!!)

あちらこちらから悲鳴が聞こえる。

「おう？ガキはつけーん」

「わッ・・・！」

襟首を掴まれ、刃を首筋に宛^{あて}がわれる。

しかし、桜はそんなことよりも気になる事があった。

（あのガキ・・・もしかして・・・ッ！！）

ふつつつと得体の知れない感情がこみ上げてきた。

そう、捕まっているのは――

白矢 である。

それに、直ぐ傍にいる2人は白矢の親だ。

（・・・・・・）

スッと冷めた視線を向ける。

なんだ しょうもない ここまで来て損した さつさと屯所に向かえば良かった こんな奴等 さつさと死んじゃえばいいのに

桜は手を出さない事を決めた。
傍観に徹する事を決めた。

周りの野次馬に混ざって、成り行きを見る。

「……あ」

さつき蹴飛ばした駄キャラだ。その他多数もいる。
なんで来たんだろ？

——あ、グルか。

「アニキ！」

「あー。……殺したか？」

「す……すいやせん……」

「……まあ、いいや。元々期待なんてしてないし」

「は……はあ……」

チャキ……チャキ……

刀の刃をクルクルとひっくり返しながら言う。

（え？何あれ？私殺す気だったの？）

「真選組……アイツ等さえ居なければ俺たち楽できるんだよな！。

……せつかく一人になったのに……なあ……」

クツクツと不気味な笑いを見せる。

寒気がした。

「真選組は正義感が強いからね。きつと来るだろうね」

（ハイ、来てまーす。出ないけど）

「アニキー！！そこそこ！！そこに居ますぜ！！」

「気づくなやこの駄キャラがッ！！死ねッ」

「……本当に、お人よしの集団だね〜真選組って」

「……お人よしはウチの局長だけだよ」

その場からは動くことなく、会話を交わす。

「——助けないのかあ？このガキ」

「殺したきや殺せば？」

ザワ……

まわりが一瞬騒がしくなる。

しかし、2人が同時に放った殺気で再び静かになる。

「何故？^{なぜ}」

「……なにがさ」

「前は助けたのに」

「……なんで知ってんのさ？」

「さあて、なんでだろうねー？」

一言一言話すたびに殺気が飛び交う。

「……何故殺さない？」

「お楽しみは最後にね？」

ツウッと白矢の首筋に切り込みが入る。

鮮血が流れ落ちていく。

「ゆっくりと痛ぶるってワケ？」

「まあね」

「鬼畜ドSめ」

「最高の誉め言葉っていうのかなあー」

会話の間にも、スツスツと白矢の体のあちこちに切込みが入っている。

「つつ・・・！」

白矢の目からポロポロと涙が落ちる。

（バカでしょ……。鬼畜ドSに涙は最高のスパイスだってーの）

「あー楽しー」抵抗してくれたらもつと楽しいんだけどねー」

「もう帰っていい？ヒマじゃないんで」

「さ・さ・さ・・・さつきから黙って聞いてればよお！！アンタ真選組だろ！？攘夷志士から市民守^{まも}ンのも仕事だろ！！？」

傍観者の一人が声を上げた。

「だって今、真選組は休みだもの。つまり、今職業を全うする義務は無いわけ。分かる？」

「・・・ッそれでも真選組かよ！？」

「それでも真選組よ」

また、周りがうるさくなっていた。

「あーあ。またうるさくなっちゃったじゃん？っーか獲物は大人し

くしてろよ。後でちゃん喰ってやるからさあ」
「・・・!!」

何人かが、後ずさりをする。

「ふああ・・・ほんつと、行つていい？」

「んゝ・・・だめ」

「《ほし》つけないでよね。気持ち悪い」

顔色一つ変えずに、淡々^{たんたん}と会話が交わされている。

「オイオイ、なんの騒ぎだ？」

耳に心地よい、聞き慣れた声が聞こえた。

「・・・ッ！近藤さん!!」

驚いた

明日帰ってくると思っていたものだから、本当にビックリしていた。

「お？桜か？・・・って、ええええ！？まさかの事件ンンン
!!？」

「イヤイヤイヤ・・・人だからっていったら事件かバーゲンっしょ
？」

「まあ、間違つてねえな」

「土方さん。それに沖田さんも」

近藤よりも少し遅れて土方・沖田が現れた。

「土方さんのオマケで言われるのはムカツキまさあ。巻き戻してやりなおさ」

「せるか!!」

また土方・沖田、両者のコントが始まった。

「ねえ、コッチは無視？」

「て、いうかアニキ。俺らなんか空気以下の扱いなんですけど」
「聞いてんのオ？」

「いや!アニキ!?俺の話聞いてます!?ちよつとおおお!!」

「うるさいなあ」。その2匹もいたぶつといてよ

「ヘイツ!!」

その他多数が2人を拘束する。

「なッ!!」

近藤と土方が刀に手を伸ばす。が、それを桜が制した。

「さ、桜!!?」

「・・・別に良いじゃないですか。あんな奴等助けなくても」

「だ、だが・・・!」

「人殺しを助ける義理なんか無いんですよ」

桜らしくない言葉に、口を開いても言葉が出ない。

土方は、「真選組のメンツつーモンがあんだろ」とか言っていたが、知らん振りだ。

「・・・それでいいんですかい？」

手を出さなかった沖田が問いかけた。

「なにがですか？」

「お前も、ただの人殺しですぜ？」

「私は……ただの人殺しですよ。昔も、今も」

「——本当に、そうか？」

今度は土方が問いた。

「そ！そつだ！！お前の気持ちは良く分かる！！お前がそつ思つのも分かる！！」

近藤がやつと正氣に戻つて声を張り上げた。

「お前は傍^{はた}から見ればただの人殺しかもしれん！！だが……だがな！！今お前がやっていることは、そこに居る2人と……お前を捨てたその親と同じ^{おんな}ことをしているんだぞ！！？」

近藤は一呼吸置いて叫んだ。

「お前はそんな奴等と、同種になつていいのか！！」

「よくねーですよ」

スラリ

鞘さやと刃やいばの擦すれる音と共に駄キャラの一人が斬られた。

『なっ』

相手方は全員が驚いている。

斬ったと同時に、白矢の母が解放された。

真選組内で会話している間に、斬られたようだ。

「——あっ……」

ガッ

父親も解放する。

そして……

「はぁッ!—!」

「おっと」

白矢も解放する。

奴にはかわされてしまったが。

「桜……」

土方が、名を呟く。

「あなた・・・・・・・・」

母が、桜に話しかける。

「・・・・・・・・勘違いすんなよ。同種になんのが嫌^ヤなだけさ」

一瞥^{いちへつ}すらすること無く、低めの声で話す。

「・・・・・・・・アンタ、さ。私の生き様、否定したろ？」

ブンツと刀を一振りして、構える。

「両耳かっぱじってよく聞け。両目かっぱらいてよく見てな」

「これが私の生き様だ」

タツと駆け出し、刀を振るう。

「・・・・・・・・演説はもういいワケ？」

「・・・・・・・・演説？はて、いつしたっけな？」

キンツキンツと2つの刀が交わる。

「・・・・・・・・桜ー。手伝つかー？」

「いえッ！コッチは、いいんで、周りの雑魚・・・・・・・・お願いします
！！！！」

動きながら言ったものだから、言葉が所々で切れる。

「だ、そうだな」

「さあて・・・久々に暴れますかねい・・・」

真っ黒な笑みと刀を構える。

『いっつつヤアアアアアアア！！！！！！！！！』

その他多数たちの、悲鳴が聞こえた。

「わー。容赦ないねー。君のお仲間サン」

「サデイスツティック星の王子様だから・・・ねッ！！」

足払いをかける。

飛んで避けたところに刀の一突き。

それも受け流された。

「あー、メンドクサイ！！」

首を狙って上段蹴りをかます。

「アッハハ」

後ろステップでかわされた。

互いが互いに、攻撃して・かわしての繰り返しで勝負がつかない。
そんな中、敵に一瞬の隙が出来た。

「しまッ・・・!!」

「もらったあああああ!!」

ドゴォ!!

頭に向かって強烈な一撃を放った。

ドサリと相手の体が落ちる。

「安心しなよ。骨は砕いてないからさ。・・・て、聞いてないか」

チンッ

刀を鞘に納めて、相手を踏む。

「見た目に反してあつけない奴・・・」

えいっえいっど踏んでみる。

動かない

「あー、土方さん。そっち終わりました？」

「おーう。総悟がほとんどやっちゃった」

「近藤さん。ついでにもう一人やつてもいいですかい？」

「別にかまわんが・・・誰をやるんだ？」

「もちろん。」

ひ~~~~じ~~~~か~~~~た~~~~!!!!」

「そう来ると思ったわあああああ!!!!」

ドオオオン!

バキッ!

「近藤さんがあんなこと言うからじゃないですか」

「ええええ！！？俺なの！？俺の所為なの！！？」

同心に引き渡しながら、けんかを止める。

「やめてくださいってば。あ、話があるんで行きましょっか」

やはり、白矢たちには一瞥することなく去っていく。

「あ．．．．あの！！」

白矢が、怯えながらも声を張る。

「あ．．．．あ．．．．あり．．．．がとう．．．．」

ボソボソと聞き取れるか聞き取れないかくらいで礼を述べる。

「——で、話してなんだ？」

「作者の所為で1週間必ず万事屋にいなきやいけないんです」

「……もしかして、俺たちが居ない時って万事屋に居たんですかい？」

「そうですよ？」

「……頑張ったな」

「なんの事ですか土方さん！？頑張る事なんか……あつた」

思い当たる節が多すぎて、反論もフォローもできなかった。

「んじゃ、もう行きますんで。明後日あさってには帰ってきますね」

「おう！ー！」

元氣に見送ったのは、近藤だけで……。
土方と沖田はためいきを吐いていた。

高校入学式でした！。。（後書き）

やっぱり厳しいねー。高校は

桜「第一、商業だもんねー。そりゃ厳しいわ」

はあー、二次元へ逃避行♪

桜「二度と戻ってくるなよ」（黒笑）

ごめんなさい（泣）

明日で入学式から3ヶ月・・・スイマッセン!! (前書き)

桜「おせえええええええ!!」

ゴメンナサイイイイイ!!

いろいろと忙しかったんですウウウ!!

桜「あっははは 黙つとけやk n k sが」

k n k sが・・・?ハッ!!!

明日で入学式から3ヶ月……スイマッシーン！！

7日目――

作者の陰謀により、万事屋に留まる事を余儀なくされた桜も、明日には真選組へと帰る。

桜自身、その事には特に何も思っていない。

傍^{はた}から見れば少しばかり酷い奴と思われがちだが、まあ、周りが気にしていないので良しとする。

「やゝつと帰れるー」

バンザイをして喜んだ。

「こんな狭^{せま}いトコから解放されるんだー！」

「狭くて悪かったな――！」

仕事のデスクにダルそうに座っていた銀時が反論した。

「コレは狭いんじゃないんじゃない？無駄なものを一切^{いっさいがっさい}合財払った結果こうなったんだ。だからココを狭いと思うのはお前の心の狭さであって……」

「つまり、心の狭い銀時が狭い家をさらに狭くしないよう、少しでも広く使う為に（元々買えないだろうけど）物を置かなかったんだよね。すごいすごい」

「そつだろそつだろ。もつと誉めろ」

「立派な貧乏魂もってんのね。いやあ、今の私には分かんないや」

「うるせーよコノヤロー!!! テメエらが俺たちから税金を奪って使ってんだろ!!! この税金泥棒が!!! 金の無駄遣い止めやがれ!!!」

「アンタこそ、ファミレス行く度私に奢^{おご}らせんじゃない! それでも年上かつてーの!!! たまにはテメエが払えや!!! それくらいやつてから税金泥棒だの何だの好きに行ってるこのくるパー!!!」

「あんだとクソガキ!!!」

「やんのかコラ!!!」

「つて、2人共セリフ長すぎです!!!」

新八のストップでやつと会話が止まった。

「そうネ! いつまでタラタラとしゃべってるアルか!!! 私にもしやべらせるヨ!!!」

「神楽ちゃんもそういう問題じゃないからね!!!? てかあの文マジメに読んだ人って居るのかな!!!?」

「居ないアル。きつと。前半の『狭い』連ちゃんから皆新八のセリフまですっ飛ばして読んだアル」

と、言っている二人の会話もこのままだと埒^{らち}が明かない。

今更ながらに、自分自身でもすごく読みにくい。そしてどうでも良いことなので、マジメに読み返す必要も無い。ホントに。

「はぁ・・・とりあえず、とつとと行きませんか?」

「おお! そうだったアル!!!」

「そうだね。早く行こうか」

「・・・・・・え? どこに?」

銀時だけが話しについて行けず、目をパチクリさせる。

「ハア？昨日の夜、アンタが言った事じゃない」

「え？俺が？」

「……銀さん？ 忘れたとは言わせませんよ？」

「イヤイヤイヤ、忘れたも何も、心当たりがねえし……」

「何言つてゐるアルか。銀ちゃん昨日お酒飲んだ後、

「よし！明日は皆でファミレスにでも食べに行くぜええええ！」

!

「だって、声高らかに宣言してたネ」

「え・・・・・・・・ええええええええ！！！」

「つーワケでさっさと行きましょつか？」

3人にぐいぐい押されて強制的に外に連れ出された。

「……これって、誰の奢り？」

「そりゃあ、言いだしっぺの銀時でしょ」

[illegible]

かぶき町に悲惨な叫び声がこだました。

「はー。おいしかったあ」

「僕もうおなか一杯です!」

「フヒー、もう入らないアルウ」

「そんだけ食えばそうなるわなああああああ!!!!!」

テーブルの上は4人が食べた後には大量の、カラッポの皿が散乱していた。

まあ、ほとんどが神楽のせいなのだけでも。

「.....んで?いくらなの?」

銀時の問いかけに桜が伝票を手取る。

「.....しめて、67,592円!!!」

「俺の金がああああああ!!!!!」

ファミレスなのにも関わらず叫び、机を叩いた。

「いやー、（私達の）お腹は天国（銀時の）財布は地獄ってね」

「そうネ！大体暗いヨ銀ちゃん。過去は忘れて明日を見つめるネ！！！」

「明日・・・から・・・また豆パンかア・・・。あはははは」

「そうアル銀ちゃん！！これで未来は明るいネ！！」

「明るいどころか暗い現実を聞いちゃったよ僕達！！！！また豆パンなんですか！？」

「そうだぜばつつあん。未来は暗い暗い闇くろい くらゐの底だ」

ゆらゆらと歩く銀時は、周りからも奇妙な目線を送られていた。

「やー、私は明日からまた仕事かあ。いやあ、大変大変」

「ほんつつつと！！いいよなあ！お前は！！仕事があつてよおおお
おおお！！！」

「そうだそうだア！！こちとら仕事があつたら雨が降るほどの奇跡だぞコノヤロオー！！！」

「いやいや神楽ちゃん！？何言ってるかわけわかんないからね！？」

（つーか、仕事あつたら雨が降るって・・・。どんだけ不運なん
だろう・・・。）

桜が哀れんだ目を向けていた事に誰も気づかなかった。

く真選組 屯所く

昨日から屯所に帰っていた真選組一同は、今日ものらりくらりと過
ごしていた。

「トシイイイ!!」

「あん? どうした?」

近藤ユウが何かを持って走ってきた。

「ここここ、コレ見てこれ!!」

「あ?」

渡された紙は結構な上質紙で、どうやら手紙のようだ。

「・・・・・・・・・・」

土方は黙ってそれを開いた。

「・・・・・・・・こいつあ」

「ね! ね! ね! 俺もビックリしたんだよ!!」

ウザイくらいの手振りをつけて話す近藤を一掃し、再び視線を手紙に戻す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばらく、思案に伏せることとなった。

く万事屋　夕方く

時間はどんどん進み、もう暖色の光が街を照らしていた。
建物も　道も　人も　天人も　木も　川も
全てが緋色に染まっていた。

灯りのついていない室内にも温かな光が舞い込んできている。

（あ、もうこんな時間）

桜はふとそう思いながらこの数日を思い返す。

（……らしくないや）

年寄りか

と、自嘲を含んだ笑みをこぼした。

「……どこかしたか？」

「んーにや、別に」

いま、室内には銀時と桜の2人しか居ない。

新八と神楽は「姉上に呼ばれてるんで……」と言って出て行った。

可哀想な卵焼きの餌食にならない事だけを祈る。

また室内に沈黙が漂った。
ただよ

「……なあ」

「ん？」

しばらくの沈黙を破ったのは銀時だった。

「お前、どうすんだ？」

「くくりでかすぎて何言ってるか分かんないんですけど」

ソファーに深く腰掛ける。

「…………親、の事だよ」
「……………」

銀時は業務用デスクに乗せた足を下ろして、真剣味を帯びた声で言う。

「許す気が無いのも、親なんて認めたくないのも分かる」
「…………何が言いたいのさ」

「本当にこれでいいのか？」

何が、なんて聞かなくても分かる。

「いいよ」

視線を天井に移す。

「もう、いいよ。元々16年前に切れてた縁よ」
「……………」

「今更それを戻す気なんて、雀の涙ほども思っちゃいないわ」

ソファーに預けていた体を起こして、視線を銀時のほうに向ける。

「私は、あいつ等の全てを拒否する」

「…………嘘つけ」

「…………嘘でもいいよ」

答えなんて、誰にも分からないんだから

「だから、今のままでいい」

「そうか。なら、俺が言うことはねえよ」
「ん、ありがとう」

く 万事屋 夜 屋根く

地上に星は輝く

天空に星は輝かない

キラキラと眩いばかりの光を放つ街と
暗い闇をいっばいに広げる天そら

「・・・逆になってるよ」

眩いた言葉は光と闇に消えた。

桜は万事屋の屋根の上で膝を抱えて体育座りをしていた。
夜風に髪がなびく。

「何やってんの？」

ふと後ろから声がした。

「銀時」

「よう」

ヒョイと屋根に乗り、桜の隣へ座った。

「神楽は？」

「もう寝た」

「そっか・・・」

夕方、あの話が終わって結構すぐに、2人共帰ってきた。
暗黒物質ダークマターを持って。

処理するのにあちこち溶けたが、まあ、被害者が出なかったのが良かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ホントは・ね」

「おう」

次の言葉が中々でないが、銀時は気長に待った。

「・・・・・・・・少し、羨ましかった」

「・・・・・・・・白矢君が？」

「そう」

ずっと遠くの空を眺めて仄かに輝く月を見て

「私の持っていないもの、全部持ってる」

言葉に表しにくい声で、ゆっくりと話す。

「私の知らない事、知らなきゃいけない事を知ってる」

表情も、怒ってるわけでも・はたまた笑ってるわけでもなくかといって無表情でもない。

「・・・・・・・・少し、嫉妬してる」

遠くを見ていた目は、下を向く。

「・・・・・・・・お前だって」

「・・・・・・・・・・？」

今まで黙って聞いていた銀時の方に目を向ける。

「アイツの持っていないモン持ってる。

アイツの知らない事を知ってる。

アイツの知らないことを知ってる。」

「……………」

「人っつーのはな、そんなもんなんだよ」

「誰かの知ってる事を知らないで、誰かの知らない事を知っている。
……………お前、さっき自分で言ってたろ」

答えなんて、誰にも分からない ってな。

「だから、そのままでもいいんだよ」

「……………」

「答えなんて、一生の中で探せばいい」

「……………うん」

「どんな感情を持ってたっていいんだ」

「……………うん」

バサリ

上から軟らかい布――毛布――がかけられる。

「だから、今は――」

『
』

「・・・・・・・・・・ッ」

膝に頭を寄せて、肩を震わす。

「ホント・・・・は！私だ・・・・って！」

「――ああ、分かつてる」

ポンポンと毛布の上から頭を撫でてやる。
そして再び、静寂が訪れた。

天に星は輝かず
地に星は輝く

天空でキラリと何かが光る
地上でキラリと何かが光る

それはどちらも同じで
どちらも違うもので

キラリと二つ、雫が落ちた

明日で入学式から3ヶ月・・・スイマッセン!! (後書き)

k n k s・・・まさか・・・!!

桜「このカスが」

グハア!!! (大ダメージ)

森羅万象意味わかんなくてスイマセン

一言のためだけに、どこまでも逝っちゃうのが長所で短所（前書き）

こんにちわ。夜代衣です。

今回でこの話は最後です。

感動なんてしませんが、見ていってください
↑

一言のためだけに、どこまででも逝っちゃうのが長所で短所

く昼過ぎく

「たっただいま戻りましたあああああ！！！！！」

屯所の扉をドカアンと開け放って、桜は真選組へと帰ってきた。

「ああ、おかえりなさい！！！！？」

迎えにきた山崎だったが、桜の放り投げた・・・というか手からスポツと抜けた荷物が山崎にクリーンヒットした。

「あ、ゴメンゴメン。事故だから」（棒読み）
「もうちょっと心をこめてください。切実に」

ダクダクと鼻血を垂らしながら、荷物を返す。

「ごめんって・・・。ところで、近藤さんは？」

「ああ、もう帰ってくると思いますよ？」

「帰って・・・？」

（まさか）

最悪のパターンしか浮かばないと、
というかそれしかありえない。

———
気がする。

「どこに行つたの？」

「『今日は宴だ！』』とか言つて酒の調達に行きましたよ」

（オッケー！！最悪の事態は免れそうだ！！！）

「——ついでに、お妙さんのところへ」

「オッケー、期待を裏切らない人だ」

そう言つてすぐだった。

「ただいまあゝ」

「おかえりなさい。いつも通りのボロボロゴリラ・・・じゃない・・・！？」

「桜・・・お前最近ストレートにゴリラつて言うようになったな」

「あ、土方さん。近藤さんと一緒だったんですか？」（スルー）

「まあな。ストーカー防止に着いていったんだ」

失敗したがな・と続ける。

「土方さあん」

屯所の奥から少々気の抜けた声が足音とともに聞こえた。

「副長ともあるう御方が自分の局長も止められないたあ、副長辞めたほうがいいですぜ」

「隊長ともあるうヤツが仕事サボつて駄菓子屋行きたあ、隊長止めたほうがいいぜ」

「こりゃあ、いけねーや。バレちつたあゝ」

「テメエの行動パターンは大体理解してるからな」

「わー。副長までそろってストーカーって、大丈夫か真選組」

「前回の二の舞になるんで会話はその辺で止めてください」

2人の間に入って、会話を強制終了する。

「おお、帰ってたのかい」

「気づくの遅すぎでしょうがああああ!!?」

沖田に今更気づかれて今日一番のツッコミをした。

「冗談でさあ。バカみてえな声がちゃんと聞こえたぜい」

「うっさいですよコノヤロー」

にこやかな顔で指をパキパキと鳴らす。

「……あのお、とりあえず局長がイジけてるんでそろそろ触れてあげてください」

山崎自身、近藤以上に忘れられていたのだが、教えるのは止めておこう。

悲惨すぎる。

……ほんとうに

「んで?どうやって土方さんの目を盗んでストーキングしたんですか?」

「いや、あれは事故でなあ……」

「ちょっと前」

近藤は、さつきも説明したとおり、宴用の酒を土方とともに買いに
来ていたのだ。

2人でのんびりと歩いていたときに、偶然お妙を発見したのだ。

「あ！お妙さん！！お妙さあああああああんん！！！」

「あ！オイ近藤さん！？」

ダツと駆け出した近藤を止めることはできず、その場に取り残されてしまった土方。

「あら？」

「うおおおたああああええええすわあああああああんんんん
！！！！あ！！？」

手に持っていたビニール袋が酒の重みと遠心力に負けて

プチリと
ちぎれて
飛んでいった

お妙の方へ

ゴン

カシヤアンと綺麗な音を立てて割れる酒瓶。
そして、数秒の沈黙。
その場の温度が、急激に下がっていった。
パキパキ・・・と氷がお妙を中心に広がっていく。

あたり一面が氷で覆われていく。

近藤はその場に縫いつけられたように止まってしまった。
土方もタバコをぼとりと落とす。

「ああ近藤さん・・・奇遇ですことねええ・・・。
ああ、会ったついでにちょっと楽しい事しませんか？」
「た・・・たたたた、楽しいことって・・・なんですか？」
「『ゴリラゴリゴリ殺し』ですよ」

「ぎ・・・ぎ・・・ギヤアアアアアアア！！！！」

『キセキが起きた・・・!!』

桜、沖田、山崎が声をそろえて言った。

「そんな攻撃を受けて・・・生きてたんですか！？局長！！？しかも無傷！！？」

「その生命力があればもうどこでだって生きられますよ。アナタ」
「だから髪の毛後ろだけ無かったんですねい」

『え？』

沖田の一言に、桜・山崎両名は、バツと近藤に目を向けた。

「ああ、この通りさ」

クルリと後ろを向いた近藤の髪は、確かに無かった。
ツルリとした地肌が輝いているだけだった。

「ちょっとおおおおお！！！？何があつたのおおお！！？っー

かなんで器用に後ろだけ抜けてんだ　よ！？余計におかしいだろコレ！！？」

もう敬語なんて忘れてツツコミをかました山崎。

「抜けたんじゃない！！溶けたんだ！！」

「まさかの暗黒物質ダークマター！！？」

「まあ・・・とりあえずそんなトコだ」

土方が収まりのつかないツツコミを止め、話を終わらせた。
と、言うわけでここから先、今回の話、近藤の後ろハゲてます。

くとりあえず、中間が思いつかないので夜

「早すぎるだろ時間経過。中間もいろいろあつたるオイ」

「土方さん、空中に向かってツツコミするたあ、とうとうイカれち

まいやしたか？頭」

「安心しろ。お前の頭よりはマシだ」

「まあまあ二人とも、喧嘩はいかんぞ。うん」

「あら、珍しく近藤さんが局長らしく見えた」

「ホント、最近俺に対してツラくない？ねえ」

会話はともかく

広間には全隊士がおり、開宴をいまかいまかと待っている。

上座に座っている近藤が、コホンと一つ咳払いをし、スツと全員を見る。

「さて！明日からも頑張れるように……」

「近藤さん、誰も聞いちゃいねえ。つーか誰も聞こうとしてねえ」

同じく上座に座っている土方に指摘されて、再び見渡せば、確かに誰も聞いてはいなかった。

むしろ、ざわざわと騒がしかったり、

「まだ始まんねーのかよ」

「明日から仕事かぁ。めんどいなあ」

「つーか局長、何で後ろだけハゲ？」

「お、メール来た……。またスパメかよ」

「あーあ、明日からまたマガジンか……。愛しきジャンプ……」

と言うよりも、しょうもない話しかしていない。

「うるっせえんだよ！！テメェらがゴチャゴチャやってっから始まんねえんだよ！！！」

土方は新しいタバコに火をつけながら、「総悟達見習え。思ったより静かに待ってんだろ」と言った。

「いや、副長。多分二人が一番静かに騒いでいると思います」

煙を吐き出してから、二人に視線を向けた。

「おい桜ア、そこはねーだろい。歩退けやがれ。邪魔」
「作戦です。これで角で攻めることはできませんよ。さあどうする

「だったら飛車ひしゃで攻めるだけでいい！」

「王手！」

「な……何……!? 何故そこに桂馬が……!!?」

「逃げませんよ？」

「甘い……角で守る！」

「な．．．捨て身覚悟だと．．．！！？」

「なあにやっ
てんだ！！」

将棋

「んなこたあ見て分かる！！俺が言ってるのはなあ……！」

「ならば、攻撃の要!!!角頂き!!!」

「バカめ！！その桂馬、頂いた！！！」

[illegible]

ドゴォン
・
・
・
・

一つの爆音が響いた。

「さて、明日からも頑張れるように、今日は飲み明かせええええええええええ！！！」

「いえー」

「もっと盛り上げれ」

「いやあ、あの爆発の後にそれはむりでさあ」

プスプスと煙を発する室内は、焦げ臭い。

まあ、説明要らずとは思っただが、さっきのは土方がバズーカを發射したのだ。

数時間もすれば皆が普通に飲んで、食べてを楽しんでいた。と、
 というか騒がしくなってきた。

ついでに、もう夜中である。

あと数十分で終電がでるころだ。

「あー・・・お酒の匂いだけで酔いそう・・・」

酒は嫌いではないが、体質上、酒とはあまりお近づきになりたくない。・・・と言うのが本音だ。

まあ、それはともかく、だ。

だんだんと盛り上がっていく宴会場は、しらふの桜には少しキツイ。

なにが、と聞かれれば――

「そのテンションと共にうなぎ上りになっていくウザさに耐えられないので、部屋に戻りますね」

「オイ土方ア・・・ヒック・・・こんなもんかい？」

「ああ？どの口が・・・ヒック・・・言ってるんだあ？」

「俺はまだまだいけまさあ・・・」

「俺だつていけらあよおおお！！」

桜は2人の飲んだくれを尻目に退出した。

元より、許可など貰う気などなく。

どうせこんなことだろうと思っていたりする・・・（笑）。

く部屋く

「っは~~~~!!久しぶりのマイルーム!!!!!!」

敷いた布団の上にダイブし、改めて帰ってきたことを認識した。

羽織を脱ぎ、さて、髪紐をほどこうか…….と思ったときに、何かを目にした。

(.?)

机の上に置かれた紙。

手にとって見れば結構、上質の和紙だということが分かった。

不思議に思っ、そばの行灯あんどんに火をつけさらによく見れば、『都野みやの桜殿』と、名前があるところから手紙だろう。

静かに手紙を開いた時、始めに目にしたのはとある旅館の住所だった。

そして、その下にあつた紙を見て、驚愕した。

「え？これ、って………？」

ごめんなさい

この一言が言いたかった。

私は、16年前、貴女を捨てたことをとても後悔しました。

後悔して後悔して、後悔しきれなくて。

再び村へ戻ったとき、貴女はそこに居なくて。

だけど、居なくても生きている……それだけで安心したのも本当です。

貴女に会えた時、とても嬉しかった。

正直、貴女と一緒に居たい。傍に居たいと思いました。

もう、あんな過ちを犯さないから。今度こそ家族4人で……。

でも、貴女の周りには貴女を大切に思ってくれる仲間が沢山居るのですね。

大馬鹿な私とは違う。本当に貴女を思ってくれる仲間。

こんな私が言える事ではないけれど、仲間を大切にしていってください。

あと、もう一つだけ――

桜は、行灯の火を消して立ち上がった。

先ほど脱ぎ捨てた羽織を着て、部屋を飛び出した。

玄関先まで急ぎ、草履ぞうりを履く。

「あれ？都野隊長？どちらへ……って、隊長！！？」

隊士の声にも何も返さず、弾丸のように屯所から出て行った。

「隊長？」

後には少しばかり吹く風と虫のなく声が残っていた。

「ハアッハアッハアッ……ッ！」

時々呼吸すら忘れるほどに走り、ある場所へと向かう。

手には、あの手紙を握り締めて。

瞬きする間も無く変わっていくネオンの色も、すれ違う人々さえ今はどうでもいい。

ただ、ただ――

「ハアッ・・・！」

目的地へたどり着き、中へ入る。

「ちよつと・・・いい!？」

「はい? いかがなされましたか？」

桜が入ったのは一つの旅館だった。

「ここに・・・『都野』って家族が泊まってない!?!？」

「ああ、都野さんですか? 先ほどチェックアウトされましたが・・・」

「チイッ!！」

「あ! ちよつと待ってください! もしかして・・・」

従業員の言葉を全て聞かずにまたしても飛び出した。

（まだ・・・まだ間に合う・・・! 駅へ・・・駅へ・・・
!?!?!）

先ほどの旅館から、一番近い駅へと向かう。
一番のショートカットとして、屋根の上を走りながら。

そして、着いた駅は眩い光を放っていて、目が痛い。

それでも、一心不乱に駆け、改札口を無視してプラットホームへとたどり着いた。

(どこ……どこにいの……!!?)

乱れた息も服もそのままに、辺りを見渡す。

なかなか見つからない。

そして、ふと反対のホームへと視線をやった時だ。

——
居た
——

アチラも、こちらに気がついたようだ。

今なら まだ アッチへいけるかな

たった数メートル 飛び越えれば 届くかな

一言だけ…… それだけでいい

言わせて 言わせて……!!!

一度だけ 一度だけ

ホントの気持ちを、言わせてよ――

その数メートルを飛び越えようと思ったが、最後の一步が踏み出せない。

もう足に力を入れさえすれば、届く距離なのに。

そうこうしている内に、遠くから電車のライトが見えてきた。

（しまった……あれ、終電じゃん）

それでもやっぱり、飛び越える勇氣はなくて。
だから、大声で叫んだ。

「本当は．．．会いたかった！！！！すごく．．．会いたかった！！！！！！」

余りの大声に、プラットホームが静へと落ちる。

「もつともつと……もつともつと……早く会いに来てほしかった……!」

どんどん大きくなる電車の音に負けないくらいの声と思いを込めて、叫んだ。

[illegible]

違う

いや、違わないけども

もっともっと、こんなことよりも言いたい事があるんだ・・・！！
言っんだ！今言わなかったら、絶対後悔する・・・！！！！

「———迎えに来てくれて・・・ありがとう！！！」

最後の一言は、電車にかき消された。

どうしてだろう

無性に泣きたくなった。

——あと、もう一つだけ

私はもう、江戸には来ません。

だから、身勝手だけど、一つだけ、一つだけ言わせて……

貴女を、愛しています

一言のためだけに、どこまでも逝っちゃうのが長所で短所（後書き）

ありがとう

次回予告 (スルー?してもいいよw) (前書き)

次回予告（スルー？してもいいよw）

どうも夜代衣です！！

この名前は覚えて無くてもいいけどねッ！！

桜「じゃあ本題入れ」

ホントに辛口コメント増えたね。

桜「だってねえ・・・謙遜けんそんしといて逆に好感得ようって考えが丸見えなのよ」

クッ・・・だがかし！！皆やってる！！

桜「皆やってたらしいと思うな！！」

銀「お前らは親子か！！」

あ、銀さん。どうもー。

桜「ああ、銀時。どうかした？」

銀「どうかしたじゃねーよ！！何次回予告でいつも後書きにやっ
てることしちゃってんの！？」

桜「まあまあ・・・てか、次回予告の前につと」

はい！

たくさんの方にお気に入りをして頂いたり、閲覧して頂いたりと、

感謝してもきれないくらいです。

本当にありがとうございました！！

これから先も学生っていう身分の上、更新はとても遅くなりますが、気長にお願いします。

桜「最低でも2〜3ヶ月に1回以上は更新するとは思うけど・・・。
まあ、プライベートもあるんでそこは御了承下さい」

ついでに言うと、今から12月くらいまではとてつもなく忙しいので、ほんっとごめんなさい><

銀「最後の顔文字がいらねえよ」

うるせえよ

銀「つーかよお、次回予告もしないままに500字越えたぞ。最初の300文字くらいでお礼とお詫びじゃねえのかよ」

とことん裏話だなあ！！ちゃんとするっつーの！！

〈次回予告〉

闇と共に動き出す、怪しい影

響き渡るは派手な爆音

壊れる江戸の秩序

それを阻止する真選組

「最初から、好きだなんて言っていないから」

冷え冷えとしているのは空気が、それとも

「俺に従わなかったらどうなるか・・・」

翻弄される桜

「やれば、いいんでしょう？」

導き出した答えとは

「知らないわ」

銀魂 悲しみの物語
第三章 血桜編

次回予告 (スルー?してもいいよw) (後書き)

イヤッハー

嗚呼、文化祭の準備が・・・（前書き）

文化祭ってたいがいゝ

桜「知るか」

絵描くのは好きなんだけどね。あ、桜も描いたよ？

桜「マジで!？」

嗚呼、文化祭の準備が・・・

満月の夜――

空に一隻の船が浮いていた。

その船の先端に立ち、月を眺める男が居た。

「クク・・・・・・楽しくなりそうだ」

パキーン！

「ああああああ！！俺の虎鉄こてつちゃんがああああああああ！！！！」

「すいやせん。手がすべりやした」

「どう滑ったらこの岩に真正面からぶつかるの！！？ねえ！！？」

真選組局長・近藤勲が最近新しく刀を購入した。

前回と同じく虎鉄を買ったようだ。

「岩でも斬れると思って。いやあ、ダメでした」

「当たり前でしょ！！？つーか峰で斬れるモンなんかないでしょうがぁ！！？」

「あ、おーい桜あ」

「ムシ！？」

沖田は偶然通りかかった桜に声をかけた。

「あ、何ですか？つーかどうした。ボツキリ逝っちゃてるじゃないですか。その刀」

「まあ、このナマクラはともかく、ちよいと刀貸してくれねえかい？」

「ああ、どうぞ」

スラリと抜きさった妖刀・鬼月を投げ渡した。

「ふんっ！」

スパーン

先ほど、虎鉄を折った岩は簡単に斬れた。

「おお、流石でさあ」

「とりあえず、何がしたい」

返してもらった刀を鞘に戻す。

「てか、虎鉄折ったの2回目ですよ。折れただけで言えば知ってる限り……」

「俺の……ごでづちゃん……」

「もう一回買えばいいじゃないですかい」

「俺もう何本も折ってっからローンがハンパじゃないの!!」

そんなかんじで、庭でギャーギャー騒いでいるのを土方は（しょうもない奴等）と思いながら見ていた。

真選組は最近、とても平和だ。

確かに、局長がストーカーをするわ部下があっちこっちぶっ壊すわで平和……とはちょっとかけ離れているかもしれない。

ただ、攘夷志士達が全く動いていないことが真選組にとっては平和なのだ。

先ほどの近藤の刀をボッキリ折るあの行為も暇つぶしに過ぎない。

．．．．．まあ、暇つぶしで折られるのも．．．悲しいが。

「土方さん、書類ここに置いときますよ」

「おう」

「副長！マヨネーズ買ってきました！」

「冷蔵庫にぶち込んでけ」

．．．．．。

「土方さん、ケーキいりやす？」

「オマエからそう言う時は絶対いいことじゃねえ」

「チツ、バレたか」

．．．．．。

「あ、土方さん」

「何だ？」

「近藤さんを引き取って欲しいと保健所から」

「何でだああああ！！！」

思わず読んでいた書類を叩きつけてしまった。

叩きつけたと同時に、そこにあつたほかの書類が散らばった。

「なんですか．．．そんなに驚くことじゃないでしょう？」

「驚くわ！！第一なんで保健所！？」

「まあ、とりあえず迎えに行きましょうよ。処分される前に」

「たつく・・・あの人は・・・。。つーかなんで保健所？」
「志村姉に送られたようです」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いろいろ話した結果、仕事が無い桜が向かうことになった。
桜は重たい腰を上げながらも、さっさと出かけていった。

「ウホッウホホッ」
「ウキーウキー」
「キッキキ」
「ウキヤーウキヤー」
「桜ー桜ー！」

「なんで猿に混ざって堂々とアンタがいるんですかあああああ！
！？」

何故か猿ばかり（天人もチラホラ見える）の保健所の中で、何でか知らないけど違和感なく溶け込んでいた。

「はい。お猿さんは賢いですけど、その分狂暴ですから気をつけて
くださいね」

「すみませんでした。もう二度と家から出しません」（棒読み）

籠に入った大きな猿——もとい、近藤を連れて帰る事になった。

「え！？ちよつと！！！？なんで出してくれないの！！！？ねえ！？」

「さあて・・・沖田さん、もう準備終わってるかなあ」

「ちよつと！！総悟がなんだって！？！？なんか悪い予感しかない
んだけど！？」

「なら、その予感は当たりですよー」

ガラガラと車輪が付いた檻は動かすのにとっても苦労する。

だが、そこは桜。

腕と言うよりも足で引つ張っているようなものだ。

「あ！都野隊長！準備、終わってますよ！！」

「ああ、ごめんごめん。思ったより重たくて」

「ちよつとザキ！？何でこの状況でそんなサラリとした話がで
きんの！？」

「いやあ、五寸釘とか指締機とか・・・探すの苦労しましたよ」

「え？それくらいならヒョイヒョイ見つかриそうだけど・・・」

「いえ、それ以外にも○○○○とか○○○○とかいろいろ探してたんですよ」

「おお、よく見つかったわね」

「イヤアアアアアアアアアア！！！」

これ以上はなんと表示しちゃいけない気がしたので、心の声に従って。表示させて頂きました。知りました方、御了承下さい。

近藤の悲惨な声は青い空に吸い込まれていった。

「トシィ！トシィ！助けてええええええ！！！」

「うおおおおお!!?」

涙と鼻水ででろでろの顔で土方の部屋に突っ込んできた。

「急になんだデメエは!!」

「桜が・・・ザキが・・・総悟が・・・!!」

「こんつつつな真夜中になんだってえーんだ!!」

—— 感のいい方ならお気づきだと思うが、まあ、夢才チだ。

刀も折られていないし、岩も斬られていない。

お妙の手によって、保健所に入れられてもいないし、。表示をするような道具も出ていない。

「ああああああ!! よがったああああ!! 夢でよがったああああ!!」

「いい加減にしやがれ!!」

「オフスン!!」

綺麗な右ストレートを決めて、布団に潜り込んだ。
少し冷めた。

「まったく、寝かせろよ・・・。明日も仕事なんだしよ」

「トシツ・・・トシツ・・・」

「・・・」

「ねー・・・トシツてば」

「・・・」

「おーきーてー・・・」

「うぜえええええええええ!!!!」

今度はさっき以上の蹴りをかました。

「なんつなんださつきから！とつと部屋に帰れ！！」

「いやだあー！絶対あの夢の続き見るに決まってるもん！！」

「知るかああああああああ！！！！」

「さつきからうつさいんじやああああああ！！！！」

障子が外れる勢いで開け放たれた。

その先には黒に金の刺繍ししゅうをした羽織を着た桜だった。

「全く・・・私の部屋に聞こえるくらい騒ぐってどんだけですか！
！ええ！？」

『す、スミマセン・・・』

流石の勢いに、2人とも正座をしてしまった。

「明日も仕事なんですよ・・・分かります！？しかも私なんか朝早くから張り込みなんですよ！？これ以上騒ぐんだったら地のハテまで蹴り飛ばすぞコルア！！！！」

流石の怒りように、何もできなくなった。

「ついかですねえ、3時から騒ぐとか本当にいい迷惑なんですよ。
あと1時間はゆっくり寝れると思ったのに！！！！」

段々と子供のようにジタバタしはじめた。
ベッシベッシ畳を叩き、いろいろ文句を言い始めた。
起こされたことなど全く関係ないことも言っている。

恐らく、桜は未だに夢現ゆめうつなのだろう。急に起こされて、ほぼ無意識

下で本音トークをしているに過ぎない。

「分かった分かった！！悪かったって！！」

「もう騒がねえからな！！うん！！」

「分かりやあいいんですよ分かりやあ」

やはりまだ眠たいのか、目を擦りながら部屋に戻っていった。

「・・・寝るか」

「おーう、おやすみー」

「ああ」

今回ばかりは近藤も素直に部屋に帰っていった。

もうあの愚痴はききたくねえ

それが2人の本音だった。

嗚呼、文化祭の準備が・・・（後書き）

落書きで

桜「やっぱ死んじゃえバカ」

寒い。とにかく寒い。（前書き）

いやあ、最近寒くなって気ましたねw

桜「ホントに」

寒い。とにかく寒い。

土方・近藤両名に朝早くに起こされた桜は、不機嫌ながらも張り込みの準備をしていた。

隊服でいくのもまあアリなのだが、今回は相当めんどくさい相手なので、普通の着物で行くことになった。

「眠い・・・」

再び布団に飛び込みたい気持ちを抑えて、着々と準備を進めていった。

非常に辛い^{つら}のだが、仕方が無い。

今寝てしまえばきつと起きた時に土方に叱られてしまうだろう。

ただ、非常に早い時間なので、時間が有り余り過ぎる。なんとかしたい。

何にもすることがない。

「チクシヨウ・・・暇だ・・・寒いし」

まあ、朝3時ということでは、寒いわけなのですよ。

結局、寒さしのぎと目覚ましに、はちみつレモンを作りに行った。

「あつたかい・・・」

ホクホクと湯気を立てる湯のみは、冷えた指先もじんわりと温めていった。

幸せそうな顔をしながら甘いはちみつレモンを飲み干していった。

「あれ、桜。もう起きてたんですかい」

「あ、沖田さん。おはようございます。いえ、ただどつかのゴリラ^{バカ}とマヨラー^{バカ}に起こされただけですよ」

「あー、アレね。あのせいか」

「何ですかその棒読み加減。分からないならいいんですよ。無理しなくて」

まだ温もりの残る湯飲みを流しに置いて、水をいっばいに張る。少し湯飲みから溢れて、排水溝に流れていった。

「そういう沖田さんこそなんでこんな早くに？いつつも遅いくせに」
「いや・・・マヨネーズの羊数えてたら眠れなくて。どっちかつーとムネヤケしてきた」

「そりやなるに決まってるでしょ!？」

思わず朝早いのも忘れて大声を出してしまった。「おっと」と呟いて口を塞ぐ。

「それと・・・気いつけなあ桜」

「それとと繋がってませんけど・・・何を、ですか？」

「今日の張り込みでい」

沖田の顔が急に真面目なものになった。本当に真面目なときにしかない顔つきだ。

「ヤツについては一番お前が詳しいから今回の張り込みがお前になつてゐる」

「そうですね・・・」

「奴等・・・すでに動いているっつゝ情報は知ってるかい？」

桜は少しムツとした顔で沖田を見た。

「知ってますよ。だから、私が行くんじゃないですか」

「―俺が言つのは裏情報だ。正確じゃないかもしれないが・・・」

合わさった目が、余りにも鋭くて

一瞬、鳥肌が立った。

「お前、狙われてるぞ」

「・・・は？」

頭がその言葉を理解するまでに、少々時間を要した。理解した後も理解できない疑問が浮かんでくる。

「それって、どういう？」

「そのまんまの意味でい。――桜、『玄虎青榆』げんこせいゆ覚えてるか？」

久しぶりにその名前を聞いた。

いつの話だったか、少し考えてみた。

「覚えてますよ。ムツカツク奴でしたね。で、それが何でしょうか？」

「城の中に明らかにお前等しか知らない筈のことがあつたら」

沖田の一言に、真剣にあの時のことを思い出していった。

あの城、いろんな仕掛けがあつた。

棒手裏剣が飛んできた。

トゲトゲボール（作者のせいでトゲがついた）が転がってきた。
変な床スイッチがあつた。

他には……そうだ、忘れていた。

「あ！あのガリベン君の……！！」

「思い出すまでに10分かかるたあ、どんだけ忘れていたんでい」

「そんだけ忘れてました。それに確か、好きの反対は無関心じゃないですか」

「やべっ、俺今度から土方さんの存在絶対無視しよう」

上の会話（後半）には触れずに、最初の『ガリベン君』、について説明しておこう。もう大分前なので。

第一章（この小説での一区切りめ）の話し、「^{あけがらす}朱烏編」でのクライマックスに近いところであった話だ。
ガリベン君（銀孤秀^{ぎんこしゅう}）のところに行ったとき、桜と高杉しか演奏できない曲・というのが出てきた。

今読み返してみると、どんだけテンション任せに書いてたんだろう自分。死ねばいいのに。

まあ、そこから連想してみると、あの曲を知っているのは銀時・高杉・桂・坂本・桜の5名と、その曲を聞いたことがあるものに限る。
そして、朱烏が鬼兵隊と組んでいたことから、高杉が伝えたと思うのが妥当だろう。

「んで？それが私が狙われている・と何の関係があるんですか？」

「バカだろオマエ」

「ぶっ飛ばすぞデメエ」

ちよつとだけ、イラッときた。

「実は……」

「実は………？」

「全くと言っていいほど関係ねえ」

「じゃあなんで話したんですかあああああ！！！？」

もう朝なんて感覚はなくなってきた。

「まあ、俺が言いたかったのは鬼兵隊が絡んでるのは間違いないかつ

たつてーことでい」

「めんどくさッ！ーそんだけの為にやったの！？つーか賢い読者はもうとつくに気づいてますよ！？」

「まー、狙われてるつっーのも巷ちまたの噂で聞いただけだし」

「なんで巷でながれるのそれ！？怪しいだろ！どう考えても怪しいだろー！」

「取りあえず、気をつけなせえ」

「もう終わらしたよ！無理矢理収めやがったよコノヤロウ！」

———
まだまだ、日は昇らない。

（AM：4：00）

「じゃ、行つてきまーす」

「気をつけるよ」

生憎、^{あいにく}急な雨に見舞われた。
空が時々ピカツと光っている。

だが、どうせにわか雨だろう。
朝っぱらだけど。

「分かってますよ。へまなんかしませんから」

「期待してるぞ！」

「クス・・・はいはい」

近藤達にほのかに笑い返し、番傘を差して真選組の門を潜った。

今回、私服で行くに当たって、刀は竹刀袋に入れて背中に担いだ。

しかしこれでは攻撃がしにくいだろう・と思うのだが、今回差している傘が仕込み傘となっている。
いつか兵庫で使ったものだ。

「さあって、何をしてくるかな」

ちよっぴり呑気な気持ちで足を進めて行つた。

表現しにくいような音が傘から響く。

朝早い今は人も天人も疎^{まば}らで、雨音がより一層鼓膜を叩く。

なんとなく遊びたい気持ちで、水溜りに向かつて歩いてみた。
浅かったり深かったり、ちよっと楽しい。

……が、モチロンながら本来のやるべき事を忘れたわけ
はない。

ちゃんと分かつてる。

だからこそ、お遊びだ。

最後だ何て思つちやいないが。

ブラリブラリと歩いて、着いたのは港だった。

あの船が止まる場所を山崎が見つけてくれた。

ここを使うのは汚職に手をつけた者たちや、攘夷浪士くらいだろう。

「っと……この辺だっけな」

真つ赤な番傘は否がおうにも目立つ。

もつと別の作りやがれチクシヨウ。

傘をギリギリまで後ろに倒して、コンテナの後ろに隠れた。

チラリ・と覗けば、船の先端に男が立っている。

こちらも傘を差していた。真つ黒な傘を。

「……………晋介」

ボソリ・と、男の名を呟いた。

彼は雨の中、わざわざ甲板に出てキセルを吸っているようだ。
ここからでも紫煙が見える。

煙は雨と共に叩き落されている。

（特に動きはないわね。つかアイツも朝早ッ！！）

そんな事を思っていると、後ろから気配がした。

マズイと思って傘を閉じ、コンテナとコンテナの間に身を隠す。

幸運にもばれなかった。

（危ない危ない）

再び船が見える位置まで行きたいのだが、どうも場所が悪い。
少し、浪士たちが増えてきたようだ。

（仕方なし・・・てね）

人の目を盗んで、大きな倉庫の近くまで来た。
シャッターは重たく閉じている。

中から人の気配はしない。

「ラッキー」

割れた窓から侵入し、上へ行くはしごを使って上へ上へと登る。
少し大きめの穴から這い出て、倉庫の上へ出た。

再び、傘を差す。

少し濡れた。

傘を差してからまた雨脚が強くなってきた。

「よく見えるわね」

結構な高さがあるので、下から気づかれる可能性は低いだろう。

（にしても……今度は一体何する気なんだか）

また下を覗き込んだ時だった。

高杉と 目が合った 気がした。

（……！？今……！！？）

だが、傘は見えないようにしてるし、誰にも気づかれちゃいない筈だ……。

「偶然……よね」

「それはどうでござろう」

「！？」

急に後ろから聞こえた声に一瞬動きが止まった。

その間だった。

黒い鋼が迫る。

ギリギリでかわした。危なかった。

「いつの間に・・・！」

「最初からでござるよ。無情の鬼神」

「くっ・・・！」

気配には敏感な方だと思っていたが、別の事に夢中になり過ぎていたのが痛かった。

「河上、万斉」

その名を呟いたと同時に、万斉は斬りかかってきた。番傘の柄を引き抜き、それで受け止める。

金属がぶつかる音が雨の音と混ざって嫌な音になった。

「く・・・うう！」

何とか弾き返し、背負っていた刀——鬼月を引き抜こうとした。が、竹刀袋から出す暇など、あちらが与えるわけもない。

連続で何度も斬りつけられる。かわしてはいるが何分足元なにぶんが悪い。時々足を滑らせて危機一髪・という状況に陥おちいった。

うまく長い距離をとって刀を抜こうとするが、すぐに距離を詰められる。

（流石人斬りってとこかしらね？）

仕込刀はそこまで長さがあるわけではない。

一歩間違えれば斬られる……。
切迫した状況だった。

「ハアツ・・・ハアツ・・・！」

雨が口に入り、呼吸が少ししにくい。

だが、そんなことではへこたれない。

反撃に、懐へ一瞬で入り込み、鋭い突きを繰り出した。

・・・防がれた。

「あーもう！当たれよチクショウ！！」

「当たれと言われて当たる奴はいないでござる」

「知つとるわ！！」

通常、使っている刀の形状が違うのは何かと厳しい。
特に重さと長さが違うというのはとても使いにくい。

ギーン！

どちらも引かない、鏢迫り合いになった。
足の踏ん張りが全然利かない。

ベツタリと肌に張り付いた服や髪が気持ち悪い。

「そいやさあ、アンタっていつもサングラスとヘッドホンつけて
るよね」

「そうでござるな」

「邪魔じゃないの？特にヘッドホン」

「慣れたでござる」

「そーですかッ！！」

再び弾き返す。

が、それが悪かった。

足が滑った。

「しまっ・・・！」

「もらった！！」

刃が落ちてくる。

とつさに手をついて横に転がる。

起き上がるが、やはり滑る。

そこに万斉の蹴りが入った。

「かはっ・・・！」

耐え切れず、屋根の上から落ちる。

だが、それを逆に好機だと思い、すばやく竹刀袋から鬼月を抜き取る。

邪魔になった仕込み刀を万斉に向かって投げる。

簡単に弾かれたが、攻撃の意味じゃないのでよしとする。

鬼月を鞘から抜き放った。

だが、忘れちゃいけない。

ここ、空中です。

かかと落として下に居た奴等をふっ飛ばし、そのまま着地する。

「さいっつつつつ悪だあああああああ！！」

「やれえええええええ！！」

一斉に斬りかかってくる奴等を斬り捨てる。

「拙者を忘れないで欲しいでござるな」

「忘れてたあああああ！！」

上から降ってくる攻撃を自慢の刀で受け止める。

「このっ・・・！！」

最初は、よかった。

雑魚ばかりだったから。

それに、体力も有り余っていた。

ただ、万斉が入ってから、士気が一気に上がった。

つまり、段々押されてきていた。

（キツイ・・・！）

体力が奪われていく。なのに、敵の数はあまり減った気がしない。

「チイツ」

「いくら鬼神といえどもこの人数は厳しいものでござろう？ぬしは所詮、にわか鬼でござるからな」

「黙っとけコノヤロー」

強がりもする余裕が無くなってきた。

ツライ

ツライ

ツライ

回し蹴りで敵をなぎ払い、刀で斬りつける。

鞘で防御し、また初めから。

常にくる攻撃に一瞬も気が抜けない。

（・・・逃げられないかなあ・・・）

ゲームとは違う。

かかしなんて戦場に居るわけがない。

逃げる暇など与えてくれない。

「はっ・・・！はっ・・・！ッはあ！！」

呼吸が止まりそうなほどの人波と血の匂いに、感覚が狂ってきた。

「はあっ・・・はあっ・・・あああゝ!!」

攻撃するのも受けるのもツライ。
苛立ちが桜を襲う。
頭と体が全然着いて行かない。

（負けたくない・・・!!）

その一心で戦っていた。

かれこれ、何分たっただろうか。

感じる人によったら30分。

だが、別の人なら1時間にも2時間にも感じるだろう。

「……ッ……ッ」

喉が張り付くような感覚だ。

酸素が体に入っている気がしない。

呼吸に合わせて体が上下に揺れた。

奇跡的にも大きな怪我はしていない。

せいぜい、膝の擦り傷くらいだ。

周りの敵はすでに斬り殺した後だ。

残っているのは万斉と残り20名といったところか。

「……ッは！！こんなもん！！？」

頑張っ て出した声は掠れたり裏返ったりした。

「強がりは無用でござるよ」

「……は？」

「こっちは、殺す気などないのでな」

「はあ！？いつつみ分かんない！！」

頭の中はもはや真っ白で、何も考えることができなくなった。

だから、だからかもしれない。

後ろへの配慮を忘れていた。

ガン！

鈍い音が後ろから……前から？横からか？

頭がイタイ

体が前へと倒れていく。
水溜りの水を跳ね上げる。

「ククク・・・・・・」

うつすらとうつすらと。
笑う声が聞こえた。

「・・・・・・あ・・・・」

それっきり意識が途切れた。

同じ頃に雨が止んだ。

寒い。とにかく寒い。（後書き）

なんか、会話少ないね。

桜「小説なんてそんなもんでしょ？」

いや、いつもは会話のほうが多い！

桜「……………」

合作？何それおいしいの？（前書き）

桜「何が言いたい？」（サブタイ）

合作描くのが一切進まない。どうしよう。あと7日？しかない。

桜（馬鹿だ）

あ、今回短めですから。

合作？何それおいしいの？

深海から、ふつと浮き上がるような・・・

ゆつたりと意識が覚醒していった。

ぼんやりとしたまま、布団から体を起こした。

「いたっ・・・」

頭がズキズキと痛む。

少し痛みと戦った後、周りを見渡した。

広くも無く、狭くも無い部屋だ。

部屋にはタンスと小さなテレビ。それと机が一つ。

出入り口が一つと、窓が一つ。

「・・・・・・・・どこ？」

見覚えが無い。

ゆるゆると顔を動かして再びじっくりと部屋を見る。

しかし、どれだけ見ても見覚えがない。

「うっ・・・」

とにかく頭が痛い。

というか、だ。

（私、何してたんだけ・・・？）

頭を抑えて思い出そうとする。

だが、思い出せない。頭の痛みが勝っている。

と、そんな時だった。

からり

軽快な音と共に障子が開いた。

自然と視線がそちらを向く。

桜は目を見開いた。

「よう、久しぶりだな？」

「し・・・晋介・・・！？」

思わず布団から跳ね起きた。

だがやはり、痛い。

動いてよく分かったが、体も少し悲鳴を上げた。

「な・・・なんで・・・！？」

「”なんで”？ここは俺の船だぜ？」

「は・・・！！？」

余計に頭が痛くなってきた。

どういうことが分からない。

（なんで？なんかあったわけ？！）

まあ

「どうでも・・・いいけどね!・・・あれ?」

刀を抜刀しようとして、気がついた。
刀ねえ。

「おまえ、馬鹿じゃねエのかい?」

「黙れこの歩く18禁」

顔から火が出そうだ。

「ていうか・・・なんで私・・・鬼兵隊に・・・」

「忘れたのか?おまえの方から来たんだろう?」

「え・・・」

頭を抑えながら、懸命に思い出そうとする。
自分から?ンなバカな――

「・・・あ」

急に紐解かれたように記憶が戻ってきた。

「思い出したみてエだな」

クツクツと笑いながら壁に背を預けた。
キセルをふかし始める。

(忘れてた・・・)

だが、思い出して疑問が浮かんだ。

「なんで・・・生かしてんの・・・？殺した方が、そっちには都合がいいじゃない」

万斉との戦いでも疑問に感じたことだ。

あれだけの人数、なのになんと怪我をしなかった。

今も頭の痛みよりも強い痛みは無い。

「クク・・・」

「何、笑ってんの」

ちよつと殺意が湧いた。

「ただ単に、おまえが欲しいだけだ」

「・・・・・・？イヤだって言ったら？」

高杉は少し笑うと、テレビの電源を入れた。

（コイツ、妙なところでハイテクだと思うのは私だけじゃない）

テレビに映ったのは、見慣れた場所だった。

「・・・・・・真選組・・・！？」

上空から撮っているのだろう。

屯所の屋根が映っている。

「真選組に・・・何する気・・・!?」

そう言えば、高杉はニヤリと笑った。

「鬼兵隊に入れ」

「は・・・!？」

何言ってんだコイツは。

そう思っていた。

だが、このテレビに映っている真選組・・・。

何かある

でも・・・。

「私は真選組の隊長よ・・・絶対イヤ」

「そう言っと、思ったぜ」

袂たもとからなにか・・・スイッチを出す。
それを力チリ、と押した。

「何を」

ドカアアアアアン!!

テレビから響いた大きな音が鼓膜を殴る。
余計に頭が痛くなった。

けど、それ以上に画面に釘付けになった。

もくもくと煙をあげる真選組屯所。
なにがあつたのか一瞬分からなくなった。

「え．．．え．．．？」

「俺に従わなかったらどうなるか．．．分かつたろ？」

バツと高杉の方に顔を向けると、厭^{いや}な笑みを浮かべていた。
そして、再びスイッチを押す。

ドオオオオオオオオン！！

また、画面の中で大爆発が起きる。
爆発で舞い上がった土煙が屯所を覆い隠した。

「さあて、どうする？」

高杉は、さらにスイッチを押そうとしている。

「ま．．．待って！！」

桜は立ち上がり、スイッチを持っている手を握った。

「分かつた．．．分かつたから．．．」

「．．．．．何がだ？」

「晋介の言うこと、聞くから．．．。鬼兵隊に入るから．．．！」

ギュウっと手に力が入る。

「だから、代わりに．．．真選組に手え出さないで．．．．．！」

お願い・・・

深く俯いて、懇願する。

それを聞いた高杉は、さらに笑みを深めた。
桜の手を解き、スイッチを袂に収めた。

高杉はゆつくりと桜の耳元に顔を寄せる。

そして、囁いた。
ささや

「歓迎するぜ」
「・・・ッ！」

布団にストンと座り込む。

高杉は部屋を出て行く時、少し振り返って言った。

「・・・ゆつくり休みな」
「・・・早く出てけ」
「ククク・・・」

一人残された部屋に付きっぱなしのテレビ。
未だにもくもくと土煙が上がっている。

パチリと電源を落とした。

悔しさに、下唇を噛んだ。

（近藤さん・・・ごめんなさい・・・・・・・・・・！！）

俯いた顔を上げる事は無かった。

「晋介・・・どうでござったか？」

「ああ・・・思った通りの反応を示してくれたよ」

桜いる部屋から少し離れたところで高杉と万斉が話していた。

「しかし・・・大丈夫でござろうか。あんな子供騙しで
「アイツにゃあ、あんなだけでも十分だ」

キセルをスツと口へ運ぶ。

「これから忙しくなるぜ・・・」

高杉はとても嬉しそうに笑っていた。

合作？何それおいしいの？（後書き）

高杉の口調って難しい。

資料が少ないどうしよう。

（ぶっちゃけ出番が少なすぎる）

月が綺麗だな〜・・・（現実逃避 夜バージョン）（前書き）

現実逃避するのにそう言ったら

「誰かに告白？」

と言われた。

イヤイヤ、周りに女性しかいませんけど!？

（作者も女ですよ?ちゃんと）

月が綺麗だな〜・・・（現実逃避 夜バージョン）

（真選組屯所）

爆発のせいで混乱した真選組も、土方の働きですぐに落ち着いた。

「ったく・・・こんな子供だましでギャーギャー騒ぎやがって」

土方は手に持った竹を斬り捨てた。

切り口から機械が覗いていて、時々パチパチと火花を立てていた。

爆音と煙のせいで、何が起きたのか理解できなかった。

だが、それもたったの2回で終わり、すぐに怪しい物が無いか探させた。

見つかったのは、竹筒。

長さは30センチと少し大きめで、草などに隠れていて、なかなか見つからなかった。

「イタズラ、ですかねい」

「だといいけどなあ」

沖田は、真つ二つに斬られたそれを指でつついていた。

「危険があるようにやあ見えやせんけど」

「爆発しといて危険がねえワケねえだろ」

「そう意味じゃねえですよ」

だが。

（だが・・・それでも逃げれそうなモンだがなあ・・・。それに、鬼兵隊に捕まる危険がある場所でメールなんかするか？）

だからこそ、イラだっているのだ。
大体、メールが来たのは昨日の夜。

桜が張り込みに行ったのは昨日の朝だ。

つまり、1日は帰ってきていない。

「まあた2番隊がゴタゴタすんな・・・はあ。永倉に押し付けよう」

心中に漂う不安を抑えながら、屯所内へと入っていった。

それから、結果が出たのは30分後だった。

「副長！中身、分かりました！！」

「報告しろ」

「はい！え」と・・・」

山崎は手に持った資料を見た。

「まず、あの爆弾、殺傷能力はあまり無いですね。火薬の量も少ないですし・・・。ちよつと壊れる程度で済みますね」

「じゃあ、あの爆音はなんでい」

「あれは着火と同時に音が鳴るカラクリがありまして、それが音を立てていただけですね」

「子供だましか・・・」

それなら被害と音の矛盾点が解消される。

「ん？じゃあ、あの煙も似たようなモンなのか？」

近藤が聞くと、山崎は「そうです」と返してきた。

「それと、あの爆弾は遠隔操作が可能なようです」

「——なるほど、スイッチかなんかで遠くからやった・・・つーワケか」

タバコを灰皿に押し付けスツと前を見る。

「これから先、しばらくは警戒を怠るな。怠ったヤツは切腹だ」

「うわー、こりやさぼったら血まみれになりそうでい」
「なるんだよ！」

ゴホン、と一つ咳払いをして続きを言う。

「それと、見て分かると思うが・・・桜が帰ってきてねえ」

空気がピシリと張り詰めた。

「これから外回り行く時は桜を探すことを優先しろ。アイツは真選組になくちゃならねえヤツだ」

「・・・トシ」

「て、どうせアンタなら言うんだろ」

近藤が立ち上がるのを皮切りに解散となった。

（素直じゃないですねー・・・副長）

山崎だけは少し笑っていた。

く鬼兵隊 一室く

「はぁ・・・」

布団に寝転んだまま、深く溜息をついた。

心が締め付けられる。

（でも・・・これで真選組には手を出せないから・・・良かったのかな・・・）

色々考えていると、再び頭に痛みを感じた。

・・・こんなときだが、人間の体は不思議だと思う。
何かに必死なときは痛みなど忘れてその事に没頭できるのに、それが終わればまた痛みが巡ってくる。

それだけ、桜にとっては必死なことだったのだ。

「・・・はぁ」

なんだろう。凄く眠たい。とても疲れた感じがする。

桜は2く3回瞬きをした後、スツと眠りに落ちていった。

翌日、高杉は再び桜の部屋へ訪れていた。

「桜」

と、声をかけるが返事は返ってこない。

まあ、あれだけしといて返事が返ってくるわけ無いと思い、勝手に開けて入った。

桜は寝ていた。

もう秋も終わる頃だというのに布団もかけず寝ている。

・・・見ているほうが寒い。

高杉は自分から「ゆっくり休め」と言った手前、起こすに起こせない。

プライドがある。

「本当に変わんねエな・・・・・・・・」

昔もよくこうやって寝ていた。

布団くらいかけろ、としょっちゅう桂が怒っていた。

——なんとなく、布団をかけてやることにした。

少し桜に触れたとき、異変に気がついた。

（コイツ、風邪でも引いたか・・・）

再び触るとよく分かった。相当熱い。

普通大雨に打たれている中で何十人もの相手をした上に精神的に追い詰められて布団も被らずに寝たらまあそつなるわよなあ。（by 作者）

適当に布団をかけて、眠っている桜に声をかけた。

「まあ、仕事はまた今度にしといてやるよ・・・ククク・・・・・・・・」

ほとんど独り言のように呟いて、部屋を出て行った。

「——昨日の今日で、それ言う？」

狸寝入りを決め込んでいた桜が、高杉に聞こえない程度で呟いていた。

月が綺麗だな〜・・・（現実逃避 夜バージョン）（後書き）

リア友に頼まれた

「オリキャラを高杉が看病する」

んー、シーン少なえ。

脱線話でもよかったな。コレ。

（ちよつと後悔）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6814j/>

銀魂 悲しみの物語

2011年11月13日01時41分発行